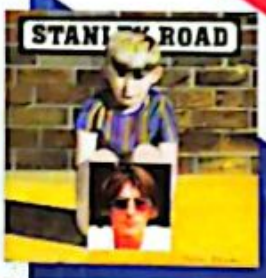
1985年8月2日第3種郵便物認可・2025年3月1日発行・毎月1回1日発行・第44巻第4号

Record Collectors' Magazine

レコード・コレクターズ

3
2025
Vol.44, No.3



90年代 UKロックの名盤

ブリットポップを生んだ
英国のシーンをふり返る

ビリー・ジョエル／リチャード・ペリー／ウォー

四階
40品川

CamScannerでスキャン

レコードコレクターズ CONTENTS

28 特集 90年代UKロックの名盤

30 本誌執筆陣によって選ばれた必聴の130枚
選・文＝赤岩和美　赤尾美香　石川真男　大伏功　エノリテ　大鷹俊一　岡村詩野
小倉エージ　小野島大　小山守　サエキけんぞう　柴崎祐二　杉原徹彦
武田昭彦　立川芳雄　土佐有明　鳥居真道　行川和彦　船曳将仁　松井巧
村尾泰郎　宮田謙一　山口智男　山崎智之　湯浅学　油納将志

85 90年代UKロックとは何だったか　文＝大鷹俊一

90 個性的なバンドたちが追求した音響空間の変革　文＝武田昭彦

94 "クール・ブリタニア"がもたらしたもの　文＝長澤唯史

98 洋楽ディレクターが見たムーヴメントの実像　文＝石川真男

102 特集 リチャード・ペリー

102 昨年亡くなったアメリカ音楽界を代表する
プロデューサーの華やかなキャリアを振り返る　文＝中村彰男

106 プロデュース作品選
選＝中村彰男
文＝小川真一／金澤寿和／谷口雄／中村彰男

112 ビリー・ジョエル　文＝近藤正義
『ストリートライフ・セレナーデ』の発売50周年を記念した日本独自企画SACDマルチ・ハイブリッド盤

122 ウォー・インタヴュー　質問作成・文＝出田圭
ロニー・ジョーダンとジェリー・ゴールドスタインが語る74年の初来日公演と全盛期の活動

130 インテリア〜インテリアズ／日向大介 インタヴュー　聞き手＝小山守
世界的に再評価の高まるエレクトロニック・ユニットの2作品がリイシュー

COLLECTORS' TOPIC

116 キング・クリムゾン　文＝山岸伸一
95年ジャパン・ツアーの東京6公演が最新リマスターを施されてリイシュー

118 『ヒプノシス レコードジャケットの美学』　文＝村尾泰郎
ロックの夢と挫折が反映されたデザイナー集団の物語

120 〈アライヴ・ザ・ライヴ〉レーベル　文＝船曳将仁
ライヴ盤シリーズからアメリカン・ロックとヘヴィ・メタル系の10タイトルが登場

126 『ミュージック・フォー・ブラック・ピジョン』　文＝原田和典
名ジャズ・プレイヤーたちが演奏する"夢の場所"を切り取ったドキュメンタリー映画

CamScannerでスキャン

3 2025 Vol.44, No.3

COLLECTORS' TOPIC

スリー・ブラインド・マイス　文＝土佐有明
初ジャズを代表するレーベルのカタログから3作品がリイシュー

裸のラリーズ　文＝小川真一
山口富士夫在籍"ダブル・ヘッズ期"の一瞬の閃きのような
無垢を記録した公式ライヴ音源2種

テストパターン　文＝立川芳雄
80年代の東京ならではの空気をパックしたテクノポップ作品
「アブレ・ミディ」が初リイシュー

『もう頬づえはつかない』　文＝ガモウユウイチ
J・A・シーザーなど天井桟敷人脈がかかわった
蜷川かおり主演映画のサウンドトラックがリイシュー

ボブ・ディランのキャリアの転換点となった
63~65年のフェスを記録した映像作品がブルーレイ化
文＝宇田和弘

Legendary LIVE in U.K.　写真＝イアン・ディクソン
ミュージック・ゴーズ・オン　SAGOSAID
取材・文＝柴崎祐二
ブリティッシュ・ロックの肖像　写真・文＝富岡秀次
矢野誠の点と線　取材・文＝除川哲朗
スティーヴ・クロッパー・リメンバーズ　取材・文＝稲葉光俊
リッスン・ナウ！　フィル・マンザネラ　取材・文＝田山三樹
初盤道　文＝真保安一郎
和久井光司のアナログ奇聴怪会
ウィ・ヒア・ニュー・サウンズ　文＝武田昭彦
赤岩和美の海外盤DVD&Blu-rayロック映像情報
コモエスタ八重樫のちょっと一服
DJフクタケのゆるみっくす7"
インフォ・ステーション
　ピックアップ・ニュース
　ブックス
　ライヴ・リポート
　コンサート&イヴェント
レターズ&編集後記
バック・ナンバー、定期購読のご案内
*「大鷹俊一のレコード・コレクター紳士録」は休載いたします

最後から見るページ

リイシュー・アルバム・ガイド
2月のリリース情報
国内盤
海外盤
ニュー・アルバム・ピックアップ

STAFF
編集長▶祢屋康
編集▶杉原徹彦／工藤大／芦崎瑞樹
表紙・本文デザイン▶川畑あずさ
デザイン&プリプレス▶
　柳井健仁／浅木美和
広告▶矢川俊介

Copyright ©2025 by Music Magazine.
All rights reserved. Printed in Japan.
本誌記事の無断複写　転載は固くお断りいたします。

CamScannerでスキャン

LEGENDARY LIVE IN U.K.

a photographic by Ian Dickson

shot 179: Ride

Town & Country Club, Kentish Town, London 27 October 1990

レコード・コレクターズ 3

2025 Vol.44, No.3

文中の記号

アルバムを示す記号　シングル、曲名を示す記号

国内盤＝「　」　国内盤＝『　』（インタビュー記事などでは〈　〉）

海外盤＝*　*　海外盤＝'　'

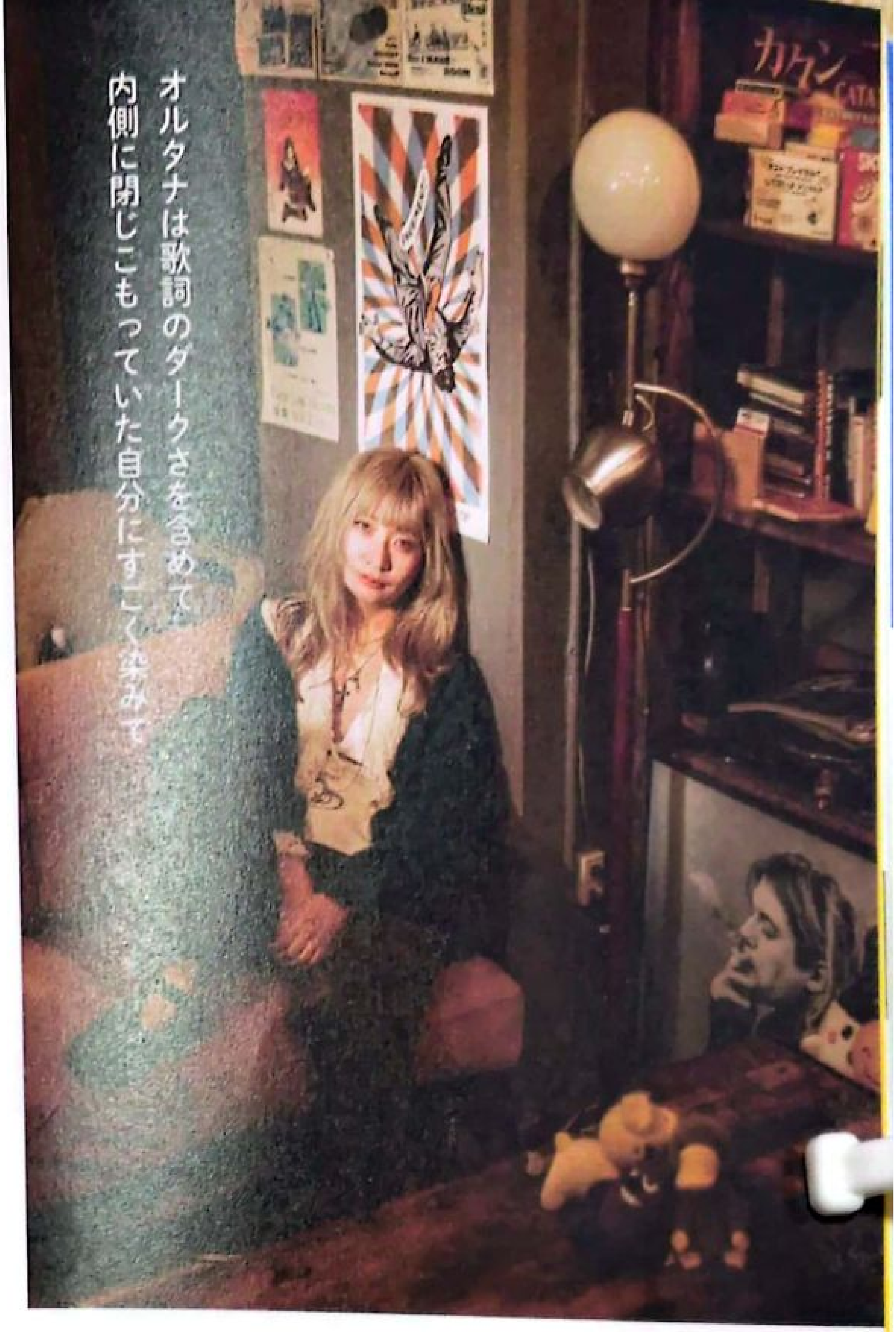
• 本誌ではアルバムやシングルを、オリジナル盤のタイトル、レーベル、番号で表記するケースが多くあります。アーティストの出身国または日本以外のメーカーが発売されたレコードの場合、その国名をレーベル名の後に記します。

• 掲載されている価格は、特記されている場合を除き税抜き価格です。

楽器略号

ac=アコースティック　acd=アコーディオン
as=アルト・サックス　b=ベース
bs=バリトン・サックス　cb=コントラバス
cl=クラリネット　el=エレクトリック
fl=フリューゲルホルン　fr=フルート　g=ギター
ha=ハーモニカ　kbd=キーボード
org=オルガン　p=ピアノ　per=各種打楽器
s=各種サックス　sg=スティール・ギター
ss=ソプラノ・サックス　syn=シンセサイザー
tb=トロンボーン　tp=トランペット
ts=テナー・サックス　vib=ヴィブラフォン
vln=ヴァイオリン　vo=ヴォーカル

CamScannerでスキャン



オルタナは歌詞のダークさを含めて
内側に閉じこもっていた自分にすごく染みて

にせっど
生まれのSAGOに
人プロジェクト。ヴ
ギターを担当し
she saidで15年
シングルをリリ
デビューした。続き
「So Lonely but
Alone」などを発表
同バンド解散後、
てSAGOSAIDとし
活動をスタートさせ、
「REIMEI」、続い
には「Tough Love
と作品を発表し
東京・西調布で自ら
スタジオ"Studio
REIMEI"を運営している。
のリリースは同スタジ
したセッション音源
REIMEI SESSION」。

SAGOSAID

第78回

最新音楽生活考

MUSIC GOES ON

取材・文=柴崎祐二　写真=栗原論　イラストレイション=我喜屋位瑳務

ここ最近、ロックが復権している。それも、〝ロック的な要素が感じられるポップス〟といったようなものではなく、エレクトリック・ギターを中心に据えたアンサンブルを何よりの特徴とする〝ロックらしいロック〟が、新旧世代のアーティストたちによる実践を通じて、今再び注目を浴びつつあるのだ。それは、昨年の末に各メディアが発表した一連の年間ベスト記事のラインナップを通覧してみても、一目瞭然というところだ。

実をいうと、〝ロックらしいロック〟というのは、それ以前の時代、具体的にいうと2010年代後半から20年代初頭にかけて、最先端の音楽シーンの中では脇の方に追いやられていたというのが実情だ。それには様々な理由があるだろうが、主には、10年代を通じてポップ志向のエレクトロニック・ミュージックやR&B～ヒップホップ等が、メジャー／インディーを問わずシーンの覇権を完全に掌握したという事情が挙げられるだろう。

しかし、いつの世にもそうした状況に飽き足らず、鮮烈なカウンターを叩きつける者たちはいる。コロナ禍を経て〝ロックらしいロック〟もまさにこのような状況の中で再び活力を取り戻し、現代カルチャーの最前線でその存在感を増しつつある。そしてまた、その活力は、何もニューカマーたちだけによって突如もたらされたものでもない。当然ながら、以前から自らのロックを実践してきた多くのものたちの歩みこそが、昨今の復権を加速させたのだといえるし、それは、日本のシーンにおいても同様だ。

15年に京都発のバンド：sage saidの一員としてデビューしたSAGOも、そうした誇り高き実践者の一人といえる。当初から、オルタナティヴ・ロックの正道を行くような胸のすくサウンドを展開してきた彼女だが、後にソロ・アーティストとして独立し、東京への転居にともない名義をのAGOSAIDと変えてバンド活動をはじめた。個性豊かなサポート・メンバーの協力を得て制作された21年の『REIMEI』、23年の『Tough Love Therapy』で展開される、躍動感と不敵さ、そして何よりもフレッシュさに満ちた内容を聴けば、今再び〝ロックらしいロック〟が輝きを増しているさまを、即座に実感できるだろう。

SAGOSAID
『Tough Love Therapy』
SECOND ROYAL SRCD072／CD／¥2500／発売中
2023年発表のセカンド・アルバム。24年にはLP（EMF 109）でもリリースされた

現在、来るべき新作を制作中だという彼女に、自らが運営に携わるスタジオにして活動拠点、REIMEIで話を訊いた。

同世代が聴いてないものを聴くぞ

「最初にCDを買ったのは小学校低学年頃、モーニング娘。だった気がします。両親もわりと音楽好きだったんですが、ちょっと変な趣味で、ビートルズを集中的に聴いたかと思ったら、続けて浜崎あゆみをガンガンかけるみたいな感じで。

今思うと、ビートルズのCDが家に揃っていたのはラッキーだったと思います。中学生の頃、BUMP OF CHICKENにハマって、好きなバンドとしてビートルズの名前をよく出していたので、それで興味をもって聴いてみたんです。初期の勢いのある曲から後期の作り込まれた曲まで、全部好きでしたね。その頃から、同世代のみんなが聴いてないものを聴く

CamScannerでスキャン

ぞ、みたいな意識があったので、余計ハマってしまって。周りはアイドルの曲をよく聴いていましたから。ギターを始めたのもその頃です。親がアコギを持っていたので、それを借りて雑誌の『Go!Go! GUITAR』とかを見ながら弾いてました。

高校生になると、ニコニコ動画の〝邦ロック・メドレー〟みたいなやつをよく見るようになるんですが、そこでART-SCHOOLの存在を知りました。聴いた瞬間、それまで聴いていた音楽とは全然違うかっこよさがある気がして、どんどん掘っていきました。それがオルタナ的なものとの本格的な出会いだったと思います。友だちにも薦めたんですけど、当時はほとんど反応がなくて悲しい思いをした記憶があります…(笑)。そこからスーパーカーとかナンバーガールとか、国内のバンドを聴いていきました。そのときはあまり意識していなかったですが、不思議と新譜より、もっと前の時代、00年前後の日本のロックの方がしっくりきましたね。

当時はネットの掲示板、2ちゃんねる、の音楽スレッドとか詳しい人がやっていて、そこで音楽の情報を手に入れたり、YouTubeが普及し出した時期だったので、自動的におすすめされるMVを観たりもしていましたね。とはいえ、CDも同世代よりはちゃんと買っていた方だと思います。もちろん、レンタルもよくしていました」

よく見るとおしゃれなグランジ

同じ時期から、徐々に洋楽のオルタナ・ロックも聴くようになったという。

「ニルヴァーナは今ではすごく好きなバンドの一つなんですけど、最初に聴いた時には正直、あんまり良さが分からなくて。はじめに借りたCDが、適当に選んだらデモとかのレア曲を集めた『スリヴァー〜ザ・ベスト・オブ・ニルヴァーナ+3』(05年)だったというのもあると思うんですが。その頃は〝ローファイ〟という概念もまだ理解してないので、単純に〝音悪いし、なんだこれ?〟となってしまって(笑)。けど、繰り返し聴くうちにだんだん好きになっていきました。今では、どんなバンドにせよ、むしろデモっぽい曲って大好きなんですけど、多分この体験が関係していると思います。

その後、『ネヴァーマインド』(91年)を聴いたときには、〝こんなちゃんとした音のアルバムもあるんだ〟と驚きました(笑)。なんだかんだ言っても、ニルヴァーナで好きなアルバムは何かと訊かれたら、やっぱり『ネヴァーマインド』か『イン・ユーテロ』(93年)になりますね。

そこから彼らの周辺のグランジを聴いていくんですが、当時のグランジって結構ハード・ロック〜メタル要素が強めなのも多いじゃないですか。個人的にあまりそういうのは好きになれなくて、マッチョ感弱めというか、例えばダイナソーJr.みたいに、パンクっぽいものの方が好みでしたね。最初に聴いた彼らのアルバムは『グリーン・マインド』(91年)だったかな。ポップさもあって、すごく好みでしたね。J・マスシスは、自分にとって大切なギター・ヒーローの一人です。

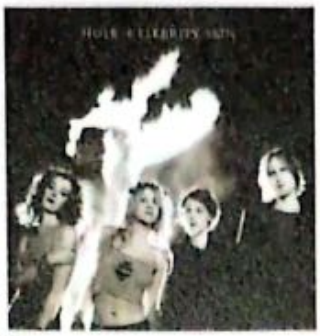
あとは、なんといってもホールの存在が絶対的です。初めはYouTubeでライヴ動画を見たんですが、演奏が最高なのはもちろん、コートニー・ラヴがトップレスで堂々と歌っている姿に本当にびっくりしてしまって。それを見た瞬間に、〝この人、超かっこいい!〟と魅了されて、以来、私は彼女の背中をずっと追いかけ

CamScannerでスキャン

てます。アルバムで言うと、『セレブリティ・スキン』も最高だし、『リヴ・スルー・ジス』（94年）もいいし…彼女の作品はすべて好きですね。暗い部分もありながらアッパーな感じだし、独特のセレブ感やキュートさにも惹かれます。

ソニック・ユースも好きで、特にキム・ゴードンのアーティストとしてのあり方にもめっちゃ憧れています。去年出たソロ・アルバム『ザ・コレクティヴ』も最高。70歳を超えてああいう表現をやり続けているというのもカッコよすぎます。

彼女にしてもコートニーにしても、衣装のセンスも抜群ですよね。私はもともと、あえて無頓着な格好をしていて、そっちの方がロックっぽいと思ってたんですが、彼女たちからの刺激もあって、ここ3年くらいでガラッと意識が変わりました。今日着ている服のテーマも、コートニー・ラヴです。グランジとかオルタナって何かと〝普段着〟っていうワードと一緒に語られがちだと思うんですが、カート・コバーンも含めて、よく見るとめちゃくちゃオシャレなんですよ。ある時そのことにハッと気付きました。あとはまあ、この数年間で音楽活動を通して女の子のアーティストや友だちが増えて元気になってきたっていうのも大きいと思いますけど（笑）。



Hole
"Celebrity Skin"
DGC[US] DGCD25164 [1998]
(CD)
スマッシング・パンプキンズのビリー・コーガンが曲作りにも関わったサード・アルバム

逆にいえば、昔はもっと内向的な性格だったように思います。高校の頃に遡ると、家族との関係に悩んだりしてたし、学校も嫌いでしたし。ありがちな話ではあるんですけど、自分の内側に閉じこもっている感じでした。そういう時によく聴いていたのが、スマッシング・パンプキンズです。歌詞のダークさを含めて自分の気持ちにすごく染みて。思い返してみると、すべてのきっかけになったART-SCHOOLを含めて、たとえ男性たちが前に出ているバンドだとしても、どこか耽美な匂いのする存在に惹かれますね」

その後、地元の名古屋を出て京都の大学に入学すると、いよいよ自分でもオリジナル曲を作って演奏するようになる。

「高校の頃も一応、バンドみたいなことをやってみたんですけど全然うまくいかなくて。大学に入ってからようやく一緒に音楽をやってくれるメンバーと出会って、she saidというバンドを始めました。

その頃にハマっていたのが、デス・キャブ・フォー・キューティーです。曲づくりからギターまで、影響受けまくりました。『トランスアトランティシズム』（03年）をよく聴きましたが、彼らの曲って、メロディも切ないし、やっぱりどこかに暗さがあって、心に染み入ってくるんです。彼らに限らず、90年代から00年代頃のバンドって、全体的に歌詞が難解で、より内面世界に寄っているように感じます。だからこそずっと聴き続けてしまうんだと思います。

あとはペイヴメントにもハマりました。もともと何曲かは聴いたことがあったんですが、大学の頃に自分の周りで局地的に大人気だったんです。ローファイという言葉を知ったのもそのあたりだったと思います。けど、一口にローファイっていうけど、〝いっても、演奏、結構上手いじゃん〟とも思ってました（笑）。ただ、

CamScannerでスキャン

ビート・ハプニングとかバステルズに対しての“これなら僕にもできる”というスティーヴン・マルクマスの発言には勇気づけられましたし、ローファイの魅力とマインドに影響を受けた時期でした。

10年代前半は京都のバンド・シーンもかなり盛り上がっていて、she saidのファースト・アルバムを出してくれたレーベル、SECOND ROYAL周辺のみんなと知り合ったり、高校時代に比べて、少しだけですけど外交的になっていきました(笑)。周りにもロック系のバンドがわりといて仲が良かったけど、振り返ると同じインディーでもポップス系の人たちの方が盛り上がっていた感じがしますね。she saidみたいな直球でオルタナ的なバンドは肩身が狭かった印象があります(笑)。なので、正直言えば、10年代っていうのは自分的には辛い時代でした」

刺激をくれた後追い世代の女性たち

その後、she saidは活動を休止してしまうが、東京への転居をきっかけに新たな名義で音楽作りを開始した。

「はじめは“東京に行ってバリバリやるぞ!”みたいな感じでもなくて、なんか今までと違うことをやってみようかなくらいの気持ちでした。“どっかに就職するにしても、東京の方がいいかな”っていう…。そうやって20年頃から始めたのがAGOSAIDというソロ・プロジェクトなんですが、もともと東京にたくさん知り合いがいたので、わりと苦労せずサポート・メンバーも集まってくれて。

実は、その前にはもう音楽やめちゃおうかなと思っていた時期もあったんですよ。けど、ちょうどUSやUKのインディー・シーンからバンド・サウンドを軸にした女性ソロ・アーティストがどんどん出てきて、驚きとともに、私ももうちょっとやってみようかなという気持ちになったんです。具体例を出すと、スネイル・メイル、ササミ、ビーバドゥービー、サッカー・マミーといった人たちですね。みんなかなり若くて、オルタナ・ロックは完全に後追い世代だと思うんですが、作品自体がすごくよくて。もしかすると、インディー・ポップ全盛の時代を経て、いよいよこういう音に光が当たるようになってきたのかな、と思いました。

あとは、フィリピン出身のビーバドゥービーとか、韓国にルーツを持つササミみたいに、白人に限らない人たちがそういう表現をやり出したというのも大きかったですね。私自身、ロック＝白人、しかも男性優位みたいな世界に疎外感があったし、日本で90年代のオルタナ・ロックに影響を受けた音楽をやってること自体に意味があるのかなと感じてしまっていた時期だったので、そこを掻いくぐってカッコいいことをやっていく彼女たちの姿勢には、とてもエンパワーメントされました。音楽的にも、ビーバドゥービーがちょっとループっぽいビートを取り入れてたりとか、23年の自分のアルバムを作るにあたっても刺激をもらいました」

今号の特集に関連して、90年代UKロックへの思いも語ってもらった。

「今まで話してきた通り、自分の嗜好は基本的にずっとUS寄りだったんです

Snail Mail
“Valentine”
Matador[US] OLE1785CD [2021]
(CD)
米国のシンガー・ソングライター、リンジー・ジョーダンによるソロ・プロジェクトのセカンド・アルバム

CamScannerでスキャン

が、最近はプライマル・スクリームもよく聴いてます。まず『スクリーマデリカ』（91年）を聴いて、他のアルバムも聴いていきました。『XTRMNTR』もかっこいいと思いました。自分でもなんで今まで聴いてなかったんだろうと思うんですけど、昔はなんとなく90年代のUKロック全般をチャラいものだと思っていたフシがあって（笑）、〝こちとらダンス・ミュージックとかそういうのに影響受けてないのが聴きてえんだよ〟みたいな感じだったんですが、今は素直にめちゃくちゃカッコいいと思えるようになりました。

思い返すと、そんなに数は多くないにせよ、昔からブラーとか、オアシスみたいなブリットポップ系も大好きだったし、レディオヘッド、ジーザス&メリー・チェインとかライドとかもわりと普通に聴いてたりもして。シューゲイザーに関しては自分は全然詳しくはないんですが、最近、若い世代でめちゃくちゃ流行ってるんですけど、なんというか、その定義がどんどん曖昧になっている気がしていて、いろんな意味で気になるワードではあります。日本だけなのかなとは思うんですが、歪んだ空間系のギターが入っていれば即シューゲイザーにくくっちゃう最近のムードも不思議ですね」

最後に、現在制作中だという次回アルバムの内容についても訊いてみた。

「最近はやっぱり自分は90年代のオルタナが好きだということを再認識したので、次のアルバムではループとかも使わない予定だし、もっとストレートなバンド・サウンドに寄った感じになると思います。あとは、ドメスティックな要素も積極的に取り入れていきたいと思っています。自分は日本に住んでいて英語をしゃべるのも得意じゃない中で、ただ好きなアーティストを真似するだけでは満足のいく表現に到達することはできないと最近思い始めて。その葛藤もサウンドに現われているような気がします。日本語にメロディがひっぱられて、邦ロック感が滲み出てくるとしても、むしろそれこそが魅力だろうと考えることができるようになりました」

〔1月14日　西調布・Studio REIMEIで〕

CamScannerでスキャン

ブリティッシュ・ロックの肖像

Portraits In British Rock From London

381

写真・文＝富岡秀次

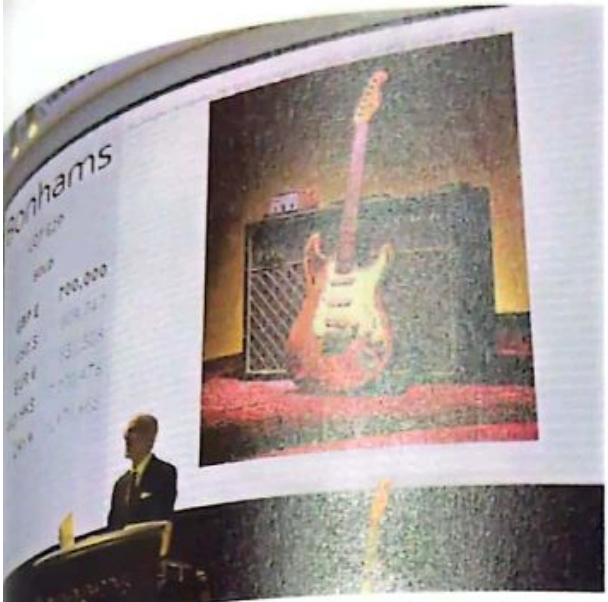
ロリー・ギャラガーのオークション@Bonhams（下）

生涯愛し続けたギターのゆくえを見守る

2024年10月17日、ロリー・ギャラガーのオークション当日、私は開始時間の1時間前にオークション・ハウス〝ボーナムズ〟に着いたが、入り口付近は既に人だかりができていた。満席の会場には、アイルランド訛りのヒソヒソ声が至るところで飛び交っていた。

午後3時のオークション開始と共に、入札はテンポ良く進んだ。オンライン入札者も多いせいか、淡々とした雰囲気だ。ロリーの忠実なローディーだったトム・オドリスコールが〝Usual Suspects（常連）〟と呼ぶドブロやテレキャスターなどはもちろん高額で落札されたが、それでもそれほどの競争にはなっていない。

私には、61年製のストラトキャスター以外に、個人的に行く末が



ロリー・ギャラガーのストラトキャスターが70万ポンドで落札された瞬間

が一本あった。かつて国内の楽器メーカー、グヤトーンに勤めていたギター設計者の富岡道明氏が、グヤとは関係なく個人として製作しロリーに進呈したギター（入札番号72）である。オークション・カタログでは〝グヤトーン・ロリー・ギャラガー・モデル〟と表記されていたが、これは完全な間違いだ。

道明氏とは血縁関係はないが、同姓ということもあって23年の10月にお亡くなりになるまで10年以上、親しくさせていただき、帰国するたびにお会いして貴重なお話を拝聴した。本連載では、09年7、8月号で、このギターの詳細を分析している。さらに、21年の5～8月号で、道明氏を日本のロック音響のパイオニアとしてインタヴュー

著者が受けたビッド札

会場となった会場の一部。奥が電話で入札するクライアントに対応する代理人たち

CamScannerでスキャン

富岡道明ギターは、オランダ国籍のキース・ブランチ氏が落札した。彼はこれが狙いでオークションに来たとのこと。意外にも、このギターは海外のマニアにはよく知られていたようだ。自身でもギターを弾く道明氏が、ロリーのスライド・プレイをコピーしながら、スライド奏法に特化し苦労して製作したギター。それを、その価値を理解した人が落札してくれる瞬間に立ち会い、しっかりと見届けることができた。

1975年の2度目の来日ツアーで富岡氏がロリーに自作ギターを渡し、バックステージでロリーが試奏しているようす／写真＝富岡道明氏

そして、いよいよ61年製のフェンダー・ストラトキャスターの順番が回ってきた。多くのファンが、このギターがアイルランドに戻ることを祈っていた。入札前に読まれた注意書き曰く〝この入札は紫色のビッド札を持っている人しか入札できない〟。周囲を見渡しても紫の札を持った人はいない。

予想では100万ポンド以上といわれていた。何といっても、ロリーがショー・バンド時代、テイスト～ソロと、生涯愛し続けたギターだから。激しい入札の攻防を想像していたが、開始後すぐに70万ポンドに上り詰め、その後、幾つか電話のやり取りがあったものの、掲示板の数字はそれ以上には上がらなかった。会場内に入札者はいなかったと思う。それで落札だ。世界中にはそれ以上に金額を引き上げられるマニアはいるはずだが、なぜかそういう入札者を拒否しているようにも感じた。

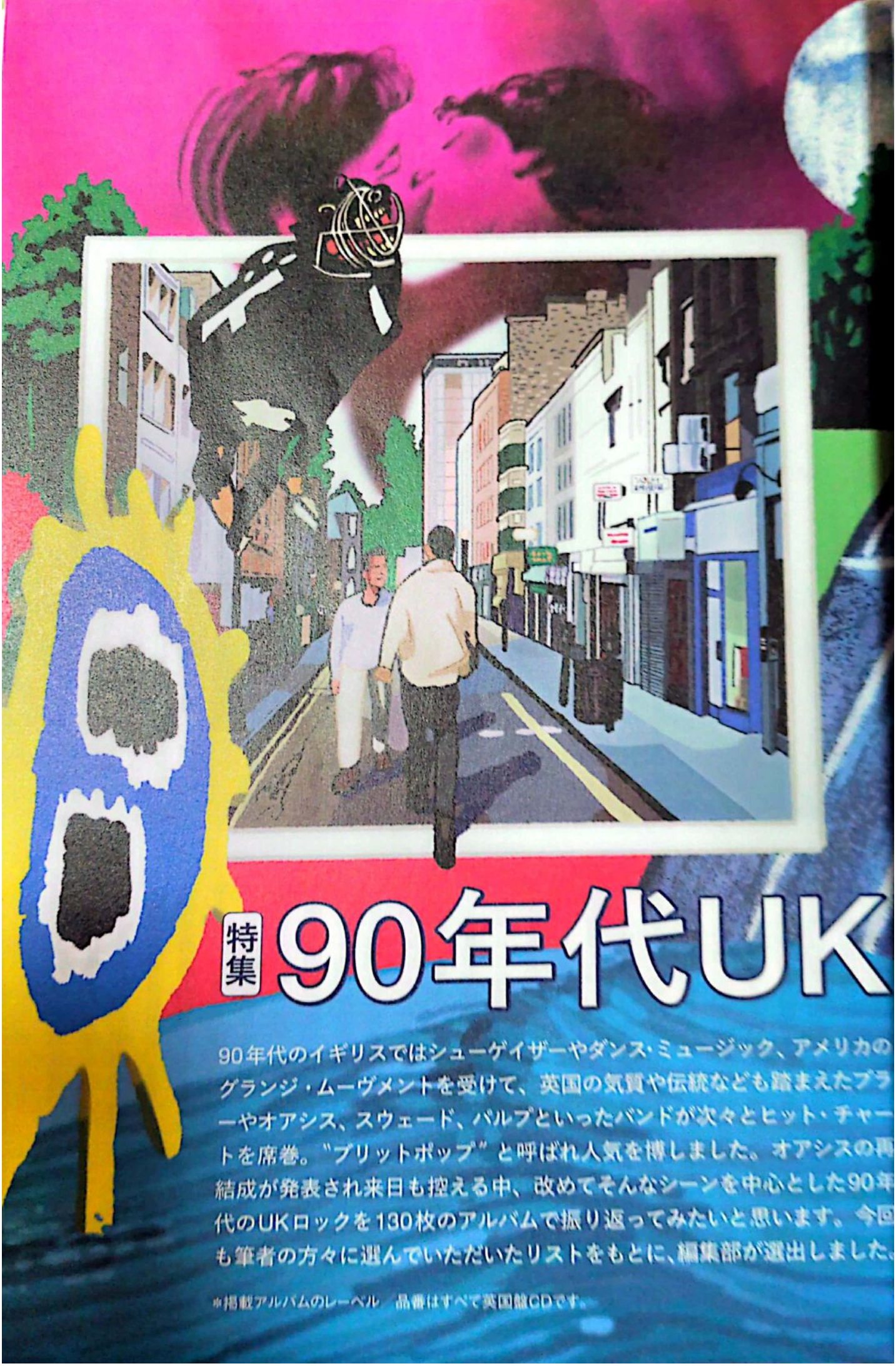
富岡道明氏製作のギターを落札したキース・ブランチ氏

結局、ストラトは70万ポンドにプレミアムを加算して、最終落札価格は88万9400ポンドであった。落札者はLive Nation Gaiety Ltd.。このストラトはダブリン市内のアイルランド国立博物館に寄贈されることになっている。前号で記した、コーク市の楽器店2代目店主マイケル・クロウリー（63年に、ロリーにこのストラトを100ポンドで売った人物）の娘シーナによる呼びかけで、数多くの出資者が共同で入札した模様だ。彼女のキャンペーン〝ロリーのストラトを故郷コークに戻そう〟の声は、多くのアイルランド人に届いた。彼女自身も5品を落札した。最終的に、オークションに掛けられた品の多くがアイルランドに戻っていったそうだ。現代のフェアリー・テイルのような良い話だと思う。

ギャラガー家のオークション責任者、ダニエル・ギャラガー氏

〔撮影は2024年10月17日　ロンドン、ボンド・ストリートのボーナムズで〕

CamScannerでスキャン



特集 90年代UK

90年代のイギリスではシューゲイザーやダンス・ミュージック、アメリカのグランジ・ムーヴメントを受けて、英国の気質や伝統なども踏まえたブラーやオアシス、スウェード、パルプといったバンドが次々とヒット・チャートを席巻。"ブリットポップ"と呼ばれ人気を博しました。オアシスの再結成が発表され来日も控える中、改めてそんなシーンを中心とした90年代のUKロックを130枚のアルバムで振り返ってみたいと思います。今回も筆者の方々に選んでいただいたリストをもとに、編集部が選出しました。

※掲載アルバムのレーベル、品番はすべて英国盤CDです。

CamScannerでスキャン

1 960年代、グラスゴーの労働者階級の家庭に生まれ、左翼の活動家だった父親の薫陶を受け、フットボールに夢中になり、ロックンロールの魅力に取り憑かれ、パンクに横っ面をひっぱたかれたひとりの青年が、いかに本作を生み出したか。それは70年代から80年代にかけてのUKポップ・カルチャーの足跡を辿ることでもある。2021年に上梓された『ボビー・ギレスピー自伝』は、その第一級の資料となりうる好著だ。

ブライトンのパーティーでの初めてのアシッド・ハウス体験。エクスタシー。レイヴ。ウェアハウス・パーティー。DJアンディ・ウェザオールとの出会い。サイケデリックな巡礼。エレクトリックなソウル・ミュージック。永遠の今。怒りやシニシズムや絶望からの脱却。タナトスではなくエロス。インナー・シティ、フランキー・ナックルズ、スエノ・ラティーノ、デリック・メイ。マッドチェスター。それまで属していたUKインディ・ロックの偏狭なコミュニティからとび出した先にあったのは〝愛の夏〟だった。89年の夏、セカンド・サマー・オブ・ラヴは最高潮に達していた。

当時は時代遅れの遺物だったシン・リジーへの深い愛情、ロックンロールへの執着で意気投合したレイヴの司祭ウェザオールに、セカンド・アルバム『プライマル・スクリーム』(89年)

Primal Scream
Screamadelica
プライマル・スクリーム／スクリーマデリカ

Creation CRECD076 [1991]

CamScannerでスキャン

収録の「アイム・ルージング・モア・ザン・アイル・エヴァー・ハヴ」のリミックスを依頼。ハウスDJとしては売れっ子だったが、リミキサーとしては未知数だった。3回目のテイクでOKが出たそのリミックスは、原曲の面影をまったく残さない完璧なアシッド・ハウス曲となり「ローデッド」と改題され、90年2月にリリースされた。曲の冒頭にサンプリングされたロジャー・コーマン監督のB級バイカー映画『ワイルド・エンジェル』(66年)のピーター・フォンダのセリフは、当時のブライマルと、彼らを取り巻くUKの文化状況がどんなものだったかをこれ以上なく鮮やかに表わしている。

「君たちは何をやりたいんだ?」

「俺たちは自由になりたい。やりたいことをなんでもやりたい。ラリって(Loaded)楽しむんだ。パーティをやるんだよ」

「ローデッド」は完璧なクラブ・バンガーとして熱狂的に受け入れられ爆発的なヒットとなった。90年から91年にかけて「カム・トゥゲザー」「ハイアー・ザン・ザ・サン」「ドント・フアイト・イット、フィール・イット」と立て続けにリリースされたシングルはすべてチャート・インして、それまで数あるインディ・バンドのひとつに過ぎなかったブライマルは、一躍時代の寵児となったのである。

本作は91年9月に3枚目のアルバムとしてリリースされた。前記のシングルはすべて収録され、コンセプチュアルに構成されたオリジナル・アルバムというより、ヒット・シングルを集めたベスト・ヒット集という印象もある。録音時期も長期にわたり、ウェザオール、ジ・オーブのアレックス・パターソン、そしてローリング・ストーンズ最盛期のプロデューサーとして知られるジミー・ミラーが手分けしてプロデュースを担当。音楽制作経験がほとんどないDJにプロデュースを頼むのは、当時では稀だった。ヒプノティックなアシッド・ハウス、『レット・イット・ブリード』のころのストーンズを思わせる米南部の香り漂う土臭いロックンロール、サイケデリックなダブ~アンビエント、ゴスペル、ソウル、フォーク/カントリーまで分裂的にヴァラエティに富んだ音楽性は一見まとまりに欠けるようだが、実は重度のパーティー・アディクトでありロックンロール・ジャンキーであるボビー・ギレスピーらの快楽原則に沿った楽曲という明快な共通項があり、フロアが盛り上がるなら曲のジャンルは問わないというバレアリックの理想が息づいている。

このアルバムが示したのは特定のサウンド・スタイルや技法ではない。思想であり生き方であり時代の様相である。セカンド・サマー・オブ・ラヴの理想を、レイヴやアシッド・ハウスのムーヴメントがどんなものだったかを、これ以上なく鮮やかに知らしめた。特にイギリス国外では、アルバムという単位で提示することで、よりわかりやすく示すことになった。

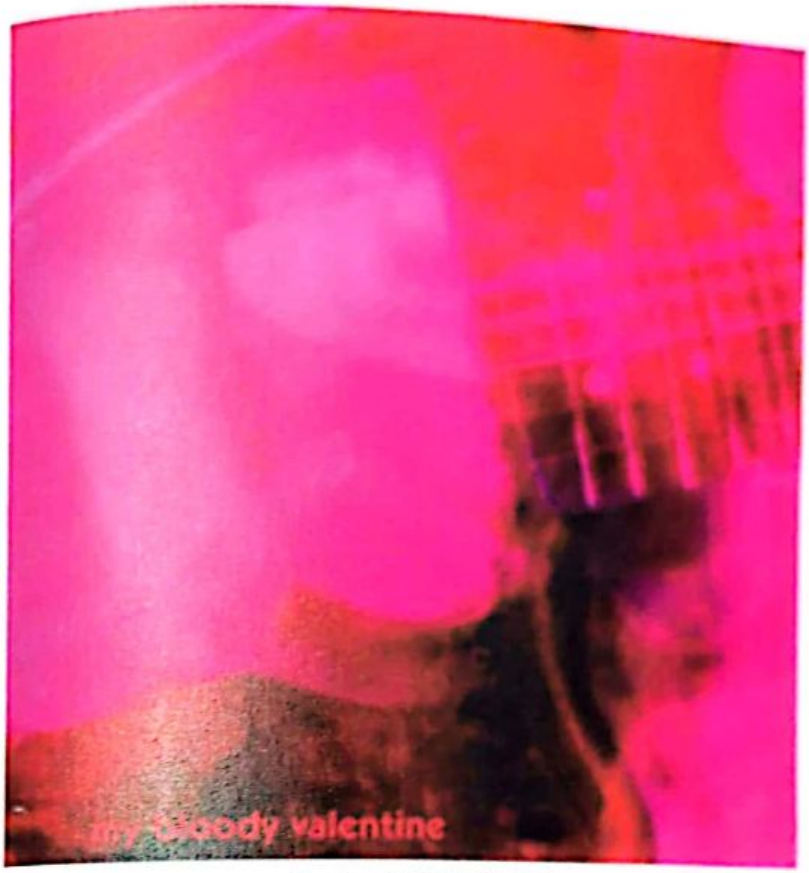
とはいえこれはあくまでも出発点に過ぎなかった。これ以降、彼らの音楽は興味の赴くままに、気ままな変遷を辿っていくことになる。前後の脈絡のない唐突な変化。次に何をやらかすかわからないカメレオンのようなバンド。むしろその予測のつかない変化が楽しみになるという、まるで70年代のデイヴィッド・ボウイのような存在となっていく。根っこにあるロックンロールの美学は不変ながら、技術の向上や特定のサウンド・スタイルの完成を目的としないから、いつまでたってもその音楽は未熟で完成途上のまま投げ出され、危うくて際どくて不安定なまま、顧みられることがない。だがその固定化しない、不断に動き続け変化し続けるその姿勢こそが、後進に大きな影響を与えている。

彼らの初来日は本作リリース直前の90年7月だった。東京・渋谷クアトロで行なわれたライヴを見た時の怒りにも似た失望感はよく覚えている。ヘタクソで未熟なのは想定内だ。だが、客を舐めたようなやる気のない演奏態度に腹が立った。そのとき、まさか彼らが21世紀まで生き残り、〝ヘタクソで未熟〟なまま、英国ロックを代表するようなバンドになるとはまったく想像もつかなかったのである。

(小野島)

CamScannerでスキャン

My Bloody Valentine
Loveless
マイ・ブラディ・バレンタイン／愛なき世界



Creation CRECD060 [1991]

たった一枚のアルバムが、リリースされるやいなやインディ・ロック・シーンのみならず広く多様な影響を及ぼし始め、しかもそれが現在の音楽にまで深く影を落とし続けているという例は、90年代はもちろんそれ以外の年代を探してもそう多くはないだろう。

それほど長くなかったとはいえオリジナル活動期間中に発表されたアルバムがこれ一枚だけではなかった（ミニ・アルバムとシングルも数枚）のを考えると、当人たちにとって幸せなことだったのか、いささか疑問に思わないでもない。しかし、この一枚だけでマイ・ブラッディ・ヴァレンタインがロックを語る際に不可欠の存在となったことだけは確かだ。

演奏における核は83年の結成当初もその後もギターのケヴィン・シールズながら、コンセプト面ではバンドの命名者で（81年公開の同名ホラー映画がその由来）、後にホラー／SF作家へと転身するオリジナル・リード・ヴォーカリストのデイヴィッド・コンウェイの存在も大きかった。そんな彼らが本作に直結する音楽性を確立したのは、シールズに女性歌手ビリンダ・ブッチャー、ベースのデビー・グッギ、ドラムスのコルム・オシオソイグというラインナップで、クリエイション・レコーズの所属となる88年のことだった。このラインナップによる最初（バンドのキャリアとしても初の）のアルバム？

CamScannerでスキャン

ズント・エニシング』ですでに彼らは、ギター・サウンドの電気的変調と音量の増幅が特徴的な、シューゲイザーともノイズ・ポップともネオ・サイケデリアとも呼ばれるその種のロックの先駆けとなっている。

ノイジーなエレクトリック・ギターに先導されるロックが彼らの発明でないことは歴史が物語っているが、このグループが新しかったのは、ノイズを男性原理の象徴ともいうべき暴力性にとどまらない、より普遍的な煽情や激情といった情念と結びつく世界を、純粋に音楽そのもので表現しきったところだ。その独特な美意識を確立するにあたっては、甘美な幻想味のあるブッチャーの歌声が作用していることは容易に想像がつく。が、ロカビリー唱法の影響が強いコンウェイに代わって男声パートを担うようになったシールズによる、ブッチャーの特性に近い繊細なヴォーカルの貢献もまた、決して無視できない。

ただし、先にも述べたように、同作のみなら、あれほどの影響力を波及させることはなかっただろう。ここに挙がっている『ラヴレス』が圧倒的な支持を集めるのは、同じような傾向のアルバムであっても、プロダクションにかけた予算と労力が桁違いで、それが作品の質と個性を高めることに、そのまま反映されているからにほかならない。

レコーディングに要した期間はおよそ2年半。そのほとんどは、いわゆるシューゲイザーが好んで使うコーラスやフランジャーといったエフェクターの使用にはこだわらず、アームを操作しながらピッキングするギター奏法で同様の効果を得るといった独創的手法の数々に、サンプリング技術をふんだんに駆使するなどヒップホップの方法論も加えながら、自身たちを含む従来のオルタナ・ロックとは似て非なるサウンドの〝発明〟に費やされている。

美しいノイズのさざ波とでも形容したくなる心地よい緊張感に包まれた本作が完成するのには、しかし、それだけの代償を払ったのも事実だ。そうした、主にシールズから提示されたアイディアのほとんどは即興的なものである。彼の頭の中で鳴っている音を他のメンバーやレコーディング・エンジニアに言語化して伝えるのがそれゆえ困難だったために、スタジオを転々とし、エンジニアも次々に交代させられるという事態は、周囲にとって災難だった（ベース・トラックもすべてシールズが演奏したという）が、最終的に信頼できるスタッフと録音場所に恵まれ、傑作を生みだしたことだけは、粘り強く理想の音を追い求めたシールズの功績として讃えるべきだろう。そのうちの1曲でEP『グライダー』にも収録されたアルバムの最終トラック「スーン」は、全作業を通じてシールズからの信頼がとりわけ厚かったアラン・モルダーのミックス。この曲のポピュラー音楽としての革新性を指摘した一人がブライアン・イーノだったのは興味深い。

一つのバンドの一枚のアルバムがクリエイションの倒産につながったという例の逸話には誇張があるだろう。だが、少なくともレーベルの長であるアラン・マッギーをして、もう彼らとは仕事をしたくないと思わせるほどには実際に制作費がかかったであろうし、なによりあの怒涛のような日々を繰り返すだけの気力が残されていなかったというのも本音に違いない。UKアルバム・チャートで24位という位置につけ、多くの同業者や批評家たちから賞賛の声を集めたにも関わらず、レーベルは彼らを放出。一方、オシオソイグが手掛けた短いインスト・ナンバー「タッチド」を除くすべての曲を書き、プロデュースを担当したシールズにとっても、同じ作業を重ねることには相当の困難をともなった。破格の契約金を得てアイランド・レコードに移籍した彼らは3作目の完成に向けてレコーディングを行なうも、残されたのは膨大なトラックの断片という結果に終わっている。97年に解散したマイ・ブラッディ・ヴァレンタインが当時のトラックに新たなパートと曲を加え、ようやく一枚のアルバム（『MBV』）として完成させるのは、13年のことである。

（松井）

CamScannerでスキャン

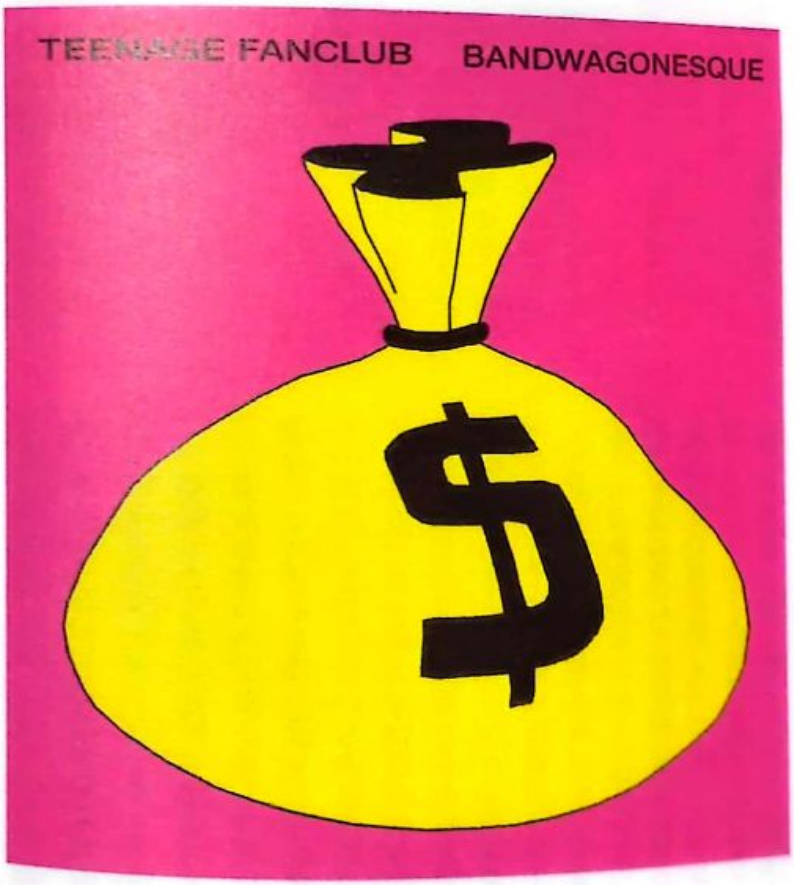
スコットランド、グラスゴーを代表するバンド、ティーンエイジ・ファンクラブ（以下、TFC）の3作目で出世作、そしてロックの名盤が誕生だった1991年を象徴する作品だ。アルバム冒頭、ハードコア・パンクを連想させるギターのフィードバック・ノイズで周到に前振りをしたうえで、ジャリジャリしたエレキ・ギターの白玉、ジェントルなストリングス、湿っぽいメロディが同時に進行するという展開に予想が裏切られ、まずハッとさせられる。『バンドワゴネスク』が多くの人にとって忘れがたいアルバムになったのは、冒頭に配置されたこのケレン味があればこそだ。

素朴で可愛らしくて切なく甘酸っぱいメロディ。倍音でグラデーションを描くエレキ・ギターのアンサンブル。ニール・ヤング率いるクレイジー・ホースを思わせるシンプルで朴訥な語り口のリズム隊。この組み合わせは、90年代を象徴する必勝パターンだ。歪んだギターによる音の壁を背景にして歌うことがメロディの良さを際立たせるのに有効な手法だと再発見されたのが90年代初頭だったといえるだろう。

ハスカー・ドゥやダイナソーJr.、ピクシーズ、ソニック・ユース、レッド・クロス、レモンヘッズといったアメリカのバンドのスタイルとも大西洋を隔てて響き合っていたと見ることもできる。むろんニルヴァーナもここに含まれる。

Teenage Fanclub
Bandwagonesque

ティーンエイジ・ファンクラブ／バンドワゴネスク



Creation CRE CD106 [1991]

CamScannerでスキャン

カート・コバーンがTFCを〝世界一のバンド〟と称賛したのは有名な話だ。他方、〝世界で2番目にグレイトなバンド〟だと評したのは、オアシスのリアム・ギャラガーだ。彼が最もグレイトなバンドだと思っているのがオアシスであることは改めて言うまでもないだろう。オアシスもまさに親しみやすい曲をエレキ・ギターをやかましくかき鳴らしながら歌うというスタイルで頂点まで上り詰めたバンドだった。

1980年代がテカテカ・ツルツル・ピコピコといった趣の大仰なテイストが好まれたディケイドだとすると、90年代は素朴でレイドバックした70年代前半のテイストへと回帰した時代だったといえるかもしれない。とはいえ、TFCの音作りは、80年代にカウンターカルチャーとして花開いたハードコア・パンクのテイストを踏まえたものだ。機材についていえば、深い歪みは足元のペダルによって作られる。『バンドワゴネスク』のブックレットには、ベーシストのジェラルド・ラヴがプロコ製のターボ・ラットを手にした写真が印刷されている。こうしたディストーション・ペダルは90年代前半を象徴するサウンドにほかならない。

80年代後半から90年代前半にかけてビッグ・スターおよびアレックス・チルトンの再評価が進み、彼らからの影響を明らかにするバンドやミュージシャンが目立った。たとえば、REMやdB's、リプレイスメンツ、マシュー・スウィート、ウィルコ、ポウジーズ、エリオット・スミスなどだ。そして、TFCはその筆頭格だと言って差し支えないだろう。TFCの曲作りは、チルトンだけでなく、クリス・ベルの作風もお手本にしているように感じられる。『バンドワゴネスク』を〝ビッグ・スターの4作目〟と評する声もあるようだ。のちにTFCはチルトンと共演を果たし、ライヴでバック・バンドを務めた。ノーマン・ブレイクのペンによる「アルコホリデイ」は特にチルトン魂が炸裂している。

『バンドワゴネスク』のプロデュースを務めたのは、ヴェルヴェット・モンキーズのドン・フレミングだ。ソニック・ユースやダイナソーJr.としばしばコラボレーションしていたUSインディ界のキーマンで、プロデューサーとしては、ホール『プリティ・オン・ジ・インサイド』(91年)やスクリーミング・トゥリーズ『スウィート・オブリヴィオン』(92年)、ポウジーズ『フロスティング・オン・ザ・ビーター』(93年)などを手掛けている。『バンドワゴネスク』を特徴付けるサウンドの要素としてはコーラスが挙げられる。これは、昨今のバンドには見られない特徴だから積極的に多用すべしというフレミングのアドヴァイスを反映させたものとのことだ。

TFCといえば、ブレイク、ラヴ、レイモンド・マッギンリー、ブレンダン・オヘアの4人がそれぞれ曲を作ることでも知られている。しかし『バンドワゴネスク』では、ブレイクとラヴがメインのソングライターとして大半の曲を書いている。収録曲はどれも粒ぞろいだ。

マッギンリーは自作曲「アイ・ドント・ノウ」で、ドラムのブレンダン・オヘアはラヴと共作した「サイドワインダー」で、それぞれヴォーカルを取っている。メンバー全員がヴォーカルを取るというスタイルは、やはりビートルズを連想せずにはいられない。

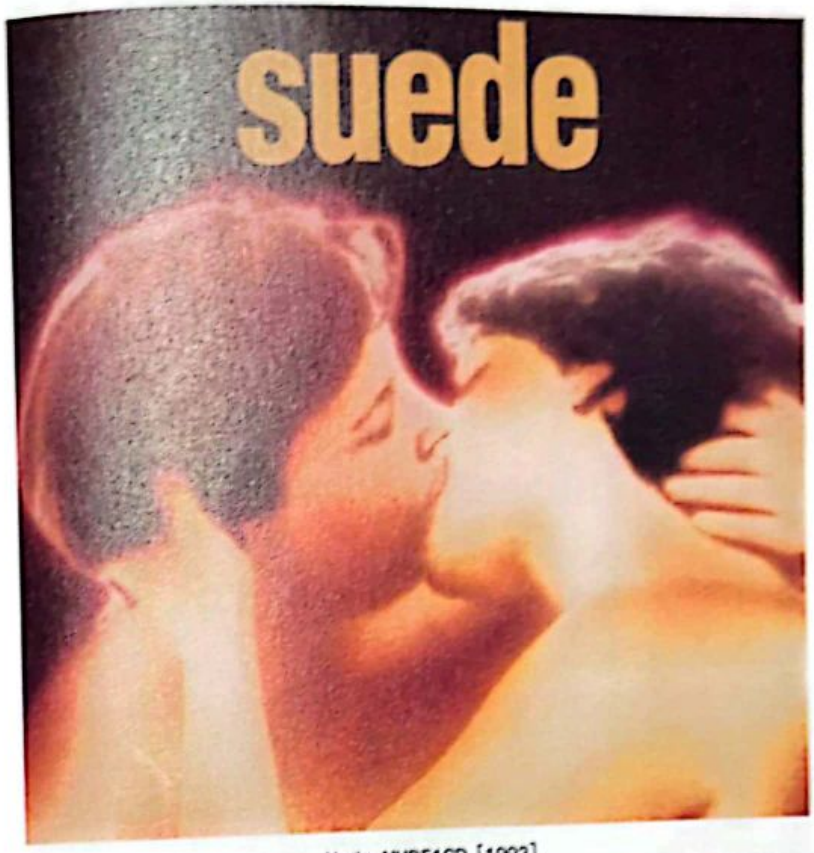
ニール・ヤングを連想させるギター・ソロの弾きっぷりも聴いていて気持ちが良い。「ザ・コンセプト」では、たっぷりと尺を取ってペンタトニック一発系のソロが披露される。ときにこの曲の後半以降に登場するテンポが落ちるセクションは日本人の耳にははちみつぱいのように聞こえるのではなかろうか。こうした古風なグルーヴが取り入れられる一方で、「スター・サイン」のようなアクチュアルなグルーヴの曲もあり、互いに際立つような構成になっている。

アルバムのラストは、インストの「イズ・ジス・ミュージック?」で締めくくられる。TFCのメロディ・センスを注入したノイ!のような趣の曲だ。こうした意外で突飛なアプローチもまた『バンドワゴネスク』を忘れがたい一枚にしている要因の一つである。(鳥居)

CamScannerでスキャン

Suede
Suede

スウェード／スウェード



Nude NUDE1CD [1993]

1989年にロンドンで結成された4人組バンドのデビュー作。先行発売されたシングル「ザ・ドラウナーズ」「メタル・ミッキー」は、ブレット・アンダーソンの妖艶な歌唱スタイルとバーナード・バトラーの奏でる粘りっけのあるギターの音が印象的だった。前者は同性愛と近親相姦、後者は名声のために身体を売る女性が描かれている。ロック・ミュージックはいつの時代もマイノリティのためのカルチャーとして支持されてきたし、少なくとも英国はお国柄もあり、少数派のメッセージがリスナーの心を常に掴んできたと思われる。80年代後半から米国シアトルを中心にムーヴメントを巻き起こしたグランジ・ロックに反発する形で登場したスウェードは、ブリットポップの先駆けとして時代を動かした。2枚のシングルをメンバーと一緒に制作していたのが、アルバム・プロデュースを手掛けることになるエド・ビューラー。彼はかつてサイケデリック・ファーズにキーボード奏者として参加していたという。

先の2曲のPVを観て、彼らは新時代のグラム・ロックだと認識し、後日、LPを迷わず購入した日のことを鮮明に覚えている。前のめりの演奏に接するとそう感じるのだが、録音自体は往年のグラム・ロックの諸作品とはかなり異なり、奥行きのある音像が眼前に立ち現われる。アルバム中盤「パントマイム・ホース」（LP

CamScannerでスキャン

ではA面最後の曲）の緩急に富んだ音楽を最大限活かしたミックスは、ヴォーカルの周囲でバトラーの弾くギターがまるで歌っているように舞う。エコーが深く掛けられたアンダーソンの歌声は艶っぽく、男の私でさえいつまでも耳を傾けていたくなる。陰影感を伴った本作の音づくりはハーフ・インチのアナログ・テープにミックス・ダウンされた音源に起因する側面が大きい。90年代初頭、アナログ・テープの優位性はその器の大きさが、音の滲み感も含め、業界では広く認知されていた。1／4インチとハーフ・インチのアナログ・テープのそれでは情報量がまるで違い、ハーフ・インチの音は総じて土台が野太くなる傾向がある。ロックで最優先されるべきものはリズム隊の音。スウェードがデビュー作で模索していたテーマはセクシャリティと暴力。そのグレイ・ゾーンを作品としてしっかりと伝えるためにメンバーはエド・ビューラーと口頭ではなく、おそらく心で向き合いながらレコーディングを遂行していたと感じる。そうでなければ、この世界観がこれほどまで聞き手の深層心理に響くことはあるまい。本作が垣間見せる尊いメッセージは海を超え、日本の洋楽ファンの心にまで届いたのである。

本作は楽器の音を詰め込むことはせず音に適度な隙間を感じさせることで、聞き手の想像力を掻き立てる。冒頭「ソー・ヤング」はビューラーの奏でるキーボードが曲にアクセントを加味し、ギターと対峙させることで曲の世界観に広がりが生まれている。「アニマル・ナイトレイト」の音像はヴォーカルとギターがほぼ対等に聞こえてくるのが特筆される。この曲に限ったことではないものの、ギター自体の響きはシューゲイザーをイメージさせる歪みっぷりで、我を忘れる瞬間さえある。エコー&ザ・バニーメンが80年代に確立した音づくりをいっそう深化させたのが彼らの功績、といってしまってはスウェードのファンから反感を買うだろうか。静謐な「シーズ・ノット・デッド」に接するといつもそのことが頭を過ぎる。英国ロックの深い闇に迷い込む快感がここにはある。90年代半ば、英国カムデンの小さなクラブを訪れた際、この曲に身を委ねながら恍惚の表情を浮かべていた来場者を他人とは思えなかった。時間を共有できるクラブの醍醐味。ドラムが暴れ回る「ムーヴィング」はグラム・ロック度が高く、エフェクター効果も相まって聞き手の心を掻き乱すパワーを秘めている。ゴージャスな音響は身体を否応なく突き動かす。

LP時代のB面では「スリーピング・ピルズ」が先の「シーズ・ノット・デッド」同様、音の迷宮に放り込まれる印象を抱かせる。輪廻転生だろうか。我が国にはかつてリビドーというマイナーな音響バンドがいたが、この曲を聞くと当方はどうしても彼らの記憶がフラッシュバックする。「ブレイクダウン」は静寂感を含め、スウェードの陰性面を集約した曲として忘れ難く、ここではギターが一歩奥で蠢いている。陽性な「アニマル・ラヴァー」はグラム・ロックを継承した曲で、バーカッションがギターの音に絡み付くのが心地いい。音の体裁はまるでストゥージズのリズム隊が舞い降りてきたようで、テンションがどこまでも高まる。アルバム最後を飾る「ザ・ネクスト・ライフ」はキーボードに導かれ、アンダーソンの伸びやかな歌声が前面に打ち出されている。彼らの望んできた扉はここで開かれたのだと感じる。

改めて先行シングル「ザ・ドラウナーズ」に耳を傾けるとキャッチーで、音響的には陽性面をアピールした曲であることが分かる。いっぽう、「メタル・ミッキー」はグラム・ロック色が濃厚で、混濁した音づくりが迫ってくる。どちらも英国の土壌でないとけっして生まれてこない類の音を湛えている。本作があったからこそ、その後のブリットポップはムーヴメントとして一時代を築くことになった。メンバーがプロデューサーのエド・ビューラーに信頼を寄せていたのは疑いようがなく、その後のアルバムでもたびたび彼を起用してきたことが何よりの証で、22年の『オートフィクション』でも彼を再びプロデューサーに迎えている。（武田）

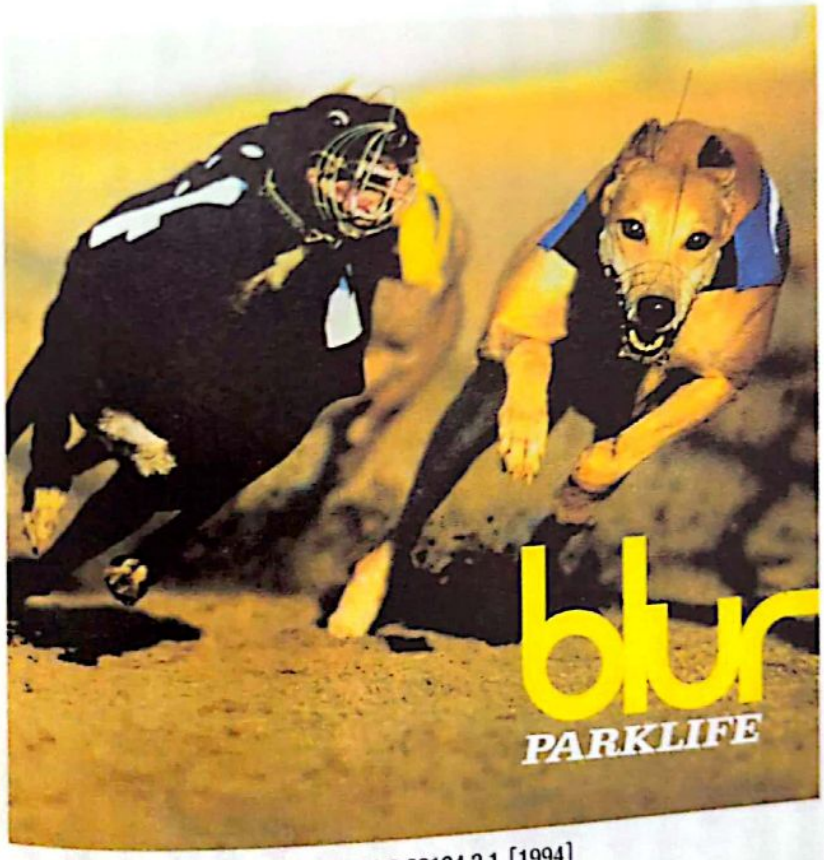
CamScannerでスキャン

一般的に90年代UKロックといえば、ブリットポップであり、ブラーとオアシスのイメージが強いと思っていたが、後年への影響などを鑑みてシューゲイザー勢の評価が高いのには納得しつつ、スウェードの高評価には「へぇ」と思う。当時在籍した音楽誌で彼らを表紙にした時は、誰にも褒められなかったのに…という恨み節はさておき、『パークライフ』である。

91年のデビュー作『レジャー』は、マッドチェスターやシューゲイザーといった終わりかけのトレンドを追うようなサウンドで、幾つか印象的な曲はあったもののまだ〝個性〟と呼べるものは希薄、次に期待、といったところだった。が、（グランジ旋風吹き荒れる）全米ツアーで散々な目に遭ったバンドは、次作の『モダン・ライフ・イズ・ラビッシュ』で大きく方向転換、XTCやキンクス、ザ・ジャムなどが持つ英国的ポップネスを前面に打ち出したのだ（とはいえ、当初プロデューサーに迎えられたXTCのアンディ・パートリッジは「XTC色が強すぎる」という理由で、デビュー作同様スティーヴン・ストリートに交代）。マッドチェスターともシューゲイザーともグランジとも異なる音を求めた彼らは、「現代の生活は過去の廃棄物。オリジナリティなど不要、つぎはぎすればいい」

Blur
Parklife

ブラー／パークライフ



Flood 7243 8 29194 2 1 [1994]

をアップデイトしてシーンに一撃を喰らわせた。

本作が発売されたのは、94年4月下旬。カート・コバーンが命を絶った数週間後のことだった。私がいた編集部にはすでに試聴用音源があり、あの頃の私は、このアルバムばかり聴いていた。アップリフティングなディスコ曲、キャッチーなポップ・チューン、朗々と歌い上げられるバラードなど、ポップ、モッズ、パンク、ニュー・ウェイヴまで英国のロック・ポップ史を網羅した多彩なスタイルと、これでもかと畳みかけてくる抗いようのないメロディもさることながら、英国生活や、そこに暮らす自分たちを含めた人々のことをコミカルに表現し、冷笑できる図太さに私は救われていた、と言ってもいいかもしれない。

ジャケットには、英国庶民に親しまれているドッグ・レースの犬が2匹。「パンク・ホリデー」「ロンドン・ラヴズ」「コローヴァー・オーヴァー・ドーヴァー」などの曲タイトルや、歌詞の中にもイギリスを想起させる言葉や地名が散見されるが、"英国をネタにするのは、他の国をネタにするより得意なだけ"で、さらに本作に関しては、"前作よりも広い視野でイギリスを見ていて、前作ほど健全ではなく、登場人物には影の部分がある"とも話していた当時のデーモン・アルバーン。彼はまた、映画や本が創作に大きな影響を与えることも明かしており、本作への影響源としては、世紀末のロンドンを舞台にしたマーティン・エイミス著のミステリー小説『London Fields』や、ラジオ4で毎晩オンエアされる海上船舶向け天気予報番組の『Shipping Forecast』などを挙げている。

刹那に生きる若者の愛とセックスを淡々と眺める「ガールズ&ボーイズ」は、今でもライヴでは最高に盛り上がるわけだが、歌詞と曲調の矛盾――サッドだけどハッピー――は、この頃のブラーの狙いであり、特にそれが顕著なのがこの曲であると言えよう。表題曲では、映画『さらば青春の光』主演のフィル・ダニエルズがコックニー訛りのナレーションを披露、歌詞は英国らしいシニカルなユーモアに溢れ、楽曲は超絶ポップであり、ブリットポップ・アンセムとしての存在感を今も放ち続ける。

金太郎飴のように、切れば"英国"が出てくる中で異彩を放つのが、フレンチ・ポップス然とした「トゥー・ジ・エンド」。ステレオラブのレティシア・サディエールを迎え、フランス語も交えたセンシュアルでメランコリックなこのバラードや、前述した天気予報番組から着想した壮大なバラード「ディス・イズ・ア・ロウ」では、表現力が増したデーモンの歌唱も堪能できる。そのデーモンがクラシックのピアノ教育を受けていたことも手伝い、本作ではキーボード/シンセサイザーが多用されてもいるが、ストリングス、打ち込みなども用いたアレンジ力の向上も認められる。さらに忘れてならないのは、グレアム・コクソンのギター・プレイだ。曲のヴァリエーションが豊かになったのに比例して、彼のプレイも実にアイデア豊富、印象的なフレーズを多く残し、本作の中核をなしている。

インストゥルメンタルの小曲を含み全16曲53分。緩みもなく、世紀末に向かうイギリスに暮らす小市民を、たいそうなスケール感をもって描き出した本作には過去へのノスタルジーもあれば、現在の混沌も、未来への希望と不安もある。が、とりわけ英国のリスナーはそのリアリティを自分ごととして捉え、本作を支持した。英国における音楽トレンドに一区切りがついていた数年間、同地の音楽シーンではアメリカナイズドが進んでいた。そこに、フレッドペリーのポロシャツを纏ったブラーが飄々とやって来て、英国を歌い、英国を取り戻した、というのはあまりに大げさだろうか。しかし実際、メディアは続々と現われる新進UKバンドを取り上げるようになり、94年半ばには"ブリットポップ"なる言葉が登場。ちなみに、オアシスのデビュー・シングル「スーパーソニック」がリリースされたのは、本作と同じ94年4月だ。

本作でバンドは初の全英1位を獲得、アルバム・セールスは125万枚を超え、翌95年のブリット・アウォードでは4冠に輝いた。(小尾)

CamScannerでスキャン

Oasis
(What's The Story) Morning Glory?
オアシス／モーニング・グローリー

Creation CRECD189 [1995]

オアシスの初来日公演（94年9月）はよく覚えている。渋谷クラブクアトロ、自分はいつもステージを正面にしてフロアの最後方で観ることが多いのだが、そのときは超満員のせいもあってステージ左脇側からの参戦であった。

約1か月ほど前にファースト・アルバム『オアシス（Definitely Maybe）』を出したばかりだというのに、素早い来日の実現でチケットは即ソールド・アウト。新人バンドの来日が多くなっていた頃とはいえ、そんななかでも一気に盛り上がる人気に、会場の熱気はすごかった。なんとか確保したスペースが、脇からとはいえしっかりと見える位置だったので、リアム・ギャラガーの後ろ手を組んだ様子や突っ張った歌いっぷり、表情がとても印象深く記憶されている。バンドとしても新人離れしたこなれたライヴさばきを持ち、最後には「アイ・アム・ザ・ウォルラス」でビートルズ・エイジまで軽く昇天させてくれるなど、未来を期待させるに十分な出来でもあった。それがさらに確信に変わるのは、翌95年の再来日公演直後に発表された、この『モーニング・グローリー（(What's The Story) Morning Glory?）』だった。ファーストも新人離れした成功を見たが、それ以上に巨大な爆発となったのが本作で、全米チャートでも4位、イギリスでは10週連続1位と桁外れのブレイクを果たす。90年代UKバンドでこれほ

CamScannerでスキャン

どの成績を残したものはいないし、とくにグランジ・ブームで大きく様相が変化していたアメリカでの大ヒットは、多くのUKバンドが鉄の壁に跳ね返されていくなかで際立っていた。世界中でも、その人気は一気に沸点に達する。ビートルズの遺伝子を濃厚に受け継いでいることは『アビー・ロード』へのオマージュともなっているジャケット・デザインで軽く宣言もされているが、同時に、本家が道をメンバー四人で渡る光景を真横から撮っているのに比べると、真正面から関係性も曖昧な二人の人間がすれ違うデザインとなってるのはじつに象徴的でもある。

受け継がれるエッセンス、その遺伝子を誇りつつも新しい世代としての立ち位置を鮮明にしたのがこのセカンドだった。パンク以降、UKロックの一つの震源地ともなったマンチェスター。かの地を舞台に、ジョイ・ディヴィジョン～ザ・スミス～ストーン・ローゼズと、連綿と吐き出されていった北部のミュージシャンたちならではの魂が、最根底から唸りを上げている。

グラム・スター、ゲイリー・グリッター（性的虐待などで現在も服役中）の"Hello, Hello I'm Back Again"から歌詞とメロディを引用というので、クレジットにソングライターとして彼の名も併記した「ハロー」に始まり、ワーキング・クラスとミドル・クラスや北部・南部の対立構造まで想起させる「ロール・ウィズ・イット」、続いて世界中で大ヒットし、人気爆発の起爆剤ともなったナンバーでありながら、ビートルズ・ファンであればまずジョージ・ハリスンがソロで初めて手がけた同名サントラ盤（邦題は『不思議の壁』）を思い出してしまった「ワンダーウォール」が、アルバムのイメージを刻み込む。

そして続くのが、ノエル・ギャラガーがリード・ヴォーカルを取ることを主張した運命のナンバー「ドント・ルック・バック・イン・アンガー」。17年にマンチェスターのコンサート会場で起こったテロ事件を受けた犠牲者追悼集会で感動的に合唱され、今ではさらに特別な歌となってしまった。ジョン・レノンとオノ・ヨーコの平和を訴えた"ベッド・イン"パフォーマンスを連想させるフレーズや、怒りや復讐の想いだけで振り返るなというメッセージ性など、今でも会場全体を揺るがすシンガロングは、オアシスの伝説を語り継ぐものとなるだろう。そこも踏まえ、ここまでの4曲の流れは完璧だ。

前アルバムのエッセンスをスケール・アップして進んでみせる中盤の「ヘイ・ナウ」や、ファースト・シングルとして出された「サム・マイト・セイ」、ヴァーヴのリチャード・アシュクロフトのことだという、アコースティックを基調に歌われる「キャスト・ノー・シャドウ」、そして、ヘリコプターの騒音をイントロに、アルバム中もっとも攻撃的なサウンドを聞かせるタイトル・トラック「モーニング・グローリー」など、変化に富んだアレンジでまとめ上げるところは若手バンド離れしている。だが、それも打算や演出なんてことよりも、直感的に詰めていったアプローチの結果で、その象徴が最後の7分半にもおよぶ「シャンペン・スーパーノヴァ」だ。ポール・ウェラーをゲストに迎え、ドラッギーな体験をベースに突如、スターとなってシャンパンの山に浮かぶ自身の姿を見つめ直す。その様子が、さんざんビートルズを始めとした過去からの引用やオマージュを攻撃されることへの反撃に思えたりもする。

ファースト・アルバムが自分たちも思っていなかったほど（たぶん）の大成功を得て、そのプレッシャーを正面から受け止めつつ作り上げたのは、まさに"グローリー・デイズ"と呼ぶにふさわしい傑作で、ここからさらに90年代UKロックの先陣として大きな歩みを進めていくはずだった。その後にあったのはメンバー交代や暴行事件、兄弟の喧嘩騒ぎで、作品的にも煮えきらないものがあったりもするものの、それでもグループの伝説は巨大化するばかり。それはファーストと本作によって築かれた圧巻の世界があったからで、伝説に新たな1ページが書き加えられる今回の再編でも、その輝きは更新されるに違いない。

（大鷹）

CamScannerでスキャン

90年代のブリットポップ・ブームを象徴するバンドとなったパルプだが、このバンドのまさに支柱であったジャーヴィス・コッカーは、この熱狂的なブームの中における最大の苦労人でもあり、最高傑作の本作の発表時点で、彼は既に30歳を超えていた。しかし、遅れてやってきた彼らがシーンの中心的存在となり、世界的な名声を得たことは決して偶然ではなく、それまでの活動で培われた高い音楽性ゆえのことだった。それはむしろ、時代が彼らに追いついた結果といえるのかもしれない。

ジャーヴィスは63年にシェフィールドで生を受けたが、彼の父マックはジャーヴィスが十代のはじめにひとりシドニーへ移住、ラジオのDJとして活動を始めており、父とは以降も距離が縮まることはなかったようだ。しかし、そんな父の影響がなかったわけではないのだろう、78年にはパルプの前身となるアラビカス・パルプを結成、ジャーヴィスは音楽の道に身を投じていく。そして83年にはバンド名をお馴染みのパルプへと改め、英国のインディ・レーベル、レッド・ライノから最初のアルバム"It"を発表、87年には別のインディ・レーベル、ファイアーから2枚目のアルバム"Freaks"を発表したが、その結果は成功とはほど遠いものだった。この時期のジャーヴィスはバンドの収入も皆無で、失業給付を手に廃工場を不法占拠し暮らすなど、

Pulp
Different Class

パルプ／コモン・ピープル

Island CID8041 [1995]

生活自体が完全に行き詰まっていたが、ロンドン芸術大学の系列のセントラル・セント・マーチンズで映画製作について学ぶなど、自身の進むべき道の模索を止めてはいなかった。入学を機に拠点をロンドンへ移したが、ジャーヴィスはこの頃、アシッド・ハウスに傾倒、89年に完成した“Separations”はその影響が顕著な仕上がりとなったものの、リリースは見送られている。しかし、91年のシングル“My Legendary Girlfriend”がチャート・インこそ逃したが大きな話題となり、同曲収録の“Separations”もようやくリリースされる。これをきっかけに“マッドチェスター・ムーヴメント”から続く英国でのバンド・ブームに呼応した英名門レーベルのアイランドがパルプに注目。ジャーヴィスはバンド結成から16年もの年月を経て、ようやくメジャー・デビューを果たすのである。

本作“Different Class”（当時の邦題は、最大のヒット曲にちなんだ『コモン・ピープル』だった）は、94年の“His N Hers”（邦題は『彼のモノ♥彼女のモノ』）に続き、95年10月30日にリリースされた通算5枚目、アイランド移籍後2枚目となるアルバムで、5月に発売され英2位を記録した「コモン・ピープル」、9月に発売され同じく英2位となった「ソーテッド・フォー・イーズ・アンド・ウィズ」「ミス・シェイプス」を含んでおり、これらの勢いとともにリリースされて英1位を記録、120万枚を超える空前のヒット・アルバムとなった。アルバム・タイトルの“Different Class”は“史上最強のナンバー2ヒット”と称される「コモン・ピープル」の歌詞にリンクしたものだが、本作のオリジナル盤には計6枚、12面分の“それぞれのクラス”を表現した写真が収められており、自由にフロント・カヴァーを入れ替えることができるようになっていた。

「コモン・ピープル」は庶民的な生活をしたいと願う裕福な彼女をアイロニックに歌ったものだが、先にも触れた80年代のセントラル・セント・マーチンズ時代に出会ったギリシャ人女性との出来事が元になっており、実際の校名も歌詞に登場している。この頃のパルプは70年代のディスコ、エレポップ、ニュー・ロマンティックスからハウスまでを一気に通過したような音楽性だったが、バンドが醸すヴィジュアルも極めて人工的で、「コモン…」に代表される一連のPVでも一分の隙もない完璧なヴィジュアルを披露。そこにジャーヴィスの奇妙なダンスが加わることで唯一無二の世界が展開されている。しかし、「コモン…」で描かれている、裕福な家庭で育ったギリシャ人の彼女との関係の描き方は相当に辛辣であり、実の父に捨てられ、バンド結成後も不遇の時期を過ごさざるを得なかったジャーヴィスならではの世界が描かれている。対して、彼のシェフィールド時代を思い起こさせる「ミス・シェイプス」では、社会から追放された人々に対し、銃や爆弾を手にするのではなく“心”での団結を歌っている。幼馴染の女性との再会の夢想を描いた「ディスコ2000」も然りで、これらの歌詞はいずれもジャーヴィスの過去に根ざしたものだが、それらが極上で完璧なポップ・ソングに仕上げられている。

アイランドからのメジャー・デビュー作となった“His N Hers”が日本で紹介されたとき、多くのリスナーはきっと彼らを“期待の新人”だと捉えていたに違いない。しかし、ブラーやオアシスに続き登場したパルプのジャーヴィスは、苦渋を舐めながらも音楽の世界に食らいつき、不遇な時代を生き抜いてきた。そんな彼だからこそ社会に対し辛辣な目線を向け、アイロニックに表現することができたのだろうと思う。

本作発売後、96年にジャーヴィスはブリット・アワードでマイケル・ジャクソンのステージに乱入し物議を醸したが、当のパルプは02年に解散。ジャーヴィスはソロ活動とともに俳優業にも進出したが、10年には本作参加の面々がハイド・パークで行なわれたフェスで一同に会し、翌年には正式な再結成が実現。23年に再び再結成を果たし、翌年には英インディの名門ラフ・トレードと契約、25年1月には98年以来となる来日公演が実現している。

（犬伏）

CamScannerでスキャン

Radiohead
OK Computer
レディオヘッド／OKコンピューター

Parlophone 7243 8 55229 2 5 [1997]

ブリットポップが絶頂を迎えたのは、オアシスとブラーのシングルが同日に発売されてヒット・チャート1位を競い合った96年あたりだろう。それ以降、似たようなバンドが次々と登場してバブル状態になり、ブリットポップは消費の対象になっていく。そして、97年にアメリカのオルタナ・ロックに接近した新作"OK"を発表したブラーのデーモン・アルバーンは「ブリットポップは死んだ」と発言。その年にリリースされたレディオヘッド"OK Computer"は、浮かれたブリットポップとは対照的なシリアスさと先鋭的なサウンドでイギリスのロック・シーンの風向きを変えた。

レディオヘッドはブラーやオアシスに先駆けて92年に"Creep"というヒット曲を生み出し、ブリットポップ絶頂期にリリースした"The Bends"（95年）は全英チャート4位を記録したが、バンドが放つ暗いムードのせいでブリットポップでは浮いた存在だった。ブリットポップは60年代に世界を席巻したブリティッシュ・ロックの復権という側面を持っていたが、マガジンやジョイ・ディヴィジョンなどポストパンクのバンドに影響を受けたレディオヘッドは作品ごとに実験性を強めていった。

前作"The Bends"まではシューゲイザーやグランジ・ロックを思わせるギター中心のロックだったが、本作ではサウンドの方向性が変化

CamScannerでスキャン

ギターを重ねて音に厚みを出すのではなく、余白を効果的に入れることで立体的な空間を生み出すようになり、様々なエフェクトが使用されてスタジオ・ワークが重視された。そうした変化はオープニング曲"Airbag"から顕著だ。ドラム・ループに絡むダビーなベース。ストリングス風のシンセなど緻密に構築されたプロダクションは、当時、注目を集めていたマッシヴ・アタックやポーティスヘッドなどのトリップ・ホップのバンドからの影響を感じさせる。本作の前年にベックがヒップホップの手法を独自に昇華させた"Odelay"を発表。トータスやステレオラブなどポストロックと呼ばれたスタジオワークを駆使する実験的なロック・バンドが現われてロックのフォーマットが変化し始めていた。そういった動きにレディオヘッドがいち早く反応して生み出したのが本作だった。

レディオヘッドがレコーディングの実験を成功させたのは、"The Bends"のレコーディングで出会ったナイジェル・ゴッドリッチの協力があればこそだった。アルバムのプロデューサー、ジョン・レッキーのスタッフとしてレディオヘッドと初めて出会ったゴッドリッチは、レディオヘッドのメンバーとは同世代。"The Bends"の制作を通じてバンドと意気投合したゴッドリッチは、"OK Computer"をバンドと共同プロデュースするという大役を担うことになる。ゴッドリッチがエンジニア出身で機材に精通していたこともバンドには好都合だった。

バンドはゴッドリッチに自由にやらせ、バンドの中心人物、トム・ヨークをはじめメンバーは積極的に意見を交換した。アルバムがほとんど完成状態になった段階で大幅に作り替えたりもしたそうだが、新人プロデューサーとバンドが一緒に手探りでアルバムを作り上げていったことが、従来の手法に囚われない新しいサウンドを生み出すことになった。後にゴッドリッチはペイヴメントからポール・マッカートニーまで様々なアーティストを手掛けてイギリスを代表するプロデューサーとなるが、本作以降、レディオヘッドのスタジオ・アルバム全作に関わってバンドと強い絆で結ばれる。

メイン・ソングライターのヨークのアイデアがダイレクトにサウンドに反映されることになった結果、曲はますます内省的になり、アコースティックな要素が増えて繊細なメロディが際立つようになった。そして、そこにR&B、ジャズ、クラシック、ワールド・ミュージックなど様々な音楽的要素が導入された。先行シングル曲"Paranoid Android"は、ギターのアルペジオとパーカッションの掛け合いがブラジル音楽を思わせる導入部から、歪んだギターが炸裂するパート、そして、現代音楽を思わせるコーラスが荘厳な雰囲気をもたらすパートへと曲は変化。ヨークをはじめ、クラシックを本格的に学んだギタリスト、ジョニー・グリーンウッドなどメンバーのアイデアが曲に投入されて6分を超える曲をいっきに聞かせる。かと思うと、アコースティック・ギター、ピアノ、ドラムというシンプルな構成で聞かせる"Karma Police"では緊張感が漂う空間を作り、ヨークの痛々しいまでにフラジャイルな歌声から溢れ出す情感を浮かび上がらせている。"The Bends"のレコーディング時にジェフ・バックリーの歌声に刺激を受けたヨークは、本作で独自の歌唱スタイルに磨きをかけて、その不穏でエモーショナルな歌声は圧倒的な存在感を放っている。

本作はバンド初の全英チャート1位を記録して、グラミー賞の最優秀オルタナティヴ・ミュージック・アルバムを受賞。本作以降、イギリスではトラヴィスやコールドプレイがメロディを重視したメランコリックな作品を発表して、ブリットポップという国を挙げてのお祭り騒ぎが過ぎ去った後の静けさがロック・シーンを包み込んだが、レディオヘッドは次作"Kid A"(00年)で大胆にエレクトロニクスを導入してサウンドの方向性を更新し、攻めの姿勢を強めていく。ブリットポップが終わった後の風景を斬新な筆致で描き出した本作は、レディオヘッドにとって、そして、イギリスのロック・シーンにとっても新たな出発点となった。(村尾)

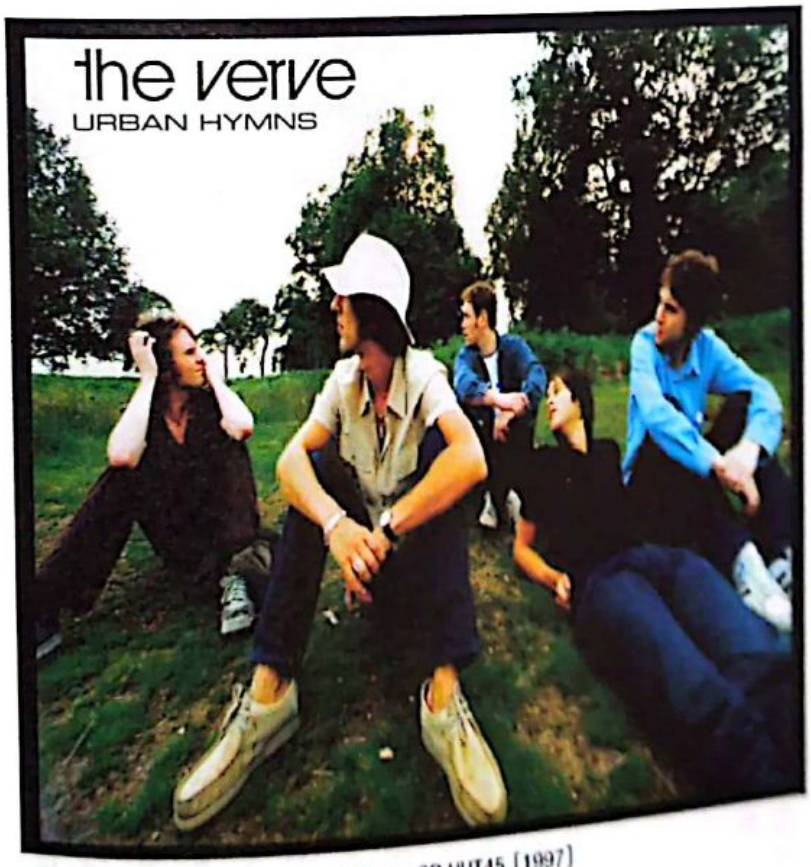
CamScannerでスキャン

ブリットポップを終わらせたのは、そのムーヴメントの最高位にあるアルバムのひとつを発表し、代表的なアーティストからも絶賛されたザ・ヴァーヴだった。彼らはまた1990年代イギリスの音楽シーンを揺るがす論議を巻き起こすことになった。

シンガー兼ギタリストのリチャード・アシュクロフトを中心にノーザン・ソウルの聖地ウィガンで結成されたバンドは92年にシングル・デビュー、サイケデリア／シューゲイザーの要素を取り込んだサウンドで人気を博している。第2作『ア・ノーザン・ソウル』（95年）からの「ヒストリー」はメランコリックな歌詞とメロディにストリングスを取り入れたスタイルを志向。この路線は新しいファン層を獲得、次なる展開が期待されたが、突如、解散が発表される。

短期間で再結成、ファンの頭を疑問符でいっぱいにした彼らだが、一躍ブレイクを果たしたのが復活シングル「ビター・スウィート・シンフォニー」によってだった。アンドルー・オールダム・オーケストラの「ザ・ラスト・タイム」（ザ・ローリング・ストーンズの曲）のストリングスをサンプリング、人生のほろ苦さと無常観を歌ったこの曲は全英チャート2位をはじめ世界各地でヒット。アシュクロフトがロンドンの路上で次々と歩行者にぶち当たるミュージック・ヴィデオがMTVでエアプレイされ、ナイ

The Verve
Urban Hymns
ザ・ヴァーヴ／アーバン・ヒムス



Hut / Virgin CD HUT45 [1997]

CamScannerでスキャン

キャスバルのテレビCMでも使用されるなど、彼らは"詐欺師"となる。発売前にテープをもらったオアシスのリアム・ギャラガーの"15回ぶっ続けで聴いた"というお墨付きもあり、この曲は97年のイギリスの音楽シーンを代表するヒットのひとつとなった。多くのブリットポップ・バンドがアメリカ市場で苦戦したのに対し、全米チャートでも成功している。

それに待ったをかけたのが「ザ・ラスト・タイム」の著作権を持つアブコ・レコーズのアレン・クラインだった。彼はサンプリングの使用の長さ、またヴォーカル・メロディが酷似していると主張し、「ビター・スウィート・シンフォニー」の作曲クレジットをミック・ジャガー&キース・リチャーズに変更させてしまった。その結果、アシュクロフトが手にしたのはわずか1000ドルだったという。それでもこの曲の成功のおかげで彼らの新作への期待は高まり、3作目のアルバムは熱狂的に迎えられた。

本作の大きな特徴となっているのは、前作『ア・ノーザン・ソウル』の「ヒストリー」の発展形といえるメランコリー&ストリングスのナンバーが大幅に増えたことだろう。「ザ・ドラッグス・ドント・ワーク」「ソネット」「ラッキー・マン」はいずれもシングル・カットされ、美しいほどに感傷的な曲調がリスナーの心を捉えて大ヒット。アシュクロフトのソングライター、メロディ・ライター、そしてヴォーカリストとしての評価を決定づけることになった。

さらに初期からのサイケデリックなサウンドスケープも「ザ・ローリング・ピープル」「キャッチング・ザ・バタフライ」「カム・オン」で健在であり、ギタリストのニック・マッケイブのラウドでノイジーなサウンドがもたらすアシッドな高揚感がオールド・ファンを驚喜させた。それに加えてストリングスを多用したロックは時代と絶妙なシンクロナイズをかもし、ブリットポップのリスナーを彼らの音楽世界にスムーズに移行させることになった。なお、最後の曲で「カム・オン!」と叫んでいるのはリアム・ギャラガーである。新旧リスナーを納得させる起伏に富んだこのアルバムは全英チャート1位を筆頭に、世界各国でヒットを記録した。

"オアシスやブラーの時代は終わり、これからのイギリスを代表するのはレディオヘッドとザ・ヴァーヴだ!"という論調すらあった本作だが、天下まであと一歩、手が届かなかった。『アーバン・ヒムス』や『OKコンピューター』が時代を象徴する名盤であることは多くの音楽ファンに共通する意見だろうが、この時期、ブリットポップのブームは終わりを告げつつあった。それらの作品は60年代を生きた高齢層が共感できなかったし、移り気なお茶の間のリスナーの関心はスパイス・ガールズ、エルトン・ジョンのダイアナ妃追悼歌「キャンドル・イン・ザ・ウィンド1997」へと向かっていった。

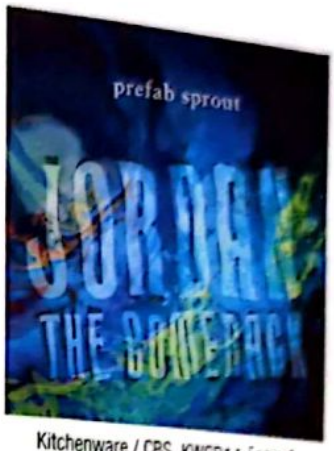
それでも『アーバン・ヒムス』のヒットにより、彼らはウィガン近郊の凱旋スタジアム・コンサートや〈Vフェスティヴァル〉のヘッドライナー出演など、"現象"といえる存在となる。だが、ツアーのストレスにより98年にマッケイブが脱退。メンバーたちより20歳以上年上のB・J・コールを代役に迎えた北米ツアーは不評で、99年には2度目の解散が発表された。2007年に再々結成、08年の〈サマーソニック〉出演を含むワールド・ツアーを行ない、アルバム『フォース』も発表されたが、09年に3度目の解散。アシュクロフトはソロとしてマイペースで活動を続けている。ザ・ヴァーヴはひとつの流れを生み出すには至らなかったものの、1990年代のUKロックを語るにあたって、誰もが思い出すバンドであり続ける。

アシュクロフト自身、アコースティック・アルバム"Acoustic Hymns Vol.1"(21年)で本作からのシングル4曲をすべてリメイクするなど、その思い入れの深さを露わにしている。

19年にはアブコとジャガー、リチャーズから「ビター・スウィート・シンフォニー」の権利がアシュクロフトに返還され、ロック史に残る

CamScannerでスキャン

Prefab Sprout
Jordan: The Comeback



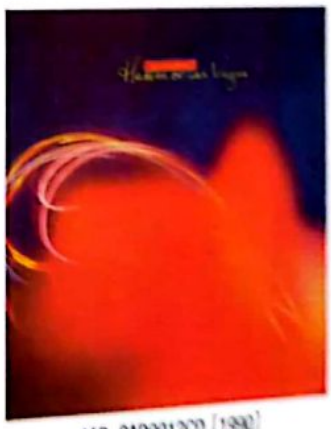
Kitchenware / CBS KWCD14 [1990]

イングランド北東部ニューカッスル近郊のダーラム出身のプリファブ・スプラウト、5枚目のスタジオ作。『スティーヴ・マックイーン』(85年)、『ラングレー・パークからの挨拶状』(88年)に続き、三度、プロデューサーのトーマス・ドルビーと組んでいる。ソングライター、パディ・マクアルーンの才気と、マジカルなバンド・サウンドが豊饒に表現された、彼らのひとつの到達点だ。

1曲目「ルッキング・フォー・アトランティス」のビートは「グッド・ヴァイブレーション」を想起させる。躍動する「カーニヴァル2000」の煌(きら)びやかなこと。再生(カムバック)を主題に、エルヴィス・プレスリーとジェシー・ジェイムズをキーワードに、カントリー、ドゥーワップ、フランク・シナトラを想定して書かれた曲など、さまざまな様式を活用しながら、彼らならではのロックンロール・シンフォニーを展開する。本盤を最後にドラマーのニール・コンティが脱退。バンドはアルバム『アンドロメダ・ハイツ』まで7年間沈黙する。(安田)

プリファブ・スプラウト
ヨルダン:ザ・カムバック

Cocteau Twins
Heaven Or Las Vegas



4AD CAD001CD [1990]

4ADの創設者アイヴォ・ワッツ=ラッセルはかつて、本作を自身のレーベルにおける最高傑作と評した。80年代に残された綺羅星の如き傑作群を差し置いて大胆にもそう評した彼の慧眼は、結果的に本作が後進のドリーム・ポップ~シューゲイザー勢にとっての神話的なインスピレーション源となったことで図らずも証明された。

スコットランドのバンド、コクトー・ツインズの通算6作目となる本作は、ゴシック色を重要なアイデンティティとしてきたそれまでの彼らのサウンドから抜け出し、相当に〝ポップ〟な領域に達している。しかし、ロビン・ガスリーとサイモン・レイモンドによる幽玄な音像構築はかつてないほどに研ぎ澄まされ、エリザベス・フレイザーの天上的なヴォーカル・パフォーマンスとともに、単なる耳当たりのよさとは隔絶した実に深遠な世界を作り出している。それはまさに、タイトルに示唆されている通り、聖と俗、崇高と煩悩の入り交じる生のあり方を、祝福しつつも冷徹に俯瞰しているようでもある。(岩崎)

コクトー・ツインズ
天国、それともラス・ヴェガス

CamScannerでスキャン

The La's
The La's

ラーズ
ラーズ

Go! Discs 828 202-2 [1990]

1980年代半ば、英国リヴァプールで結成された四人組バンドのザ・ラーズは87年「ウェイ・アウト」でデビュー。英国ポップのエッセンスを凝縮した89年のセカンド・シングル「ゼア・シー・ゴーズ」がマスコミ筋で評判となり、注目される存在に。次のシングル制作において、リー・メイヴァースとレーベル側の意向がそぐわないまま90年、アルバムがリリースされた。

プロデューサーのスティーヴ・リリーホワイトにより生み出された本作は、ギターの響きやコーラスの取り入れ方に英国ポップならではの王道スタイルが貫かれている。甘酸っぱさ全開の音楽はギターの音色、奥行き方向の活かし方、コーラス・ワークの賜物といえそう。空間を的確に捉えた楽曲はすべてを7インチ・シングルで聞きたくなってしまう。彼らがカヴァーした「マイ・ジェネレーション」には震えた。91年、再結成された05年の2度来日公演を果たしている。08年、本作はデラックス・エディションも登場。

(武田)

Happy Mondays
Pills 'N' Thrills And Bellyaches

ハッピー・マンデーズ
ピルズ・ン・スリルズ・アンド・ベリーエイクス

Factory FACD320 [1990]

BBCの名物音楽番組「トップ・オブ・ザ・ポップス」にストーン・ローゼズと共にハッピー・マンデーズが出演したのが89年。マッドチェスター勢の興隆を象徴する出来事だ。その翌年に発表された3作目では、DJのボール・オークンフィールドとプロデューサーのスティーヴ・オズボーンの貢献度が大。ダンス・ミュージックのループを参照したようなグルーヴの重心を支えるのは鮮明なベース・ラインで、曲によってはオズボーンがベースを弾いている。結果、勢いだけで演奏はヨレヨレだった前2作とは大違いの〝踊れるロック〟に仕上がった。

リード曲となったのは不世出のシンガー、ジョン・コンゴスのカヴァーである〝God On〟だが、アシッド・ハウスの影響が濃いこのヴァージョンに、原曲の面影はない。アルバム・タイトルは〝薬をキメて幸せだけど腹を壊した〟というところで、彼らしいといえばらしいか…。ヘロイン中毒だったショーン・ライダーの、ふらつくようなヴォーカルの奇妙な味もクセになる。(上左)

CamScannerでスキャン

マッシヴ・アタック
ブルー・ラインズ

Massive Attack
Blue Lines

Virgin CDV3126 (1991)

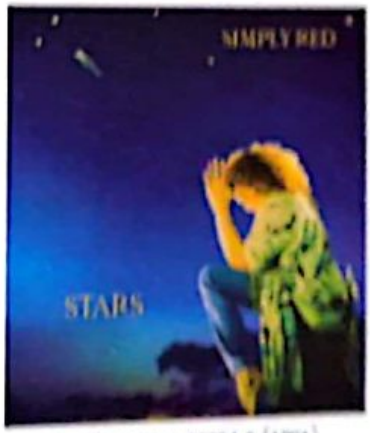
ブリストルのサウンド・システム、ワイルド・バンチから派生する形で1988年に結成されたマッシヴ・アタックが91年に発表したファースト・アルバム。

ファンク、ソウル、レゲエ／ダブ、ヒップホップ、ハウス、パンクといった70～80年代に隆起したポップ・ミュージックの記憶がアンダーグラウンドなストリート～クラブ・カルチャーと結びつき、レイヴ全盛期の狂熱に浮かされるUKシーンに対して強力な冷却装置として機能した。レイヤードされるジャンルを超えた無数のサンプルは、彼らの文化的背景の多様さと複雑さを示す。どこまでもダウナーで憂鬱でディープでドープな音像は、91年当時において決定的に新しく、そして美しく、その後のアブストラクト・ヒップホップやベース・ミュージックに至るUKのダンス・ミュージックに甚大な影響を与え、その余韻はいまなお途切れることがない。

強力なグルーヴ、秀逸な音響デザイン。35年近くがたっても色褪せることのないポップ・アート。（小野島）

シンプリー・レッド
スターズ

Simply Red
Stars



EastWest 9031-75284-2 (1991)

イギリスでは91年の9月末、発表1週目にアルバム・チャートの1位にランクされ、2年越しでチャートの上位に位置し、340万枚を超えるセールスを記録。すでにミック・ハックネルのワン・マン・バンド化し、デビュー・ヒットの「マネーズ・トゥ・タイト」や「二人の絆」などのソウル曲のカヴァー・ヒットに特徴的なブルー・アイド・ソウルからの脱皮を試み、ポップな曲作りや演奏展開を意識し、実践。それに大きく貢献したのがプログラマー、ドラムスに起用された屋敷豪太。さらにピアノ、ギター、新たに強化したベースによるリズミックなファンク・スタイルによる「サムシング・ゴット・ミー・スターテッド」や「スリル・ミー」、ポップでストレートなロックの表題曲など音楽的な幅を広げた。

ソウルフルなミックの歌唱はより味わいを増し「フォー・ユア・ベイビー」などのバラード曲で真価を発揮。曲の背景にサッチャー政権への批判がうかがえる表題曲や「ワンダーランド」での反骨精神も見逃せない。（小倉）

CamScannerでスキャン

U2
アクトン・ベイビー

U2
Achtung Baby

Island 262 110 [1991]

“ロックンロールとは神秘性と茶目っ気の賜物。80年代の俺たちは音のでかいフォーク・バンドだったが、今はロックンロールに戻っている。”というボノの言葉を最初に実践して見せた7作目。お馴染みブライアン・イーノ、ダニエル・ラノアとスティーヴ・リリーホワイトがプロデュースで、ミックス等でフラッドが参加している。

この時期、ベルリンの壁崩壊やイラクのクウェート侵攻など世界情勢は激しく動き、音楽シーンの変化も大きく、バンドも問題を抱えていた。そんな中、彼らが選択したのは、大胆不敵な変革。インダストリアルやダンス・ミュージックからの影響を反映させたサウンドは、ジャケット同様にヴィヴィッドで遊び心という名の実験性に富み、周囲のあらゆる変化を体現したかのようにケオティック。攻撃的でセクシー（卑猥と言うべきか）で、人を喰ったような本作に一本の筋を通しているのは、容赦ない生き方を、静かに真摯に提示するバラード“One”ではないだろうか。英米ともにチャート1位を獲得。（赤尾）

マニック・ストリート・プリーチャーズ
ジェネレーション・テロリスト

Manic Street Preachers
Generation Terrorists

Columbia CK52474 [1992]

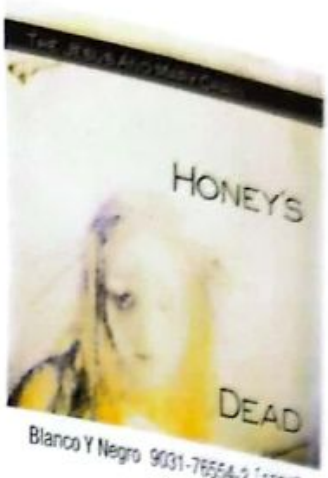
“（ジョン・）レノンが撃たれたとき笑ってやった”という「モータウン・ジャンク」の歌詞、インタヴュー中に自らの腕にカミソリで“SCAR”と刻むなどロック界をアジテーションしてきたバンドが“史上最高のアルバムを1枚作って解散する”と宣言して発表したファースト・アルバム。前宣伝のわりには“普通に良い”作品だったことに落胆した声もあったが、「モーターサイクル・エンプティネス」「ユー・ラヴ・アス」「ステイ・ビューティフル」などキレとメロディを兼ね備えた秀曲が並ぶ。

ライヴでガンズ&ローゼズをカヴァーしたりサンダーやジ・オールマイティを手がけたアンディ・テイラー（元デュラン・デュラン）がプロデューサー候補に挙がるなど、ハード・ロック的な傾向もあったが、ポルノ女優トレイシー・ローズをゲストに迎えた「リトル・ベイビー・ナッシング」で女性への性的搾取を歌うなどスタイルに囚われないヴェクトルを進み、“アルバム1枚”にこだわらず今日まで第一線で活動を続ける。（山崎）

CamScannerでスキャン

ジーザス&メリー・チェイン
ハニーズ・デッド

The Jesus And Mary Chain
Honey's Dead



Blanco Y Negro 9031-76554-2 [1992]

60年代前半、ビートルズ以前のポップスを換骨奪胎して自前の雑然たる歪み空間に叩き落した、ということではラモーンズ、スーサイドの後継にしてさらに歪みを増強して虚無感を拡張したこのバンドの功績は、80年代末から90年代初頭に生まれた（後にシューゲイザーと呼称された）バンド群によって実践的に称揚され引き継がれた。本家は、ではどうするか、その答えが本作だ。

リズム・アレンジに統一感を持たせ、ギターを中心とする歪み成分を背景に溶け込ませて刺々しさをまるめつつ、虚妄のポップ化を推進してみせた。死に関わる詩情を積極的に歌うのは、安易な恋情や希望と背中合わせにある危機感こそが日常の主体であることを示している。クリスタルズの「ゼン・ヒー・キッスド・ミー」やロネッツの「ユー・ベイビー」へのオマージュが天然なものとして活用され、甘美なメロディの中に苦汁を流し込まねば気が済まないそのアティテュードこそロックンロール。パンクの心。退廃なんてまっぴら、と告げる。（湯浅）

モリッシー
ユア・アーセナル

Morrissey
Your Arsenal

His Master's Voice 0777-7-86794-2-4 [1992]

ソロ・ファースト『ヴィヴァ・ヘイト』（88年）と並びモリッシーの代表作と言っていいサードで、ここからバンドの骨格となるコンセプトも固まった。大いに貢献したのがプロデューサーに起用されたミック・ロンソンで、ジギー・スターダスト期のデイヴィッド・ボウイを支えた彼の能力はもっと評価されるべき。モリッシーとの相性もよく、ほとんどの曲をモリッシーと一緒に書いたアラン・ホワイトのギターの、エキセントリックな部分と繊細さをまとめるというセンスもいい。

モリッシーらしさ全開の美曲「ウィル・レット・ユー・ノウ」や英国の右傾化を描く「ザ・ナショナル・フロント・ディスコ」などが印象的だが、なかでも話題となったのがボウイの「ロックン・ロールの自殺者」のエッセンスを織り込んだ「アイ・ノウ・イッツ・ゴナ・ハプン・サムデイ」で、これを受けてボウイは『ブラック・タイ・ホワイト・ノイズ』（93年）でカヴァー。一つのロックンロール伝説を完結させたのだった。（大鷹）

CamScannerでスキャン

PJ・ハーヴェイ
リッド・オブ・ミー

PJ Harvey
Rid Of Me

Island CID8002 [1993]

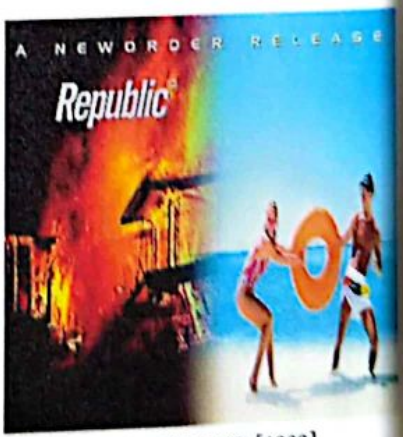
彼女はイングランド南部ドーセット出身のヴォーカリスト&ギタリストで、本名はポリー・ジャン・ハーヴェイ。95年の3作目からはソロとして活動することになるが、1作目とこの2作目は、ドラマーとベーシストを従えたトリオの作品としてリリースされている。

本作のプロデュースはニルヴァーナ作品などで知られるスティーヴ・アルビニ。ジミ・ヘンドリクスが大好きだというハーヴェイが、アルビニの起用を強く希望したらしい。この人選は大成功で、空気感の強調されたラウドなサウンドのなかにハーヴェイの無骨なギター・プレイが響き渡るさまは、聴く者の耳を奪う。その一方でハーヴェイはキャプテン・ビーフハートやハウリン・ウルフからの影響も公言しており、楽曲は自己流の変則的ブルーズと呼べるようなものが多い。結果的に本作は、黒人音楽を90年代的グランジ感覚で甦らせたような傑作となった。11年の『レット・イングランド・シェイク』も、ハーヴェイの歌のうまさが光る好盤。

(立川)

ニュー・オーダー
リパブリック

New Order
Republic



London 828413.2 [1993]

このアルバムの制作前の時期は、ニュー・オーダーにとって活動休止期間にあたり、バーナード・サムナー(g、vo)はザ・スミスのジョニー・マーとのエレクトロニック、ピーター・フック(b)はリヴェンジ、スティーヴン・モリス(ds)とジリアン・ギルバート(kbd、vo)夫妻はTV音楽制作と、サイド・プロジェクトを行なっていた。その後の本作制作中に彼らが所属したファクトリー・レコーズが倒産となったため、ロンドン・レコーズからリリースすることとなる。

89年の『テクニーク』以来、約4年ぶり6作目の作品で、前作に続いて2作目の英1位となった。次のアルバムは8年後になるので、90年代では唯一のアルバムでもあった。前作のイビザ島のバレアリック・ハウス的ダンス・ミュージックとサムナーのプロジェクト:エレクトロニックのポップで明るさのあるサウンドを融合した音で、80年代初~中期のダークな音からダンサブルなポップ・ミュージックへと変身した姿が覗く。

(赤岩)

CamScannerでスキャン

オアシス
オアシス

Oasis
Definitely Maybe

Creation CRE CD169 [1994]

オープニングの「ロックンロール・スター」をはじめ、全曲、何かしでかしそうな大物感に満ちている。

シューゲイザーに代表される当時の英国のロックに欠けていたロックンロールの息吹が、育ちのいいブリットポップとは一線を画す。ふてぶてしく適度にルーズなヴォーカルを筆頭に、朗々としているようでロックンロール本来のヤバさがサウンドから醸し出される。音楽自体もビートルズはもとより、ラモーンズやセックス・ピストルズ、さらにヴェルヴェット・アンダーグラウンド、バーズ、Tレックスらのハイブリッドだ。意外と曲が短くないところも特筆すべきで、ケミストリーたっぷりだから演奏のみのパートにも時間を割く。ギター・ソロが多い点にもロックンロールの伝統への敬意を感じるのだ。

"前向き"ではなくとも、サウンドそのものでバンド名どおりの無限の多幸感に包みこむ。高揚感あふれる本作のリリースがニルヴァーナの終焉数か月後だったことも、ロックの流れを[illegible]と[illegible]思えない。（[illegible]）

ザ・ストーン・ローゼズ
セカンド・カミング

The Stone Roses
Second Coming

Geffen [illegible] [1994]

このセカンドの意義を当時、受け止めることはできなかった。1994年12月発売、この年はクラブ系ロック・サウンドの勃興期。打ち込みとブレイク・ビーツでハードコアに攻めるアンダーワールドなどのダンス・オリエンテッドなサウンドは広くロック界を揺るがし、このバンドも対策を開始したのだろう。その工夫の核はリズム。89年のアシッドな妖しい前作は、素朴な生ドラム・サウンド。一変したこの盤で、何をしたかは明白だ。恐らくキックやスネアなどに強力な打ち込みを適用、ダンスにも最高なファット極まりないグルーヴを叩き出した。

このアルバム・リリース後のツアー前にドラマーのレニが脱退したのは、それゆえと思える。しかし、総力戦で作ったこの音楽は、30年を超えた今こそ輝いて聞こえるのだ。イアン・ブラウンのドープなヴォーカル、ジョン・スクワイアのトリップするギター、縦横にグルーヴするマニのベース、すべてが素晴らしすぎ。96年に解散するが、この3人で継続するべきだった。（[illegible]）

Radiohead
The Bends

レディオヘッド
ザ・ベンズ

Parlophone CDPCS7372 [1995]

ロック嫌いの私が、ロック嫌いの人にも〝騙されたと思って〟とおすすめできる、レディオヘッドの2ndアルバム。個人的な位置付けでは彼らの最高傑作で、臨終の際でも極論、ロックはこれ以外、聴かなくてもよかったと思うかもしれない。何が良いのかを言語化することは今までしてこなかったが、まず第一に、ギター・サウンドで誤魔化さずに楽曲をきちんと聴かせるところがあり、だからこそロックなのである。これはある意味で逆説的にも取れる言い方だが、本作固有の問題であって普遍的なものではない。その不思議さは音響レヴェルにも存在し、細かく聴いていけば他のアルバムとも劣らぬ拘りを感じるにも関わらず、それを第一印象として感じることは、私の場合、ない。これはほとんどの場合、〝曲が良いからだ〟ということで片付けられているが、それ以上に何かあるはずだ。しかし、その答えは未だ出せずにいる。

そして彼らの代名詞と言ってもよい、6/8拍子曲は、このアルバムには2曲もある！

（エブリデ）

Paul Weller
Stanley Road

ポール・ウェラー
スタンリー・ロード

Go! Discs 828-629-2 [1995]

ブリットポップ期を象徴する一枚であり、そのムーヴメントに欠落していたソウル、ファンクを貪欲に取り込んだソロ3作目だ。共同プロデューサーのブレンダン・リンチによる緻密な音作りは、一音一音をクリアに際立たせながら、ライヴ感あふれるダイナミックな音像を実現。90年代のモッド・アンセム「チェンジングマン」から、ドクター・ジョンのカヴァー「アイ・ウォーク・オン・ギルデッド・スプリンターズ」、そして、ドラマチックなバラード「ユー・ドゥ・サムシング・トゥ・ミー」まで、一曲一曲、憂いを帯びたメロディとエッジの効いたギターが交差する構成が特徴となっている。

スティーヴ・ウィンウッドやノエル・ギャラガー、ミック・タルボットらの参加も注目されたが、本作の真価はモッズ・カルチャーへ敬意を払いながら、何でもありの時代の幕開けとなった90年代に新たな音楽的可能性を提示した点にある。サー・ピーター・ブレイクのアートワークにもこの時代の空気感が漂っている。

（油納）

CamScannerでスキャン

Stereolab
Emperor Tomato Ketchup

ステレオラブ
エンペラー・トマト・ケチャップ

Duophonic Ultra High Frequency Disks
D-UHF-CD11 [1996]

ティム・ゲイン率いるポストロック系バンドの4枚目。初めてハードディスク・レコーディングを導入し、生演奏とエレクトロとエディットをシームレスに同居させることが可能になり、それまで以上に自在性の高い音作りを成し得ている。全13曲中5曲のエンジニアをジョン・マッケンタイアが担当しているのも重要だろう。

メロディアスなポップス的形態を保持しつつ、クラウトロック、サイケデリック、パンク、ラウンジなどの要素を導入し、電子音などの異物感のある音が加わり、それをドライな音響感覚で表わしているところに非凡さがある。なによりも冒頭'Metronomic Underground'での、ユルいファンク・ビートに乗せて無機質なヴォーカルが同じ言葉を執拗に反復して延々と続き、エグい質感のエレクトロや鍵盤が重なり、ドラッギーな酩酊感覚やトリップ感覚をもたらしているのが圧倒的にすごい。ポップ性と実験性を両立させ、この時点での極めて先鋭的なロックを示してみせた、彼らの最高傑作。（小山）

Kula Shaker
K

クーラ・シェイカー
K

Columbia SHAKER1CDK [1996]

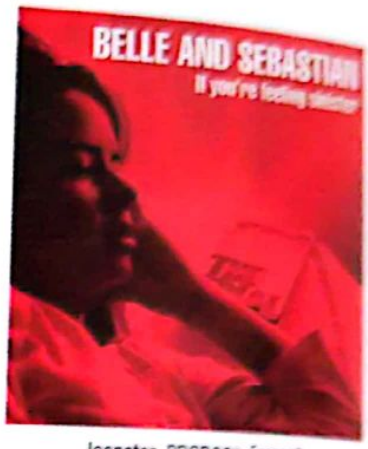
ロンドンで同じ学校に通っていたクリスピアン・ミルズとアロンザ・ベヴァンの二人で始めたバンド活動が出発点。活動停止を経た90年代半ばにバンドを再編。クリスピアンがインド旅行で得た影響を音楽性に強く反映させたことから、バンド名もインドの王の名にちなむものとした。と、そのスタート地点から同時代のバンドとの差別化が図られていた彼らのデビュー作。

「タットヴァ」（英4位）、ヒンディー語で歌われる「ゴヴィンダ」（英7位）などのエスニック色濃厚な楽曲を収録した本作は、初登場で英1位を記録。その「タットヴァ」でのビートルズ風アレンジ、「スタート・オール・オーヴァー」のオルガンやホーン、「ホロウ・マン」のメロトロンなど、60'sロックのアイディアを正面切って採用し、カラフルさを生み出したセンスも秀逸。「ヘイ・デュード」みたいなヒット曲も書けるが、あれこれ音楽的に試したいという実験精神溢れる楽曲の数々に、英国産ロック・バンドとしての心意気を感じさせる。（松澤）

CamScannerでスキャン

ベル・アンド・セバスチャン
天使のため息

Belle And Sebastian
If You're Feeling Sinister



Jeepster PRCD001 [1996]

グラスゴーの大学で結成されたベル・アンド・セバスチャン。大学のレーベルからファースト・アルバムを発表した彼らの2作目となる本作は、ロンドンのレーベルと契約してリリースした実質的なデビュー作だ。

バンドの中心人物のスチュアート・マードックは、本作の曲を書くにあたってキャロル・キングやジョニ・ミッチェルを聴き込んだそうだが、曲から伝わってくる孤立感と60年代のロックやポップスに対する愛着はザ・スミスを思わせるところもある。また、アルバムから伝わってくる親密さや音楽に対する無垢な愛情は、ヴァセリンズやパステルズなどグラスゴーの先輩たちと通じるところもあった。そんななか、曲を通じて物語を紡ぎ出す巧みなストーリーテリングも彼らの特徴。レコーディングの際は教会のホールでリハーサルをしたそうだが、ブリットポップの喧騒から遠く離れて奏でられた彼らの歌の繊細さや洗練されたソングライティングは、その後の英米のインディ・シーンに影響を与えた。

（村尾）

ビョーク
ホモジェニック

Björk
Homogenic

One Little Indian TPLP71CD [1997]

ビョークは革新的なものへの鋭い嗅覚をもったアーティストだ。彼女は70年代的なロック・バンドのスタイルに早々と見切りをつけ、パンク／ニュー・ウェイヴに影響されても、それらに長くとらわれることはなかった。そして90年代は〝ミクスチャー〟と〝コラボレーション〟がキーワードになった時代。ここで彼女はそのセンスと才能を炸裂させ、本作を作り上げたのである。

ミクスチャーという観点から見た本作の素晴らしさは、ロックとクラブ・ミュージックとを結びつけたという点にある。そしてガイ・シグワース、ハウイー・B、マーク・ベルといった、どちらかというとサブカルチャー・シーンの周縁に存在していた人々とのコラボレーション。さらに、奇才デオダートに無気味だが流麗なストリングスのスコアを書かせている。そして、ビョークの圧倒的な歌唱力。その後、本作の亜流もあちこちに現われたが、それらを聴けば聴くほど、本家ビョークの才能の豊かさが際立つ。孤高の音楽家による名盤である。

（立川）

CamScannerでスキャン

The Sundays
Reading, Writing And Arithmetic

ザ・サンデイズ
天使のささやき

Rough Trade ROUGH CD148
[1990]

マッドチェスターの熱狂の傍らで、一杯の清涼飲料水のような爽やかさをシーンにもたらしたザ・サンデイズの初アルバム。ザ・スミスやコクトー・ツインズを引き合いに出して評されたそのサウンドは、確かに80年代のシーンとの連関を強く感じさせる。しかしながら、天才的ヴォーカリスト、ハリエット・ウィーラーの溌剌とした歌唱と、デイヴィッド・ガヴリンの巧みかつ繊細なギターを聴けば、本作の魅力がそうした先達との類似性の指摘を軽く飛び越える独自のものであるのがわかる。その眩しいまでの清々しさは、

Lloyd Cole
Lloyd Cole

ロイド・コール
ロイド・コール

Polydor 841-907-2
[1990]

コモーションズ解散後、ルー・リードに憧れてNYに移住。実際にルーと組んでいたロバート・クワイン、フレッド・マーらをゲストに迎えてこのソロ初作を発表した。都会の乾いた風景を感傷や葛藤を交えて無為自然に描いた歌詞、さりげない色気漂うギター・ロック・サウンドが沁みる。本作の翌年に、こちらもクワインらを含む『ガールフレンド』を出すマシュー・スウィートや、フェルナンド・ソーンダースが力を貸したソロを発表するニッキー・ホランドも参加。この時期、ロイドの周辺にはルー・リード・フォロワーの輪が形成されていた。

The House Of Love
The House Of Love

ザ・ハウス・オブ・ラヴ
シャイン・オン

Fontana 842 293-2
[1990]

クリエイションからのファーストと同タイトルのセカンド。"UKギター・ロック"とも言うべきサウンドで、エコー&ザ・バニーメンなどのネオ・サイケの流れをくむスタイル。だが、かつてのポストパンク勢のように突き放さず、ギミックなしの実直なサウンドが身上だ。はかなげでエモーショナルなヴォーカルと耽美というより艶やかなツイン・ギターの拮抗が魅力だが、メロウな歌ものも捨てがたい。「シャイン・オン」「ビートルズ・アンド・ストーンズ」「アイ・ドント・ノウ・ホワイ・アイ・ラヴ・ユー」「32nd・フロア」など、佳曲揃い。

Thunder
Backstreet Symphony

サンダー
バックストリート・シンフォニー

EMI CDEMC3570
[1990]

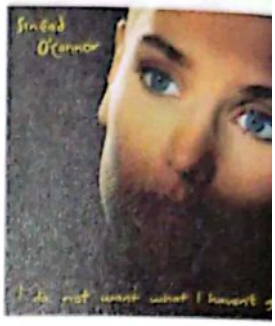
近作5枚のアルバムを続けて英チャートのトップ10内に送りこんでいるバンドのデビュー作。当時、ブリットポップ・ファンの多くが見向きもしなかったのは、純正ハード・ロック・バンドだから？ ザ・フー、キンクス、フェイシズなど、彼らがカヴァーするアーティストをみれば、濃厚な英国魂を持った正統的後継バンドというのは明白で、本作収録のどの曲にも前記バンドの香りが漂う。「アン・インクリッシュマン・オン・ホリデイ」の自虐的なセンスも実に英国的。UKロック好

CamScannerでスキャン

Sinéad O'Conn
I Do Not Want What I Haven't G

シンニード・オコナー
蒼い囁き

Ensign / Chrysalis 260 547
[1990]



プリンスのファミリーへの提供曲でネリー・フーバーが共同制作にあたり屋敷豪太がプログラミングを担当した「愛の哀しみ」。恋人の喪失をテーマにした悲哀に満ちた感傷的なバラードを情感を込めた歌唱によりヒット。本作は世界的に700万枚を超えるベストセラーを記録。同曲は冒頭の「フィール・ソー・ディファレント」やアカペラによる表題曲「蒼い囁き」などともに幼少期に虐待を受けながら、事故死した母親への思いを込めたもの。デビュー作での過激な攻撃性は鳴りを潜め、穏やかな曲と真摯な歌唱により内省的なアルバムを生んだ。（小倉）

Depeche Moc
Violat

デペッシュ・モード
ヴァイオレーター

Mute STUMM64
[1990]

エレクトロニック・ミュージックの新たな地平を切り開いた7作目。シンセを核としながらも、ギターやブルース調のリフを大胆に取り入れ、「パーソナル・ジーザス」では宗教的象徴をポップに昇華し、「エンジョイ・ザ・サイレンス」では冷たさと感情の交錯をみごとに描き出した。マーティン・ゴアの歌詞は愛や罪悪感、救済といった普遍的テーマを掘り下げ、デイヴ・ガーンの深みのある歌声がそれを支えることで、作品全体に陰鬱で官能的な美学を漂わせている。商業的成功と批評的評価を両立、UKよりもUSオルタナに多大な影響を与えた。（油納）

The Brand New Heavie
The Brand New Heavie

ブラン・ニュー・ヘヴィーズ
ネヴァー・ストップ

Acid Jazz JAZID CD23
[1990]

当時、これを聴きながら〝なぜ他のアシッド・ジャズと違って圧倒的にアカ抜けているんだろう?〟と不思議に思ったもの。アシッド・ジャズ自体は、60年代末のブーガルー、シェイクを継いで90年代クラブ時代に参戦した音楽だが、このバンドは圧倒的なヒップ感を誇っていた。今聴けば、そのサウンドの要がキックとスネアを中心とするドラム処理（恐らくPCによる）にあると分かるが、その上のバンド・コンビネーションも素晴らしい。このままのライヴができればもちろん世界制覇だろうが、そうできないのがそうしたプロデュース事情だった。（サエキ）

Inspiral Carpet
Lif

インスパイラル・カーペッツ
ライフ

Cow / Mute DUNG8CD
[1990]

ザ・ストーン・ローゼズやハッピー・マンデーズと共に〝マッドチェスター〟を牽引したバンドの初作。他の2バンドがダンス・グルーヴを色濃く打ち出していたのに対し、本作での彼らは直線的なビートで突っ走る。冒頭こそジャーマン・プログレのような電子音が聞こえるが、その後は終始、ファルフィッサ・オルガンを軸にしたレトロなパンク／ニュー・ウェイヴを展開。随所に見られるドタバタ感は意図的に演出しているのだろうが、そうした〝ダサかっこ良さ〟がとにかく痛快に響くのだ。マンチェスター・シーンに独特の彩りと厚みを加えた快作。（石川）

CamScannerでスキャン

World Party
Goodbye Jumbo

ワールド・パーティー
グッバイ・ジャンボ

Ensign / Chrysalis CDP32 1654 2
[1990]

ウェールズ出身のシンガー・ソングライター／プロデューサー／マルチ奏者であるカール・ウォーリンジャー（元ザ・ウォーターボーイズ）を中心に結成されたバンドの2作目。タイトルは、象の乱獲による象の絶滅危惧を表わす。ローリング・ストーンズ「悪魔を憐れむ歌」へのオマージュ「ウェイ・ダウン・ナウ」をはじめ、ビートルズからソウル、ファンク、ワールド・ミュージックまでの影響をポップに落とし込み、スライド・ギターやシンセ、ピアノを印象的に使うなど、緻密なアレンジを施したカールが、プリンスに心酔していたのは、深く頷ける。（長畑）

The Dream Academy
A Different Kind Of Weather

ドリーム・アカデミー
ディファレント・カインド・
オブ・ウェザー

Reprise 7599-26307-2
[1990]

デビュー・アルバムの制作を手がけたピンク・フロイドのデイヴィッド・ギルモアがプロデューサーに復帰した3作目にして最終作。冒頭に置かれたジョン・レノン「ラヴ」のカヴァーはシングルも切られ、そこにはジュニア・ヴァスケスがリミックスを手掛けたヴァージョンも収められていた。97年にダリオGが「サンシャイム」で85年のデビュー曲「ライフ・イン・ア・ノーザン・タウン」を大々的にサンプリングしたことは有名だが、その嚆矢となったとも言えそうだ。「マーシー・キリング」「ルーシー・セブテンバー」などオリジナルも佳曲が揃う。（杉浦）

The Trash Can Sinatras
Cake

トラッシュ・キャン・シナトラズ
ケーキ

Go! Discs 828 201-2
[1990]

スコットランドのジャングル・ポップ・バンド、トラッシュ・キャン・シナトラズのファースト・アルバム。アズテック・カメラら一世代前のバンドを彷彿させる抑制的でアコースティック色強いサウンドは、ハウス旋風吹き荒れる中では正当に評価されたとは言いがたかったかもしれないが、一部の心あるインディー・ポップ・ファンの急所をこれでもかと刺激し、ここ日本でも長く根強い人気を誇る定番作となった。シンプルなアンサンブルながら、ストリングスなど各種楽器やコーラスを交えた緻密なアレンジが数かれており、聴き込むほどに味わいが増す。（柴崎）

Pet Shop Boys
Behaviour

ペット・ショップ・ボーイズ
ビヘイヴィアー
静寂の旋律

Parlophone CDPCSD113
[1990]

80年代の第2次ブリティッシュ・インヴェイジョン時代から現在まで、順調に活動を続けるペット・ショップ・ボーイズ。その4thアルバムで、『ヘイヴィアー：薔薇の旋律』というんだかなぁーの邦題が付けられた。"It's A Sin"や"Always On My Mind"のメガ・ヒットを経た大注目作だったが、喧騒に浮かれず、このコンビらしい繊細な楽曲と練り込まれたエレクトロ・サウンドを響かせている。その音色はさすがに時代がかっているが、もう少し年月を経たら再発見されるかもしれない。そんな永続性を楽曲に持つ魅力が溢れている。（大鷹）

CamScannerでスキャン

Mega City Four
Who Cares Wins

メガ・シティー4
ヤツらの勝手さ!

Decoy DYL20CD
[1990]

90年代のUKメロディック・パンクに先鞭をつけた四人組はエモいメロディで、頭一つ抜きん出た存在に。その影響はミューズや日本のNOT WONKをはじめ世界中に及ぶ。衝撃の1st "Tranzophobia"(89年)は必聴だが、パンクは過去のものと考えていたバンドの過渡期を捉えたこの2ndも聴き逃せない。横ノリのビートやグランジ・サウンドも取り入れ、音楽性の深化を求めている。なかには5分超えの長尺曲も。哀愁のギター・ポップ・ナンバーは、彼らがハスカー・ドゥとともにフェイヴァリットに挙げていたティーンエイジ・ファンクラブにも匹敵。(山口)

Spacemen 3
Recurring

スペースメン3
回帰

Fire FIRE CD23
[1991]

ソニック・ブームことピーター・ケンバーとジェイソン・ピアースの二人を中心とするサイケデリック・ロック・バンドの最終作。二人の関係がこじれ切った中で制作され、実質的には彼らのソロ曲を集めたアルバムだが、そうした緊張感や激変への予感が好作用を及ぼしたのだろうか、相当に野心的な内容となった。得意とするガレージ~元祖シューゲイザー的なサウンドにもかつてないほどの彩りが加わり、ビートにはアシッド・ハウスからの影響も顔を覗かせるなど、同時代シーンの影響も。が、よく聴くとやはり不穏かつ不敵。そこがたまらなくいい。(柴崎)

The Orb
The Orb's Adventures Beyond The Ultraworld

ジ・オーブ
アドヴェンチャーズ・ビヨンド・ザ・ウルトラワールド

Big Life BLRDCD
[1991]

キリング・ジョークのローディーだったアレックス・パターソンが88年に結成。当初は普通のダンス曲を作っていたが、やがてドラムを除いたチル・アウト向け音楽を作り始め、多様なサンプルをコラージュするサイケデリックなスタイルを確立。レイヴ・カルチャーの狂騒を彼らなりに解釈したアンビエント・ハウスの誕生である。この1作目収録の、ミニー・リパートン「ラヴィン・ユー」をサンプリングした「ウルトラワールド」とスティーヴ・ライヒをモチーフとした「リトル・フルッフィ・クラウズ」は、そのもっとも美しく純粋な結晶である。(小野島)

Wire
The Drill

ワイヤー
ドリル

Mute CDSTUMM74
[1991]

86年発表のEP "Snakedrill" のヴァリエーション集的、エレクトロニクス活用で少ない要素を拡大解釈しまくる、という実験作。シンプルなテクノポップ的な曲もあれば、おそらくブルース・ギルバート主体と思われるエフェクティヴなゆがんだ曲もあり、このバンドが、コリン・ニューマン主体の具象的方向性と、ブルースとグレアム・ルイス(ドームの二人)の無機質な表現が同居したものであることが示されている。CDには、アクティヴな魅力が横溢したライヴ音源を収録。同年発表のブルースのソロ作 "Music For Fruit" との併聴を推奨。(湯浅)

CamScannerでスキャン

Chapterhouse
Whirlpool

チャプターハウス
ワールプール

Dedicated / BMG ZD74977
[1991]

3本のギターが織り成す、木々のさざめきのような、立ち込める霧のような音像。そこに吸い込まれる木霊を思わせる繊細な歌声。ときにノイズも沸き立つが、けっして耳障りではなく、ひたすら美しく心地好いアンビエンスが描かれる。そしてそこに、リズム隊が敷き詰める抑制されたグルーヴがじわじわと高揚感を施す。レディング出身の5人組の初アルバム。全英チャート23位と商業的にはそれほど振るわず、バンドも長くは続かなかったが（00年代に一時的に再結成した）、本作はシューゲイザー回帰の名盤として今なお評価を上げ続けている。（石川）

The Wonder Stuff
Never Loved Elvis

ワンダー・スタッフ
ネヴァー・ラヴド・エルヴィス

Far Out / Polydor 847252-2
[1991]

ウェストミッドランド州ストアブリッジで結成されたバンドの3作目。疾走感のあるオープニングから、よりポップに、ダイナミックに展開していくサウンドに気分が高揚するのを抑えきれない。グルーヴィなオルガンもあれば、前作に続きフィドルや、バンジョー、マンドリンも導入されてフォーキーな味わいがブレンドされたが、ルーツ・ロックにはならず、あくまでもモダンなポップ・ロックのバランスを保って痛快。全英チャート最高3位を獲得、カースティ・マッコールが客演した「ウェルカム・トゥ・チープ・シーツ」他2曲が全英トップ10入り。（赤尾）

All About Eve
Touched By Jesus

オール・アバウト・イヴ
タッチ・バイ・ジーザス

Vertigo 510 146-2
[1991]

ルネッサンスやカーヴド・エアあたりの英国トラッド・テイストをダークなニュー・ウェイヴ通過後の感覚で展開したような音だ。女性シンガーがゴス系のジーン・ラヴズ・ジザベルの極初期に在籍し、本作からのシングルでメロウ・キャンドルをカヴァーした事実も象徴的。このサードではポピュラリティを高め、清楚かつ優雅な歌唱を活かした穏やかな曲が中心だ。デイヴィッド・ギルモア(g)が2曲に参加したことにも"プログレ水脈"の深さを感じる。一方でブライマル・スクリームに通じるビート感を導入するなど音作りの"同時代性"もポイント。（行川）

Talk Talk
Laughing Stock

トーク・トーク
ラフィング・ストック

Verve / Polydor 847-717-2
[1991]

82年の結成当初はニュー・ロマンティック系のグループと目されていた彼らだが、エンジニア出身のティム・フリーズ＝グリーンがサポートで加わった84年以降、一気に音楽性を拡張し、エッジーな存在に。このアルバムは、ポストロックの元祖ともいえるソリッドで硬質な音響の妙が際立つ一枚で、今ならばアンビエントやドリーム・ポップの文脈で捉え返すことも可能。ロバート・ワイアットやジャパンの諸作に通じる感触もある。ECMの看板ギタリストであるヤコブ・ブロも、本作の首謀者であるマーク・ホリスからの影響を公言していた。（土佐）

CamScannerでスキャン

Saint Etienne
Foxbase Alpha

セイント・エティエンヌ
フォックスベース・アルファ

Heavenly HVNLP1CD
[1991]

グレイター・ロンドン出身のセイント・エティエンヌはうれしい！たのしい！大好き！な男二人、女ひとりのバンド。いや、ドリームズ・カム・トゥルーよりも、同時期のピチカート・ファイヴに喩えるべきだろう。60年代趣味、同時期のダンス・ミュージックの導入、コラージュの汎用など、91年のデビュー作となる本盤から、渋谷系と呼応するセンスを炸裂させる。ニール・ヤング「オンリー・ラヴ・キャン・ブレイク・ユア・ハート」のカヴァー、ダスティ・スプリングフィールドをサンプリングした「ナッシング・キャン・ストップ・アス」など収録。（安田）

The The
Dusk

ザ・ザ
ダスク

Epic 472468 2
[1992]

恐れと怒りを原動力にしているかのような時期を過ぎ、しかしもちろん諦めなどなく、力強く内向する姿を示した名作。イギリスでは最高2位を記録するヒットに。揺るぎのないサウンド、明瞭な演奏、ポップな側面もあるギミックのないアレンジ。それでいて曲ごとに微妙に空気感を変化させてみせる。〝死にゆくものすべてがよみがえるとき、愛は死よりも強い〟と歌う「愛は死よりも強し」にも孤独な陰がある。自分自身に問いかけ、自身の背負ったネガティヴなエネルギーを静かにゆっくりと好転に向かわせようとする覚悟が感じられる。（湯浅）

The Beautiful South
0898 Beautiful South

ビューティフル・サウス
0898

Go! Discs 828 310-2
[1992]

元ハウスマーティンズのポール・ヒートン(vo)とデイヴ・ヘミングウェイ(vo)により結成されたバンドの3作目。彼らと女性のブリアナ・コルガン(vo)というトリプル・ヴォーカル体制が売りだった。それぞれがリードとコーラスを担当し、ポールが酔っ払い男の死を歌った「オールド・レッド・アイズ・イズ・バック」や、デイヴがタブロイド新聞のヌード・モデルを歌った「36D」、ブリアナが男の裏切りを歌った「ベルボトム・ティアー」など、諧謔や皮肉に溢れた歌詞を思い切りポップなメロディで仕上げたサウンドが心地よい。（赤岩）

PJ Harvey
Dry

PJ・ハーヴェイ
ドライ

Too Pure PURE CD10
[1992]

ポーリー・ジーン・ハーヴェイを中心に結成されたスリー・ピース・バンドのデビュー作。女性の性的な欲望を赤裸々に綴った歌詞はインパクト大で、曲によってフリーキーなサックス、チェロなどを交えた楽曲が聞き手を魅了する。ギター・ロックとブルースの狭間に魂が宿る。プロデューサー／エンジニアのヘッドは加工を施すことなく、彼女のまっさらな声質、音楽性を直に捉えた印象。デビュー当時はパティ・スミスの再来と言われていたが、その後の彼女の功績は計り知れない。2000年に出た本作のデモ盤は骨削りながらも必聴だ。（武田）

CamScannerでスキャン

Primitives Galore

プリミティヴズ ガローア

RCA PD75086 [1992]

モリッシーがTシャツを着用して早くから注目を浴びていた、女性ヴォーカルを擁するコヴェントリー出身のバンドのサード。垢抜けない初期はシューゲイザーとニアミスした音もチャームポイントだったが、それがトレンドになったこの頃にはほぼ脱却している。彼らの本質であるロックンロールの色合いを強める一方、60年代のガール・ポップと80年代後半のドリーム・ポップを、さりげなくディープにブレンド。アコースティックかつサイケデリックな歌ものも聴きどころで、ソフト・ロックへのアプローチも深いが、本格志向が活動停止を招いた感も。（行川）

Cure Wish

ザ・キュアー ウィッシュ

Fiction 513 261-2 [1992]

1位を獲得した英国のみならず米国でも2位と過去最大のヒットを記録した9作目。ポップで聴きやすいがゆえにベストに挙げることをためらうファンの意見も目にするが、シスターズ・オブ・マーシーのデビュー盤を手がけたデイヴィッド・M・アレンのプロデュースでゴシック色も明瞭なこれは紛うことなき傑作だ。94年のエレキブラン「MELT」は「ハイ」を想起させる楽曲（05年にはART-OF-COOLが「カノン」で継承）で強烈だったが、近いところではフィービー・ブリジャーズによる「フライデイ・アイム・イン・ラヴ」のカヴァーも忘れがたい。（杉浦）

Peter Gabriel Us

ピーター・ガブリエル US

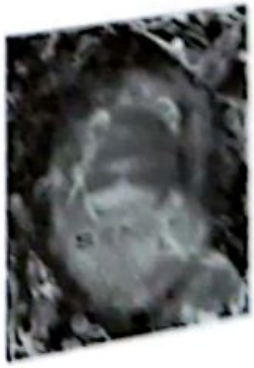
Real World / Virgin PGCD7 [1992]

ピーター・ゲイブリエルの作品を聴き進めたり遡ったりしていると筆舌に尽くし難い不思議な感覚に陥り、だからこそ音楽が時間芸術であり時間の旅なのだと改めて感じさせてくれる。そして本作品は、バーカッションなどからも前作から踏襲したエスノ性を感じるダンス・ミュージック的なプロダクションである。しかしあくまでポップ・ロックの域を出ないのが素晴らしく、映画のサントラを聴いているようだ。シングル・カットもされた「Digging In The Dirt」が楽曲としてハイライトだが、アルバムに埋もれることも、目立ちすぎることもない。（エブリデ）

The Lightning Seeds Sense

ライトニング・シーズ センス

Ghetto / Virgin CDV2690 [1992]



エコー&ザ・バニーメンら70年代後半以降のリヴァプール勢で、最も遅咲きだったのがイアン・ブロウディだ。89年に始めたこのソロ・プロジェクトではプロデューサーとしての経験を活かして一人でポップな曲を制作するようになり、テリー・ホールとの共作曲も含むこの2作目でマルチプレイヤーとしての"センス"が開花した。「ライフ・オブ・ライリー」が英BBCの番組「マッチ・オブ・ザ・デイ」で使われたのを始め、96年にはユーロ96のテーマ曲「スリー・ライオンズ」が大ヒットするなど、サッカーとの関わりの強い印象派でもある。（岡村）

CamScannerでスキャン

Jesus Jones
Perverse

ジーザス・ジョーンズ
パーヴァース

Food FOOD CD8
[1993]

93年生まれの自分が幼少期にこのアルバムを車の中で聴いた頃、彼らはUKロックの位置付けの中では商業的に最もダメとされた時期であった。もちろんロック中心の聴取傾向ではなかったことと赤ん坊の私に80'sからの連続的な体験がなかったことは白状しておきたいが、ロック・ミュージックとして昇華し切っていないのを抜きにしても、明るいドラミングと楽曲構成、無駄に長さのない楽曲単位から、これはポップスであると感覚的に思った。後の日本のポップスへの影響を鑑みても、当時の自分の判断も間違っていなかったかもしれない。（エブリデ）

Radiohead
Pablo Honey

レディオヘッド
パブロ・ハニー

Parlophone CDPCS7360
[1993]

孤高のバンドのスタートがグランジ風なギター・ポップだったことを物語る1st。ニルヴァーナの「スメルズ・ライク・ティーン・スピリット」、ベックの「ルーザー」と並ぶ90年代の負け犬ソング「クリープ」は、自虐的な告白が感傷的なメロディとギターの炸裂音とともに世界中のはみ出し者の胸に突き刺さった。ヴェルヴェット・アンダーグラウンドの影響が窺える「ストップ・ウィスパリング」、歌詞の屈折とは裏腹にアンセミックなサビを持つ「エニワン・キャン・プレイ・ギター」など、曲は粒揃い。「ブロウ・アウト」は彼ら流のネオアコだ。（山口）

The Cranberries
Everybody Else Is Doing It, So Why Can't We?

クランベリーズ
ドリームス

Island CID8003
[1993]

英国と母国アイルランドでチャート1位と破格の成功を収めたデビュー・アルバム。メンバーはキュアーやザ・スミス、ジョイ・ディヴィジョンといったゴシック系やマンチェスターのバンドを好んでおり、「アイ・ウィル・オールウェイズ」にはザ・スミスの影響が顕著。プロデュースもザ・スミスの最終スタジオ作を手がけたスティーヴン・ストリートが担当している。デビュー・シングルでもある「ドリームス」はフェイ・ウォンが歌詞を替えて「夢中人」のタイトルでカヴァー。フェイが演じた94年の香港映画『恋する惑星』のテーマ曲でもあった。（杉原）

Bryan Ferry
Taxi

ブライアン・フェリー
タクシー

Virgin CDV2700
[1993]

8作目のソロ・アルバムで、共同プロデューサーとギターにロビン・トロワーを迎えて制作された。得意のカヴァー・ソング集で（オリジナル・インスト1曲を含む）、ソロ1〜3作目や、この後の"As Time Goes By"（スタンダード集）、"Dylanesque"（ボブ・ディラン作品集）と同様のもの。ブルース、R&B、ガール・グループからヴェルヴェット・アンダーグラウンドまで、これまで同様の幅広い選曲がなされている。ダウナーな歌声が魅惑的な、エルヴィス・プレスリーがヒットさせた「ガール・オブ・マイ・ベスト・フレンド」に渋さ極まれり。（赤岩）

CamScannerでスキャン

Senseless Things
Empire Of The Senseless

センスレス・シングス
エンパイア・オブ・ザ・
センスレス

Epic 473525-2
[1993]

メガ・シティ・フォーとともに90年代のUKメロディック・パンク・シーンをリードしつつ、この四人組もまた大胆に音楽性を深化させていった。この3rdではギター2本のアンサンブルを活かし、グランジ・サウンドを鳴らしながらファンクやハードコアにもアプローチ。マーク・ケッズ（vo、g）のルックスが災いし(?)、日本でアイドル・バンドとして売り出されたのは黒歴史か。リバティーンズの「キャント・スタンド・ミー・ナウ」（04年）を共作したケッズ、ゴリラズに参加したリズム隊。解散後もメンバーたちはシーンに足跡を残している。（山口）

Blur
Modern Life Is Rubbish

ブラー
モダン・ライフ・イズ・
ラビッシュ

Food FOODCD9
[1993]

グランジ全盛の米国での挫折を経て、キンクスやXTCら英国ロックの伝統を意識的に継承しつつ独自の美学を打ち立てた2作目。当初、そのXTCのアンディ・パートリッジをプロデューサーに迎えて制作していたが、うまくいかずに解任。デビュー作を手がけたスティーヴン・ストリートが再登板し、デーモン・アルバーンの鋭い社会観察とメロディの才能、グレアム・コクソンの革新的なギター・ワークをうまく引き出し、英国の日常における皮肉とユーモアを交えた傑作を生み出した。ブリットポップの原型的作品であり、彼らの最高傑作と言える。（岩崎）

Aztec Camera
Dreamland

アズテック・カメラ
ドリームランド

WEA 4509-92492-2
[1993]

敬愛する坂本龍一をプロデューサーに迎えた、NY録音の5作目。繊細な歌声と詩的な歌詞に坂本のミニマルで洗練されたアレンジがみごとに調和しており、当時、ロディ・フレイムがイメージしていたメランコリックで洗練されたサウンドの意図を坂本が汲み取り、より広がりのあるものへ昇華させている。前年に坂本はバルセロナ五輪開会式のテーマ曲を手がけており、その曲に触発されたフラメンコ調の「スパニッシュ・ホーセズ」など、粒よりの楽曲が並ぶ。しかし、95年発表の次作が振るわず、アズテック・カメラ名義での活動を終わらせることに。（岩崎）

Slowdive
Souvlaki

スローダイブ
スーヴラク

Creation CRECD139
[1993]

シューゲイザーは、それであるというだけで詩性を持った音楽であると思っているが、この作品はマイ・ブラッディ・ヴァレンタインの『ラヴレス』とは対極の意味で詩性を持っている。ある程度の商業性も加味して必然的にポップな曲も多くなっているが、結果的にそれはポジティヴな意味合いを持ち、さもなくばあくまでも90'sのロックの残像として忘却の彼方に消え去っていた可能性が高いといわねばならない。そしてこの頃のライヴでギターを弾いて歌うレイチェル・ゴスウェルはこの世で最も美しいものの一つに数えたいと思う。（ブラッド）

CamScannerでスキャン

Björk
Debut

ビョーク
デビュー

One Little Indian TPLP31CD
[1993]

アイスランドのバンド、シュガーキューブスのヴォーカルとしてイギリスに進出したビョーク。そこでハウスに出会って強く惹かれた彼女は、バンド解散後に渡英して初のソロ・アルバムを制作した。完成した本作は大半の曲をネリー・フーパーがプロデュースして、ダンス・ミュージックを取り入れたオルタナティヴなエレクトロニック・サウンドとエキゾチックなメロディーがビョークの唯一無二の歌声の魅力を引き立てる。男性的なロックが主流だったシーンに風穴を開け、その後の女性ミュージシャンに影響を与えた点でも重要なアルバムだ。（村尾）

Stereolab
Transient Random-Noise Bursts
With Announcements

ステレオラブ
騒音的美学の終焉

Duophonic Ultra High Frequency
D-UHF-CD02
[1993]

85年結成のマッカーシーが音楽性の違いから分裂後、クラウトロックの影響を強くするティム・ゲインが中心となって90年に結成されたステレオラブ。本作はメジャー・レーベル（エレクトラ）を通じて発表された2作目である。アナログ機材による反復ビートと揺らめくような独特の響きに乗せてフランス人のレティシア・サディエールが物憂げに歌うスタイルに後年ほどの多様さはないが、マニアックな電子音楽やイージー・リスニングのサンプリングを絶妙に組み込みながら聴かせる楽曲群からは、この時期ならではの弾けた魅力が感じられる。（松井）

The Wildhearts
Earth Vs The Wildhearts

ワイルドハーツ
アース VS ワイルドハーツ

EastWest 4509-93201-2
[1993]

メタルのヘヴィネス、パンクの疾走感と反逆精神、ポップで歌えるメロディ、辛辣なユーモアを兼ね備えたサウンドでUKハード・ロックンロールの潮流（後に〝ブリットロック〟と呼ばれることになる）の中心バンドとなったのがザ・ワイルドハーツだった。「TVタン」「サッカーパンチ」、シングル・オンリーの「カフェイン・ボム」などジンジャーの曲作りが冴えわたり、ブリットポップ勢を蹴散らす勢いだったがロックンロールなライフスタイルのせいで最初の解散。メンバー交替やステージ上の乱闘など波乱の連続を経て、今なお突っ走り続ける。（山崎）

Paul Weller
Wild Wood

ポール・ウェラー
ワイルド・ウッド

Go! Discs 828 435-1
[1993]

93年発表、7枚目の「66」に至るまで、多少の差異はもちろんあるにしても高いクオリティの作品をリリースし続け驚異のキャリアを歩むポール・ウェラーの2ndソロ。シングル・ヒットとなった「Sunflower」や、タイトル曲「Wild Wood」のような彼ならではのシャープな楽曲が快調ぶりを聴かせてくれるし、オーシャン・カラー・シーンのスティーヴ・クラドックやサイモン・ファウラー、さらにスタイル・カウンシルのミック・タルボットといったウェラー・ファミリーと言いたい仲間たちが集まり、アルバム全体のスケール感を大きくしている。（大鷹）

CamScannerでスキャン

Kate Bush
The Red Shoes

ケイト・ブッシュ
レッド・シューズ

EMI CDEMD1047
[1993]

個性的パフォーマーでありながら、エルトン・ジョンなどの系譜をひく英国の正統派シンガー・ソングライターでもあるケイト・ブッシュ。これはそんな彼女による、80年代ワールド・ミュージック・ブームへの回答ともいえる作品だ。ゲイリー・ブルッカーやジェフ・ベックなど英国ロック界の大物の参加が話題を呼んだが、作品の本質は、アイルランドやブリテンの伝統的ダンス音楽をロック的に変奏したものではないか。70年代にスティーライ・スパンなどが追い求めた理想を、遠回りを経て実現した作品。個人的にはそんなふうに感じられる。（立川）

Underworld
Dubnobasswithmyheadman

アンダーワールド
ダブノーベースウィズマイ
ヘッドマン

Junior Boy's Own JBOCD1
[1994]

アンダーワールドを生んだジュニア・ボーイズ・オウンは90年代英国音楽の頭脳中枢だ。その12インチ群を点検すれば、彼らのサウンド構成が分かる。ブレイクビーツのグルーヴを核としてシンセなどエレクトリックを適用する手法。米ヒップホップとは感覚を異にし、ロック感覚が強いのが特徴。そして、このユニットではループの陶酔性が強く追求されているのが新機軸なのだ。サウンドの核であるリック・スミスとフロントのカール・ハイドに加え、この初期はDJのダレン・エマーソンが重要な役割を果たし、多彩なサウンドで様々な可能性を提示。（サエキ）

Therapy?
Troublegum

セラピー?
トラブルガム

A&M 540-196-2
[1994]

北アイルランドの3人組による4thは、いきなりスラッシーなギター・リフが鳴る。ビッグ・ブラックやジーザス・リザードといったアメリカのジャンク・ロックに影響されたノイジーなロック・サウンドを身上としていた彼らがここではメタルのグルーヴを取り入れ、ユニークさに磨きを掛けている。切れ味鋭いサウンドはポップな魅力も纏いはじめた。全英5位を記録。ヘルメットのペイジ・ハミルトンがギターを加えた「アンビリーヴァー」、もう一つのルーツを物語るジョイ・ディヴィジョン「アイソレーション」のカヴァーなど、聴きどころも多い。（山口）

Primal Scream
Give Out But Don't Give Up

プライマル・スクリーム
ギヴ・アウト・バット・ドント
・ギヴ・アップ

Creation CRECD146
[1994]

出世作となった『スクリーマデリカ』（91年）に続く、4枚目のアルバム。メイン・プロデューサーにトム・ダウドを迎え、メンフィスとハリウッドで録音された。スリーヴにはウィリアム・エグルストンの写真をトリミングした米国南部連合旗をあしらい、米国サザン・ロックのバスティーシュを目論んだ。『スティッキー・フィンガーズ』期のローリング・ストーンズになりきった「ロックス」、ジョージ・クリントンをフィーチャーした「ファンキー・ジャム」など、サンプリング全盛期に様式まることを正面突破で挑戦する表現は当然、賛否両論を呼んだ。（安田）

CamScannerでスキャン

Everything But The Girl
エヴリシング・バット・ザ・ガール
アンブリファイド・ハート
Blanco Y Negro 4509-96492-2 [1994]

生死の境を彷徨っていたベン・ワットの復帰作であり、従来の洗練されたアコースティック・サウンドから、急速に接近しつつあったクラブ・サウンドへ移行する転換点に位置する7作目。トッド・テリーによる「ミッシング」のリミックスが全米2位となったことで、クラブ・サウンド的な作品と捉えられがちだが、ここでは萌芽の段階であり、隠れた名曲である「トゥー・スター」や「12月25日」など、それまでふたりがやってきた音楽を総仕上げするような、フォークやジャズの要素を取り入れた温もりのあるアコースティックな響きが心を打つ。（油納）

Edwyn Collins
Gorgeous George
エドウィン・コリンズ
ゴージャズ・ジョージ
Setanta SETCD14 [1994]

グラスゴーのポストパンク・シーンで重要な役割を担ったバンド、オレンジ・ジュースのエドウィン・コリンズによるソロ3作目。エドウィンが愛するノーザン・ソウルをベースにして大ヒットした"A Girl Like You"を筆頭に、R&B、ジャズ、カントリーなどアメリカーナな音楽を、ヴィンテージな味わいを残しながらクラブ・ミュージックを通過したモダンなサウンドで仕上げたところは、同時期のポール・ウェラーの作品に通じるところがある。デイヴィッド・ボウイを彷彿させる艶やかな歌声も魅力的で、ブリティッシュ・ロックの香り高い一枚。（村尾）

Portishead
Dummy
ポーティスヘッド
ダミー
Go! Beat 828 522-2 [1994]

サンプリングやスクラッチなどヒップホップの手法を使っているが、根底にはシド・バレットやニック・ドレイクに始まり、コクトー・ツインズなど4ADレーベル系の80年代ニュー・ウェイヴに至るUK独特のダークで憂鬱で内向的なロックの系譜がある。ベス・ギボンズのメランコリックなヴォーカルは20世紀前半から歌い継がれてきたトーチ・ソングの伝統が息づいており、それらが古いホラー映画の世界のような、あるいは狂った妄想が支配する内面世界のような非現実的で幻想的な空間の中で隠花植物のような花を咲かせている。（小野島）

Epic Soundtracks
Sleeping Star
Bar / None [US] AHACD6149-2 [1994]

前衛的なポストパンク・バンドとしてカルト的な人気を得たスウェル・マップスの元メンバー、エピック・サウンドトラックスが、J・マスキスやキム・ゴードンらUSの支援者とともに作り上げたソロ作品。こう書くと、いかにもラウドで尖った内容が想像されるかもしれないが、その実、拍子抜けしてしまうくらい上質なポップ・ソング集となった。だがしかし、単に耳に心地好いわけではなく、崩壊の予感を秘めたメロディと彼の歌声には、"ポップ・ソングとは一体何なのか"という、根源的かつ自己言及的な疑問がこだましている。悲しいほどに美しい。（柴崎）

CamScannerでスキャン

Siouxsie & The Banshees
The Rapture

スージー&ザ・バンシーズ
恍惚〜ラプチュア
Polydor 523725-2
[1995]

90年代のUKロック・サウンドの原型を作ってきたバンドが、結成19年目に放った最後のオリジナル・アルバム。80年の『カレイドスコープ』以降のポップ感が際立ち、ゴスのイメージを完全に払拭している。半数近くの曲をプロデュースしたのは87年の『スルー・ザ・ルッキング・グラス』でカヴァーしたジョン・ケイル。88年の『ピープショウ』で挑んだダンス・ビートの曲を含むが、不変のネガティヴな心象風景をたおやかに歌い心に残る。バンド史上2番目に長い11分半近くの曲など守りに入らぬ姿勢を感じるが、"閉幕"の足音も聞こえてくる傑作の一枚。（行川）

Tricky
Maxinquaye

トリッキー
マクシンクェーイ
4th Broadway / Island BRCD610
[1995]

1stにしてトリップ・ホップを代表する傑作。トリッキーが幼少の頃に自殺した母親の名をタイトルに冠し、持ち味となるひたすらダークでダウナーなムードで貫かれている。ダブを軸にヒップホップ、レゲエ、パンクなどの要素を込めた徹底してヘヴィなトラックと、低音でつぶやくようなラップが一体化し、独自のスタイルを築き上げた。この後、99年の『ジャクスタポウズ』あたりまでは複雑さや深さを増していくが、基本形たる本作はシンプルなだけに格別だ。コロナ禍以降に頻発した不穏でロウファイな音に通じる感覚もあり、今聴いてもしっくりくる。（小山）

Elastica
Elastica

エラスティカ
ELASTICA
Geffen GED24728
[1995]

ジャスティーン・フリッシュマンのスウェードやブラーとのゴシップがマイナスに働いたか、英1位を記録したアルバムにも拘わらず、今では忘れられてしまった観が拭えないが、彼女のザラついたギターを中心としながらも耳を捉えるベース・ラインがハッキリ聞こえるサウンドはパンク成分が多めであっても米国のライオット・ガール勢のような殺伐さはなく、コーラスがザ・カーズを想起させる曲などはグランジを経たパワー・ポップといった趣で魅力的だ。トリオと4人編成の違いはあるが、ドラマーだけが男性であり、半文学と相通する気品もある。（杉原）

Gene
Olympian

ジーン
オリンピアン
Costermonger GENE1CD
[1995]

93年に結成、翌年にシングル"For The Dead"でデビューを果たしたジーンの記念すべきアルバム第1作。マーティン・ロッシターのヴォーカルはザ・スミス時代のモリッシーと比較されがちだが、リフ・メイカーとしての才能豊かなスティーヴ・メイソンのギターには、スモール・フェイシズやザ・ジャムを愛した彼らの軸足が強く感じられる。95年3月に発売され英8位を記録、まだ初々しさが残る仕上がりながらも、抒情的でかつ英国ロック的な音を堪能できる。同時期の重要シングル等を詰め込んだ編集盤"To See The Lights"も必聴である。（大伏）

CamScannerでスキャン

The Boo Radleys
Wake Up

ブー・ラドリーズ
ウェイク・アップ!
Columbia CK67249
[1995]

88年にウォラシーで結成、90年にレコード・デビューを果たしたブー・ラドリーズによる、95年3月リリースの第4作。彼らの代表作といえば極めて実験性の高い93年の"Giant Steps"の名前が上がりそうだが、どれか1枚といわれれば本作を無視することはできないだろう。本作は2月にシングル発売され、英9位を記録した極上のポップ・チューン"Wake Up Boo!"をリード・トラックとしたものだが、アルバムには様々なスタイルの曲が並んでおり飽きさせない。本作からシングル・カットされた"Find The Answer Within"も必聴のナンバーだ。(犬伏)

King Crimson
Thrak

キング・クリムゾン
スラック
Discipline Global Mobile / Virgin
KCCDY1
[1995]

ダブル・トリオ編成で発表された『ヴルーム』(94年)に次ぐフル・アルバム。硬質でメカニカルな音楽性を軸にサイケとスペイシーな面を持ち併せた音でグランジ以降のロックを総括していたのが、ロバート・フリップらしい。「ダイナソー」は彼らの音楽を集約したような曲、インスト曲「スラック」はダブル・ドラムの魅力が存分に味わえ、総じて録音品質が高い。メロトロンを駆使した「セックス・スリープ・イート・ドリンク・ドリーム」はシニカルな歌詞が彼らしく、「ヴルーム・ヴルーム」のヴォルテージの高さには眩暈を催してしまう。(武田)

Whiteout
Bite It

ホワイトアウト
バイト・イット
Silvertone ORECDS36
[1986]

グラスゴー郊外の港町、グリーノックから出てきたこのバンドは、ザ・ストーン・ローゼズを世に出したシルヴァートーンとの契約を果たすなど当初は大いに期待されたが、満を持してリリースされたこのアルバムは英国ではまったく響かなかった…が、日本で予想外のヒットを記録。60~70年代の古き良きロックへの初々しい憧憬が溢れるサウンドが炸裂するが、同時にどこか老成した筆致も随所に感じられ、じつに味わい深い楽曲が並ぶ。近年、アナログでリイシューされ再評価の機運が高まっているが、改めて多くの人に発見されるべき名盤である。(石川)

Supergrass
I Should Coco

スーパーグラス
アイ・シュド・ココ
Parlophone CDPCS7373
[1995]

スーパーグラスはオックスフォード出身の3人組。95年のデビュー作となる本盤から英1位の大ヒットに。いかついモミアゲが猿っぱさを増幅させるルックスのギャズ・クームスは当時まだ十代。剥き出しの若さをガレージ感覚溢れるロックンロールに昇華する。初期のXTCを彷彿させるパワーとポップを極めた演奏は興隆するブリットポップというジャンルに鮮度を与えた。ユニークな表題は"I should coco(そう思うべき)"のコックニー訛りのスラング。60年代パーロフォン社でお馴染みカンバニー・スリーヴの意匠を流用したスリーヴも愛おしい。(安田)

CamScannerでスキャン

Teenage Fanclub
Grand Prix

ティーンエイジ・ファンクラブ
グランプリ
Creation CRECD173
[1995]

『バンドワゴネスク』で〝グランジへのスコティッシュからの回答〟を届けた4人組（当時）だが、バンドとしての真価が発揮されたのは、轟音よりフォーキーさが強くなったこの4thアルバムだと思う。というのも、ノーマン・ブレイク、レイモンド・マッギンリー、ジェラルド・ラヴという主要メンバーがそれぞれのソングライティングで持ち味を開花。各人がリード・ヴォーカルをとり、クロスビー・スティルス&ナッシュさながらのハーモニー・ワークを見事に形にしていたからだ。それが端的に表われた冒頭3曲は、バンド史上でも鉄板中の鉄板。（岡村）

The Chemical Brothers
Exit Planet Dust

ケミカル・ブラザース
さらばダスト惑星
Freestyle Dust XDUSTCD1
[1995]

1曲目「リーヴ・ホーム」の衝撃は忘れられない。衝撃的なブットいベース音を核に組まれた直進的なサウンドは単純に循環するミディアム・テンポの8ビートなのだが、急テンポのヘヴィ・メタル以上の破壊力を持つ。盛り上げのイディオムは、ハードフロアなどの純フロア・テクノ勢と呼応している。ここにロックとクラブ音楽の垣根が取り払われたのである。ヴォーカルがほぼ入らないのでジャンルとしてはクラブ。しかし、ベース音を中心とする音色のディストーション感覚は、紛れもないジミ・ヘンドリクス以来のロック・マナーなのである。（サエキ）

Gorky's Zygotic Mynci
Bwyd Time

ゴーキーズ・ザイゴティック・マンキ
ブード・タイム
Ankst ANKST CD059
[1995]

ウェールズ出身バンドの3作目。歌詞は、英語だけでなく独特の響きをもつウェールズ語でも書かれている。ウィキペディア（英語版）の紹介ページで様々なジャンルにカテゴライズされていて笑ってしまうが、それだけ個性的ということ。インクレディブル・ストリング・バンドやティラノソーラス・レックスのサイケ・フォークの系譜にあり、またケヴィン・エアーズやロバート・ワイアットに通じるユーモア性もあるユニークな音楽性は、ブリットポップやグランジ飽和状態のシーンに鮮烈な印象を与えた。次作『バラフアンデル』では[illegible]

Goldie
Timeless

ゴールディー
タイムレス
Metalheadz / FFRR 828 646-2
[1995]

ニア・アーカイヴスの登場などで、近年、再評価著しいドラムンベース。90年代の英国が生んだもっともオリジナルなダンス・ミュージックであり、2ステップやUKガラージ、ダブステップやブロステップといったサブジャンルを生みながら今もフロアを揺らし続けるドラムン草創期の最重要作といえばもちろんこれ。ドラムンがアンダーグラウンドからメインストリームに浮上するきっかけとなった、切れ味抜群の高速ブレイクビーツ、荘厳と妖しさが同居するフューチャリスティ[illegible]

The Charlatans
The Charlatans

ザ・シャーラタンズ
ザ・シャーラタンズ

Beggars Banquet BBQCD174
[1995]

マッドチェスターと言われることもあるが、このバンドの音作りには、60年代ソウルなどの影響を受けたモッズ・リヴァイヴァル期のバンド、メイキン・タイムの鍵盤奏者である故ロブ・コリンズがメンバーとして大いに貢献している。90年代中盤には、ヴォーカルのティム・バージェスのスワンプ・ロックへの傾倒なども相まって、よりR&B色強いグルーヴ感ある演奏を展開した。英チャート1位を獲得した本作はスティーヴ・ヒレッジらと組んだウェールズ録音だが、米録音を実践したこの時期のブライマル・スクリームの動きともシンクロしていた。（岡村）

Cast
All Change

キャスト
オール・チェンジ

Polydor 529312-2
[1995]

ザ・ラーズのベーシストだったジョン・パワーにより92年に結成、95年にシングル"Finetime"でデビューを果たしたキャストのファースト・アルバムで、同年10月に発売され英7位を記録。1年を超える長きに亘りチャートに留まるという大ヒット作となった。パワーが長年、温めていた楽曲をカタチにしたものだけに、収録曲の粒の揃い方はブリットポップ系バンドの中でも群を抜いており、演奏力も抜群。ザ・フーと比較されることもしばしばだが、中でもキース・オニールは容姿から演奏スタイルに至るまで、キース・ムーンにそっくりだ。（犬伏）

The Bluetones
Expecting To Fly

ブルートーンズ
エクスペクティング・トゥ・フライ

Superior Quality BLUECD004
[1996]

浮遊感のある音像にギターのカッティングが勢いよく切り込んでくる、アルバム冒頭の瞬間にこそ、筆者は"ブリットポップの醍醐味"を最も感じる。そこからは滑らかなアンサンブルに乗って、甘くて瑞々しい歌声が繊細に旋律を綴っていく。快進撃を続けていたオアシスを蹴落とし、全英アルバム・チャート初登場1位を奪取した彼らのこの初作は、シューゲイザーにもサイケにもマッドチェスターにも、ビートルズにさえも染まらない純白のギター・ポップ。それゆえに各楽曲が時代を越える永遠の輝きを放つ。ブリットポップの最高到達点の一つ。（石川）

Lush
Lovelife

ラッシュ
ラヴライフ

4AD CAD6004CD
[1996]

女性二人がヴォーカル／ギターでフロントに立ったロンドン出身バンドのサード&ラスト・アルバム。ブームの終わりを告げるかのようにシューゲイザー・サウンドから解き放たれ、ドリーミーかつノイジーなギターに頼らず、クールな"ポップ・スタイル"に照準を合わせている。バンク・ロック風の激しい曲とソフト・ロックと言えるリリカルな曲との落差も魅力で、しっとりした歌ものではアンニュイな歌声も冴えわたる。曲によりヴァイオリン等の弦楽器、金管楽器、フルートなどゲストを迎え、バルブのジャーヴィス・コッカー(vo)が1曲に参加。（行川）

CamScannerでスキャン

The High Llamas
Hawaii

ハイ・ラマズ
ハワイ

Alpaca Park CDWOOL2
[1996]

架空の桃源郷を妄想で具現化してしまったようなアルバムだ。80年代にポストパンク的な音楽を奏でていたマイクロディズニーの中心人物、ショーン・オヘイガン率いるバンドの3作目。ビーチ・ボーイズからの影響は明白だが、そのほかにもラウンジやブラジル音楽、ソフト・ロック、エキゾチカの成分も含有されており、ドリーミーで幻惑的なサウンドを創出している。特にストリングスとコーラスが織りなす音像が麗しい。ステレオラブやジム・オルークと並び、音響派／ポストロックの頭目として注目される契機となった重要作だ。（土佐）

Shed Seven
A Maximum High

シェッド・セヴン
マキシマム・ハイ

Polydor 531039-2
[1996]

90年にヨークで結成、94年にデビューを果たしたシェッド・セヴンが96年4月にリリースした第2作で、英8位、18万枚を超えるセールスを記録した彼らの代表作である。曲の粒が揃った傑作に仕上がった前作"Change Giver"よりサウンド・プロダクションは圧倒的に向上しており、先行シングルとなった"Going For Gold"は英8位を記録、次作収録の"Chasing Rainbows"とともにバンドのアンセムとなった。彼らはその後、解散～再結成という紆余曲折を経て、24年に発売した2枚のアルバムがいずれも英1位を記録するという快挙を果たしている。（犬伏）

Ocean Colour Scene
Moseley Shoals

オーシャン・カラー・シーン
モーズリー・ショールズ

MCA MCD60008
[1996]

失敗に終わったデビュー作に続いて、レーベルを移籍して制作したセカンド作。自身のスタジオ：モーズリー・ショールズで録音したもので、これは出身地のバーミンガム近郊の街、モーズリーと、アラバマ州のマッスルショールズを掛けて名付けられ、アルバム・タイトルにも使われた。スティーヴ・クラドック(g)はポール・ウェラーのバンドでも活動するが、本作にもウェラーがギターやオルガンで参加している。レッド・ツェッペリンの「フォー・スティックス」のリズムに影響された「ザ・リヴァーボート・ソング」など硬派な曲が並ぶ。（赤岩）

The Divine Comedy
Casanova

ディヴァイン・コメディ
カサノバ

Setanta SET CD25
[1996]

ダンテ『神曲』の英題をその名に冠したディヴァイン・コメディは、北アイルランド出身のニール・ハノンのソロ・プロジェクトとして89年に活動をはじめ、4作目となる本盤で商業的成功を獲得した。バート・バカラックの洒脱さと、スコット・ウォーカーの深遠な表現からの影響を多大に感じさせるオーケストラル・ポップに乗せて、60年代流儀の気障なモテ男をきどったハノンの美意識に満ちた世界が繰り広げられる。第2弾シングルとなった「ピカミング・モア・ライク・アルファー」はさながら笑いを求めていないオースティン・パワーズだ。（安田）

CamScannerでスキャン

Ash
1977

アッシュ
1977
Infectious INFECT40CDX
[1996]

北アイルランドのトリオによるファースト・アルバムは1977年生まれの〝真正ティーンエイジャー〟（デビュー時の売り文句）の青春スピリットがほとばしる。〝カモン、ジャッキー・チェン！〟と叫ぶ「カンフー」を筆頭としたアドレナリン噴出のハード・ロック、ウェットな泣きの入った「オー・イェー」などは十代の未完成でセンチメンタルだった時代のタイムカプセル。誰もがいつか卒業していく時期の思い出がありったけ込められているが、彼らはそれをスタイルとして確立。50歳間近の今も甘酸っぱいティーンエイジ・ロック節を奏で続ける。（山崎）

Elvis Costello & The Attractions
All This Useless Beauty

エルヴィス・コステロ
オール・ディス・ユースレス
・ビューティー
Warner Bros. 9362-46198-2
[1996]

アトラクションズと10年ぶりに制作した一枚。当初は、コステロが他アーティストのために書いた曲のセルフカヴァー作と謳われ、実際にティル・チューズデイ、ロジャー・マッギンなどによって既にこの時点で公開されていた提供曲はある。だが、最終的に共同プロデュースで関わったジェフ・エメリックの手腕によって、成熟期に入っていたコステロの人懐こいソングライティングが馴染みの仲間との演奏で堪能できる、90年代屈指のオリジナル作になった。ポール・マッカートニーとの共作曲、ブロドスキー・カルテットが参加した楽曲も収録。（岡村）

Squarepusher
Feed Me Weird Things

スクエアプッシャー
フィード・ミー・ウィアード・
シングス
Rephlex CAT037CD
[1996]

スクエアプッシャーことトム・ジェンキンソンのアルバム1作目は、ベース他の生演奏にサンプラー、リズム・マシン、エフェクター、オープン・リール・デッキ等を駆使した一人多重録音。90年代以降に一般的なポピュラー音楽の中にまで浸透したドラムンベースを、さらに高度なスタイルで発展させたこの分野の重要作だ。後には、彼も同傾向のその他のアーティストもPCソフトを音楽制作に取り入れることが多くなっていくが、この時期のロウファイな機材を用いた音作りの経験があるのとないのとでは、全く違ったものになっていただろう。（松井）

The Blue Nile
Peace At Last

ザ・ブルー・ナイル
ピース・アット・ラスト
Warner Bros. 9362-45848-2
[1996]

「ダウンタウン・ライツ」のヒットを生んだ『ハッツ』から7年。シンセによる抑制の効いたエレクトロ主体だった前2作とは趣を改め、アコースティック・ギターをフィーチャーした曲が目立つ。コーラスの起用や歌詞などにおいてゴスペル的テイストが織り込まれ、ファンク的なニュアンスによるシンセ・ベースやドラムス、ストリングス代わりのシンセを効果的に起用。哀愁味や翳りのある叙情的な曲調、穏やかで落ち着きがあり時に官能的で、愛をテーマにその高揚感やあり様を浮き彫りにしたポール・ブキャナンのヴォーカルも特徴的で味わい深い。（小倉）

CamScannerでスキャン

Dodgy
Free Peace Sweet

ドッジー
フリー・ピース・スウィート
A&M 540 573-2
[1996]

90年にロンドンで結成された3人組、ドッジーが96年6月に発表したサード・アルバムにして、文句なしの最高傑作。アコースティックなポップ・ソング"Found You"から、ザ・フーを彷彿させる入魂の"In A Room"、美しくも感傷的な"One Of Those Rivers"、そして、今もまったく色褪せないクラブ・ヒット"Good Enough"まで、いささかのコンセプチュアルな味付けとともに見事なバランスで楽曲が並べられている。本作は英7位のヒットとなり、英国でプラチナ・ディスクに認定、"Good Enough"はバンドのキャリアで最高の英4位を記録した。(犬伏)

Placebo
Placebo

プラシーボ
プラシーボ
Elevator / Virgin CDFLOOR2
[1996]

ブリットポップ最盛期の96年にリリースされたプラシーボのこの初アルバムは、全英5位まで上昇するヒットとなり、そのユニークなサウンドでシーンに多大なインパクトを与えた。中性的なルックスと歌声。退廃的な歌詞。変則チューニングによる特異なギター・サウンド。漂うグラムやゴスの美意識。米国グランジを彷彿させるエッジと疾走感。そして、そんななかに浮かび上がる不思議なポップ感覚。これまでにない角度で新たな価値観を提示した本作は、振り返ってみれば、ブリットポップの終わりの始まりを告げる一枚だったのかもしれない。(石川)

Jamiroquai
Travelling Without Moving

ジャミロクワイ
TRAVELLING
WITHOUT MOVING
～ジャミロクワイと
旅に出よう～
Sony Soho Square 483999 2
[1996]

60～70年代英国の音楽家は、米国の黒人音楽を聴いて育ちながらも、それらを自分流のオリジナルなものにしようと腐心した。しかし、80年代になってスタイル・カウンシルなどが登場し、好きな元ネタへの愛を率直に披瀝するというあり方が聴き手の支持を得るようになる。そうした潮流から必然的に生まれたのがジャミロクワイだ。本作はその3作目で、数多の元ネタをDJ的な感覚で組み合わせ、既視感と新鮮さを両立させた新時代のブルー・アイド・ソウルを作り出している。90年代、ポップ・ミュージックの世界はリサイクルの時代を迎えたのだ。(立川)

Aphex Twin
Richard D. James Album

エイフェックス・ツイン
リチャード D.ジェイムス・
アルバム
Warp WARPCD43
[1996]

テクノ系の金字塔的傑作。いわゆるドリルンベースのビートが縦横無尽に暴れまくり、それとは相反するような美しいストリングスやアンビエント系の音が背後で鳴り続け、いわば醜悪と美麗が同居する異形のケイオティックな音像を成し遂げている。そこに意味や感情の介在などなく、ひたすらストイックで無機質なのも重要だろう。今となっては古典であり、もはやジャンルなど関係なく、悪意や不快や不安といったものを促す表現の極北として捉えるべきだろう。本作が世界中のミュージシャンに、どれだけの影響や衝撃を与えたことだろうか。(小川)

CamScannerでスキャン

Bush
Razorblade Suitcase

ブッシュ
レイザーブレイド・
スーツケース

Trauma IND90091
[1996]

ニルヴァーナのフォロワーであることをすいぶんと叩かれたが、バンド結成の動機がニルヴァーナなのだから、その多大なる影響はメンバーたちも認めるところ。前作の『シックスティーン・ストーン』(94年)がヒットしたことに加え、アイドル・バンド扱いされた反動だろうか。この2ndを自分たちの『イン・ユーテロ』にすると表えたのか、同作を手掛けたスティーヴ・アルビニを迎え、持ち前のキャッチーな魅力を削ぎ落してまでグランジ・ロックに寄じようとしている。そう言ったら、ちょっと大袈裟すぎるか。全英3位、全米1位を記録した。(山口)

Reef
Glow

リーフ
グロウ

Sony 486940-2
[1997]

フリーのアナグラムをバンド名に持つ4人組が、ブラック・クロウズを手がけた米国人プロデューサー、ジョージ・ドラクリアスと作った2nd。ブルージーでファンキーなロックンロールが歓迎され、全英1位に。1曲目のプレイス・ユア・ハンズ」がCMに使われたこともきっかけになったと思うが、ヒットの理由はモダンな音作りにもありそうだ。ソリッドなサウンドは、力強い歌声を持つゲイリー・ストリンガー(Vo)に影響を与えたというメタリカも参考にしていそう。曲によってはシンセも鳴る。「ロボット・リフ」は人力ハウスの趣もあり。(山口)

David Bowie
Earthling

デヴィッド・ボウイ
アースリング

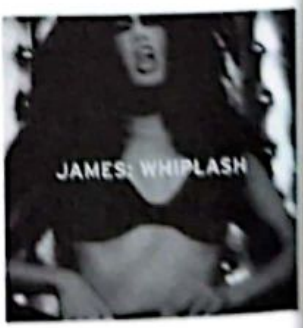
BMG 7432144944 2
[1997]

90年代のボウイで最も高揚感を得られる盤。1曲目「リトル・ワンダー」の大胆なサウンドが目を引く。この時期、ドラムンベースに移行していたジャングルを、そのオールド・スクールな形態で起用。そうした音作りにはティン・マシーンからの盟友、リーヴス・ガブレルス(g)が大きな貢献を果たした。リズム構築に気を取られすぎることなく、練られたヴォーカル・ロックに落とし込んだ成果は、今こそ問われるべき。ボウイの真価は緻密にして雅な和声感覚にある。それを基盤に優美なメロディを歌い上げる90年代のロック、素晴らしすぎる。(サエキ)

James
Whiplash

ジェイムス
ウィップラッシュ

Fontana 534 354-2
[1997]



ジェイムズが90年代に発表したアルバム6枚はどれも秀作なので、その意味では何が選ばれてもおかしくないのだが、ジャケットはワーストであろう通算7作目の本盤を選んだ理由は本作からのシングル3曲の素晴らしさにある。とりわけブライアン・イーノがバンドと共作した「トゥモロー」は筆者にとって90年代UKロック・ソングのトップ10に入る曲であり、イーノの外仕事としてもベストの候補だ。サビの歌詞、謀略や銃で愛は掴めない。未来は変わると信じよう。明日、運命は変わると信じるんだ。も、今の時代こそ切実さが増して響いてくる。(杉原)

CamScannerでスキャン

Paul McCartney
Flaming Pie

ポール・マッカートニー
フレイミング・パイ

MPL / Parlophone
7243 8 56500 2 4
[1997]

一連のビートルズ・アンソロジー・プロジェクトを経たポール・マッカートニーがELOのジェフ・リンと恩師ジョージ・マーティンの3人で丁寧に作り上げた作品だ。タイトルはジョン・レノンのよくわからないジョークに由来したものだし、リンゴ・スターも参加しているなど、〝ビートルズついた〟アルバムだ。サウンドとしては使用楽器の選定も含め、アナログっぽい質感にまとめられている。70年代的なサウンドを再評価する動きはポールにも波及していたといえる。90年代のREMや2000年代のウィルコの諸作と並べて聴きたい作品。（鳥居）

Feeder
Polythene

ポリシーン
フィーダー

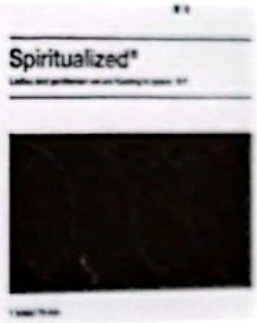
Echo ECHCD15
[1997]

南ウェールズ出身のグラント・ニコラスとジョン・ヘンリー・リーが、ロンドンで出会った日本人タカ・ヒロセと結成したスリー・ピース・バンドとして出発。本作がデビュー・アルバム。編成的にも、ヘヴィに鳴るギターにも、ニルヴァーナ、ひいてはグランジの影響が濃い。だがシングル・ヒットした「ハイ」（英24位）や「クラッシュ」（英48位）など、粗いギター・サウンドに乗る内省的&感傷的なメロディが、強くイギリスを意識させる。若者にアピールしたグランジの音楽的魅力を抽出して、新たな英ポップを創造。以降もヒット作を連発する。（鈴木）

Spiritualized
Ladies And Gentlemen We Are Floating In Space

スピリチュアライズド
宇宙遊泳

Dedicated DEDCD034A
[1997]



より大きな音響空間を志向するにあたり、楽器や声音のひとつひとつのヴォリュームではなく演奏の密度や発声者の数の増量、響きの層の厚みの増加に挑んだ力作。バラネスク・カルテット、ロンドン・コミュニティ・ゴスペル・クワイア、ホーン・セクション、それにピアノとヴォーカルでドクター・ジョンも参加している。電子楽器は背景の色彩の一部。派手な残響で空間を埋めるのではなく、演奏者各自の蠕動（ぜんどう）が重なり合うさまを清明にとらえている。激奏の交差もあるが、ノイズを活用する場面はない。空間を漂流するクラゲを感得させる交響組曲の趣き。（湯浅）

Prodigy
The Fat Of The Land

プロディジー
ザ・ファット・オブ・ザ・ランド

XL XLCD121
[1997]

東京ドームのavex「rave」などでやっていたエレクトリック・ダンス・ユニットが大胆なロック・イディオムと3人の異形のフロントメンを前面に出して天下を獲った。イケイケのリフとビート、執拗なほどのキラー・フレーズの反復は歌えて、踊れて、暴れられるもので、「ファイアスターター」「ブリーズ」「スマック・マイ・ビッチ・アップ」が時代のアンセムとなった。基本的にリアム・ハウレットの単独プロジェクトながらクール・キースやクリス・ピアン・ミルズのゲスト参加、L7のカヴァーがひとつの塊となったスタイルが世界のフェスを席巻した。（山越）

CamScannerでスキャン

Cornershop
When I Was Born For The 7th Time

コーナーショップ
ボーン・フォー・ザ・
セヴンス・タイム

Wilja WJCD1065
[1997]

ウルヴァーハンプトン出身のインド移民2世、ティジンダー・シンが中心となって結成されたコーナーショップの3作目。インドの国民的シンガーのアシャ・ボスレを歌った「プリムフル・オブ・アーシャ」がヒットを記録した。シタールやドーラクといった出自にまつわる楽器とサンプリングが同居するチャーミングなサウンドが特徴である。ビートルズがシタールを導入した「ノルウェイの森」をパンジャーブ語でカヴァー。西欧視点のエキゾチシズムをパロディで捉え返すアプローチだといえる。そして何より一番の魅力はシンの滋味深い声である。（鳥居）

The Pastels
Illumination

パステルズ
ILLUMINATION

Domino WIGCD34
[1997]

スティーヴン・パステル率いるグラスゴーのバンドで、活動が最も活発だった時期に出た4枚目のアルバム。サイケデリックな浮遊感や〝揺らぎ〟を醸し出すバンド・サウンドとともに、スティーヴンのいささかヨレヨレのつぶやくようなヴォーカルでグッド・メロディを聴かせているのだが、常にパンク精神的なものを内包していて、随所でヴェルヴェット・アンダーグラウンドっぽい質感を垣間見せているのがおもしろい。いわば心地よさと攻撃性の同居、というあり方そのものが魅力といえるだろう。UKインディの良心というべき存在だ。（小山）

Robert Wyatt
Shleep

ロバート・ワイアット
シュリープ

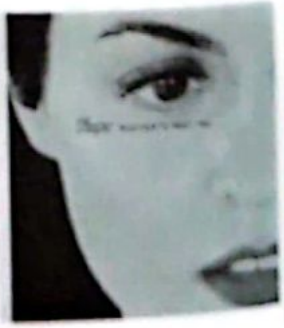
Hannibal HNCD1418
[1997]

大怪我を負ってドラマーの道を断たれたことに対して他人が迂闊な評価を下すわけにはいかないが、それを境にロバート・ワイアットの表現が幅と深みを増したのは間違いない。独創性に富んだ声のパフォーマンスに加え、それを活かすための音響への目配りも、広い世代、幅広いジャンルのアーティストに影響を与えた部分だろう。97年発表の本作は、そんなサイケ／ジャズ・ロック期後のワイアットがさらなるピークの到来を告げた作品。フリー、アンビエント、ポストパンクと親密な関係を結びつつ唯一無二の世界を浮かび上がらせている。（松井）

Sleeper
Pleased To Meet You

スリーパー
プリーズド・トゥ・ミート・ユー

Indolent SLEEPCD016
[1997]



90年代の全盛期スリーパーがリリースした3作の中では、商業的には最も成功せず、おそらくは最も評価されていないアルバムである。だが、音楽的な成熟でいえば、本作が最も進みに進んだものであることは広く知られるべきだ。愛らしいルックスながら退廃的な発言も厭わないルイーズ・ウェナーを中心に、ストレイトでパンキッシュなサウンドを鳴らしてきたこのバンド。ベーシストが脱退して3人となった本作では、あたかも後期ビートルズのごとく、バンドという概念から解放されて溢れんばかりのリリシズムをじつに瑞々しく音化している。（石川）

CamScannerでスキャン

Mogwai
Mogwai Young Team

モグワイ
モグワイ・ヤング・チーム
Chemikal Underground
CHEM018CD
［1997］

芸術作品として静的なものでないことを強調して訴えていうなれば、これは97年のモグワイ誕生の瞬間を焼き増ししたものである。耳栓が必要になるほどの、そして密やかに鼓膜を物理的に消耗するであろう、この轟音こそが静けさと等価であることを宇べる作品でもあり、傷跡を伴むような演奏を前に我々の存在は無意味化されてしまう。それは音源で聴く場合であっても同じだ。アートワークは [illegible]

Mark Hollis
Mark Hollis

マーク・ホリス
マーク・ホリス
Polydor 537-688-2
［1998］

90年代のUKロックが再評価されているとは到底言えないし、またそのタイミングでもないのだが、トーク・トークと、そのフロントマンだったマーク・ホリスに関しては10年代以降、年を経ていくたびに重要性が高まっている。本作は唯一のソロ作で、ジャズやフォーク、20世紀のクラシック音楽からインスピレーションを得たきわめてミニマルで静謐な作品であり、大音をアコースティック楽器をふんだんに配置し [illegible]

Massive Attack
Mezzanine

マッシヴ・アタック
メザニーン
Circa / Virgin 7243 8 45599 2 2
［1998］

マッシヴ・アタックの作品のうち、商業的にもっとも成功を収めた一枚で、イギリスのチャートでは1位を獲得している。とはいえ、"中二階"と名付けられたこのアルバムには陰鬱ならざる不穏な空気が漂っており、密度の高い緊張感が味わえる。閉塞的な [illegible] サウンドだといえる。無機質な響きのエレキ・ギターの導入により、彼らの殺伐とした音景がさらに強調されるようになった。[illegible]

Belle & Sebastian
The Boy With The Arab Strap

ベル&セバスチャン
The Boy With The Arab Strap
Jeepster JPRCD003
［1998］

前作の高評価を経て発表された通算3作目。多少の粗削り感もあったアンサンブルが格段に洗練度合いを増したことで、若き日のスチュアート・マードック自身が密かに愛でてきたであろう往年のポップスやフォーク・ロック名盤に比肩するような、温かな質感を獲得することに成功した。一方で、あの時代＝90年代後半を傷つきやすい若者として生きたX世代ならではの繊細 [illegible]

Manic Street Preachers
This Is My Truth Tell Me Yours

Epic 481703 6
[1998]

Fatboy Slim
You've Come A Long Way, Baby

Skint BRASSIC11CD
[1998]

Idlewild
Hope Is Important

Food FOODCD28
[1998]

XTC
Apple Venus Volume 1

Cooking Vinyl COOK CD177
[1999]

Beth Orton
Central Reservation

ベス・オートン
セントラル・リザヴェーション

Heavenly HVNLP22CD
[1999]

ケミカル・ブラザーズの作品にも客演した彼女の『トレイラー・パーク』（96年）はフォークトロニカ的な作風だったが、続く本作は一転、生音の良さを活かしたオーガニックでアコースティックなサウンドへとシフト。ドクター・ジョン、ベン・ハーパー、テリー・キャリアーなどゲスト陣は豪華極まりないが、ベス・オートンの凛とした歌声は彼らに埋もれない確固たる個性を蔵している。さりげなく織り込まれたストリングスやパーカッションも効果的で、のちにジム・オルークがプロデュースを手がけるのもこの作風なら[illegible]。（十[illegible]）

Travis
The Man Who

トラヴィス
ザ・マン・フー

Independiente ISOM9CD
[1999]

発表当時、某女史にお気に入りのバンドを尋ねられ、トラヴィスの名と本作を挙げたところせせら笑われた。ブリットポップ衰退期、救世主として絶賛されたデビュー作でのオアシス風ラウドなロックから一転。ナイジェル・ゴッドリッチ制作による本作は、哀愁や叙情漂うメランコリックなメロディ、生ギターをフィーチャーしたポップな音楽性に変貌。フラン・ヒーリーによる内省的な歌詞、甘く、切なげなヴォーカルが魅力。「ホワイ・ダズ・イット・オールウェイズ・レイン・オン・ミー」のヒットで世界中に認知され、本作はベストセラーに。（小[illegible]）

Sigur Rós
Ágaetis Byrjun

シガー・ロス
アゲイティス・ビリュン

FatCat FATCD11
[1999]

独自のスタイルを確立させたセカンド。ヨンシーのファルセット・ヴォイスを中心に据え、ストリングス系や鍵盤類などによる漂うような抽象的サウンドとともに、幽玄の夢想的イメージを喚起させる世界を構築している。なおかつ祈りや願いも感じさせる、無垢な美しさがあまりに印象的。特筆すべきは、空間をめいっぱい使った立体的音響のセンスに長けているところで、いわゆるポストロック～音響系の新たな可能性を示す作品となった。バンドのピークは00年代に入ってからだが、その土台を作り上げ、後進にも影響を与え続けている重要作。（小山）

Super Furry Animals
Guerrilla

スーパー・ファーリー・
アニマルズ
ゲリラ

Creation CRECD242
[1999]

ウェールズから登場したスーパー・ファーリー・アニマルズ。初めてサンプラーを導入した本作は、エレクトロニックな要素がバンド・サウンドに溶け込み、ストリングスやホーンなど様々な楽器を自在に配置。音作りはこれまで以上に複雑で立体的になるなか、カリプソからドラムンベースまで様々な音楽性を取り込んで、バンドの中心人物、グリフ・リースのソングライティングも光っている。同郷のゴーキーズ・ザイゴティック・マンキに通じるサイケデリックな多幸感にはウェールズの風土を感じさせたりもして、バンドの個性を確立した[illegible]。（[illegible]）

CamScannerでスキャン

90年代UKロックとは何だったか

多様に花開いたサウンドを検証する

文＝大鷹俊一

もうあと数か月後の25年7月4日、英カーディフのミレニアム・スタジアム（Principality Stadium）でついに実現してしまうオアシス再結成。リハーサルで大喧嘩が始まってすべてキャンセル、との報がいつ飛び込んできても不思議ではないが、兄弟それぞれがそれぞれの〝不在の時〟を思う存分謳歌してきているだけに、そんなことにはならないだろうとも思う。いずれにしても昨今、ロック・バンドのイヴェントがなかなか大きな話題になりにくいだけに、音楽メディアやネット界隈もどこか浮き浮きした気分であるのは否めなく、こうして大特集を組まれるのも嬉しい限りだ。

特集で選ばれた90年代のアルバム群を見ているだけで、華やかな時代がグルグルと脳内で回りだす。単に懐かしい、聴いていた瞬間の光景が浮かぶだけじゃなく、まだ、辛うじて音やバンドが文化や社会状況と密接に絡み合い、共に進捗しあっていた時代の空気感・熱気がもたらすものを感じるし、そこらは現在とは明らかに違っている。

マッドチェスターとシューゲイザー

その前の80年代は、ケーブル・テレビの台頭でアメリカでのテレビ環境が大きく変わり、MV（ミュージック・ヴィデオ）がヒットに及ぼす影響が拡大。そこから波及してオーディオ&ヴィジュアルの時代が促進された。そうした要素が追い風となり、秀逸なMVを制作するヒューマン・リーグやカルチャー・クラブ、デュラン・デュラン、ユーリズミックスといったブリティッシュ・グループが次々と大ヒットを飛ばして米チャートを席巻する。この動きは第2次ブリティッシュ・インヴェイジョンと呼ばれるほど（第1次はもちろんビートルズを始めとする60年代のグループによるもの）活況を呈し、音楽業界は潤った。

その背景にはパンク以降、一気に風通しがよくなり新しい才能に窓口を開くようになった流れがあるが、80年代後半の英国で台頭していたのがアシッド・ハウスやテクノといったクラブ・ミュージックだった。加えて、エクスタシーなどドラッグの蔓延があり、野外でのレイヴ・パーティも拡がっていった。そんななかで89年に登場したのがストーン・ローゼズ。彼らのファースト・アルバム『ストーン・ローゼズ』（89年）のリリース時には賛否両論が日本でも渦巻いたもので、初来日のライヴでは度肝を抜かれるほどの音痴ヴォーカルが爆発して呆れかえった記憶もあるが、それは、90年代ブリティッシュ・ミュージック界のスタートを告げる号砲でもあった。

ローゼズに続きハッピー・マンデーズ、

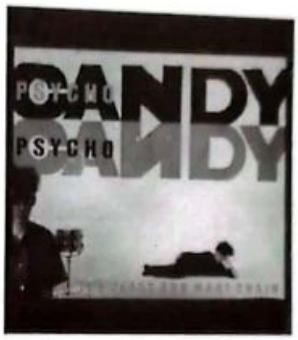
CamScannerでスキャン

ザ・シャーラタンズ、インスパイラル・カーペッツといった、いわゆる〝マッドチェスター〟と括られたグループが相次いでデビューし、かつてのインディ全盛期のような活況となっていく。彼らを輩出したマンチェスターは、ジョイ・ディヴィジョン～ニュー・オーダーで大成功を収めたインディ・レーベル、ファクトリー・レコードが経営するクラブ、ハシエンダがあって、若手バンドにライヴの場を提供したり、DJたちが最新のクラブ・ミュージックを鳴らすなど新しい動きの重要な拠点となり、ムーヴメントを押し上げていった。

さらに、シューゲイザーと括られるバンドたちも猛烈な勢いで登場してくる。80年代半ばに現われたジーザス&ザ・メリー・チェインは、シングル「アップサイド・ダウン」やデビュー・アルバム『サイコキャンディ』（85年）を発表。フィードバックや深いディストーションを塗り込めたサウンドの彼方にメロディアスなものを浮かべて人気を集めたし、それ以前にも、コクトー・ツインズやスペースメン3など、内省的な音展開を特徴としたグループも支持を得ていた。そうした流れをそれぞれのフィールドで進化させたバンドたちが新しい動きを作り出し、ライド、マイ・ブラッディ・ヴァレンタイン、スワーヴドライヴァー、スロウダイヴ、ペイル・セインツ、ラッシュといったバンドたちが、個性的で美しい音を聞かせるようになる。

フィードバックやノイジーな音をバンド全体で吐き出しつつ、目線は自らの靴先を見続ける姿から〝shoegaze〟（靴を見つめる人）と名づけられた一連の音。それらは、

The Stone Roses
"The Stone Roses"
Silvertone[UK] ORELP502 [1989]
(LP)



The Jesus & Mary Chain
"Psychocandy"
Blanco Y Negro[UK] BYN7 [1985]
(LP)

での、ヒット・チャートを主戦場とした活気への反動のように若い聴き手のなかに拡がっていった。

グランジを経たブリットポップの狂騒

その頃のイギリスといえば、80年代のサッチャー政権下での新自由主義施策と労働組合との激しい対立、ストライキの多発などで、失業率が大戦後最悪を記録する不況が続いていた。その被害をもっともストレイトに受ける若い世代がシューゲイザーの奏でるような音へと傾倒するのも自然であったと言えるし、今回のリストを見ても、そんな閉塞的な時代の空気が伝わってくる。

そんな流れが変化したのは90年。納税能力に関係なく国民すべてに一定額の税金を課すという〝人頭税〟の導入で激しく非難され、ついにサッチャーが退陣する。同じく保守党のジョン・メイジャーを経て次に首相となったのが、44歳と若かった労働党のトニー・ブレアで、彼が積極的に後押ししたのが〝クール・ブリタニア〟であった。

〝クール・ブリタニア〟は、よく知られる愛国歌の「ルール・ブリタニア（Rule Britannia）」をもじったものだが、自分が

CamScannerでスキャン

たのが、わが愛するボンゾ・ドッグ・ドゥー・ダー・バンドだった。ヴィヴィアン・スタンシャル、ニール・イネスなどによる、モンティ・パイソンのセンスを音化したような、イギリスにしか生まれ得ないバンド。その名盤『Gorilla』(67年)のオープニングを飾るのがまさに『God Britannia』で、ファンキーなサウンドをバックに〝クール・ブリタニア/旅(トリップ)に出よう〟と高らかに、どこか人をおちょくった歌が繰り広げられる。当然、〝クール・ブリタニア〟の命名者もこれを知っていただろうが、停滞する経済の影響をストレイトに受けていた世代にとって、60年代に、音楽やファッションをはじめ世界中のポップカルチャーに多大な影響を与えた〝スウィンギン・ロンドン〟を思い出させる動きが、各所でカンフル剤となったことは間違いない。

イギリスならではのカルチャー、音楽、ファッション、アートなどに改めて目を向けようとする動きを音楽で具現化した〝ブリットポップ〟が、90年代UKロックを席巻したのであった。

この動きに至る外的な要因がもう一つある。それはアメリカのシーンの変化だ。具体的には91年、ニルヴァーナの『スメルズ・ライク・ティーン・スピリット』や『ネヴァーマインド』の世界的ヒットを橋頭堡としてグランジが爆発的に流行し、パール・ジャムやサウンドガーデン、マッドハニーといったシアトル周辺のグループがメジャー・シーンに大きく取り上げられるようになる。これは決して偶然や突発的な動きではなく、ソニック・ユースやフガジ、ブラック・フラッグ、バッド・レリジョンなど、80年代から地道にインディペンデントな活動をしてきた人たちや、タッチ&ゴー、SST、マタドールといったインディ・レーベル、さらにそこらの動きをサポートもしていたCMJ(College Media Journal)など、多様な局面が重なりあってこそ作り上げられたものだった。

また、見のがしてならないのは、そうしたアメリカのアンダーグラウンドの動きに最初に大きく反応したのは、イギリスの人々だったという点だ。ピクシーズのデビューはイギリスの4ADからだったし、ソニック・ユースやダイナソーJr、ニルヴァーナなどが、まず人気と知名度を獲得したのはイギリスである。そうしたなかで蓄えられたエネルギーがアメリカで爆発したのがグランジであり、そのおかげで、かつてイギリスでポストパンク期に起こったようなインディ系のアイデアと才能に溢れたさまざまなタイプのバンドやアーティストたちが、一気に注目されるようになった。

そうしたグランジの爆発は、ベースとなる社会環境や状況がまったく違うイギリスの聴き手にとって、共有できる部分ももちろんあるにしても距離を感じる点も当然多かった。そうしたものと、改めてイギリス的なるものに向かう視点が自然に融合してでてきたのが〝ブリットポップ〟とされた一連の音群だった。代表的なバンドの一つ、ブラーの前身が、J・D・サリンジャーの小説『大工よ、屋根の梁を高く上げよ/シーモア・序章・』から取られた〝シーモア〟というのは、アメリカン・カルチャーへの憧憬を示したものだろう。また、グランジ期のアメリカでさんざんきついツアーをし

Nirvana
"Nevermind"
Sub Pop/DGC[US] DGCD24425
[1991](CD)

CamScannerでスキャン

オアシス

た経験が、逆にイギリス的なものやポップへのこだわりを作り上げたとも言え、そうしたイギリス的なこだわりを軸とした金字塔が『パークライフ』（94年）であった。モッズ映画『さらば青春の光』（79年）の主役、フィル・ダニエルズを迎えたタイトル・トラックや、シングル・ヒットした「ガールズ&ボーイズ」などにより人気を集め、年度の各音楽賞を軒並み獲得。〝ブリットポップ〟という看板が高々と掲げられたのだった。

もう一本の柱となったのが、94年にデビューしたオアシスだ。ザ・シャーラタンズとの深い交流を持つノエル・ギャラガーが弟、リアムと始動させたグループは、それこそブリティッシュが誇るザ・ビートルズの遺伝子を隠すことないどころか、積極的にアピール。自分たちの世代感覚のなかに落とし込んだことで、共感の輪を広げた。セカンド・アルバム『モーニング・グローリー』（95年）の全米4位という成功は、同時代バンドのなかでは際立っていた。まさしく〝クール・ブリタニア〟を、何よりもわかりやすい商業的な成功という形で示したのだった。

もちろん、オアシスの二人にそんな意図や狙いはなかったろうが、時代と共振するというのはこういうことだ。ブラーの「カントリー・ハウス」とオアシスの「ロール・ウィズ・イット」という2枚のシングルが95年8月14日の同日リリースとなったことからメディアは喜んで〝ブリットポップの対決〟を煽り立て、どっちが勝っただのカウントが間違ってたなどと盛り上がったりしたのも懐かしいエピソードだ。

Blur
'Blur's Country House'
Food/Parlophone CDFOOD63
[1995] (CD single)

境界を越えて拡張する時代のはじまり

翌96年には、ダニー・ボイル監督の映画『トレインスポッティング』が公開。ヘロイン中毒の若者たち、そこからの更生、仲間との再会や死といった重いテーマを、音楽を重要なキーとして使って描き出した作

クリームによる8分にもおよぶ同名曲を始め、ニュー・オーダーやパルプ、エラスティカといった同時代のバンドや、それらの音楽性に大きな影響を与えたイギー・ポップ、ルー・リードなど先祖たちの音も交えてテンポよく展開する映画は、今でもカルト的人気を持つ特別な一本だ。なかでもインパクトを与えたのが、アンダーワールドの「ボーン・スリッピー」。クラブ・ミュージック直送のトランス感覚に溢れた音はまさにこの時代を反映したものであり、主人公たちや観客の感覚にもっとも強く響いていた。

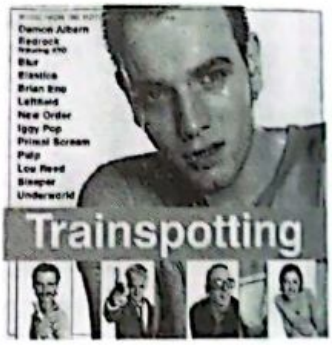
ヒップホップの影響をブリティッシュ流に拡張した、トリップ・ホップと括られる動きが続出するのもこの頃で、マッシヴ・アタック、ポーティスヘッドなどが活躍。その他、ケミカル・ブラザーズ、ファットボーイ・スリムなどもシーンを賑わした。こうした人だけじゃなく、ハウス、テクノなどクラブ・ミュージックの影響を受けたヒットが席巻するのも90年代の特徴であり、レディオヘッドのように、こうした要素を巧みに自分たちのなかに取り入れ、柔軟に変化して自らの世界を広げるグループも現われてくるようになった。

一方で、80年代をリードしたインディ系のヴェテランも着実に実績を積み上げていく。ティーンエイジ・ファンクラブやニュー・オーダー、モリッシー、ワイアー、ザ・ザなど、音楽性へのぶれないこだわりもUKならではのシーンを堅牢にしていった。

政界や広告業界がこぞって後押しした〝クール・ブリタニア〟というフレーズは、90年代終わりにはあまり聞かれなくはなるものの、そこで示された〝クリエイティヴ産業を軸に若い才能が能力を発揮するエネルギッシュな社会を〟という目標が一定の効果を上げたことは事実だ。こと音楽シーンでいえば、より幅広い音楽性が展開していく流れを強固なものとした。

あらゆる音楽性がボーダレス、ジャンルレスに拡張し続ける現在からすると、90年代UKはまだまだわかりやすい動き・シーンではある。だが同時に、その原点となるような表情や断面が見えているのが、なんとも不思議な魅力を今でも醸し出している。

レディオヘッド



v.a.
"Trainspotting (Music From The Motion Picture)"
EMI[UK] CDEMC3739 [1996] (CD)

CamScannerでスキャン

個性的なバンドたちが追求した音響空間の変革

陰影深いギター・サウンドからダンス・グルーヴまでを生んだ90年代

文＝武田昭彦

本稿では特集で選ばれた名作を俯瞰しつつ、プロデューサーやエンジニアの音の傾向やキャリアにも触れながら、90年代の英国ロックのサウンド形成をアーティスト主体で振り返りたい。米国発のグランジ・ロックが一世を風靡するなか、英国の先鋭バンドたちが音に変革をもたらすムーヴメントが後年、ブリットポップと呼ばれるようになった。ここではブリットポップのみならず、多様なアーティストの出現により驚くほど個性的な音楽ムーヴメントが巻き起こった90年代を駆け足で大局的に見ていく。

英国特有のざらつき感や陰影感

ブリティッシュ・レーベルから発表されたライドのデビュー作〝Nowhere〟（90年）は、マーク・ウォーターマンが録音した素材をアラン・モウルダーがミックスしたシューゲイザーの代表作。アランは80年代後半、ジーザス&メリー・チェイン〝Automatic〟のミキシングで頭角を現わし、轟音ギターを打ち出したバンド・サウンドを確立している。アランはマイ・ブラッディ・ヴァレンタイン〝Loveless〟（91年）で、ギタリストのケヴィン・シールズと複数のエンジニアたちとギターの歪みを極限まで捉えた。ジーザス&メリー・チェイン〝Honey's Dead〟（92年）は前作で採り入れていたノイジーな音とダンス・ビートをより進化させ、革新的サウンドを構築することに成功する。また、シューゲイザーの動向に少なからず影響を与えたバンドに82年、4ADからデビューしたコクトー・ツインズがいる。深いエコーのかけられた音楽はデビュー当初から一貫しており、〝Heaven Or Las Vegas〟（90年）は夢を見ているような音づくりが特徴といえる。音楽スタイルこそゴシック・パンク／ドリーム・ポップと表現されることも多いが、4ADを代表するコクトー・ツインズの活動がなければ、90年代の英国ロックはまるで違うものになっていたと思われる。

英国ブリストルで結成され、90年にメジャー・デビューを飾ったマッシヴ・アタックは、レゲエやダブを導入した音響空間を生み出しトリップ・ポップと呼ばれるジャンルを創出した。彼らの〝Blue Lines〟（91年）はヒップホップやダブの要素を活かし、クールな面持ちの音楽で新しいエレクトロニック・ミュージックの扉を開いた。本作のミックスおよびプロデュースはジョニー・ダラーが手掛けており、彼はピーター・ゲイブリエル〝Us〟（96年）では2曲のストリングス・アレンジも担当している。

80年代からアイランド・レーベル傘下のスタジオで働き始め、多くのレゲエ・バンド

CamScannerでスキャン

ブラー

に加え、ザ・スミスのエンジニアを務めていたのがスティーヴン・ストリートだ。彼は80年代中盤にはスミスのプロデューサーに昇格し、90年代以降はブラーやクランベリーズの活動をプロデューサーとして裏方でしっかりと支えてきた。本誌先月号の書評でも紹介された『アイランダー クリス・ブラックウェル自伝』（アルテスパブリッシング刊）でもスティーヴンに触れた記述があり、彼がどうしてレゲエのレコード制作にあたっていたのか等々、その背景が分かる。本書はアイランド・レーベルに限らず、情報満載の充実した内容なので、本誌読者ならぜひとも押さえておきたい一冊だ。

スティーヴンは今回選出されたブラー“Parklife”（94年）、クランベリーズ“Everybody Else Is Doing It, So Why Can't We?”（93年）でも手腕を発揮。各々のバンドの個性を引き出しながら、ミキサーたちと各種エフェクトを効果的に活かすことでアルバム固有のリズム、音響を生み出すことに注力している。英国特有のざらつき感や陰影感を保有した音づくりは、新世代のロック・サウンドとして英国チャートを席巻することになる。彼自身がエンジニアやプロデュースを手掛けてきたアルバムについて言及した動画が以前から数多く公開されており、ブラー、スミス、モリッシーらのアルバムの制作背景が垣間見られるのでファンなら必見だ。スティーヴン・ストリートがプロデュースを担ったブラー“Parklife”（94年）は、後述するブリットポップの中核を担うアルバムとして脚光を浴びることになる。ちなみにスコットランドを舞台に描かれた96年の映画『トレインスポッティング』（ダニー・ボイル監督）は、プライマル・スクリーム、パルプ、エラスティカらの音楽も含め、90年代の若者ドラッグ・カルチャーを象徴する作品として忘れられない。

ファクトリー・レコーズが運営するマンチェスターのクラブ“ハシエンダ”で80年代後半から渦巻いていたのが、マッドチェスターと呼ばれる動向で、ストーン・ローゼズ、ハッピー・マンデイズらが注目を浴びていた。レーベル自体は92年には消滅したものの、90年代の英国シーンに爪痕を残したことは疑いようがない。ストーン・ローゼズ“Second Coming”（94年）、ハッピー・マンデイズ“Pills 'N' Thrills And Bellyaches”（90年）に耳を傾けると、マッドチェスターの動向に影響を受けつつ、より進化した音楽性と音づくりが追体験できる。前者はギター・リフを前面に打ち出しつつ、大胆なリズムと融合させ、フォーク・ロック的要素を取り入れるなど、一筋縄ではいかない音楽性を内包する。いっぽう、後者はファクトリー・レコーズらしさを継承しながらも、レイド・バックした音に特徴があ

CamScannerでスキャン

う、身体が自然と揺さぶられる。本作のプロデューサーを務めたスティーヴ・オズボーンとボール・オークンフォルドのコンビは、ヒット・メイカーでリミキサーとしても活躍し、U2からも絶大なる信頼を寄せられているのはご存知だと思う。なお、マッドチェスターの雰囲気を探るには02年の映画『24アワー・パーティ・ピープル』（マイケル・ウィンターボトム監督）を見るのが近道かも。ハッピー・マンデイズ、ジョイ・ディヴィジョン、ドゥルッティ・コラム、808ステイトらの音楽を収めたサントラも併せ当時の空気感が享受できる。

マッドチェスターの影響を受けたバンドには、グラスゴー出身のプライマル・スクリームもいる。今回選出された彼らの"Screamadelica"（91年）はインディ／ダンス・ムーヴメントの中核を担うべく、ギター・サウンドとアシッド・テクノの世界を極めている。複数のプロデューサーを起用することで、幅広い音楽性を構築しているのが何より聞き逃せない。

ギターとヴォーカルの過剰なエフェクト

グランジ・ロックが全盛の最中、新たな方向性を見出したのがロンドンで結成されたスウェードで、デビュー作"Suede"（93年）はプロデューサーのエド・ビューラーの才能が開花したアルバムとして忘れがたい。グラム・ロックの艶雑さとギター・サウンドを独特の陰影感のある音色でまとめ上げたこのアルバムは後年、ブリットポップの先駆けとして認知されることになる。また、スウェードと共にブリットポップの先駆者となったのがブラーにほかならず、先にも述べたブラー"Parklife"（94年）はいわずと知れた重要作である。いずれにしてもスティーヴンの仕事ぶりを辿ると80年代のスミスから始まり、クランベリーズ"Everybody Else Is Doing It, So Why Can't We?"（93年）、"No Need To Argue"（94年）へと連なり、さらにブリットポップを代表するブラーへとつながる流れは、英国ロックの一幕を見るようで感慨深い。

いっぽう、ブリットポップの動向を英国内のみならず、米国マーケットにまで広げたのがオアシスだ。今回選ばれた彼らの"Definitely Maybe"（94年）に始まり、2作目の"(What's The Story) Morning Grory?"（95年）はギターとヴォーカルに過剰なまでのエフェクト処理を施すことで独自の音楽スタイルを築き上げ、後者は全米でも4位を記録した。オアシスは昨24年に再結成されたことが話題となっており、今年10月には来日公演が控えている。当時から彼らを支持してきたファンにとって、これほど歓迎すべきコンサートはなかろう。

ブリットポップの第2世代には、95年にデビューを果たしたクーラ・シェイカーがいる。東洋神秘主義を掲げていた彼らの『K』（96年）はそれまでのブリットポップとは一線を画した音楽性が支持され、一気にブレイク。"Temple Of Everlasting Light" "Govinda"などに立ち込める独自のインド・テイストはいまの耳で聞いても新鮮に響いてくる。ここ日本でも異例のセールスを記録。また、音楽的にはブリットポップとはやや離れているものの、当時の空気を吸収したポップ・バンドにティーンエイジ・ファンクラブがいる。米国出身のプロデューサー、ドン・フレミングらの手掛けた"Bandwagonesque"（91年）はニール・ヤングの音楽を現代流に蘇らせたような音づくりが熱狂的に支持された。

クラウトロックの影響を受けたステレオラブの"Emperor Tomato Ketchup"（96年）は、ロンドンとシカゴで録音された素材をトータスのジョン・マッケンタイアが

ミックス。無機質なトラックに冷めたヴォーカルが絡み付く音楽は従来よりシンプルな印象で、曲の構造そのものがあっさりと伝わってきて異彩を放っている。

90年代における英国ロックを振り返る際、最重要バンドともいうべき存在がレディオヘッド。彼らの"Pablo Honey"(93年)、ジョン・レッキーのプロデュースによる"The Bends"(95年)、そしてナイジェル・ゴッドリッチと組んだ"OK Computer"(97年)の3作は作品ごとにアプローチが異なる。"The Bends"のレコーディング時に知り合ったナイジェルとバンドの関係性には興味が尽きず、"OK Computer"で実践された楽器の音素材をとことん加工した音づくりは音響的にも特筆される。繊細かつ神経質な作風は耳を澄ますほど、未知なる音の世界が広がっているのが確認できる。

93年からソロ活動を始めたアイスランド出身のビョークも独自のスタイルでアルバムごとに先鋭的な音づくりを提示してきたアーティストにほかならない。彼女の"Homogenic"(97年)は生楽器とエレクトロニック・ビートを組み合わせ、想像力をどこまでも刺激してくれるアルバムである。

ビョーク

90年代の音楽シーンはアナログとデジタル録音が混在していたとはいえ、マイクの配置を筆頭に、マイク・アンプ、コンソールなどの選定はアナログ録音時代と何ら変わっておらず、エンジニアがアーティストの演奏する楽器や歌を如何に捉え、記録すべきか常に吟味していた。デジタル録音した複数のトラックをステレオにまとめるトラック・ダウンの際、あえてアナログ・テープに記録することで音の厚みや滲みを出す場合も少なくなかった。90年代はCDマスタリングがほぼ確立されたいっぽう、LPカッティングの分野は熟成期に突入した時代でもある。その背景もあり、この時期のLPの音は驚異的に抜きん出ている。本稿で紹介したマッドチェスター、ブリットポップの名作に耳を傾けた後、米国を拠点に活動するステイーヴ・アルビニがプロデュースしたPJ・ハーヴェイの"Rid Of Me"(93年)を聞くと、音の肌合いの違いに気付かされる。彼女の音楽は楽器の生音を優先し、総じて乾いた音に感じるが、それに対してマッドチェスター、ブリットポップのアルバムは粘り気があり、華やかな響きを湛えている。両者の音の差異は90年代に限った話ではないものの、完成度の高いLPで作品に接すると、一聴しただけでその違いが確認できる。その上で90年代の英国ロックに真正面から向き合うことで得られる、感受性豊かなアーティストの発露や当時の空気感を身近に感じられる瞬間は堪らなく魅力的だ。

CamScannerでスキャン

〝クール・ブリタニア〟がもたらしたもの

90年代UKロックと政治・社会

文＝長澤唯史

〝クール・ブリタニア（Cool Britannia）〟と聞いて、ボンゾ・ドッグ（ドゥー・ダー）バンドを思い浮かべる本誌の読者は多いだろう。1stアルバム『ゴリラ』（67年）の冒頭に収められたこの曲は、18世紀の愛国歌「ルール・ブリタニア！（統べよ、ブリタニア）」（1745年）のパロディ。"Britons never never never shall be slaves"（ブリトンの民は、断じて断じて断じて奴隷とはならじ）をもじって"Britains ever ever ever shall be hip"（英国人よ、ずっとずっとずっとイカれてろよ）と歌うのは、原曲の国粋主義に対する強烈な皮肉だ。だが残念ながらこの曲は、本稿でとりあげる〝クール・ブリタニア〟とは何の関わりもない。

90年代中盤、音楽やアート、ファッションなどさまざまな分野で若い才能が一斉に開花した。こうした現象を当時のメディアが〝クール・ブリタニア〟と呼んだのだ。これは米雑誌『ニューズウィーク』96年11月の〝ロンドン最高／ロンドン式（London Rules）〟という特集をきっかけに広がった表現とされるが、もともとは大手アイスクリーム店のベン&ジェリーズが同年4月から発売していたフレーヴァー名だ。

"Newsweek (November 4, 1996)"
"London Rules"を特集した『ニューズウィーク』96年11月4日号

一方、97年に誕生した労働党政権はクリエイティヴ産業の育成政策を打ち出すが、この政策にUKロック／ブリットポップがきわめて重要な役割をはたす。本稿では当時の英国の政治や社会でなかでUKロックのはたした役割をふり返ってみたい。

ブラーVs.オアシスの社会的背景とは

1995年夏、『NME』8月12日号が大きな社会的反響を巻き起こした。あの〝イギリス・ヘヴィ級選手権、ブラー対オアシス、8月14日、ヒット・チャート上の最終決戦〟という表紙が書店の店頭を飾ったのだ。両グループの新曲（ブラー「カントリー・ハウス」とオアシス「ロール・ウィズ・イット」）の同日発売はBBCのニュースも採りあげたほどで、音楽を超えた社会的事件となる。

この同日発売はそもそもブラー側が広告戦略の一環として、当初の発売予定日を変更してぶつけてきたものだ。当時、『パークライフ』（94年）でブリットポップの頂点に立つブラーにたいして、オアシスがデ

ビュー直後から挑発的な発言を繰り返していた。この状況での同日発売は、メディアに格好のネタを提供した。当人たちも〝スノッブなロンドンのやつら〟（ブラーのこと）や〝無教養〟〝北部のださい田舎者〟（オアシスのこと）とお互いを罵りあうなど、ゴシップには事欠かない。このいささか呆れるような諍いは、同年9月の『オブザーヴァー』紙上でのノエル・ギャラガーの〝デーモン（アルバーン）とアレックス（ジェイムズ）にはエイズにかかって死んでもらいたい〟というきわめつけの問題発言が契機となり、急速に鎮静化していったのは周知のとおりだ。

それにしてもなぜ、この確執がそこまで衆目を集めたのだろうか。上記の発言でもわかるように、オアシスは英国北部の工業都市、マンチェスターの労働者階級。一方のブラーは、ロンドンの中産階級出身だ。

"New Musical Express (August 12, 1995)"
"ブラー対オアシス"が表紙を飾った『NME』95年8月12日号

当時のメディアでもこの点に焦点をあて、この両者の対立をたんなる音楽上のライヴァル関係以上のものに仕立て上げようとしていたふしがある。その背景にあったのが、80年代以降の保守党政権下の階級間・地域間の格差拡大と対立だった。

79年に首相に就任したマーガレット・サッチャーは、他の先進国に先駆けて新自由主義的政策を打ち出す。国営企業の民営化と競争原理の導入、労働組合の解体、高額所得者の減税、福祉の削減・切り捨てなどだ。その結果、英国は製造業から金融を中心とするサーヴィス業へと国家経済の軸足を移し、60年代以降の長期の不況から脱出するきっかけをつかむ。だがその一方で、製造業の衰退により地方都市は疲弊し、若者を中心に大量の失業者も生まれた。さらに、こうした状況に不満を抱える白人の間では、白人至上主義を唱える極右政党、イギリス国民戦線への支持も拡大する。

90年に就任したジョン・メイジャー首相は前政権から基本路線は引き継ぎつつ、多少の軌道修正をはかる。だが、それでも地方や若者の不満は解消せず、97年の総選挙における労働党の歴史的大勝利とトニー・ブレア政権の誕生につながるのである。

Blur
"Leisure"
Food/Parlophone [UK] FOODCD6 [1991] (CD)

ブラーのデーモン・アルバーン、グレアム・コクソン、アレックス・ジェイムズの3人はロンドン大学ゴールドスミス校の出身。まさに〝スノッブなロンドンのやつら〟だった。この1891年に創設されたカレッジは、最近ではジェイムズ・ブレイクを輩出したことでも知られ、美術や音楽からメディア、カルチュラル・スタディーズにいたる幅広い研究分野で英国最先端の教育機関として有名だ。そして、ブラーの3人と同時期に在籍していたのが、現代英国美術を代表するアーティスト、ダミアン・ハースト。彼を中心としたゴールドスミスの学生たち（のちにヤング・ブリティッシュ・アーティスト＝YBAsとして有名となる）が伝説的な〝フリーズ〟展を開催した88年、デーモンたちもブラーの前身となる〝サーカス〟を結成している。このように、

CamScannerでスキャン

サッチャー政権からアンダーグラウンドで活動していたアーティストたちが、90年代にかけてにわかに注目を浴び商業的成功をおさめていく。それが〝クール・ブリタニア〟だった。

トニー・ブレアによる新しい文化政策

一方、1994年に41歳の若さで党首に就任したトニー・ブレアは〝ニュー・レイバー（新しい労働党）〟をスローガンに、市場原理主義を取りこんだ新たな政策で英国経済の復活をもくろんだ。先述のクリエイティヴ産業の育成もそのひとつで、これが若い世代のアーティストの躍進と符合した。

このプロジェクトは、英国の新たなアイデンティティを文化によって世界に発信しようというものだった。広告・建築・美術・映像・音楽・舞台などの従来の芸術分野に、ソフトウェアやゲーム、ファッションなども加えた13の創造的産業を対象とし、人材育成や技術革新、海外進出、知的財産権の保護などへのサポートを行なった。

さらにこれは、地方の若者の失業者の就業支援、自立対策でもあった。このプロジェクトのひとつに〝ミュージシャンのためのニュー・ディール〟がある。やや幾の07年の数字だが、英国全土で何らかの音楽活動をしているミュージシャンは500万人にのぼる。そのうち25万人がバンド活動を行なっており、毎晩4500件以上のライヴ演奏が行われていた。もちろん、そのなかには失業中の若者も多数いる。そうした若者を対象に、音楽業界でキャリアを形成していくために必要な教育やトレーニング、情報提供などを行なうのだ。このような福祉と就業をセットにする〝ワークフェア〟はサッチャーやアメリカのレーガン政権でも行なわれていたが、文化産業まで支援対象を広げているところが目新しかった。

ブレアの経済政策はあらたな時代のグローバル市場における競争力の強化をめざしていた。〝文化産業をイメージ・リーダーとして英国そのもののブランド力を強化する〟という発想も斬新だったし、さらに、上記のような支援策を英国の全地域で実施すれば、若者の失業対策と同時に地方の活性化ともなる。こうしてブレア政権下で英国経済はふたたび活況をとり戻した。

また、オックスフォード大学在学中にハード・ロック・バンドのヴォーカリストとしても活動していたブレアは、ポップカルチャーの力をよく理解していた。労働党党首となった翌年には、デーモン・アルバーンを国会議事堂に招待して会見。96年のブリット・アワーズ授賞式ではデイヴィッド・ボウイを称えるスピーチを行なう。そして、97年の首相就任後には、ポップカルチャーのアイコンたちを首相官邸に招いてパーティを開催した。この席上で撮影されたノエル・ギャラガーとのツー・ショットが翌日の各紙紙面を飾り、ここにUKロック／ブリットポップと〝クール・ブリタニア〟の連携が結実した。

94年のブレアの党首就任から97年の首相就任までの3年間は、〝ブリットポップ〟誕生から終焉までの時期でもある。川端康雄氏によれば、この言葉が初めて使われたのは『フェイス』誌94年5月号のブラーに関する記事だ（『愛と戦いのイギリス文化史 1951-2010年』）。オアシスが

『愛と戦いのイギリス文化史 1951-2010年』
川端康雄ほか編 慶應義塾大学出版 2011年

デビューし、カート・コバーンが27歳で命を絶ったこの年、グランジに代わりブリットポップが世界の音楽市場を席巻した。そして97年、新作「プラー」発売と同時にデーモンが〝ブリットポップは死んだ〟と発言、オアシスの新譜『ビィ・ヒア・ナウ』の失速とともにブームは終わる。だが、このわずかな期間に残したものはきわめて大きかった。

川端氏は〝クール・ブリタニア〟の重要な現象として、英国旗の位置づけの変化をあげる。モリッシーのコンサートでの掲揚（92年）、オアシス（ノエル）の英国旗をあしらったギター（96年）、スパイス・ガールズのジンジャー（ジェリ・ハリウェル）の英国旗ドレス（97年）など、数多くのミュージシャンが英国旗をさまざまな意匠で利用した。ここから英国旗がクールでポップな記号となり、英国の〝ブランド化〟の象徴として機能する。その結果、06年の英国のクリエイティヴ産業（先述の13分野）の粗付加価値（GVA＝gross value added）は573億ポンドにのぼり、英国産業全体の6・4パーセントを占めた。これは先進国でも突出した数字だそうだ（太下義之「英国の『クリエイティブ産業』政策に関する研究」）。

Oasis
"Be Here Now"
Creation [UK] CRECD219 [1997]
(CD)

このように、英国の過去の遺産を含む総合的な〝ブランド〟としての価値づけをするのが〝クール・ブリタニア〟だったとすれば、それは音楽分野でもっとも成功した。オアシスは引用などのかたちで過去の音楽遺産（ビートルズなど）を積極的に再利用し、ブラーも2枚目のアルバム『モダン・ライフ・イズ・ラビッシュ』で、60年代以降のUKロックの伝統を前面に打ち出した。こうした過去の音楽的・文化的遺産の継承の集大成が、12年のロンドン・オリンピック開会式・閉会式だったことはいうまでもない。こうして英国は〝コンテンツ大国〟としての地位をゆるぎないものとする。

だが、三たび川端氏の言葉を引用すれば、ブレア政権が英国にもたらしたのは、じつは〝ビッグ・ブラザー社会〟だった。この時代の英国では国家による国民の監視と、管理の強化が進展した。国家による文化産業支援とは、裏返せば国家や資本による統制にもつながる。YBAsを代表とするクール・ブリタニアのアーティストたちも商業的成功を否定せず、コンテンツのビジネス化にも抵抗しなかった。

Gorillaz
"Cracker Island"
Parlophone [UK] 5054197213212
[2023] (CD)
サンダーキャット、バッド・バニーなどをゲストに迎えたゴリラズの最新作

だが、かれらは資本や企業による管理の枠内で、観る人に生理的嫌悪感を与えるような〝おぞましい〟作品群を発表しつづけた。この挑発的な戦略が、90年代以降の〝ビッグ・ブラザー社会〟への抵抗のあり方だ。筆者が個人的に愛するマイ・ブラッディ・ヴァレンタインも、快楽とはほど遠い〝ラヴレス〟な音でリスナーを挑発しつづけ、デーモンのゴリラズは、既存の音楽ビジネスに収まらない世界を創出している。90年代UKロックはいまだに現在進行形だ。

CamScannerでスキャン

"普通の人たち"がポップに輝いた時代

洋楽ディレクターが見たムーヴメントの実像

文＝石川真男

筆者は、1989年から1998年にかけてBMGビクターというレコード会社に勤務していた。最初は営業部販促課に配属されたが、すぐに洋楽制作部へと異動になり、いわゆる〝担当ディレクター〟の任務に就くこととなった。その主たる業務は、ライセンス契約している海外レーベルの作品を日本でリリースするか否かを決め、そのマーケティングを行なうというものだ。

筆者が入社した当時のBMGは、ホイットニー・ヒューストン、ダリル・ホール&ジョン・オーツ、リック・アストリーといったメジャー・アーティストを中心に展開しており、ロック系、とりわけインディ系にはあまり力を入れていなかった。筆者も当初はモータウンを担当し、スティーヴィー・ワンダーの来日時の取材を取り仕切るなど貴重な経験をさせていただいたが、その一方、かねてから英国ロックに心酔しており、そうしたアーティストも手掛けたいという願望を心に秘めていた。そんな89年、徐々に潮目が変わっていくのを感じた。いや、社内は相変わらずだったが〝現場〟の空気に変化が感じられたのだ。とりわけ、89年10月にザ・ストーン・ローゼズが初来日公演を行なった時、UKロックの潮流が勢いを増すのを感じた。

チャプターハウスとの思い出

一方、BMGでは、筆者が洋楽制作部に異動する前からプリミティヴズ、ザ・ウェディング・プレゼント、ポップ・ウィル・イート・イットセルフといったUKロック勢はリリースされていたが（後に筆者がそれらを引き継いだ）、それらに〝力を入れていく〟といった機運は決して芽生えていなかった。なんとかテコ入れできないものかと思案していたのだが、ちょうどその頃、BMG UK傘下に設立されたのがデディケイテッド・レコーズだった。スペースメン3、ディス・ピクチャー、クレーンズといったバンドを日本でリリースしたが、その独特の美意識を纏ったサウンドは決して万人受けするようなものではなく、取り立てて成果は上げられなかった。そんななか、音楽専門誌などからいくらか手応えのあったのがチャプターハウスだった。

インディ系バンドをプロモーションする際、最初から闇雲にアプローチ範囲を広げるよりも、まずは音楽専門誌に手厚く取り上げてもらうことが重要だった。まずは最も推してくれそうな一誌を選んで先行露出のアドヴァンテージを与え、ライヴ・レポートなどを英国在住ジャーナリストに書いてもらう。次は現地で本格的なインタヴュー取材をお願いし、アルバムに合わせて記

CamScannerでスキャン

事露出。予算が取れるようであればプロモーション来日させることもあった。そして、その時期には来日公演も決めておき、プロモーション来日時の取材記事が掲載される時には、それを来日公演の前煽りとしても機能させる、という段取りだった。さらにはコンサート来日時にも取材を入れ、公演後にもできる限り露出を継続させようと尽力した。

だがチャプターハウスの場合、社内にはいまだUKロックに懐疑的な向きもあり、基本的なプロモーションをやるのが精一杯だった。91年6月に日本でアルバム『ワールプール』をリリース。前評判はなかなか良かったのだが、セールスは期待したほどではなかった。だが、同年12月の来日公演が決まると、渋谷クラブクアトロ3公演が即完売。これには驚いた。なにしろ、アルバムを買った人全員がライヴに押し寄せるかのような売れ行きだったのだ。担当としての認識の甘さを恥じつつも、これによりUKロックに対する社内の認識が少しずつ変わっていくのも実感した。

12月の来日公演時には、三日間ほどプロモーション日を設け、みっちり取材を受けてもらった。三日間行動を共にし、東名阪の公演にも同行。約十日間という時間を過ごして感じたのは、ステージ上ではこの世のものとは思えない夢想的な世界を紡ぎ出しているにもかかわらず、普段は本当に普通の若者たちだったということだ。メンバーはみな寡黙で繊細そうな感じだったが、とはいえ近寄りがたさはなく、むしろフレンドリーだった。とりわけ印象的だったのは、彼らが普段着のままステージに上がっていたことだ。それまでは〝いかにも衣裳〟といった装いでステージに立つR&B系のアーティストを数多く担当していたゆえに、地味なセーターやトレーナーで客前に出る彼らに少々驚いた。ともかく、言動やいでたちで何らかのイメージを創り上げようとすることはなく、しかしながら、ステージに上がるとひたすら音楽に集中することで、別世界を築き上げていたのだ。

同世代でもあった彼らとはとても仲良くなった。最終公演となった渋谷クアトロ三日目の最終日には〝僕らと一緒にステージ・ダイヴをしてくれ〟とムチャブリされた。最後の曲は、ひたすらノイズを鳴らしまくる、かの"Die Die Die"。そこで筆者はマネージャーに促されてステージに上がり、メンバーからギターを手渡され、思い切りノイズを鳴らし、バンドと客席に飛びこんだ。その後、舞台監督にめちゃくちゃ怒られたのはホロ苦い思い出である。

Pop Will Eat Itself
"Cure For Sanity"
RCA[UK] RCA2485-2R [1990] (CD)

This Picture
"A Violent Impression"
Dedicated/BMG[UK] ZD75088 [1991] (CD)

日本人気の高かったホワイトアウト

筆者は92〜93年にかけてBMGニューヨークに赴任したのだが、帰国後には、日本でかなりのヒットを記録したジェレミー・ジョーダンやビッグ・マウンテン、大きな話題となったマシュー・スウィートやレニ

CamScannerでスキャン

シグラード・カウボーイズといった様々なアーティストを担当していた。一方でUKロックにも目を光らせ、虎視眈々と〝その機会〟を窺っていた。その頃、BMG傘下に入ってきたレーベルが、ザ・ストーン・ローゼズで名を上げたシルヴァートーンだ。そして、送られてきた資料のなかにキラリと光るものがあった。ホワイトアウト「ノー・タイム」のMVだった。ノスタルジックなロックを初々しいグルーヴで奏でるこの4人組に、トレンドやマーケティングといった言葉とは無縁の屈託のない憧憬を感じ、とても魅力的に思えた。

そこからはあらゆる手を尽くした。まずはロンドン在住のジャーナリストにライヴを観てもらったのだが、それが94年3月24日、ロンドン、100クラブでのオアシスとのギグだった。この時期、ホワイトアウトはオアシスとダブル・ヘッドライナーでツアーを行なっており、この日はたしかホワイトアウトの方が後だったと記憶している。少なくともこの時点では互角だったのだ。だがその後、とてつもなく大きな差がついてしまったことは周知のとおり…。

しかしながら日本では大健闘した。まず日本映画のミニ・アルバム『ノー・タイム』を94年11月にリリース。そしてフル・アルバム『バイト・イット』を本国より4か月早い95年2月にリリースした。その間にも、ミニ・アルバム向けには現地ジャーナリストによるインタヴューを実施し、アルバム向けにはグラスゴーまで取材に赴いた。また、6月の来日公演も早くから決まっており、来日に向けて音楽誌で毎月何らかの記事が出るよう戦略を立てた。そのおかげもあってか、「ノー・タイム」「デトロイト」といった曲が全国各地のFMラジオで回り始めた。その他にも、地方のラジオ局へ筆者自らプロモーション行脚に出掛けたり、一般誌やTVなどにもアプローチし、深夜枠ながらTVスポットを打ったりもした。セールス的にも、ロックものとしてはかなりのヒット作となった。

極東の島国でのそんな状況を察知した英国の音楽雑誌〝NME〟は、ホワイトアウト日本公演の同行取材を敢行。この〝ビッグ・イン・ジャパン〟現象を解き明かすべく、公演や取材の現場に付いて回り、4ページにわたってレポートを掲載した。記事では、日本各地での熱狂ぶりを伝え、その様子を〝まるでビートルズのようだ〟と称した。また、ギタリストのエリック・リンゼイは、近年の取材で当時のことを〝天国のようだった〟と語っている。そして、来日が終わる頃、いつもはふざけるバンドのマネージャーからは真面目な面持ちで〝君たちが売ってくれなければ、シルヴァートーンからはとっくに契約を切られていただろう〟と感謝されたのをよく覚えている。

すべてを終えて帰国の途に着く際、空港でバンドの面々から寄せ書きとプレゼントを渡された。スモール・フェイセズのベスト盤、そしてフェイセズ『ファースト・スステップ』だった。なかなかいいセンスだ。メンバーはみな無邪気で屈託がなくて、本当にいい奴らだった。明るいが、決して浮ついた感じはなく、適度に抑制が効いていて、時に落ち着きさえ感じられた。それはサウンドにも表われていたかもしれない。

成功例ができたことで、社内調整や海外

ホワイトアウト
『ノー・タイム』
BMGビクター BVCQ9203［1994］
(CD)
日本独自編集盤

CamScannerでスキャン

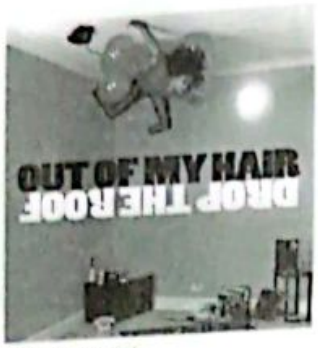
とのタ[illegible]などがもんとわりやすくなった。それにより、日本上陸でマーケティングができたアウト・オブ・マイ・ヘアーは、ホワイトアウト以上のセールスを上げ、さらなる〝ビッグ・イン・ジャパン〟を作ることができた。一方、スリーパーなどは初作の『スマート』から継続的にプロモーションを行ない、3作目『プリーズド・トゥ・ミート・ユー』ではフル・スケールでプッシュしたが、本国のようには売れなかった。

他にもモリッシー、スピリチュアライズド、カーヴ、ノーザン・アップロアー、ザ・ジャイアズ、60ftドールズといったアーティストの来日公演に関わった。

思えば、この時期のUKロックにはアルバム1、2枚を作って終焉を迎えるバンドが多かった。もちろん長きにわたって活動を続けていたり、再結成して今も活動している面々もいる。だが、そうした場合も、やはり一瞬の輝きを放つ1stアルバムが最も魅力的であることが多い。普通の若者が表現の機会を得て、無垢な状態で感性を迸らせる。来日などで接したバンドは、まさにそうした〝普通の人たち〟だった。

また、英国特有の美意識を宿していたこともUKロックの魅力の一つであろう。決して発散型ではなく、内省的で、どこか影があり、いくらか捻りも効いていたサウンド。例えばマッドチェスターは、本能を刺激するダンス・グルーヴをそのまま放出するのではなく、ロックというフォーマットのなかに組み込み、グルーヴがバンド・サウンドのなかで蠢いているような感覚を生み出す。シューゲイザーは、まさに美しさや激しさを轟音という幕で覆い隠し、そこから透けて見える妖しげな魅力で聴き手を引き込む。ブリットポップも、60〜70年代ロックの意匠を借りながら、同時代的な若い感性をそこから迸らせる。単なるコピーではなく、新旧の美意識が溶け合っているのだ。そうした温故知新の感覚は日本人の好むところだ。

そして、〝ポップ〟であるということは重要な要素だ。セル・アウトしたポップではなく、自身の感情から湧き出てきたポップ。古き良きロックを取り入れながら、それらを自身の表現として煎じ詰めたところに滲み出てきたポップ。そうした根源的なポップこそが日本人に突き刺さったのではないだろうか。そして、こうした日本人に好まれる要素は、とりもなおさずUKロックの魅力と言えるかもしれない。ともかく筆者は、いくつものバンドと触れ合うことでUKロックのそんな魅力を感じたのだ。

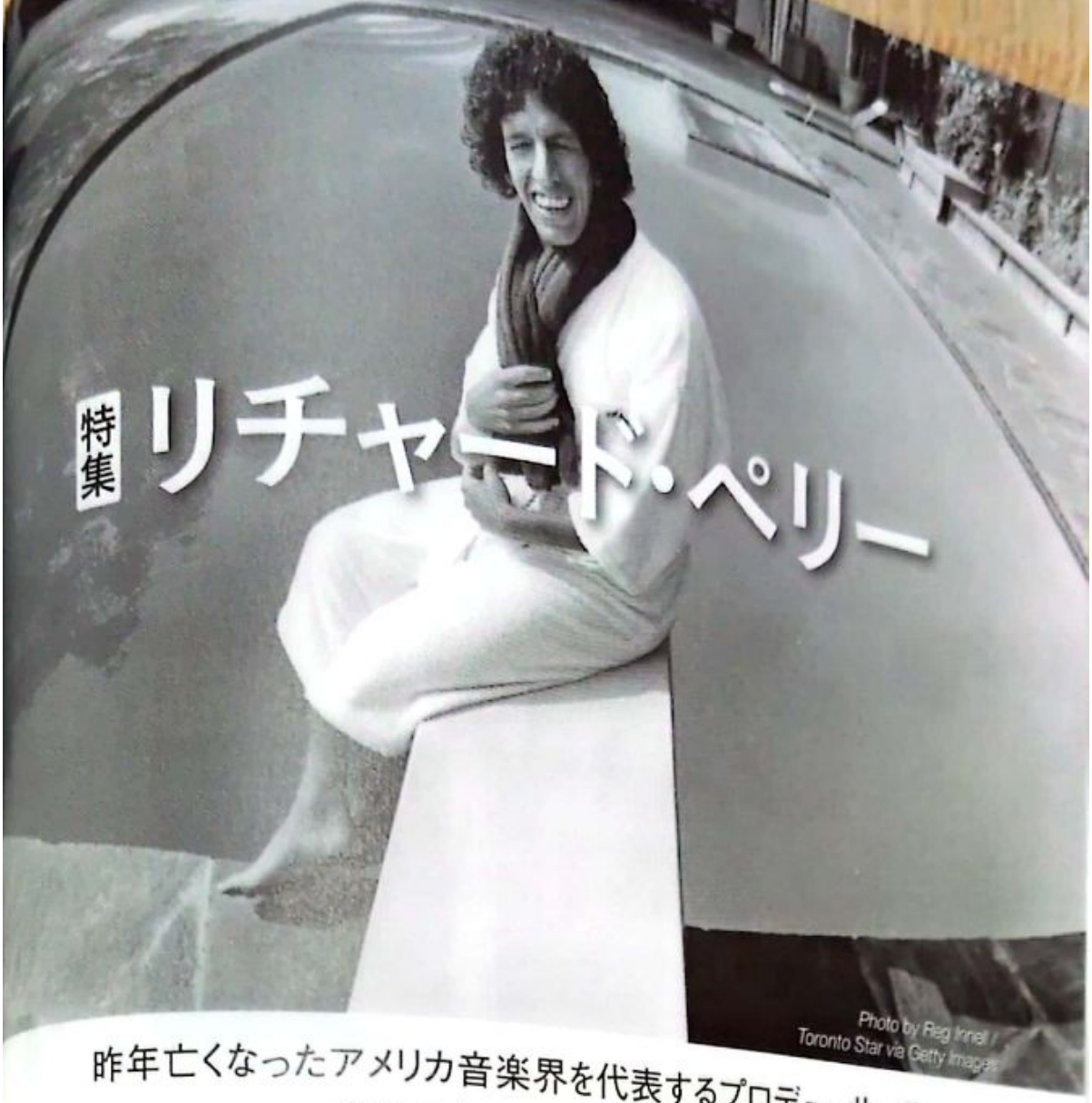


Out Of My Hair
"Drop The Roof"
RCA[UK] 74321348372 [1996]
(CD)

Sleeper
"Smart"
Indolent[UK] SLEEPCD007 [1995]
(CD)

Curve
"Doppelgänger"
Anxious[UK] ANXCD77 [1992]
(CD)

CamScannerでスキャン



特集 リチャード・ペリー

Photo by Reg Innell / Toronto Star via Getty Images

昨年亡くなったアメリカ音楽界を代表するプロデューサーの華やかなキャリアを振り返る

文＝中村彰秀

リチャード・ペリーが昨年12月に他界した。82歳。近年は引退状態だったようだが、ペリーのプロデュース・ワークといえば、最も輝いていたのはやはり70年代、ニルソン、カーリー・サイモン、バーブラ・ストライサンドらの名作群が思い浮かぶ。実力がありながらそれに見合う人気がないアーティスト、転換期の大物シンガーに、選曲からアレンジ、ミュージシャン起用まで大胆に指示をだして、アーティストの新たな一面を引き出して大ヒットを生み、スターダムに（再び）のし上げる。ペリーは時にはアルバムの裏や中ジャケットに自身も顔を出して存在感を主張する、実に〝目立つ〟プロデューサーだった。70年代後半にはプラネット・レコーズを設立し新たな飛躍を遂げる。そのすべては紹介できないが、重要作品を中心にその足跡を追っていこう。

ニューヨークから西海岸へ

リチャード・ペリーは、1942年6月18日、ニューヨーク市の生まれだから、国は違えどポール・マッカートニーと同じ誕生日。高校の頃にはホワイト・ドゥワップの3人組、レジェンズを結成し、その後エスコーツと名前を変えてシングルを発売す

CamScannerでスキャン

る。老年からゴールディ・ゼルコウィッツという女性がグループに加入。彼女はその後、女性4人組のゴールディ&ザ・ジンジャーブレッズを結成するが、これは60年代後半にはテン・ホイール・ドライヴと活動するジェニア・レイヴァンその人だ。

ペリーはこの後、ソングライター、プロデューサーを目指し、ジェイ&ジ・アメリカンズのケニー・ヴァンスと曲作りを始め、スティーリー・ダンのプロデューサーとなるゲイリー・カッツと会社を設立。ジェリー・リーバー&マイク・ストラーに曲を売り込み、レッド・バード・レーベルの共同経営者ジョージ・ゴールドナーと交流を深めていく。そして彼の娘リンダと親しくなり、彼女はペリーの最初の妻となっている。

ペリーは66〜67年にはレッド・バード、そしてカマストラ・レーベルなどで数枚のシングルをプロデュースしている。ガレージ・バンド、ステインズによるラヴィン・スプーンフルの曲 'Did You Ever Have To Make Up Your Mind' と、名前をファイヴ・カーズ・スタッドと変えての 'Be-Bop-A-Lula' (ともに66年)。マンハッタン・トランスファーのジャニス・シーゲルが在籍していた3人組ガール・グループ、ヤング・ジェネレイション 'Hideaway' (66年) はキャス・エリオット風の歌声で、テヴド・ワンズと名前を変えての 'It's Not Gonna Take Too Long' (67年) はピーター・アンダース&ヴィニ・ポンシアの曲だ。タイニー・ティムともその頃に知り合い、'April Showers' (66年) ではすでにユニークな個性を発揮。ファンタジアの 'Gotta Get Away' (67年) はビーチ・ボーイズ風サウンド。マルベリー・フルート・バンド 'Yes, We Have No Bananas' (67年) はアンダース&ポンシアとコラボレートしたものだ。

67年、ペリーは西海岸へ移り、プロデューサーとして本格的活動開始。キャプテン・ビーフハート&ヒズ・マジック・バンドのデビュー盤 "Safe As Milk" はライ・クーダーが熱演したブルージーなサウンド。

同年暮れにはワーナー／リプリーズのスタッフ・プロデューサーとなり、68〜69年に数枚のアルバムを担当しいる。タイニー・ティムの "God Bless Tiny Tim" からは 'Tip-Toe Thru' The Tulips With Me' がヒット。そして、ファッツ・ドミノがビートルズの2曲をカヴァーした熱演盤が "Fats Is Back"。この2作品でペリーは評価を高め、自信を深めていく。さらに、エラ・フィッツジェラルドのロンドン録音盤 "Ella!" (69年)、俳優セオドア・ビケルの "A New Day" (69年)、ポール・ウィリアムズが在籍したバンド、ホリー・マッカレルも手がけた。

70年代、大人気プロデューサーに

70年にペリーは再びフリーランスとなり、いよいよ八面六臂の活躍をみせる。まずは大物バーブラ・ストライサンドのプロデュース。70年代となって彼女の古いイメージを払拭できないかとの依頼で、ローラ・ニーロやランディ・ニューマンら（当時の）新進気鋭のソングライターの曲で固めた選曲を提案。ストライサンドは歌い方も変え、ニーロ作 'Stoney End' は大ヒットとなり、アルバム "Stoney End" をきっかけに彼女は新たな人気を獲得する。

アンディ・ウィリアムズは "Solitaire" でニール・セダカやビートルズ関連、ニッキー・ホプキンスの曲を歌い新境地を開く。

また、当時では珍しい女性ロック・バンド：ファニーの制作も試みて注目を浴びる。

ニルソンはすでにシンガー・ソングライターとして評価が高く、69年の映画『真夜

CamScannerでスキャン

リンゴ・スター『グッド・ナイト・ウィーン』LPの内袋から

中のカーボーイ』主題歌 "Everybody's Talkin'"（うわさの男）も大ヒットしたが、アルバムは売れなかった。ペリーがニルソンを連れてロンドンで録音した "Nilsson Schmilsson" は、従来路線と違うロック寄りのアプローチをとり、バッドフィンガーのカヴァー "Without You" が大ヒットしてニルソンは一躍人気者となる。

すでに実力派シンガー・ソングライターとして認められていたカーリー・サイモンの "No Secrets" もロンドン録音。"You're So Vain"（うつろな愛）をはじめ、ダイナミックなロック・サウンドを打ち出し彼女のイメージを大きく変えて、夫ジェイムズ・テイラーとともにスーパースターとなった。

スタンダード集 "Sentimental Journey"（70年）でペリーに1曲アレンジをまかせていたリンゴ・スターが、再びペリーを起用したのが、ロサンゼルス録音の "Ringo" だ。ビートルズの3人、ザ・バンドの面々、マーク・ボランなど豪華なゲストを招いての華やかなポップ・ロック・アルバムに仕上げ、リンゴのソロ・シンガーとしての魅力を前面に打ち出したもの。ペリーはこの頃、数枚の特大ヒット・アルバムを続けて手がけ、その活躍はとどまることを知らず、という勢いだ。

モータウンを離れたマーサ・リーヴスのソロ・デビュー盤 "Martha Reeves" はパワフルな演奏をバックにリーヴスが歌手として実力を発揮した内容にもかかわらず、セールス的には不発。ペリーにとって自信作だったのだが。

アート・ガーファンクルのソロ2作目となる "Breakaway" は、従来の明るく爽やかなイメージとは違い、成熟した大人の内面を見せ、歌手としての成熟を示した内容で、ガーファンクルの代表作だ。

英国のシンガー・ソングライター、レオ・セイヤーはすでに英国では人気が高く、スリー・ドッグ・ナイトは彼の楽曲 "The Show Must Go On" を大ヒットさせていたが、本格的米国進出を狙ってLAで録音されたのが "Endless Flight"。エルトン・ジョンに続く存在に、とペリーは思ったのか、セイヤーに腕利きの共作者、演奏陣を用意して強力にサポートしている。ディスコ調 "You Make Me Feel Like Dancing"、バリー・マンとの共作 "How Much Love"、さらにアルバート・ハモンド&キャロル・ベイヤー・セイガー作の名バラード "When I Need You" とヒットし、セイヤーは大スターになった。

マンハッタン・トランスファー "Coming Out" はシャンソン、マンボからトッド・ラングレンの曲まで含む多彩な内容で、ペリーの音楽的素養を証明した作品。

ゲス・フー解散後の、バートン・カミングスのソロ・デビュー・アルバム "Burton Cummings" は、ロック・バンドのリード・シンガーだったことを忘れさせる軽妙なポップ・ヴォーカル盤で、同作からのシン

CamScannerでスキャン

"Stand Tall"はヒットした。うまさが大物シンガーから声をかけられ、ペリーはひっぱりだこの状況に。アーサ・リーヴスのアルバムがペリー・ゴーディに気に入られ起用されたのが、ダイアナ・ロスの"Baby It's Me"で、TOTOのメンバーやトム・スノウ、レイ・パーカーJr.らが脇を固めた力作だった。

プラネット・レコーズとスタンダード集

ペリーの新たなステップが、80年の自身のレーベル、プラネットの立ち上げだった。単なるプロデューサーから、経営者としての役割も踏まえての活動へ。同レーベルといえばやはりポインター・シスターズで、ペリーは同グループの"Energy"でロック系ミュージシャンを積極起用し、大ヒットしたブルース・スプリングスティーン作の"Fire"をはじめ、ロック系ソングライターの曲を歌わせた。その後、アルバムを重ねるごとに、しだいにソウル路線へシフトし、演奏陣も順次変えるなどサウンドを進化させながら、"Break Out"(83年)、"Contact"(85年／リリースはRCA)で人気はピークとなる。ペリーは彼女たちの9枚のアルバム、さらにジューン・ポインターの"Baby Sister"(83年)まで手がけている。

プラネットではこれ以外にもビル・メドレーの"Right Here And Now"(82年)、鍵盤ミュージシャン、グレッグ・フィリンゲインズ、マーヴァ・キングといったソウルから、ロック系のナイト、スー・サード&ザ・ネクスト、マーク・サファン&ザ・キーパーズ、さらにノスタルジックなポップス3人組のスウィングなども手がける。82年にはペリーはレーベルをRCAに売却しており、再びフリーランスに戻っているのだが。

80年代に入って注目すべきは、フリオ・イグレシアスの英語圏向けアルバム"1100 Bel Air Place"だ。ウィリー・ネルソン、ダイアナ・ロスとのデュエット、ビーチ・ボーイズのコーラスを入れるなどの趣向を凝らして大ヒット。またティナ・ターナー、パティ・ラベル、ドナ・サマー、チャカ・カーン、ホイットニー・ヒューストンなどの黒人シンガーからニール・ダイヤモンド、トム・ジョーンズといった大物にも手を貸しており、ペリーは相変わらず多忙だった。

ペリーが若き日に影響されたロックンロールの熱気を再現したアルバムが"Rock, Rhythm And Blues"。御大レイ・チャールズの63歳作"My World"は、チャールズの現役ぶりをアピールした強力盤だ。

95年のテンプテーションズ"For Lovers Only"を前例として、2000年代、還暦を迎えたペリーが改めて取り組んだのがスタンダード集。ロッド・スチュワートの"It Had To Be You: The Great American Songbook"に始まるシリーズ数作、カーリー・サイモン"Moonlight Serenade"(05年)や、アート・ガーファンクル"Some Enchanted Evening"(07年)などがある。

Burton Cummings
"Burton Cummings"
Portrait [US] PR34261 (1976)
(LP)

Julio Iglesias
"1100 Bel Air Place"
Columbia [US] QC39157 (1984)
(LP)

Richard Perry
プロデュース作品選

長く、そして多岐にわたり音楽作品の制作に携わってきた
リチャード・ペリーの仕事の中から、
キャリアを代表するアルバムを紹介します。

選＝中村彰秀

文＝小川真一　金澤寿和　谷口雄　中村彰秀

Captain Beefheart & His Magic Band
Safe As Milk

Buddah [US] BDM1001 (mono) / BDS5001 (stereo) [1967] (LP)

突飛な組み合わせだが、ブッダ・レコードのボブ・クラスノウの推薦で、リチャード・ペリーがプロデューサーの席についた。これが彼の最初の大きな仕事となったのだが、録音システムに不慣れなこともあり、多分に苦労はしたと思われる。がしかし、ペリー自身は後のインタヴューで〝キャプテン・ビーフハートのレコードを作るのもアンディ・ウィリアムスも、どちらも同じようなものさ〟とうそぶいている。このレコーディングで、ヴォーカルのドン・ヴァン・ヴリートがマイクをぶっ壊したというエピソードが残っているが、真相のほどは定かではない。（小川）

Fats Domino
Fats Is Back

Reprise [US] RS6304 [1968] (LP)

タイニー・ティムの大ヒットを受けてリチャード・ペリーの元に持ち込まれたのが、十代の頃のヒーローだったファッツ・ドミノのプロデュース。冒頭の「マイ・オールド・フレンズ」ではファッツの代表曲をコラージュするモダンなサウンド・プロダクションで、英国勢に押され気味だったニューオーリンズの帝王の復活を高らかに宣言。ラリー・ネクテルのピアノが光る「レディ・マドンナ」のカヴァーは特に秀逸。ペリーはそのキャリアの随所で〝再生工場〟的な働きを見せるが、選曲とミュージシャン選びの妙技はこの頃から発揮されていた。（谷口）

CamScannerでスキャン

The Holy Mackerel
The Holy Mackerel

Reprise [US] RS6311 [1968] (LP)

「雨の日と月曜日は」を作曲したボール・ウィリアムズが在籍していたことで知られるザ・ホーリー・マッカレル。彼らの68年の唯一のアルバムで、他にもボールの弟のメンター・ウィリアムズ、TCBバンドのジェリー・シェフなどが加わっている。プロデュースを若き日のリチャード・ペリーが手掛けた。サイケな曲調からカントリー・ミュージックまで、様々な要素が詰め込まれているのが60年代らしいが、このアルバムの中からボール・ウィリアムズ＝ロジャー・ニコルズのコンビによる初期の傑作曲 'Bitter Honey' が生まれている。（小川）

Tiny Tim
God Bless Tiny Tim

Reprise [US] RS6292 [1968] (LP)

長身、長髪、顔は白塗り、ウクレレを持ち裏声で歌う奇妙な男、タイニー・ティム。'Welcome To My Dream' と歌い始めると、ティムのノスタルジックな音楽ワールドが広がっていく。20世紀初めの曲から直近60年代の曲まで、違和感なく歌われる。ペリーはこのアルバムをキワモノにするのではなく、アーティ・バトラーのアレンジを添えて、極上のアートへと仕上げた。もうひとつのバーバンク・サウンドといえる代物。'Tip-Toe Thru' The Tulips With Me' は米17位のヒットに。ペリーのプロデューサーとしての手腕を最初にみせつけた作品である。（中村）

Fanny
Fanny

Reprise [US] RS6416 [1970] (LP)

フィリピン出身のミリントン姉妹を中心とした、米国で初めて成功した女性4人組ロック・バンド。ランナウェイズやバングルスの先駆けとされるが、ペリーが女性バンド育成を思案中に、秘書がトルバドールのオープン・マイクに出演する彼女たちを発見。ペリーが契約を準備すると同時に鍵盤奏者補強を提案して音を整え、本作でデビューした。70年代前半に5作を発表し、メイン・ライターであるジューン・ミリントン在籍は4枚目まで。ペリーは初期3作をプロデュース（4枚目はトッド・ラングレン）し、2作目からトップ40ヒットが生まれている。（金澤）

Nilsson
Nilsson Schmilsson

RCA Victor [US] LSP4515 [1971] (LP)

フィル・スペクターのパーティで知り合ったリチャード・ペリーとニルソンは、同じブルックリン出身、同じ双子座ということもあり意気投合。3年後、ニルソンがペリーに依頼し本作の制作がスタートした。ペリーは当時最新の録音技術を誇っていたロンドンでレコーディングすることを提案。エンジニアとして起用されたロビン・ジェフリー・ケーブルの手ほどきで、ペリーの録音に関する技術と知識が格段にアップデイト、その後のキャリアにおける意義は大きかったという。かくして本作は大ヒット、ペリーにとってもニルソンにとっても代表作となった。（谷口）

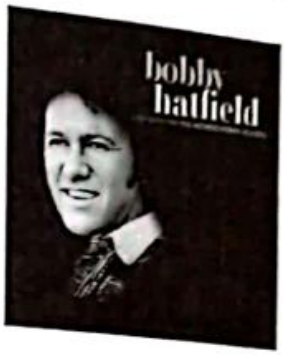
CamScannerでスキャン

Barbra Streisand
Stoney End

Columbia [US] KC30378 [1971] (LP)

ローラ・ニーロ(3曲)、ランディ・ニューマン(2曲)、キャロル・キング、ジョニ・ミッチェル、ニルソンなど、当時のシンガー・ソングライターのブームを反映したペリーの選曲。バーブラ・ストライサンドにはなじみのない曲ばかりで、当初はとまどいを示した。しかし完璧主義者の彼女はまたたくまに曲を自分のものにし、歌い方もガラリ変えた。表題曲は全米6位の大ヒットとなり、近年もステージの定番曲。時代の変化の中でストライサンドのイメージを変え、70年代以降、彼女の活躍の分岐点となったアルバムだ。ランディ・ニューマンがピアノで参加。(中村)

Bobby Hatfield
Stay With Me: The Richard Perry Sessions



Omnivore [US] OVCD363 [2020] (CD)

ライチャス・ブラザーズの分裂後、ビル・メドレーより遅れてソロ活動を始めたボビー・ハットフィールド。ペリーの手で72年に2枚のシングルを発表したが、実はもっと多くの曲が録音されており、それが近年発掘された。ほとんどがロンドン録音で、リンゴ・スター、クラウス・フォアマン、アル・クーパーらの演奏だ。'Stay With Me'と'Run To My Lovin' Arms'はライチャス・ブラザーズ的熱唱。'Oo Wee Baby, I Love You'は何故かビートルズの'Get Back'風で、ジョージ・ハリスン作'What Is Life'と'Sour Milk Sea'も力強い仕上がりだ。(中村)

Carly Simon
No Secrets

Elektra [US] EKS75049 [1972] (LP)

フォーク出身のカーリー・サイモンといえば、ポップ寄りの歌世界。そこにペリーがもたらしたのは、ロックのダイナミズムで、大ヒット曲'You're So Vain'(うつろな愛)'を聴けば歴然。ドラムにこだわって、3人目に起用したジム・ゴードンが叩く音でペリーはやっと満足した。ジミー・ライアンのギター・ソロも力強い。夫となるジェイムズ・テイラーの曲でもペリーが選んだのはブルージーな'Night Owl'で、ニッキー・ホプキンスのピアノ、ボビー・キーズのサックス・ソロ、ボニー・ブラムレットとドリス・トロイのコーラスも効いている。(中村)

Ringo Starr
Ringo

Apple [UK] PCTC252 [1973] (LP)

あらゆる意味でリンゴ・スターらしさ全開のソロ最高作。ビートルズ解散前から誇いの絶えない他3人が、曲は別ながら勢揃い。ジム・ケルトナーやビリー・プレストンら周辺ミュージシャンに加え、マーク・ボランやザ・バンドまで参集。そのお膳立てをプロデューサーのペリーが担った。彼はリンゴの初ソロ『センチメンタル・ジャーニー』に編曲面で関わったが、ニルソンの72年アップル録音作"Son Of Schmilsson"でリンゴと再会し、ヴィジュアル連動による新作レコーディングを持ち掛けたらしい。翌年作『グッドナイト・ウィーン』もペリーの制作で。(金澤)

CamScannerでスキャン

Andy Williams
Solitaire

イージー・リスニングの帝王、アンディ・ウィリアムスの27枚目のアルバム。前作まではビートルズやレオン・ラッセル作品など、ロックのヒット作をMOR的アプローチでカヴァーしていた印象が強いが、本作はリチャード・ペリーの選曲センスが光り、より一層ウィリアムスのヴォーカルにフォーカスされている。ニール・セダカ作のタイトル曲はカーペンターズでお馴染みだが、実は本作が最初のヒット。スティーヴィー・ワンダーの「サンシャイン」をここまで重厚なバラードに仕上げられるのはこのコンビだけだろう。ニルソンの「リメンバー」も名演。（谷口）

Martha Reeves
Martha Reeves

表ジャケにペリーの名前が大きく記載されていることに、まずビックリ。これはモータウンの花形として活躍したマーサ＆ザ・ヴァンデラスの看板シンガー、初ソロ作。カーリー・サイモン、バーブラ・ストライサンドにリンゴ・スター、と、ペリーがかつて続けざまにヒットを生んで脚光を浴びた時期の錚々たる陣営だろう。ヴァン・モリソンやグラディス・ナイトのカヴァーにキャロル・キング提供曲が並ぶあたりはペリーらしいが、演奏陣は地味な職人ばかり。唯一ゲスト格に相応しいジェイムス・テイラーがホーン・アレンジで参加しているのも意味不明だ。（金澤）

Art Garfunkel
Breakaway

リチャード・ペリー自身が、プロデューサーとして大きな鍵を握る作品を与えてくれた作品」と振り返るアート・ガーファンクルの2作目のソロ・アルバム。選曲は主にペリーが行ない、フラミンゴスでお馴染みのスタンダード「瞳は君ゆえに」は叙情的なアレンジでヒット。他にもスティーヴィー・ワンダーやブルース・ジョンストン＆ギャラガー＆ライルなど、意外かつ幅広いレパートリーがガーファンクルの澄み切った高音の魅力を引き出している。余談だがスティーヴン・ビショップは、本作への楽曲提供をきっかけにレコード・デビューを果たしている。（谷口）

The Manhattan Transfer
Coming Out

結成約10年のヴェテラン・コーラス・グループ2作目。デビュー盤はノスタルジックなジャズ中心で、作風を広げるべくポップ職人ペリーを起用したと思われる。が、収録曲の多くは50～60年代スタンダード。終盤、リンゴ・スター、ジム・ケルトナーがツイン・ドラムを披露し、トッド・ラングレンやマイケル・フランクスの楽曲が登場するが、全体の方向性はチグハグだ。彼らが時代に真にコンテンポラリー化するのは、80年代の声を聞いてからになる。ただし、後にロッド・スチュワートのスタンダード集で成功したことを考えると、ペリー起用は慧眼か。（金澤）

Leo Sayer
Endless Flight

Chrysalis [UK]
CHR1125 [1978] (LP)

レオ・セイヤーの本格的なアメリカ進出作。ソングライティング・パートナーがいなかったセイヤーに、ベリーはバリー・マン、ヴィニ・ポンシアらの〝相棒〟を用意。その結果が、セイヤーの裏声も見事な〝You Make Me Feel Like Dancing〟(全米1位)と、ストリングスも華麗な〝How Much Love〟(17位)に結実。さらにアルバート・ハモンド&キャロル・ベイヤー・セイガー作〝When I Need You〟(1位)は極上のバラード。ディスコを意識した感のあるアレンジもありつつ、LAの最強ミュージシャンによるタイトな演奏がセイヤーの[illegible]

Diana Ross
Baby It's Me

Motown [US]
M7-896R1 [1977]
(LP)

ダイアナ・ロス7作目のオリジナル・アルバム。全編ベリー制作だが、ダイアナがアルバムを丸ごと単独プロデューサーに任せるのは、3作目『サレンダー』(71年)を手掛けたアシュフォード&シンプソン以来だ。その期待に応えるべく、スティーヴィー・ワンダーやビル・ウィザースからカヴァー曲を選りすぐり、トム・スノウやメリサ・マンチェスターら当時の若手ライター、デビュー前のTOTOやリー・リトナー(B)など新進プレイヤーを積極起用。チャート成績は今ひとつに終わるが、後年のシックとの連続はこのチャレン[illegible]

Pointer Sisters
Energy

Planet [US] P1 [1978]
(LP)

レコード番号P1。つまりベリーが設立したプラネット・レコードの初リリース作品で、ポインター姉妹にとってもボニー離脱後3人編成での初作品になる(オリジナル5作目)。しかもこの機会を利用し、ベリーのプロデュースで大胆にポップ・ロック路線へとシフト。スティーリー・ダンやドゥービー・ブラザーズ、フリートウッド・マック、ロギンズ&メッシーナ、スライ&ザ・ファミリー・ストーンらの曲をカヴァーし、ブルース・スプリングスティーン提供〝Fire〟が全米2位と大ヒットした。バックもLAのロック系ミュージシャンばかり。[illegible]

Marva King
Feels Right

Planet [US] P16 [1981]
(LP)

マイケル・ジャクソン、スティーヴィー・ワンダーのバックで歌い、のちにプリンスのバンドに加わって舞台〝Diary Of A Mad Black Woman〟で脚光を浴びた、歌手で女優のマーヴァ・キングのソロ初作。アーバン・ソウルな音作りは、ベリーよりもその右腕トレヴァー・ローレンスによるところが大きいのでは。ケニー・ロギンス作〝Who's Right, Who's Wrong〟、メリー・ウェルズが歌った〝Two Lovers〟でのエレガントな歌声。モーリス・ホワイト制作期のエモーションズを思わせる曲もある。彼女の自作曲〝Isle Of Castaways〟[illegible]

CamScannerでスキャン

various artists
Rock, Rhythm & Blues

Warner Bros. [US]
1-25917 [1989]

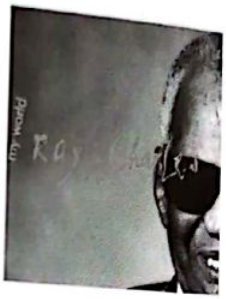
50年代、ロックンロールを広めた伝説のDJ、アラン・フリードが開いたロックンロール・ショウを観に行き大きく影響されたベリーが、あの時に感じた熱気を鮮やかに再現したもの。どれも名曲。歌うのはエルトン・ジョン、マイケル・マクドナルド、チャカ・カーン、クリスティン・マクヴィー。さらにベリーがプロデュースを手がけたポインター・シスターズ、マンハッタン・トランスファー、ランディ・トラヴィス、エル・デバージも参加。当時の音楽そのままでなく、よりパワフルでタイトなサウンドに仕上っている。ベリーが商売っ気抜きで制作した作品だ。（中村）

Thelma Houston
Throw You Down

Reprise [US]
9 26234-2 [1990]
(CD)

遅すぎた邂逅。"Don't Leave Me This Way"というNo.1ヒットを持ち、ジミー・ウェッブ作のソフト・ロックからディスコ、ジェリー・バトラーとの共演、ジミー・ジャム&テリー・ルイス制作のモダン・ファンクまで、何でも真摯に歌ってきた実力派シンガーにとって、万能型のベリーに制作を委ねるのは念願だったはず。一方、ゴスペルの素養を持ちながらクドくならずポップに歌えるテルマ・ヒューストンは、ベリーの好みのタイプに違いない。音作りやアレンジは時相応だが、カーリー・サイモン作のバラードを始め、丁寧な曲集めがベリーらしい。（金澤）

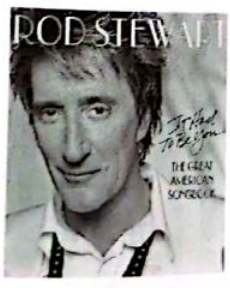
Ray Charles
My World



Warner Bros. [US]
9 26735-2 [1993]
(CD)

レイ・チャールズ、還暦を過ぎても錆びてはいない。そんな意図が伝わってくるアルバム。ベリーの起用は、伝説の人物がまだまだ現役であることを示すためだったに違いない。女性ヴォーカルをバックに盛り上がるファンキー・ナンバーと美バラードが交互に並ぶ中、レイの歌声が力強い。グラミーのベスト男性R&Bヴォーカル賞を獲ったレオン・ラッセル作"A Song For You"、ロン・ミラー&ケン・ハーシュのコンビ作のバラード"If I Could"、トム・スノウ作のスウィート・ソウル"Love Has A Mind Of Its Own"が格別だ。エリック・クラプトンが参加。（中村）

Rod Stewart
It Had To Be You... The Great American Songbook



J/BMG [EU]
7 4321 96867 2 [2002]
(CD)

永遠のロック・スター、ロッド・スチュワートが密かに抱いていた"スタンダード・アルバムを作る"という夢に最初に賛同したのが、かつてシングル「モータウン・ソング」のプロデュースを手掛け、ロッドとは旧知の仲だったリチャード・ベリー。今作では選曲からデモ・テープの制作、レーベル探しまで付き合う献身ぶりで全米4位の大ヒットに導いた。リリース後もコンサートの指揮者として起用されるほど、ロッドからの信頼は厚かったという。"グレイト・アメリカン・ソングブック"シリーズは第5弾まで続き、ロッドの新たな代名詞となった。（谷口）

CamScannerでスキャン

ビリー・ジョエル

『ストリートライフ・セレナーデ』の発売50周年を記念した日本独自企画SACDマルチ・ハイブリッド盤

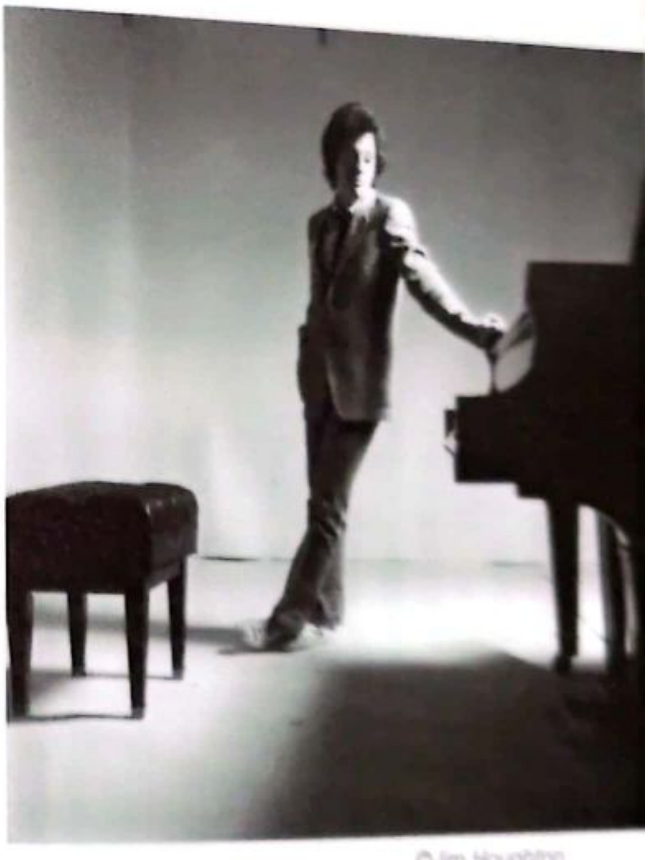
文＝近藤正義

昨2024年1月24日に16年ぶりとなる東京ドーム公演を行なったビリー・ジョエルは、その直後である2月1日には17年ぶりとなる新曲「ターン・ザ・ライツ・バック・オン」を発表し、同月4日には第66回グラミー賞授賞式でその新曲を生パフォーマンス。この曲は〈ビルボードHOT100〉で62位、〈アダルト・コンテンポラリー〉チャートでは7位をマークし、1999年以来、27年ぶりにヒット・チャートに返り咲いた。さらに7月25日にはNYマディソン・スクエア・ガーデンにおけるレジデンシー公演が生涯通算150回目でフィナーレを迎えるなど、精力的にライヴ活動を継続しながらエンターテイナーとしての知名度をますます上げている。

そして今年はビリー・ジョエルの生誕75周年、サード・アルバム『ストリートライフ・セレナーデ』のリリース50周年を迎える。それを記念して、日本独自企画／完全生産限定のSACDマルチ・ハイブリッド盤7インチ紙ジャケット仕様**『ストリートライフ・セレナーデ 50周年記念デラックス・エディション』**が発売された。

前作『ピアノ・マン』ではオーケストレーションを使った、ゴージャスなサウンドも含まれていた。しかし、本作はビリー自身の意向によりストレートなバンド・サウンドでシンプルに作られている。彼が狙ったのは、古き良きストリート・ロックンロールだ。ただ、自分のバンドでレコーディングしたいというビリーのアイデアは却下され、プロデューサーの意向で、基本的には前作同様にLAのスタジオ・ミュージシャンが中心になってバックを固めている。その中にはウィルトン・フェルダー（ベース）、ロン・タット（ドラム）、ラリー・ネクテル（ベース）なども名を連ねている。

サウンド面では10曲中4曲に登場するペダル・スティール・ギターの多用が特徴の



©Jim Houghton

CamScannerでスキャン

『ストリートライフ・セレナーデ 50周年記念デラックス・エディション』

ソニー SICP10157～8／¥5273／SACDマルチ・ハイブリッド+Blu-spec CD2／2・19発売／歌詞・訳詞つき／解説＝ソリアーノ・タナカ、立川直樹

[SACDマルチ・ハイブリッド]＜Streetlife Serenade (The Original Album)＞①街の吟遊詩人は… ②ロスアンジェルス紀行 ③場末じみた場面 ④ルート・ビアー・ラグ ⑤ロバータ／街の恋物語 ⑥エンターテイナー ⑦ビッグ・タイム・スペンダー ⑧週末の歌 ⑨スーベニア ⑩メキシカン・コネクション ＜CD層のみのボーナス・トラック＞ ⑪街の吟遊詩人は…(Live) ⑫ロスアンジェルス紀行(Live) ⑬エンターテイナー(Live) ⑭スーベニア(Live)

[Blu-spec CD2]＜Live At The Great American Music Hall, 1975＞①イントロダクション ②小雨降るパリ ③ロバータ ④メキシカン・コネクション ⑤ルート・ビアー・ラグ ⑥ジェイムズ ⑦バンド・イントロダクションズ ⑧僕の故郷 ⑨美しすぎて(インタールード) ⑩エヴリバディ・ラヴズ・ユー・ナウ ⑪ニューヨークの想い ⑫ベニー&ジェッツ(インタールード) ⑬流れ者の祈り ⑭デルタ・レディ(インタールード) ⑮エンターテイナー ⑯さすらいのビリー・ザ・キッド ⑰悪くはないさ ⑱週末の歌

＊完全生産限定盤　＊7インチ紙ジャケット
＊1974年アルバム発売時に米コロンビア・レコードが作成したメディア配布用プレス・キットを復刻(リサイズ)
＊オリジナル・クアドラフォニックLP内袋を復刻
＊日本盤LPの初版帯を含む2種の帯を復刻(リサイズ)
＊7インチ・シングル盤ジャケット4種を復刻(実寸大)
＊日本盤LP初回発売時のブックレットを復刻(リサイズ)

一つだ。当時のビリーはジャクソン・ブラウンを意識していたそうで、その影響と考えられる。しかし、彼の曲で使われるとカントリーっぽさがあまり感じられないのが面白い。4曲で登場するミニ・モーグの使用も、オーケストラや管楽器の代用を思わせる自然な響きで好感が持てる。そして、クアドラフォニックで聴けばさらに明瞭なのだが、ギターが何本も録音されていること。さらに、ピアノとオルガンのダブル・キーボード。この辺りにもジャクソン・ブラウンを意識したサウンド作りが見え隠れしているようで面白い。しかし、2年以上にわたるLAでの生活、LAのプロデューサーやスタジオ・ミュージシャンと組んでのアルバム制作も、生粋のニューヨーカーのビリーだけにジャクソン・ブラウンのようにはならなかった。それが再びニューヨークに自分のアイデンティティを求めるきっかけになったのだから、人生どこでどんな展開が待ち受けているか分からないものだ。歌詞にはロングアイランド以外の場所に住んだことのなかった彼から見たLAの描写、西部への憧れなどが含まれ、「ルート・ビアー・ラグ」「メキシカン・コネクション」といったインスト・ナンバーの存在も映画のサウンドトラックのような色彩を滲えている。

本作は全米35位、アルバムからのシングル「エンターテイナー」は34位をマーク。アルバム、シングル共に、発売当時は前作『ピアノ・マン』の売上げに届かなかったが、ゴールド・ディスク(50万枚のセールス)を獲得。さらにその後もビリーの大成功に伴って売上げ枚数は伸び、1997年にプラチナ・ディスク(100万枚のセールス)に認定されている。

■SACDマルチ・ハイブリッド

このセットの本編であるオリジナル・アルバム部分はSACDマルチ5chハイブリッド・ディスク仕様である。つまり、このディスクはシングル・レイヤーではなくハイブリッド構造なので、通常の再生装置を

CamScannerでスキャン

使って普通の2chで聴くこともでき、SACDの再生装置であればさらなる高音質で楽しむことができる。

まずはSACDマルチ4chから説明しよう。これはクアドラフォニックLPの4chミックス・マスター音源を世界初DSDマスタリングした高音質サラウンド・ミックス。やはりSACD再生なら音質は驚異的にアップする。音の広がりや奥行き、そして音の艶が違う。録音周波数帯域とダイナミック・レンジの拡張による威力は絶大だ。

さて、これは通常のステレオとはまるで別ものの『ストリートライフ・セレナーデ』だ。その違いは、とても分かりやすい。1曲目のイントロから、もう別次元の空間と思えるサウンドなのだ。曲順にその違いを述べるなら、「街の吟遊詩人は…」はピアノの音の豊かな広がり。「ロスアンジェルス紀行」では埋もれていた楽器やフレーズの再発見やフェンダー・ローズの煌びやかな響き。「場末じみた場面」ではヴォーカルに深くかけられたエコーとビリーの弾くミニモーグの音像が鮮やかに再生され、「ルート・ビアー・ラグ」では逆にミニモーグの音像が引っ込んだ感じになる。「ロバータ／街の恋物語」では力強いヴォーカルが際立ち、「エンターテイナー」は隠れていたフレーズが現われるうえにサウンドは全体的に煌びやかな輝きを纏う。「ビッグ・タイム・スペンダー」では指をスリップさせるピアノの弾き方が臨場感豊かに迫り、「週末の歌」ではヴォーカルの深いエコーと派手なギター・サウンドが強調され、「スーベニア」ではシンプルな楽器編成ゆえの音の空間を感じさせる。そして「メキシカン・コネクション」ではいくつもの隠れていたフレーズが浮かび上がってくるなど、このように驚きの連続なのだ。これらは、もとのステレオ・ミックスに親しんでいればいるほど、面白さも増す。

そして、同じ盤で楽しめる2chは2chミックス・マスター音源をDSDマスタリングした最新リマスター・サウンド（ただし、ボーナス・トラックの⑪～⑭は除く。なお、⑭は世界初CD化）。ことさらにHi-Fi感を強調するのではなく、とても自然なサウンドに仕上がっている。そこそこの音量で聴く2chのスピーカー再生、あるいはヘッドフォン再生でも、充分にクリアなHi-Fiサウンドを実感できるはずだ。

■CD

2枚目のディスクは高品質Blue-spec CD2仕様。〈ストリートライフ・セレナーデ・ツアー〉期の名演を収録したライヴ・アルバム "Live At The Great American Music Hall, 1975"（世界初CD化）が収録されている。これはもともと2021年にアメリカとヨーロッパでリリースされたアナログ盤ボックス・セット "The Vinyl Collection, Volume 1" に特典ディスクとしてセットされていた音源で、うち5曲（②⑧⑬⑯⑰）は昨年の『ピアノ・マン 50周年記念デラックス・エディション』に収録されていたが、その他の曲も含めた全曲まるごとのCD化は今回が世界初である。

コンサート会場は500人収容と小規模だが、演奏も観客の熱気も凄まじい。ビリーのMCから推測すると、この日は2回の公演が組まれ、そのセカンド・セットが収録された。コンサートは四日間開催され、この日はその最終日である。バンドのメンバーはドン・エヴァンス（ギター）、ダグ・ステッグマイヤー（ベース）、リース・クラーク（ドラム）、ジョニー・アーモンド（サックス&キーボード）。

収録された18のトラックの内訳は、デビュー・アルバム『コールド・スプリング・ハーバー～ピアノの詩人～』から「エヴリ

CamScannerでスキャン

バディ・ラウズ・ユー・ナウ」、セカンド・アルバム『ピアノ・マン』から「小雨降るパリ」「僕の故郷」「流れ者の祈り」「さすらいのビリー・ザ・キッド」「悪くはないさ」の5曲。そして、当時の新譜である『ストリートライフ・セレナーデ』からは「ロバータ／街の恋物語」「メキシカン・コネクション」「ルート・ビアー・ラグ」「エンターテイナー」「週末の歌」の5曲。さらに、まだレコーディングされていない76年の次作『ニューヨーク物語』に収録されることになる、最初期テイクの「ジェイムズ」と「ニューヨークの想い」の2曲。その他にはビリーの軽快なMCが聞ける「イントロダクション」「バンド・イントロダクションズ」。ジョー・コッカーでお馴染み「美しすぎて（ユー・アー・ソー・ビューティフル）」、エルトン・ジョンのヒット曲「ベニー&ジェッツ」、レオン・ラッセルのヒット曲「デルタ・レディ」などの出だしやサワリがインタールードとしてそのまま収録されている。当時のビリーはライヴの最中に、物真似のような余興で観客を沸かせていたことが分かる。なお、アンコールの「悪くはないさ」が始まる前に、観客が「ピアノ・マン」や「キャプテン・ジャック」をリクエストしている声が聞こえることから、前作からのヒット曲であるこれら2曲はこのセットでは演奏されなかったと思われる。

なぜこのような録音が残っていたのかというと、ビリーのインタヴューによれば当時の強力な生パフォーマンスを活かして新曲をライヴ・レコーディングするというアイデアがあったそうだ。それを裏付ける事実として、このコンサート会場でのライヴ・レコーディングにはプロデューサーのマイケル・スチュワートやサウンド・エンジニアのロン・マロも立ち会っている。つまり、このライヴ音源は結果的には実現しなかったそのプロジェクトの一環だったということなのかもしれない。

■仕様について

本作の豪華な仕様は圧巻。US盤オリジナル・クアドラフォニックLPのアートワークを初復刻した7インチ紙ジャケット仕様。US盤オリジナル・クアドラフォニックLPのゴールド・レーベルの再現。US盤オリジナル・クアドラフォニックLP内袋の復刻。日本盤LPの初版帯を含む2種の帯をリサイズ復刻。日本盤LP初回発売時の12ページ・ブックレットをリサイズ復刻。7インチ・シングル盤ジャケット4種（ポルトガル盤、ドイツ盤、オランダ盤、日本盤）の復刻。2025年新規ライナー・ノーツ／21年のビリー本人によるセルフ・ライナー・ノーツ翻訳／1974年USプレス・キット翻訳／78年日本盤LP初回発売時ライナー・ノーツ／歌詞・対訳（ライヴMC含む）を収めたモノクロ72ページ日本語ブックレットという徹底ぶり。貴重な完全生産限定盤である。

ビリー・ジョエルの＜SACDマルチ・ハイブリッド盤7インチ紙ジャケット仕様＞は『ストレンジャー 40周年記念デラックス・エディション』『ニューヨーク52番街 40周年デラックス・エディション』（共に2018年リリース）、『ピアノ・マン 50周年記念デラックス・エディション』に次いで4タイトル目。高音質かつ立体的なサラウンド・サウンドでビリーの名曲を楽しむことのできるこのシリーズは、聴きなれた名盤にあたかも新譜のような輝きとときめきを加えてくれる。この他に、70年代当時は『ニューヨーク物語』（76年）もクアドラフォニック盤でリリースされていたので、近い将来にSACDマルチ・ハイブリッド盤でのリリースが期待される。

CamScannerでスキャン

COLLECTORS TOPICS

キング・クリムゾン

95年ジャパン・ツアーの東京6公演が最新リマスターを施されてリイシュー

文＝山岸伸一

キング・クリムゾンの『スラック』発表に伴う1995年5月1日のオーストリアから始まった〈スラック・ツアー〉は、しばらくの休息を挟み、10月1日から14日にかけて行なわれた来日コンサートがさらなるグレードアップの節目となった。ロバート・フリップ、エイドリアン・ブリューのギター、トニー・レヴィン、トレイ・ガンのスティックとベース、ビル・ブルフォード、パット・マステロットのドラムスのダブル・トリオを目の当たりにすることになった来日コンサートは、横浜での初日に続く2日の新宿厚生年金会館大ホール、翌3日も同じ場所、5日と6日が中野サンプラザ、8日が名古屋、9日の大阪を挟んで10日が世田谷の人見記念講堂、12日が大宮、13日が仙台の後、最終日の14日は再び新宿厚生年金会館大ホールで行なわれた。その時の音源は2010年に2枚組の『ライヴ・イン・ジャパン1995－ザ・オフィシャル・エディション』として発売され、2018年には全公演が〈日本公演補完シリーズ〉として、コンサートの写真をアルバム・ジャケットに使い、2時間弱のコンサートがそれぞれ2枚組のCDとして日本発売されていた。今回のリイシューは東京での6公演で、24年の最新リマスター、高品質のSHM－CD、アルバム・ジャケットはそのまま同じデザインだ。東京以外の残りの5公演も同じ形での発売が今年に入って実現している。商品の詳細な解説を参考に6タイトルを聴いてみよう。

初日からの三日間は『スラック』からの10曲に加えて「太陽と戦慄パートII」「レッド」「インディシプリン」「エレファント・トーク」「ニューロティカ」「スリー・オブ・ア・パーフェクト・ペアー」を含む22曲をまったく同じ曲順で演奏しており、東京初日の[1]『1995年10月2日（月）東京・新宿厚生年金会館大ホール』では、まだバンドもPAエンジニアも調整段階にあるようで、コンサートの初めの方は音のバランスにばらつきがある。6曲目の「レッド」から演奏も乗りはじめ、「B'ブーム」のドラム・ソロには圧倒される。「太陽と戦慄パートII」でいったん終了し、アンコールの「ウォーキング・オン・エアー」の余韻で会場の興奮がおさまっていくようだ。

[2]『1995年10月3日（火）東京・新宿厚生年金会館大ホール』は、前日の手探り感が解消され、はっきりとした音像だ。『スラック』の3曲「ダイナソー」「B'ブーム」「スラック」はアルバムより進化している。同じ場所での最終公演とはコンサートの流れが大きく違っていることにも気付く。

[3]『1995年10月5日（木）東京・中野サンプラザ』は、翌日のコンサートと共にヴィデオ収録が行なわれたもので、二日間のコンサートから編集された映像は『ライヴ・イン・ジャパン』と『デジャ・ブルーム』として発表されている。サウンドボード・ダイレクトのDAT録音からマルチトラック録音に変わっており、オープニングの「サーキュラー・インプロヴィゼイション」はこの日だけ特別の長さで臨場感を増す結果となっている。曲順にも変化があり、「スリー・オブ・ア・

CamScannerでスキャン

パーフェクト・ペアー」が15曲目から10曲目に繰りあげられ、「ニューロティカ」が10曲目から16曲目に下げられ流れを変えようとの思惑が感じられる。ヴェテラン・ファンには嬉しい選曲の「太陽と戦慄パートII」の充実ぶり。「Bブーム」とそれに続く「スラック」のドラム・バトルはスタジオ・アルバムとは違うライヴならではの聴きごたえがある。映像用のためかコンサートの雰囲気を伝える歓声や拍手がかなり長く収録されている。

[4]『1995年10月6日（金）東京・中野サンプラザ』も前日と同じセットリストで演奏されており、バンドの安定度がわかる。リズムへのこだわりが顕著で、「Bブーム」は他の日と比べるとスペイシーな前半が長い。

[5]『1995年10月10日（火）東京・人見記念講堂』は、初日からあった「スリー・オブ・ア・パーフェクト・ペアー」がこの日から最終日までの4公演ではなくなり、日本語でタイトルが付けられた「待ってください」はこの日が最後の演奏となった。前日の大阪公演から「セラ・ハン・ジンジート」が新たに選曲され、最終日まで2曲目という早い段階で演奏されている。それまで2曲目に演奏されていた「ヴルーム・ヴルーム」はこの日だけ演奏されていない。ここでツアー後半にかけて流れを含めて見直しをはかったものと思われる。

[6]『1995年10月14日（土）東京・新宿厚生年金会館大ホール』は日本公演の最終日。歓声と謝辞が収録され、ツアー最後の曲はこれまでの東京公演ではラストに演奏されていた「ウォーキング・オン・エアー」ではなく、「太陽と戦慄パートII」だ。メンバーの作ではないパーカッションの共演となる「プリズム」はスタジオ・アルバム未収録曲で、95年5月からのツアーで演奏されていたが、日本のファンには未知の曲だった。演奏の速さに耳が慣れるまでは大変だが、コンサート自体はこの日がベストの出来だと思う。キング・クリムゾンの熱心なファンなら、すでにこの6枚を聴いて分析しているだろうが、どれか1枚なら最終公演をお薦めする。

前例のないダブル・トリオという編成で臨んだキング・クリムゾンの日本公演は、ところどころでビル・ブルフォードのツッコミによる、日によって微妙な違いはあるにしろ、その時のノリで個々のパフォーマンスが大きく変わるようなものではなく、しっかりとした曲構成を維持するロバート・フリップの強い意志に貫かれているように思う。ロバート・フリップが立ち上げた自身のレーベル、ディシプリン・グローバル・モービルからのキング・クリムゾンの公式ライヴ・アルバムは、この先もとどまるところを知らない。

キング・クリムゾン日本公演補完シリーズ in SHM-CD <1995年東京公演編>

[1]『1995年10月2日(月)東京・新宿厚生年金会館大ホール』
POCS1990～1

[2]『1995年10月3日(火)東京・新宿厚生年金会館大ホール』
POCS1992～3

[3]『1995年10月5日(木)東京・中野サンプラザ』
POCS1994～5

[4]『1995年10月6日(金)東京・中野サンプラザ』
POCS1996～7

[5]『1995年10月10日(火)東京・人見記念講堂』
POCS1998～9

[6]『1995年10月14日(土)東京・新宿厚生年金会館大ホール』
POCS2000～1

＊発売はすべてDGMディストリビューション・ジャパン／12・18発売／¥4000／2SHM-CD／紙ジャケット／日本語解説つき

CamScannerでスキャン

COLLECTOR'S TOPICS

『ヒプノシス レコードジャケットの美学』

ロックの夢と挫折が反映されたデザイナー集団の物語

ター村尾泰郎

60年代にロックが新しいアートとして捉えられるようになった時、ジャケットのデザインも変化した。そのきっかけを作ったのが、ストーム・トーガソンとオーブリー・パウエルが1968年に設立したイギリスのデザイナー集団、ヒプノシスだ。ドキュメンタリー映画『ヒプノシス レコードジャケットの美学』は、様々なミュージシャンのミュージック・ヴィデオやポートレイト写真を手掛けてきた写真家／映画監督のアントン・コービンが監督を務め、ロジャー・ウォーターズ、ポール・マッカートニー、ロバート・プラントなど多彩なミュージシャンや関係者の証言を交えながら、ヒプノシスの軌跡を辿っていく。

ストームとオーブリーは、64年にイギリスのケンブリッジで出会った。当時、ストームのアパートはヒップな若者たちの溜まり場で、そこにはストームの高校時代の同級生だったロジャー・ウォーターズやシド・バレットも出入りしていた。ストームはピンク・フロイドの『神秘』（68年）のジャケット・デザインをやらせてほしいとバンドに相談。それがヒプノシスの始まりだった。

『神秘』以降、ヒプノシスはピンク・フロイドのジャケットを手掛けるようになるが、なかでも衝撃的だったのが『原子心母』（70年）だ。一頭の牛が写っているだけで、タイトルもバンド名も入れないというアイデアに、バンドは大喜びしてレコード会社の重役は頭を抱えた。「ジャケットのアイデアはいろんなアートから盗んでいい」とストームは言うが、『原子心母』のジャケはマルセル・デュシャンが便器に『泉』というタイトルをつけてアート作品にしたことを思い出させる。

『原子心母』はジャケットがレコードの包装紙からアートになった瞬間かもしれない。

映画ではピンク・フロイドの作品以外にも、ヒプノシスが手がけた代表作を作品ごとに紹介しているが、彼らが脚光を浴びるきっかけになったのは、ナイス『エレジー』（71年）だったという。ストームが夢で見た"砂漠に転がっている赤いボール"というイメージを実現するためにサハラ砂漠で撮影した。『ウィングス・グレイテスト・ヒッツ』（78年）はアルプスの山頂で撮影。ピンク・フロイド『炎』（75年）では実際に人間に火をつけるなど、今ならAIで簡単に作れる写真を彼らは手間と金、そして、命までかけて制作していた。そのバカバカしいまでの情熱から、当時のロック・シーンの熱気が伝わってくる。その一方で、彼らはボツになったアイデアをリサイクルすることもあった。10ccがボツにしたアイデアを、後にウィングスが採用したことを本作の取材で知ったポール・マッカートニーが慌てる一幕もあるが、強烈なインパクトを持つピーター・ゲイブリエル〝2〟（78年）もボツから復活したデザインだったとか。

本作ではロジャー・ディーンやピーター・サヴィルといった同業者も登場。サヴィルが自身が手掛けたジョイ・ディヴィジョン『アンノウン・プレジャーズ』（79年）とピンク・フロイド『狂気』のデザインを比較するのも興味深い。途中でヒプノシスに参加するス

CamScannerでスキャン

ロッピング・クリッスルのメンバー、ピーター・クリストファーソンにもスポットを当てていたりと、ポストパンク世代のコーピンだからこその目の付けどころも光る。さらに下の世代でヒプノシスとは交流がなかったノエル・ギャラガーが登場して、大御所たちとは違った音楽好きの目線でコメントしているのもいい。レコードを買った帰りに電車の中でジャケットやライナー・ノーツを見るのが楽しいんだ、と嬉しそうに語り、レコードのジャケットは〝貧乏人のアート・コレクション〟だと言う。ノエルの言葉は観客の気持ちを代弁しているようで絶妙なキャスティングだ。

ヒプノシスの黄金時代はパンクという革命によって終わりを告げる。セックス・ピストルズのメンバーが〝I hate Pink Floyd〟と書かれたTシャツを着ているのを見た時の驚きをオーブリーが語るのを観て、以前、彼に取材した時に「勝手にしやがれ」のジャケットを見た時に自分たちの時代は終わったと思った」と語っていたのを思い出した。ヒプノシスが作るジャケットは、いつの間にか莫大な金が動くロック・ビジネスの象徴になってしまっていた。

さらに本作をほろ苦いものにしているのが、ストームとオーブリーの別れだ。天才肌でワンマン気質のストームと、情熱的でしっかり者のオーブリー。ロジャー・ディーンは「ストームが爆弾を落として、オーブリーがカケラを集めて作品に仕上げる」と二人の関係を表現するが、ひとつの時代を築きながらも、次第に彼らの関係は崩壊していく。ロックが新しい時代のアートになることを目指しながら、やがてビジネスに取り込まれていく。そんなロックの夢と挫折がヒプノシスの物語に反映されているようにも思えた。それでも、ヒプノシスのジャケットの魅力は今も色褪せない。

ヴィジュアルと組み合わさることで音楽は奥行きを増す。サブスクが主流になり、ジャケットの存在感が希薄になった現在。自分がせっせとレコードを買い続ける理由のひとつは、音が出る〝貧乏人のアート・コレクション〟に今も魅了されているからだと、本作を通して改めて気付かされた。

『ヒプノシス レコードジャケットの美学』
2月7日からYEBISU GARDEN CINEMA、シネマート新宿、シネ・リーブル池袋ほか全国順次公開　配給・宣伝：ディスクユニオン　©BMG Rights Management (UK) Ltd and Hipgnosis Songs Fund Ltd 2022. All rights reserved.
写真はヒプノシスの中心メンバー、オーブリー・バウエル（左）とストーム・トーガソン

『ヒプノシス全作品集 コンパクト版』
オーブリー・バウエル著、島田はつみ訳／シンコーミュージック／4500円／発売中
ヒプノシスが手掛けたジャケットのデザインすべてをカラーで掲載し、多くの重要作にオーブリー・バウエルが解説をつけている

CamScannerでスキャン

〈アライヴ・ザ・ライヴ〉レーベル

ライヴ盤シリーズからアメリカン・ロックと〈ヴィ・メタル系の10タイトルが登場

ター舷曳将仁

テレビやラジオの放送用ライヴ音源をCD化する〈アライヴ・ザ・ライヴ〉シリーズ。今回はアメリカン・ロックと〈ヴィ・メタル・アーティストの計10タイトルを紹介する。

[1]は、ビリー・ジョエルが78年3月5日にオランダのアムステルダムで行なったライヴを12曲収録。メガ・ヒット作『ストレンジャー』に伴うもので同作から4曲、76年発表の前作『ニューヨーク物語』から5曲を披露している。ボーナスとして、78年3月15日のドイツ、ブレーメン公演から5曲を収録。「素顔のままで」以外の4曲が、アムステルダム公演とかぶっていないのが嬉しい。

[2]は、ビリー・ジョエルとエルトン・ジョンの共演による〈フェイス・トゥ・フェイス・ツアー〉から、94年7月12日の米フィラデルフィア公演を2CDに全29曲収録。二人による『僕の歌は君の歌』『オネスティ』などの曲からスタート。エルトンとビリーが互いの曲を歌う趣向を含む各々のセットを挟み、ラストは再び二人による3曲で締めくくるという、英米ピアノマン夢の共演を堪能できる。

[3]は、アメリカを代表するブラス・ロック・バンド、シカゴの77年10月5日、米ピッツバーグ公演を2CDに完全収録。米6位を記録した『シカゴXI』に伴うもので、ヒット曲「朝もやの二人」や「シカゴへ帰りたい」など同作からは5曲を披露。『シカゴII』収録の組曲「バレエ・フォー・ア・ガール・イン・バキャノン」からハイテンションな演奏を聴かせる。同ツアー終了後の78年にテリー・キャスが拳銃の暴発事故で他界。彼を有したシカゴの最後のツアー音源としても貴重だ。

[4]は、ドゥービー・ブラザーズが93年に行なった来日ツアーから、10月9日の日本武道館公演を完全収録。当時の最新作『ブラザーフッド』(91年)収録曲と93年に発売されたベスト・アルバム『リッスン・トゥ・ザ・ミュージック』収録曲を含わせたようなセットリストで、新旧の代表曲がたっぷり味わえる。ラストの「リッスン・トゥ・ザ・ミュージック」では、当時、エリック・クラプトンのバック・バンドで来日中のリッチー・ヘイワード(リトル・フィート)がゲスト参加。

[5]は、アイアン・メイデンのライヴ音源で、81年4月28日のオランダ、ナイメーヘン公演からの10曲と、同年1月22日のドイツ、ブレーメン公演からの9曲を収録。2作目『キラーズ』を発表したばかりの時期で、ヴォーカルは昨年10月に他界したポール・ディアノ。いずれの音源もフェイド・インまたはアウトするが、ポールの叩きつけるようなヴォーカルとパンキッシュな勢いのある初期ライヴの凄みは十分に伝わってくる。

[6]は、85年1月19日にブラジルで開催された〈ロック・イン・リオ〉にオジー・オズボーンが出演した時のライヴを完全収録。3作目『月に吠える』発表後で、オジーのほかにジェイク・E・リー(g)、ボブ・デイズリー(b)、トミー・アルドリッジ(ds)、ドン・エイリー(kbd)の強力メンバー。初期の名曲群とブラック・サバス「アイアン・マン」「パラノイド」と、フェス向けと思われる強力なセ

CamScannerでスキャン

ストリスト になっている。

[illegible]は、オジーのバンドを脱退したジェイク・E・リーが、元ブラック・サバスのレイ・ギランらと結成したバッドランズのライヴ音源。2作目となる『ヴードゥー・ハイウェイ』発表に伴うツアーから、92年7月2日のロンドン公演を完全収録。ドラムはジェフ・マーティン。ボーナスとして、デビュー作発表後の89年7月21日に行なわれた、カナダのトロント公演を6曲収録。こちらのドラムは、後にキッスへ加入するエリック・シンガー。レイ・ギラン（93年に病死）のパワフルなヴォーカルとブルース色の強いハード・ロックという、彼らの音楽性の魅力を伝える音源だ。

[illegible]は、日本でも人気を博したハード・ロック・バンドのドッケンが、82年1月14日にドイツのテレビ・スタジオで行なったプロモーション用ライヴを完全収録。ベースは後にラットへ加入するフォアン・クルーシェという初期ラインナップ。81年にフランスのレーベルから発表したデビュー作の曲をまとめてライヴで聴ける貴重な音源だ。ボーナスとして、84年2月26日の米ミルウォーキー公演から、ジョージ・リンチのギター・ソロを含む計6曲を収録。ベースがジェフ・ピルソンに交代した黄金期メンバーでのライヴだ。

[9]は、ハード・ロック・バンドのホワイト・ライオンが、88年5月7日に行なったニューヨーク公演を完全収録。米11位を記録した『プライド』発表に伴うもので、なんと同作の全曲が披露されている。ボーナスとして、88年の来日ツアーから、9月18日に行なわれた渋谷公会堂公演の音源3曲を収録。

[10]は、ヴァン・ヘイレンが79年10月2日に行なった米アリゾナ公演音源を2CDに完全収録（ラストの曲のみフェイド・アウト）。2作目『伝説の爆撃機』に伴うツアーで、初期2作の曲と各メンバーのソロで構成されたセットリスト。彼らの音源は、これまでにも同シリーズで数作リリースされているが、デイヴィッド・リー・ロスがシンガーを務めた初期の勢いに満ちたライヴはやはり格別だ。

[1]ビリー・ジョエル『ライヴ・イン・アムステルダム1978』
IACD11496

[2]ビリー・ジョエル&エルトン・ジョン『ライヴ・イン・フィラデルフィア1994』
IACD11497〜8

[3]シカゴ『ライヴ・イン・ピッツバーグ1977』
IACD11499〜500

[4]ドゥービー・ブラザーズ『ライヴ・イン・ジャパン1993』
IACD11501

[5]アイアン・メイデン『ライヴ・イン・ヨーロッパ1981』
IACD11505

[6]オジー・オズボーン『ライヴ・イン・リオ1985』
IACD11506

[7]バッドランズ『ライヴ・イン・ロンドン1992』
IACD11507

[8]ドッケン『ライヴ・イン・ジャーマニー1982』
IIACD11508

[9]ホワイト・ライオン『ライヴ・イン・ニューヨーク1988』
IACD11509

[10]ヴァン・ヘイレン『ライヴ・イン・アリゾナ1979』
IACD11510〜1

＊発売はすべてAlive The Live（IAC）／1・17発売（[1]〜[4]）、1・24発売（[5]〜[10]）／オープン・プライス／英文ブックレット対訳つき／輸入盤国内仕様／完全限定盤

CamScannerでスキャン

ウォー・インタヴュー

ロニー・ジョーダンとジェリー・ゴールドスタインが語る74年の初来日公演と全盛期の活動

質問作成・文＝出田圭
通訳・翻訳＝前むつみ

米国西海岸はLA近郊を拠点とした、ローカルにしてミクスチャーな個性派ファンク・バンド、ウォー。先日、彼らの初来日公演を収めた2CD『ライヴ・イン・ジャパン1974』が日本先行でリリースされた。メンバーは、ハワード・スコット(g、vo)、ロニー・ジョーダン(kbd、vo)、B・B・ディッカーソン(b、vo)、ハロルド・ブラウン(ds、vo)、チャールズ・ミラー(s、cl、vo)、パパ・ディー・アレン(per、vo)、リー・オスカー(hca、vo)のオリジナル七人衆。[1]①③⑤[2]②④⑤⑥などの代表曲をはじめ、最も勢いがあった時期の演奏を、良質なリストア音源で体感できるライヴ盤だ。本号刊行時までには、初来日50年の記念ライヴ(@ブルーノート東京)も敢行しているはず。それらに先立ち、現ウォーで唯一のオリジナル・メンバー、ロニー・ジョーダン(LJ)と、長年のプロデューサーであるジェリー・ゴールドスタイン(JG)に話を聞くことができた。以下は、通訳の方が実施された個別電話取材をもとに構成。久々の機会でもあり、既知トピックと重なる内容も一部質問してもらっている。

日本はとくに印象的だった

はじめに、今回のライヴ音源が録音された74年の初来日公演のことを聞いた。

JG 初めての日本でもあったから、どんなライヴになるのか想像もつかなかった。全部で4公演だったと思うが、始まってみると観客の反応がすごく良くてね。英語の歌詞を覚えて一緒に歌ってくれるんで驚いた。日本でそんなことが起こるとはね。素晴らしいライヴだった。「シズオカ・チャント」([2]⑦)は観客と一緒に歌った素晴らしい曲だよ。

CamScannerでスキャン

『ライヴ・イン・ジャパン 1974』
ワーナー WPCR18720〜1／2CD／¥3182／歌詞・訳詞・解説つき／1・29発売

[1] ①世界はゲットーだ! ②サザン・パート・オブ・テキサス ③シスコ・キッド ④ソー ⑤オール・デイ・ミュージック ⑥ドント・レット・ノー・ワン・ゲット・ユー・ダウン

[2] ①ロータス・ブロッサム ②ジプシー・マン ③バンド・イントロ ④スリッピン・イントゥ・ダークネス・イントロ ⑤スリッピン・イントゥ・ダークネス ⑥ミー・アンド・ベイビー・ブラザー ⑦シズオカ・チャント ⑧ウェア・ワズ・ユー・アット

LJ　当時は数えきれないほどライヴをやったけれど、日本はとくに印象的だったね。バンドが好調なだけでなく、観客の盛り上がりがインスピレーションを与えてくれて、相乗効果を演奏にもたらしたんだ。観客との音楽的コミュニケーションがとても楽しかった。これは観客とのコラボレーション作品だね。

74年の2LP『ライヴ!』（録音は72年終盤、73年初頭など諸説あり）に比べ、演奏がより引き締まった印象を受ける。

JG　『ライヴ!』の録音からほぼ2年経っているからね。その間に2枚のスタジオ・アルバムを出したし、コンスタントにライヴもやって、バンドは成長していたんだ。

その時点での最新スタジオ作『デリヴァー・ザ・ワード』（73年）では、キーボードの音色にいくつかヴァリエーションを加えた印象もあったが、当ライヴCDでの演奏は、真骨頂のギミックレスな骨太ファンク。このときステージで使った鍵盤楽器を思い出してもらえるかロニーに頼んでみた。

LJ　そうだなぁ、たぶんヤマハのシンセサイザー…いや違うな、まだシンセサイザーは使っていなかった。そうだ、フェンダー・ローズとハモンドB・3オルガン!

今回のライヴ盤では、当時は未完成だった次作アルバム『仲間よ目をさませ!（Why Can't We Be Friends?）』（75年）から3曲（[1]④⑥[2]①）を演奏している。

JG　ちょうど『仲間よ目をさませ!』が3分の2ほど仕上がった時期で、その3曲を日本で初めて演ったんだ。私たちは新しい曲を演奏するのが好きで、レコーディングしたての曲をプレイするのも楽しかった。

"Why Can't We Be Friends?"
United Artists UALA441G
[1975]（LP）

16分に及ぶ「ジプシー・マン」（[2]②）ではダイナミックなビート展開も聴ける。

JG　ジプシーのように世界中を旅している私たちの心境を歌った曲だね。演奏は、毎晩ジャムっているうちにどんどん変化していくから、ライヴでの演奏も毎回違う。今回選んだのはそのうちのベストだよ。

同曲のスタジオ版（前記『デリヴァー・ザ・ワード』所収）は、当時まだ少数派といえたはずのディスコ・ビートが特徴的だ。

JG　あれもジャムから生まれたんだ。私は常に録音機器をオンにしていて、ジャムをすべて録っていた。面白いものがあれば曲にしたり編集したりね。ジャムを曲にま

CamScannerでスキャン

とめるのにはすごく時間がかかったよ。

なるほど60年代ラテン・ソウルなどでの四つ打ち系ビートはディスコにも通じそうなわけで、彼ら持ち前のラテン性がジャムで揉まれそこに着地したのかもしれない。

JG　歌詞についてもジャムの最中に誰かがアイディアを思いつき、それを膨らませながら仕上げていって、誰が歌うかもみんなで決めた。すべてはジャムから始まるんだけど、常に鍵となるのはグルーヴだね。2025年リリース予定の『仲間よ目をさませ！』のボックス・セットには、未発表曲やヴァージョン違いのほかにジャムの様子も入れるつもりだから、ジャムから曲に発展する過程がよくわかると思うよ。

ジャムりながら、全員でつくり上げていくウォーの楽曲は、大半が“written by War”のようにクレジットされている。そんなウォーの初期やそれ以前にも目を向けてみたい。たとえば、ロニー・ジョーダンの演奏にはしばしばゴスペルが感じられる。

LJ　そう、私はそこからスタートしたんだ。9歳の時から教会でゴスペルを演奏していたよ。ゴスペルからジャズ、ジャズからR&B、R&Bからラテンという具合にいろいろな音楽をプレイするようになった。

60年代前半、LAの南側に位置するコンプトン近郊のティーネイジャーだったハワード・スコット、ハロルド・ブラウン、B・B・ディッカーソン、ロニー・ジョーダンの4人が結成したクリエイターズがウォーの母体。ロングビーチ界隈などで活動した彼らには、やや遅れて近隣のチャールズ・ミラーが参加。やがてナイトシフトと名を変えた彼らはパパ・ディー・アレンを迎え、さらに彼らに注目していたジェリー・ゴールドスタインを介してエリック・バードン（英国出身／元アニマルズ）とリー・オスカー（デンマーク出身）もジャムに参加しそのまま加入した。なお、複数バンドの掛け持ちだったチャールズには、セニョール・ソウルというバンドでの契約もあり、ウォーの面々がひと肌脱ぐ機会もあったようだ。

LJ　アルバム契約だったんで、私たちが何曲か参加してセニョール・ソウル最後の一枚を作った。そのときのセニョール・ソウルはほとんどウォーだったわけさ（笑）。

60年代の末に出会い、彼らと組んで2枚のアルバムを残したエリック・バードン（71年初頭前後に発病などで脱退）は、彼らの方向性に影響を与えたのだろうか。

LJ　（エリックと出会う以前に）私たちの方向性はすでに決まっていたよ、目指すサウンドもね。自分たちを信じ、それに向かって進んでいったんだ。

曲を書くという意識がなかった

バンド名“ウォー”の由来は現状“諸説あり”のようで、あらためてロニーに聞いた。

LJ　ウォーという名はエリック・バードンが考えたんだ、ヴェトナム戦争の真っ最中にね。当時はヴェトナムに限らず、そこかしこで戦争が勃発していた。それでウォーという名前にしたんだが、それは戦争に対する我々の抵抗という意味、戦争反対の意味だった。武器の代わりに楽器を持って戦争に反対するという意思を込めたんだ。

当時のスライ&ザ・ファミリー・ストーンやサンタナ、ジミ・ヘンドリクスをどのようにみていたのだろう。

LJ　みんな自分のスタイルを持っていて素晴らしいと思っていたよ。スライたちのファンキーな音楽や、サンタナのラテン・ミュージックが大好きだった。ジミはロックンロール、ブルース、R&Bのすべてを兼ね備えた最高のギタリストだ。ほかにもジェイムズ・ブラウンなど素晴らしいアーティストがたくさんいたね。

CamScannerでスキャン

ロンドンでジミ・ヘンドリクスと共演、という伝説のような逸話もある。

LJ　本当だよ。彼が亡くなる前の夜に一緒にプレイした。ロニー・スコッツというクラブでね。彼はとても元気で、私たちのステージに飛び入りし、メンフィス・スリムの「マザー・アース」を一緒に演った。1時間くらいジャムったかな。全員がソロを取ってね、楽しかったよ。その翌日、彼は亡くなったんだ。ものすごくショックだった。

多様なエレメンツが渾然となったウォーの音楽にはロック感覚も見てとれる。特定の影響源はあるのだろうか。

LJ　影響はすべてのアーティストから受けているよ、ジャンルに関係なくね。私は競争するのが嫌いなんだ。クラシックもジャズもR&Bもラテンもレゲエも全部好き。私たちはいつもオープンだったから、他のバンドも喜んでジャムに参加してくれた。デラニー&ボニー、リトル・フィート、カルロス・サンタナ、バディ・マイルス、ミーターズとかね。みんな独自のスタイルを持っていて、学ぶことがたくさんあった。

よくいわれるように、ウォーの72年ヒット「スリッピン・イントゥ・ダークネス」（71年の名盤『オール・デイ・ミュージック』所収／前掲ライヴCDでは「2」（355）は、73年のボブ・マーリー&ザ・ウェイラーズ「ゲット・アップ・スタンド・アップ」に影響を与えた。また、それ以前からウォーとウェイラーズは面識があったとの説もある。

LJ　ボブ・マーリーとはよい友人だった。彼は「スリッピン・イントゥ・ダークネス」をすごく気に入ってくれてたんだ。「ゲット・アップ・スタンド・アップ」には感動したよ。彼とは音楽的な共通点がたくさんあって、互いに影響し合っていた。

ラテンのリズムやパーカッションもウォーの大きな特徴のひとつだ。

LJ　サルサも好きで、ファニア・オールスターズやパルミエリ兄弟など、好きなアーティストは大勢いるよ。

LA近郊のチカーノ・コミュニティとの交流はどんな感じだったのだろう。

LJ　私が育ったコンプトンという街はイーストLAにも近く、チカーノの人たちもたくさん住んでいた。私たちには共通の楽しみや大切にしているものがあった。まずファミリー、そしてパーティに音楽だ。彼らとは自然に親しくなったよ。

ロニーのいうファミリーは文字どおり家族の意味だろうけれど、それをオーディエンスやコミュニティなどにも拡げるなら、パーティや音楽とともに、ウォーの立脚点そのものでもある。初来日ライヴの場にも、おそらく同様のものがあったのではないか。

唯一無二ともいえる個性的なバンド、ウォー。その独特の音楽性やアーシーな感覚はどこから来ているのだろう。

JG　ハートからだよ。メンバーがそれぞれ経験したこと、感じたことを音楽に反映した。それがウォーの素晴らしさでもあり、マジックでもあったんだ。

LJ　ひとついえるのは、私たちには曲を書くという意識がなかったということ。曲を書くのではなく、ジャムっているうちに曲が現われる。メンバーがそれぞれ聴いていた音楽を持ち込んで、自由にストリートで演奏している感じだね。ウォーはユニヴァーサル・ストリート・バンドなんだ。

〔24年12月18日　電話インタヴュー〕

"All Day Music"
United Artists UAS5546
[1971] (LP)

CamScannerでスキャン

COLLECTOR'S TOPIC

『ミュージック・フォー・ブラック・ピジョン』

名ジャズ・プレイヤーたちが演奏する〝夢の場所〟を切り取ったドキュメンタリー映画

文／原田和典

まず原題に惹かれた。〝黒い鳩のための音楽〟？　いったいそれはなんなのだ？と、さらに鑑賞に身が入る。

ギタリストのヤコブ・ブロ（1978年、デンマーク、コペンハーゲン生まれ）を中心とする、彼と仲間たちの事象を動画として切り取った作品といえばいいか。収録地域は北米、ヨーロッパ、日本。期間は14年間に及ぶ。監督は『完全な人間（The Perfect Human）』などを残すと同時にジャズ評論家や詩人としての一面も持つヨルゲン・レス（37年、デンマーク、オーフス生まれ）と、レオナルド・ダ・ヴィンチの幻の名画を題材にしたドキュメンタリー『ロスト・レオナルド～史上最高額で落札された絵画の謎』を手掛けたアンドレアス・コーフォード（79年、デンマーク、コペンハーゲン生まれ）。作品中では、ヤコブに加え、ビル・フリゼール、リー・コニッツ、ジョー・ロヴァーノ、マーク・ターナー、トーマス・モーガン、アンドリュー・シリル、高田みどり、マンフレート・アイヒャーらもフィーチャーされる。以下、〝この映画に接してよかった〟と思ったところを書いていく。

●録音中のスタジオにカメラが入る

スタジオでのレコーディングは基本的にクローズドで行なわれるので、参加ミュージシャンか制作スタッフにならなければ立ち入りは困難を極める。つまり、いちリスナーにとっては〝夢の場所〟である。そこにカメラが入ってしまった。おかげで、ザ・パワー・ステーションとして創業し、2017年からはパワー・ステーション・アット・バークリーNYCという名称になっている老舗スタジオの、〝アヴァター・スタジオ時代〟の様子も見ることができるのだ。しかも、セッションによっては、ブースを使わず、参加メンバーが一か所に集まって輪になって演奏する。

●レコーディング本番前の気迫

スタジオに集まった音楽家は、いきなり本番にとりかかるわけではない。まず楽器をケースから出し、各自で調子を整えていく。マーク・ターナーのウォーム・アップ風景から放たれる、なんと滑らかなフレーズ、美しい音色。重鎮リー・コニッツにしても、マウスピースを無造作にくわえてフッと出した一音目から、もう完全なるリー・コニッツである。

●コンサートからクラブまでのライヴ風景

レコーディング場面同様、ライヴ場面も見ごたえあり。ヤコブと高田みどりのコンサートにおける、高田がマリンバで行なう繊細なマレットさばきに酔いしれ、ファンとして足を運んだ場合、写真一枚すら撮影が許されないはずの名門ジャズ・クラブ、ヴィレッジ・ヴァンガードでのセッションが店内のレイアウトと共に楽しめるありがたさに浸る。

●名言、名リアクション多数のインタヴュー

歌手以外の肉声に接する機会は希少だ。だから私も〝この人はこんな声でこうしゃべるのか〟など興味津々で見た。なかでも「私は音楽プロデューサー」と自己紹介する、マンフレート・アイヒャーの存在感のすごさよ。ヤコブがトーマス・スタンコを偲んだ「トゥ・スタンコ」を共に聴きなおしているときの、

CamScannerでスキャン

左から、パレ・ミッケルボルグ(tp)、ヨン・クリステンセン(ds)、トーマス・モーガン(b)、ヤコブ・ブロ(g)

『ミュージック・フォー・ブラック・ピジョン ――ジャズが生まれる瞬間――』
2月28日(金)からヒューマントラストシネマ渋谷、シネ・リーブル池袋 ほか全国で公開予定　配給・宣伝:ディスクユニオン
©2022 RISE AND SHINE WORLD SALES UG All Rights Reserved Exclusively licensed to disk union Co., Ltd. in Japan

アイヒャーのリアクションからは、いかに彼が音楽を愛し、人間を愛し、歴史を尊んでいるかが伝わってきた。なお、初期のスタンコはクシシュトフ・コメダのバンドで活動し、本作監督のひとりであるヨルゲン・レスも若き日にコメダと交流があった。そして晩年のスタンコはECMに"Litania: Music Of Krzysztof Komeda"を残した。そうした背景を知っていると、涙が出そうになる。

●亡くなったミュージシャンの〝レガシー〟

ヤコブの演奏を私が初めて聴いたのは09年のLoveland Records盤"Balladeering"だった。当時、ディスクユニオンに勤めていたジャズ担当者に薦められた。私の頭にはいかなる〝前例〟も浮かばず、その点でヤコブは実にすがすがしい印象を与えた。〝俺の即興を聴け、このドライヴ感やグルーヴ感に唸れ〟的場面がなく、音を空間に漂わせていた。だが、ヤコブも当然ながら音楽シーンの先達の間でセンスを磨き上げた。

ドラマーのポール・モーシャンとトランペッターのトーマス・スタンコは、別格的な師ということになろうか。モーシャンの演奏ぶりを、カメラは丁寧に追う。ドラマーの両手両足の動きを後ろから見ることなど、まずありえないので、私は〝モーシャン・ビート〟生成の過程に立ち会ったような嬉しさを覚えた。スタンコはフッテージによる挿入で画質も良くないが、巧みな編集ぶりは彼がヤコブの心の中に宿っていることをしっかりと示す。

ほか、20年に他界したヨン・クリステンセンの、タムの縁を効果的に使ったドラム・プレイにも酔いしれずにはいられない。同年に他界したコニッツは、前述のモーシャンを含むレコーディングではサックスのベルの中に布を入れて〝ミュート奏法〟をしており、これも興味深く見聴きした。私は、かつてテナー・サックス奏者のスコット・ハミルトン(OKAMOTO'Sのオカモトショウの父)がリハーサルでベルの中に詰めものをしている写真を見たことがあるが、コニッツは実際の録音でこのミュート効果を用いていたのである。

登場人物による音楽や発言を収めた、その名も"Music For Black Pigeons Motion Picture Soundtrack"がLovelandから発売中。加えて、ヤコブがコニッツ、フリゼール、モーガン、シリル、ジェイソン・モラン(彼は映画に登場せず)と14年に収録していた音源がECMから『テイキング・ターンズ』というタイトルで陽の目を見たばかりだ。

さて、〝黒い鳩のための音楽〟とは何か。それを知るためにも、最後の最後までじっくりと目と耳を凝らしていただきたい。

CamScannerでスキャン

COLLECTORS TOPIC

スリー・ブラインド・マイス

和ジャズを代表するレーベルのカタログから3作品がリイシュー

文＝土佐有明

欧州でも耳ざといリスナーやDJたちに支持されている和ジャズのレーベル、スリー・ブラインド・マイス（TBM）が、オリジナル・アルバムの〝プレミアム復刻コレクション〟をスタートさせた。70年代、日本のジャズ・ミュージシャンによる新録音を中心にリリースしてきたTBMの面目躍如たるラインナップとなっており、LPとCDでリリースされる。レア盤を漁り続けてきたディガーにとっては垂涎ものだろう。ここでは、2月26日に発売される3タイトルを紹介する。

なお、いずれの作品も米国の名エンジニア、バーニー・グランドマンがリマスタリングとアナログのカッティングを手がけている。60年代からコンテンポラリー・レコードやA&Mレコードのマスタリング部門で活躍し、キャロル・キング、マイケル・ジャクソン、スティーリー・ダンなどの名盤にエンジニアとして関与した彼の、今回のリリースへの貢献は大きいと見た。ひとつひとつの音の輪郭が明瞭で、分離もよく、奥行きのある音像が愉しめるはずだ。

鈴木勲＋1『ブルー・シティ』は74年の録音。2022年に逝去したベーシスト、オマさんこと鈴木勲のセカンド・アルバムだ。前作『ブロー・アップ』がジャズ・ディスク大賞の日本ジャズ賞を獲得した鈴木が、その勢いを駆ってレコーディングした作品で、彼はアナログのA面ではチェロを、B面ではベースを演奏している。メンバーは鈴木の他に、渡辺香津美（g）、井野信義（b）、小原哲次郎（ds）、菅野邦彦（p）という強力な布陣で、鬼気迫る演奏が堪能できる。

目玉と言えるのは、重厚で硬質な音色で魅了する鈴木のチェロだろう。むろん、ミルト・ヒントンからの影響を滲ませる、歌うようなベース・ラインも素晴らしく、彼がアンサンブルの中心に鎮座していることがよく分かる。一方で、ブルース・フィーリング濃厚な菅野のピアノ、ボサノヴァなどブラジル音楽の要素を消化した渡辺のギターもツボを押さえたプレイで、アルバムに厚みをもたらしている。全体的に硬派で、ヴァイタリティあふれるジャズが味わえる一枚だ。なお、鈴木はCRCK/LCKSのメンバーとして今をときめく若手ギタリスト、井上銘を早くに見い出し、OMAバンドに引き抜いた実績がある。この慧眼ぶりも決して忘れてはならないだろう。

中村照夫グループ『ユニコーン』は、73年の録音。中村照夫（b）は64年に渡米してNYで音楽活動を開始し、69年にはスティーヴ・グロスマン、レニー・ホワイトらとジャズ・サマリタンを結成。その後、ロイ・ヘインズのグループにも加わった。本作は、彼のデビュー作にしてリーダー作だ。時代的な流れもあったのだろうが、エレクトリック期のマイルス・デイヴィスやそこから分派していったフュージョン／クロスオーヴァーの余波を受けた作風。初期ウェザー・リポートのメンバーだったアル・ムザーン（ds）が屋台骨を支えているのも、そうした印象をより強めている。

他に、マイルスとの共演歴もあるスティーヴ・グロスマン（ss、ts）やレニー・ホワイト

CamScannerでスキャン

（ds）、チャールズ・サリヴァン（tp）、ジョージ・ケイブルズ（p、el-p）らが参加している。ロナルド・ジャクソン、岸田恵士、アルヴァン・バンと3人のパーカッション奏者が顔を揃えているのもポイントで、彼らが作品のダンサブルなグルーヴを強化していると言えるだろう。さきほどエレクトリック・マイルスと書いたが、本作には、サンズ・オブ・ケメットやザ・コメット・イズ・カミングといった、昨今のロンドン発のジャズ・コレクティヴに耽溺しているリスナーも虜にするような響きがある。

冒頭から野性的でアグレッシヴなドラム・ソロが展開される「サム・アザー・ブルース」。粘っこくタメの効いたファンク「ウマ・ビー・ミー」、中村流スピリチュアル・ジャズとでもいうべき「ニュー・ムーン」など、名演がたっぷりと詰まったアルバムで、ロンドンのDJたちの間で和ジャズ再評価のきっかけとなった作品なのも納得できる。

菅野邦彦トリオ+1『慕情』は74年の録音。ピアノの菅野のほか、小林陽一（b）、高田光比古（ds）、小川庸一（コンガ）という布陣で、オーセンティックななかにもエッジの効いた演奏を聴かせる。エロール・ガーナーをして〝日本一のジャズ・ピアニスト〟と言わしめた菅野のタフでエネルギッシュなピアノは絶好調で、特に「枯葉」ではキース・ジャレットのように雄叫びをあげながら、軽快に飛ばしまくる。リスナーもつられて快哉を叫びたくなるような、ダイナミックかつ躍動的なフレージングが強烈な印象を残す。

小林と高田のリズム隊は単に底辺を支えるのではなく、独立したヴォイスで己を主張し、アンサンブルに動的なフィーリングを与えている。また、コンガが加わることでビートのアタックの強さが強調されており、凡百のピアノ・トリオとは一線を画する仕上がりになっているのも見逃せない。「ブルース・フォー・ウィントン・ケリー」では菅野のウィントンへの思慕の念を、小気味よくスウィングするピアノ・ソロで表現。曲ごとに表情を変えるピアノのタッチや音色は驚愕もので、菅野の音楽的なヴォキャブラリーの多さと幅の広さを窺わせる。

いずれも70年代に発表されたこれらの作品に共通するのは、武骨さとたくましさ、独特のざらついた手ざわりだろう。まるで拳骨で殴ってくるような印象すら受ける鈴木のチェロも、野太い音色で迫ってくる中村のベースも、口当たりのよさとは無縁の菅野のピアノも、この時代ならではの混沌とした響きと呼応している。もちろん、いずれも彼らの若かりし日の録音であり、それゆえに〝怒れる獅子〟という側面がストレイトに表出しているのだろう。荒々しい音塊に息を呑むこと必至である。

鈴木勲カルテット+1
『ブルー・シティ』
MHCL10177

中村照夫グループ
『ユニコーン』
MHCL10178

菅野邦彦トリオ+1
『慕情』
MHCL10179

*レーベルはすべてスリー・ブラインド・マイス（ソニー・ミュージックレーベルズ）／¥2727／SACDハイブリッド／2・26発売／タワーレコード限定販売

*同内容のLPである鈴木勲カルテット+1『ブルー・シティ』（MHJL403／¥4400）、中村照夫グループ『ユニコーン』（MHJL404／¥4400）、菅野邦彦トリオ+1『慕情』（MHJL405／¥4400）も同時発売

CamScannerでスキャン

インテリア〜インテリアズ／日向大介 インタヴュー

世界的に再評価の高まるエレクトロニック・ユニットの2作品がリイシュー

聞き手＝小山守

80年代に活動したエレクトロニック・ユニットのインテリア〜インテリアズによる2作品が、それぞれCDとアナログ盤で再発された。彼らは、沢村満(s)、日向大介(kbd)、野中英紀(g)、別当司(ds)の4人で結成。82年に細野晴臣プロデュースのファースト『インテリア』を出し、85年には日向と野中の二人組となりインテリアズと改名して米ウィンダム・ヒルからファーストの編集盤『インテリアズ』を世界発売。そして87年にはセカンド・アルバム『デザイン』をリリースしている。その後、自然消滅してしまうが、2019年に米ライト・イン・ジ・アティックによる日本の環境音楽を紹介した画期的コンピ『Kankyo Ongaku』に彼らの〈PARK〉が収録されたことがきっかけのひとつとなり、世界的に注目が高まったことなどもあって、今回のリイシューにつながった。彼らの音楽は、アンビエント、ニューエイジ、ミニマル、ファンク、現代音楽などの要素が混在しつつ、それを鋭利な実験精神や洗練された都会的センスで表わしたものだ。今回の再発を機に、日向にユニットのヒストリーについて語ってもらった。

爆音でやっていたライヴ

――まず81年に、メンバー4人がバークリー音楽院の卒業後に結成したそうですね。

「実は一人しか卒業していないんですけどね(笑)。僕は卒業よりもどうやったら早くデビューできるのかなって考えてて。なんでアメリカに来たかっていうと、日本で音楽をやりたくなかったんですよ。自分たちの好きなものがあんまり売れていない国だったので。ウェザー・リポートとか、そういう音楽をやりたくて。でもボストンでYMOやプラスチックスを見て、今の日本はこういうものが流行ってて、自分たちがいない間に進化しちゃったのかな、って思って。そろそろ帰っても受け入れてもらえるんじゃないかって。でも受け入れてくれたのは細野さんくらいだったけど(笑)」

――そのYMOの『BGM』に触発された

右上から時計回りに日向大介、野中英紀、別当司、沢村満

CamScannerでスキャン

のが結成のきっかけといわれていますが、実際そんな感じだったんですか。

「そうですね。アメリカのハイファイ環境で大音量で聴く『BGM』には、ジェネシスと同じような感じでノックアウトされた。ジェネシスとかのプログレに聞こえちゃったんですよね」

――そこから、どういう音楽をやりたいっていうヴィジョンはあったんですか。

「当時、聴いていたのは、フュージョンの中でも、ブレッカー・ブラザーズとかスパイロ・ジャイラみたいなのじゃなくて、ハードコアな、ジャズの要素を残したような音楽が好きで、それとスティーヴ・ライヒとかブライアン・イーノとかにも興味があって。現代音楽に頭突っ込んじゃったというのもあって、現代音楽が煮詰まってこの先はないなっていう時に、スティーヴ・ライヒみたいなミニマルのサウンドがすごく新しく感じて。それと昔から聴いているジェネシスとかピーター・ゲイブリエルとかピンク・フロイドとか。それでなにやろうかってなった時に、ミニマルな感じが出てきちゃった。ギターの野中はロッカーだから、ミニマルをやるにしても、爆音でやりたかったんですよね。踊らせるとか、ちょっとしたR&B感とか、それでみんなが踊り出せば、音楽がわかりにくくても大丈夫だろうって。当時、よくファッション・ショウに呼ばれたんですよ。倉庫みたいなところでやる文化的なイヴェントで重宝されて、そこで爆音でやっていたんです。作品ではわからない、来ないとわからないことをやってて、来た人たちはそんなの聴いたことがないからおもしろがって。それでライヴをやらせてもらう機会が増えていって」

――『インテリア』はロック的な要素もあるし多彩ではあるんですけど、端的に言えば静謐な曲が中心ですよね。でも、もともとは爆音メインだったわけなんですか。

「ライヴと並行して、今度はそれを作品にしなきゃならないので、爆音環境みたいなのがないと、音をジャーンって鳴らしてもちっちゃく終わっちゃうじゃないですか。当時、流行っていたデジタル・ディレイで環境音を作り上げていたんですけど。それをまとめるのにどうしようってことになって、ちっちゃくまとめたって感じですかね。あるいは起承転結を作ってみたりね。だから僕らの中では意識の変化はないんですよ。同じことをやっているつもりで」

――ファーストは環境音楽とか、エリック・サティ〈家具の音楽〉的な考え方とかの側面もあると思いますが、そういうところを求めたというのはなかったんですか。

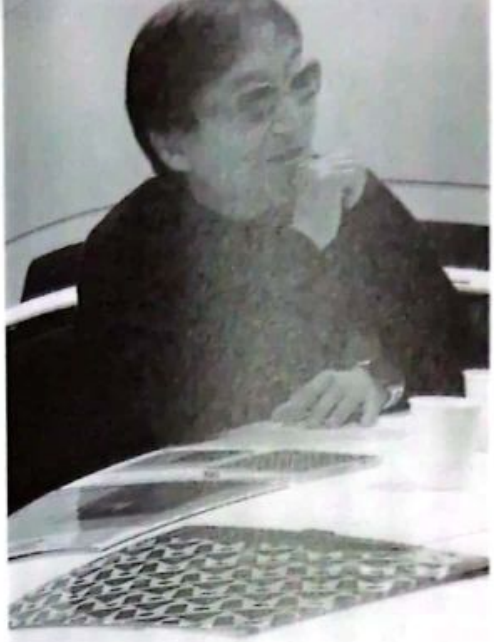
「そういう部分は、昔、武満徹さんの『音、沈黙と測り合えるほどに』を読んで、日本の音楽の伝統でひとつだけいいところはそ

『インテリア』
GT（ソニー・ミュージックレーベルズ）MHCL31015～6（2Blu-spec CD）、MHJL372（LP）／¥3200（LP=¥4400）／解説＝Chee Shimizu／発売中

[1]〈YEN盤『インテリア』1982年作品〉①TECHNOBOSE ②GIANT STEPS ③FLAMENGO ④N.F.G. ⑤REPLY ⑥TIMELESS ⑦COLD BEACH ⑧LUFT ⑨ASCENDING ⑩PARK

[2]〈ウィンダム・ヒル盤『インテリアズ』1985年作品〉①TECHNOBOSE ②GIANT STEPS ③FLAMENGO ④TIMELESS ⑤HOT BEACH ⑥REPLY ⑦LUFT ⑧ASCENDING ⑨PARK

*LPにはディスク1のみ収録



日向大介

こかなって思いましたよね。沈黙っていうか。そういう意味で、ああいう静かなものにぽかーんと落っこちゃった、みたいな。ソフト・アンビエントとかハード・アンビエントとか自分たちでは言いつつ、両方をやっていた感じですかね」

――結成当初は沢村さんが中心だったと思うんですが、アルバムを出す頃は日向さんが中心になっていったんですか。

「僕中心というよりは、僕と別当と野中が中心になっていった。僕はなんとか売れるサウンドというか、自分の好きな方向に持っていこうとしたんですよね。みっちゃん（沢村）はそれよりもっとピュアなアイデアだったんで。最終的に、ここは俺のいるところじゃないなって思ったみたいで」

――それで二人組になって、インテリアズに改名しますね。

「みっちゃんが〝インテリアとしてそっち行っちゃうんだったら、賛成できないから名前変えてくれよ〟って言うから、〝ズを付ければいいっ〟って言ったら〝いいよ〟って（笑）。サックスっていう単音楽器を、僕が使い切れなかったというのもあるんですよね。入れるところがない。そこにあまり価値を感じなくなっちゃっていたりね」

――二人で続けることになったということは、野中さんとはやりやすかった？

「〝ふざけんなよ〟って思った直後に、いいことやる、とかね（笑）。結局続いてきたから、こいつやるじゃんってなっていったんですよ。新しいアイデアを持ってきたりね。だからすごくおもしろかったです」

自分の知識を全部使った2枚目

――それで、アメリカのニューエイジ・ミュージック系レーベルのウィンダム・ヒルと契約して、87年に『デザイン』をリリースするわけですが、サンフランシスコでレコーディングしていますよね。

「そうですね。デジタル・マルチ・トラック・レコーダーのオタリDTR900が出たばっかりで、すごく音が良くて、オタリに交渉したら、サンフランシスコまで送ってくれたんですよ。ジェリー・ガルシアの家の隣にあるザ・サイトってスタジオを借りられることになって、勝手にやらせてもらえて、たぶん1カ月くらいいたのかな。野中が最初に〈Gaia〉を持ってきて、彼は〝地球が終わるぞ〟みたいな、一人危機感に襲われてて（笑）。それでかわりばんこに曲を出していった感じですね」

――〈Shadows of You〉は、11分以上にわたってアコギのアルペジオが繰り返されて、徹底したミニマルをやっていますね。

「当時、リピートの音楽みたいなのをよくやってて、こういうのは得意なんですよ。ドレミをミレドってひっくり返して、先へどんどん展開していくっていう。シェーンベルクの理論で、ドレミに対してミレドだと時間が戻るとか、そういうことがおもしろくなってて。そんなわけで、2枚目は自分の知識を全部使い果たしたんですよね」

――あと〈River〉ではいくつもの層が重なったような複雑な構造で独特の音響を生んでいたりとか、エクスペリメンタルな部

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

COLLECTOR'S TOPIC

裸のラリーズ

山口冨士夫在籍〝ダブル・ヘッズ期〟の一瞬の閃きのような邂逅を記録した公式ライヴ音源2種

文＝小川真一

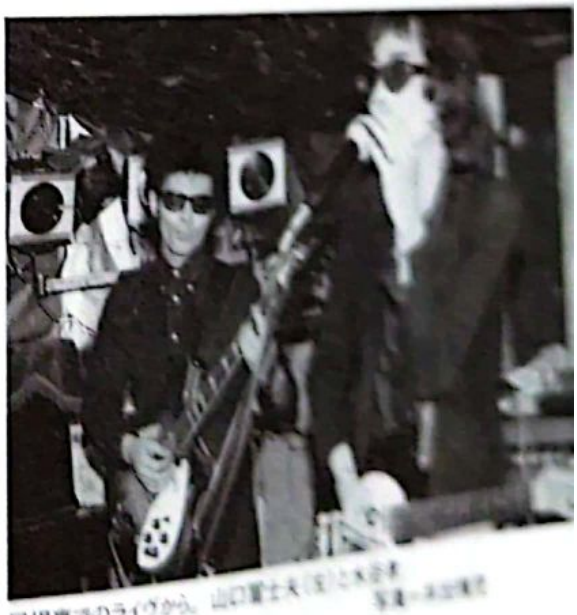
この邂逅はいったい何だったのだろうか。二人がどのような角度で出会い、どのような偶然と必然を介して別れていったのか。元ザ・ダイナマイツ／村八分の山口冨士夫が、水谷孝率いる裸のラリーズのギタリストとして活動を開始したのは、80年8月の渋谷・屋根裏でのステージだった。これは途轍もない大きな事件であったと思うのだが、その翌年の81年春に冨士夫はバンドを離脱してしまう。まさに一瞬の閃きのような邂逅であった。

その密約の時間を記録したアルバムがリリースされた。『屋根裏 YaneUra Oct.'80』（The Last One Musique）と、『屋根裏 YaneUra Sept.'80』（同）の2種のCD／LPだ。山口冨士夫が裸のラリーズに加わったライヴは、全部で7回とされている。その中には、灰野敬二、財団法人じゃがたら、吉野大作&プロスティテュート、山崎春美などが出演した神奈川大学でのイヴェント〈100時間劇場〉（80年11月7、8日）、80年の11月23、24日に法政大学学館ホールで行なわれた〈IMAGINATIVE GARAGE〉もあるが、じっくりとグループの音を聞くのならば、渋谷のセンター街の近くにあったライヴハウス、屋根裏でのギグとなる。その屋根裏の音源がリリースされたのだ。

水谷孝と山口冨士夫がフロントに立っていた時期のことを、ラリーズ・ファンは〝ダブル・ヘッズ期〟と呼ぶ。双頭の大蛇が威嚇し合うように唸りをあげている様を想像するがいい。その緊迫感が音源を支配している。

『屋根裏 YaneUra Oct.'80』は、暗闇で穴を掘るような不気味なコード・カッティングで始まる。そこに血肉が宿り、水谷孝の漆黒を思わせるヴォーカルが始まっていく。どちらかがギター・ソロを弾き、もう片方がサイドに回るというスタイルではなく、互いが曲の流れに潜り込み、それぞれが自身の情感を音にしていくという形をとっている。どちらが出すぎても駄目で、薄氷を踏むような絶妙なるバランスが必要だ。これをもってこそ双頭と呼ぶのにふさわしい。

次の「俺は暗黒」（2LPのアナログ盤では収録時間の関係により1曲目に収められている）は、耳慣れないタイトルだと思う。今回、水谷の遺品のノートを調べ直したところ歌詞に「俺は暗黒」と付けられていたことから、公式に名付けられた。削岩機を思わせる



屋根裏でのライヴから、山口冨士夫（左）と水谷孝
写真＝[illegible]

強烈なノイズが炸裂していくが、混乱は見当たらない。むしろ整然と、冷たい感触で演奏が進められていく。クールネスと言ってもいいほどの冷静さが、この時期の裸のラリーズの聞きどころでもある。

アンプのハム・ノイズから、微かな足音、マイク・スタンドの軋みまで、すべてが生々しく聞き取れるほど音がいい。これほどまでリアルにラリーズを感じたことがなかった。彼らのいた空間が目の前に迫ってくる。これは間違いなく、ミックス、マスタリング、そしてプロデュースを手掛けた久保田麻琴の功績だ。初期の水谷孝と行動を共にしていた彼だからできることで、水谷の頭の中で鳴っていた音を共有できるからなのだろう。

裸のラリーズの正当なる復刻作業が続行中だが、これまで海賊盤の海原に漂流中だったラリーズの音源がベストな形で回収されている。正規の音源こそが正しい評価にも繋がる。サイケという他愛もない言葉で言い表わすのは単純すぎる。彼らを異形の音楽として、隔離してしまってはいけない。日本語によるロックとして、真正面から受け止めたい。やっとその時代が来たように思う。

『屋根裏 YaneUra Sept.'80』は、紆余曲折を経て、今回リリースされた。当初は、山口富士夫が加入した裸のラリーズがリハーサルを繰り返した国立のMars Studioでの録音だと思われていた。がしかし、精査するうちに、渋谷・屋根裏でのライヴ音源であることが判明。それほど音が鮮明で、ミキシングの精度も高かったというわけだ。

Mars Studioでの音源が聞けなかったのは残念であるのだが、双頭グループとして最も密度の高かった時期のライヴ音源を二つ同時に聞くことができるなんて、これ以上喜ばしいことはない。

80年の夏から秋にかけての裸のラリーズは、水谷、冨士夫のツイン・ギターをメインに、ベーシストのDoronco（ドロンコ）、ドラムスの野間幸道の4人編成であった。二つの時期の演奏を聞いて感じるのだが、グループ全体のうねりが、液体のように変化し続けている。深いところで意思の疎通があり、その共通認識の上に立って強烈なエゴが放出されていく。これはバンドにとって理想の瞬間ではなかったのだろうか。

一時の交感を得た水谷孝と山口冨士夫だが、別れは突然やってきた。81年3月の渋谷・屋根裏でのライヴを最後に、冨士夫は裸のラリーズから脱退する。山口冨士夫は自著の中でこのように語っている。「オレは、今でもラリーズにいたことを誇りに思っているよ。村八分もそうだけど、一生忘れられない何かをオレの中に芽生えさせてくれたバンドだからな」と。この言葉が彼の本心のすべてだとは思わないが、これを最後に二人は二度と交わることがなかったのだ。

『屋根裏 YaneUra Oct.'80』

The Last One Musique（タフビーツ）TBVC 0007／¥4500／2CD／発売中／解説＝松山晋也

[1]①夜より深く_1980 ②俺は暗黒 ③氷の炎

[2]①Enter the Mirror ②夜、暗殺者の夜 ③The Last One_1980

＊曲順を入れ替えた2LP（TBV0057／¥5500）も発売中

『屋根裏 YaneUra Sept.'80』

The Last One Musique（タフビーツ）TBVC 0008／¥3000／CD／発売中／解説＝湯浅学

①氷の炎 ②夜の収獲者たち ③夜、暗殺者の夜 ④The Last One_1980

＊同内容のLP（TBV0070／¥4800）も発売中

CamScannerでスキャン

COLLECTORS' TOPIC

テストパターン

80年代の東京ならではの空気をパックしたテクノポップ作品『アプレ・ミディ』が初リイシュー

文＝立川芳雄

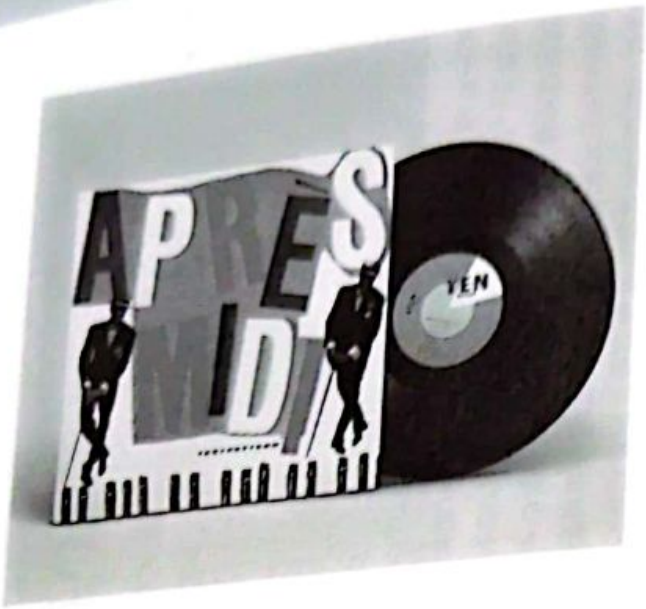
80年代やその前後の時代に日本で作られた日用品や小物などが、海外のマニアから高く評価されているという話を聞く。作り込みすぎず、あえて〝間〟を活かしたようなデザインが、おそらく新鮮に感じられるのだろう。ここで紹介するテストパターンの『アプレ・ミディ』も、そうした日本的なデザイン感覚から生みだされた作品である。80年代初頭の東京以外ではけっして誕生することのなかった、和製テクノポップのプロトタイプだといってもよい。そのせいか本作は、一部のファンから熱い支持を受けており、海外から再発の要望も寄せられていたようだ。そして、そんな作品がこのたび初めてリイシューされた。発表されたのは82年10月だから、42年半ぶりの復刻ということになる。

テストパターンは、デザイナーの比留間雅夫と、彼のオフィスで働いていた市村文夫の二人によるユニットだ。当初は仲間内のパーティーなどで、テクノ・サウンドに乗せて好きな歌をうたっていたらしいが、そうした余興は次第に本格化していった。やがて比留間は、そのころ発売されたばかりのシークエンサー、MC－4を購入し、デモ・テープを作り始める。そのコンセプトは、テクノの手法でパーシー・フェイス風の音楽を作るという、当時としてはきわめて斬新なものだった。

比留間はシーナ&ザ・ロケッツ『チャンネル・グー』（80年）のジャケットをデザインしており、この作品のリリース元だったアルファ・レコードと人脈的なつながりをもっていた（82年には、やはりアルファに所属していたカシオペアのアルバム『ミント・ジャムス』のジャケットもデザインしている）。そのため彼のデモ・テープは、『チャンネル・グー』のプロデューサーでもあった細野晴臣の手に渡る。細野はその音を非常に気に入り、結果的に彼のプロデュースによって、テストパターンの唯一のアルバム『アプレ・ミディ』が作られたのである。

当時の細野は、高橋幸宏と共同で、アルファ内にYEN（エン）レーベルを立ち上げたばかり。そしてレーベルの設立と同時に、専用スタジオが文京区音羽に作られた。細野はそれをLDKスタジオと名づける。私はそこに何度か行ったことがあるが、プライヴェート・スタジオの走りといった存在で、当時としては非常に珍しい場所だった。小さなビルの一室にあり、通行量の多い幹線道路の近くだったにもかかわらず、なかに入るとえらく静かで、いわゆる〝業界〟の浮ついた雰囲気とは無縁といった感じのスタジオだった。レコーディング・ブースはとても小さく、ドラム・キットを入れるとそれでいっぱい。その代わりコンソール・ルームは広く、そこにシンセサイザー類を置いてラインで録音するというのが、このスタジオでの当たり前の（当時としては特異な）やり方だった。ちなみに専属エンジニアとして起用されていた飯尾芳史は、後に売れっ子となって数多くの作品を手がけることになる。

細野はこのスタジオを使ってソロ・アルバム『フィルハーモニー』を制作し、82年5月



『APRES-MIDI』
YEN(ソニー・ミュージックレーベルズ) MHJL387(LP)、MHCL31029(Blu-spec CD2)／¥4000(CD=¥2500)／解説＝柴崎祐二／2・21発売

①CRESCENT MOON
②SOUVENIR GLACE
③BEACH GIRL
④SEA BREEZE
⑤MODERN LIVING
⑥RING DANCE
⑦CATCHBALL
⑧TECHNO AGE
⑨OCEAN LINER
⑩AEROPLANE

にリリースしているが、その際に"ブライアン・イーノの手法に興味がある"といった発言をしている。YMOの代表曲「ライディーン」に象徴されるような"テクノポップ"に嫌気がさしていたのだろうか。そんな細野にとって比留間のデモ・テープは、新鮮な音に感じられたのかもしれない。そして『アプレ・ミディ』もLDKで録音され、『フィルハーモニー』ときわめて類似したところのある作品となった。ある意味でこの2作品は、姉妹作とも呼べるものであろう。

『アプレ・ミディ』のサウンドの魅力は、シンセ類の音色と、"間"を活かしたアレンジにあると、私は思う。音で空間を埋め尽くすといったことがない。そして、だからこそ一つ一つのシンセ類の音が存在感のあるものになっており、しかもそれらの音色が艶やかで可愛らしいのだ。

さらに特筆すべきは、シンセ類が"楽器"として使われているという点だろう。コンピュータと楽器との境界が消失した現在とは異なり、当時のレコーディングの手法は、"手弾きの代わりにMC-4に演奏してもらう"といったものだった。『アプレ・ミディ』の基本的な制作手法もそれだ。LDKスタジオには細野が購入したばかりのサンプリング・マシン、イミュレーターがあり、この作品でもそれは導入されているのだが、最低限の使用にとどまっている。本作のシンセ類は、サンプラーではなく楽器なのだ。そして比留間と市村の、良い意味での素人っぽさとデザイナー的センス、ポストYMO的なシンセ・サウンドを模索していた細野の志向性、さらに音の隙間を活かした飯尾のサウンド・メイキング。これらが80年代初頭という時代の雰囲気のなかで図らずも融合したところに、『アプレ・ミディ』は生まれたのだろう。

テストパターンはその後も短い間だが活動しており、六本木のクラブ"インクスティック"でのライヴを、私は見た記憶がある。また、83年には『エン・マニフォールド・ヴォリューム1』というコンピレーション・アルバムが出ており、そこには日向大介と野中英紀によるインテリアというユニット、およびゲルニカの上野耕路の作品とともに、テストパターンの楽曲も2曲収録されている。1曲はリズム・ボックスのややチープな音を活かしたダンサブルな楽曲、もう1曲はエキゾチシズム豊かな楽曲なのだが、どちらも『アプレ・ミディ』の収録曲に比べると完成度が高い。ただその反面、自分たちの出している音に自分たちで驚いているかのような瑞々しさといったものは、希薄になっているようだ。そのことを考えると、『アプレ・ミディ』は奇跡的に生まれた作品なのかもしれないと思えてくる。短い期間ではあったが日本の音楽界が異様なまでの百花繚乱ぶりを示した80年代の初め。その時代の空気をパックしたような作品が再発されたのである。

CamScannerでスキャン

COLLECTOR'S TOPIC

『もう頬づえはつかない』

J・A・シーザーなど天井桟敷人脈がかかわった
桃井かおり主演映画のサウンドトラックがリイシュー

ヌーガモウユウイチ

2024年10月にオリジナル・アルバム『ONE』と『TWO』がリイシューされた桃井かおり。シンガーとして再注目されているが、彼女の本業はもちろん女優。そんな彼女の人気を決定づけた作品が、初主演作品となった79年公開の映画『もう頬づえはつかない』だ。この年の第22回ブルーリボン賞と日本アカデミー賞で、桃井は、本作と山田洋次監督による『男はつらいよ 翔んでる寅次郎』、前田陽一監督による『神様のくれた赤ん坊』を含む3作品により主演女優賞を獲得。第34回毎日映画コンクールでは日本映画優秀賞、主演女優賞を受賞。『キネマ旬報』でも主演女優賞を受賞した。

この年は、テレビドラマ「ちょっとマイウェイ」にも浅井なつみ役で主演。パルが歌った主題歌「夜明けのマイウェイ」は『オリコン』シングル・チャート最高第18位、同誌調べで18・9万枚のヒットを記録。桃井の人気も決定づけられた。モーニング娘。の安倍なつみは、彼女の母親がこのドラマのファンであったことから"なつみ"と名づけられたという。

『もう頬づえはつかない』は、見延典子の小説が原作となる。早稲田大学第一文学部文芸科の卒業論文として200枚の小説として書かれたもので、『早稲田文学』78年5月号に発表された。卒業制作として提出された作品の原題は「二つの子宮」で、同誌に掲載されるにあたって改題されている。ページ数の少ない同誌としては異例の一挙掲載となり、すかさず78年11月に講談社から書籍化。初版部数2万部と、新人作家としては異例の待遇で刊行された。女子大生と二人の男子学生をめぐる愛や性をリアルに描いて同世代の学生やOLなどに大きな支持を受け、最終的には約50万部を超えるベストセラーとなり、見延は一躍、人気作家となった。当時、"吹き溜まり"と陰口をたたかれ、志望者が定員にも満たなかった早稲田の文芸科だが、小説発表後には60人の定員に90人が殺到。一気に人気学科となったという。"もう頬づえはつかない"ならぬ"もう吹き溜まりではない"との声も聞かれるようになった。

翌79年に、東陽一監督によってATGで映画化。出演は桃井かおり、奥田瑛二、森本レオ、伊丹十三など。まり子を演じた桃井の演技は高い評価を得て、前述のように多くの賞を獲得した。東は『桃井かおりのためにできたような作品』と述べており、"私から女優桃井かおりへのオマージュのようなものだ"とも語っている。こちらの映画も最終的には、ATGでの観客動員数の新記録を更新するほどの大ヒットとなった。

その音楽は、作曲を田中未知が、編曲をJ・A・シーザーが担当した。東監督の前作品『サード』（78年）でも田中が音楽を担当しており、その後の『四季・奈津子』（80年）、『ラブレター』（81年）、『セカンド・ラブ』（83年）でも引き続き田中が音楽を担当している。東監督作品の映像との相性はバッチリだった。

田中は、寺山修司主宰、劇団天井桟敷の初期メンバーとして67年の初公演『青森県のせ

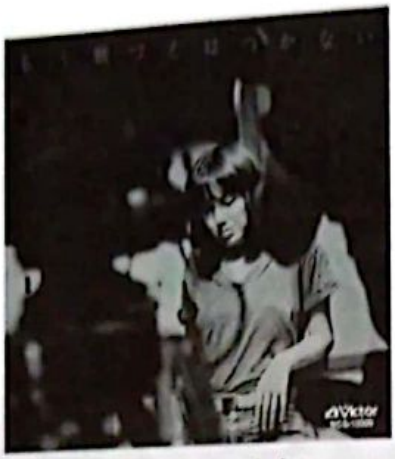
CamScannerでスキャン

むし男」から制作と照明を担当。そんななか、田中が寺山の詩に曲をつけてギターで披露する、寺山を囲むサロンの会があった。そのなかの一曲が、カルメン・マキが69年にヒットさせた「時には母のない子のように」だった。その後は、カルメン・マキ「山羊にひかれて」（69年）、「だいせんじがけだらなよさ」（69年）、日吉ミミ「人の一生かくれんぼ」（72年）などの楽曲を寺山と共作している。

J・A・シーザーは、69年公演の「時代はサーカスの象にのって」に参加したのをきっかけに天井桟敷に入団。寺山の薦めで音楽を始め、71年の「邪宗門」ではすべての音楽を担当した。以降、座付き音楽家として天井桟敷による全作品の音楽を手がける。ほか、寺山監督の映画『田園に死す』（74年）、『ボクサー』（77年）、『さらば箱舟』（82年）などの音楽も担当した。83年からは、〝演劇実験室◎万有引力〟を結成して活動している。

今回、リイシューされた『もう頬づえはつかない』サウンドトラックは、劇中のシーンの音声と劇伴がミックスされた構成。トラックごとにタイトルがついているが、そのなかで複数の楽曲が組み合わされる、組曲形式のトラックとなっている。メロディ・ラインはマイナー・キーのトラックがほとんどだが、ハーモニック・マイナー・スケールとナチュラル・マイナー・スケール（エオリアン・スケール）という二つのスケールを使い分け、さまざまな情景を描き出している。

なかでも、「まり子の一日」前半部でのエレクトリック・ギターによる独奏や、同曲の後半部、「恒雄とのくらし（回想）」前半部でのチェンバロ風の音色の鍵盤、「橋本とのくらし」前半部でのオカリナとアコースティック・ギターの独奏、「帰って来た恒雄」のクラリネットなど、寂しさと哀しさを際立たせるシーザーの楽器のセレクトは素晴らしい。



『もう頬づえはつかない（オリジナル・サウンドトラック）』

ビクター（タワー）NCS10309／¥2300／12・25発売／歌詞つき／タワーレコード限定販売

①まり子の一日 ②橋本とのくらし ③恒雄とのくらし（回想） ④ビルの夜 ⑤帰って来た恒雄 ⑥ホテルの一夜 ⑦橋本の帰京 ⑧わかれ ⑨もう頬づえはつかない ＜ボーナス・トラック＞ ⑩しゃぼん玉消えた

「恒雄とのくらし（回想）」の後半部分では、ワン・コードでのリフの上でピアノがインプロヴィゼーションを行なう。田中の生み出す楽曲にジャズの印象はあまりないが、ジャズの影響を感じさせるアプローチだ。また、「ビルの夜」「ホテルの一夜」前半部のコンボ・オルガン風など、発展途上だったキーボードの音色が愛おしい。70年代後半を象徴するかのようなサウンドだ。劇伴のエンディングである「わかれ」は、アッチェレランドして緊張感を高めていき、さらに二つのリズムが交差していく混沌としたトラック。天井桟敷の音楽作家である田中らしい、舞台性に溢れたドラマティックな劇伴だ。

主題歌は作詞：寺山修司、作曲：田中未知、編曲：J・A・シーザーという天井桟敷のゴールデン・トリオにより制作。歌唱は荒井沙知が担当し、同年にシングル・カットされた。荒井は、寺山がカルメン・マキ、浅川マキに次いで全面的に取り組んだシンガーで、77年にビクター／SFレーベルからリリースされた1stアルバム『赤い鳥ひとり』でも、寺山と田中がほぼ全面参加している。ボーナス・トラックとして、シングルのB面だった「しゃぼん玉消えた」も収録。2024年最新リマスタリングが施され、タワーレコード限定でリリースされている。

CamScannerでスキャン

70年代日本のポップス・シーンを支えた
作・編曲家／プロデューサーの歩み

矢野誠の点と線

第21回

小宮やすゆうとの点と線①

文＝除川哲朗
イラストレイション＝本秀康

洗足池の和声楽教室

「シュガー・ベイブとの点と線」で、彼らの培養土となった特別な場所と矢野誠がなぞらえていた四谷のロック喫茶、ディスクチャート。72年秋から73年春まで約半年の間、集った仲間たちによってストーリーは次々と展開していったのだが、そのオープニング・スタッフとして最初に呼ばれたのが小宮やすゆうである。そして、郷里長崎の同志、長門芳郎[illegible]

以降、本家のジャズ喫茶いーぐるにバトン・タッチして老舗の灯をともし続けているものの、その筋のポップス・ファンにとって聖地であることに変わりはない。そこで、かつて長門氏が雑誌『POP-SICLE』でグリニッチ・ヴィレッジを探訪しながらナイス・フォークスに思いを馳せていたのと同じような気持ちで、矢野・小宮お二方による聖地での語らいをお願いした次第。

小宮　そもそもの出会いは、矢野さんの最初の奥さんの親戚が僕の長崎の友達でして。大[illegible]

介してくれたんですよ。それがちょうど70年ぐらいですか。

矢野　彼女は桐朋の演劇科だった。

小宮　それで、矢野さんが音大で学んだ理論を教えてくれるというので、それに飛びついたんです。ほかにはブレッド&バターの岩沢二弓君、かんせつかず君もいたかな。基本、その3人で毎週通ってました。洗足池の矢野さん宅のピアノ室。そこが教室で。

矢野　和声学だね。なまじコードとか憶えたからいじゃビートルズの正体には近づけないから、ジョージ・マーティンが教えたである

CamScannerでスキャン

[illegible]いろ
んな文化や人間のことが交えてね。
スペース・陸前を備えて音楽サロン化していた矢野の実家・洗足池ベースには、TBSの番組〈ヤング720〉のディレクターで矢野とマリリン・モンロー・ハズバンドを組んでいた日野原幼紀も入り浸っていたから、すぐに交流を深めた模様だ。学内では会ったことのなかった明治学院の先輩、吉田美奈子も洗足池ではよく顔を合わせたという。
その傍ら、小宮・長門を中心にした15時の音楽コミュニティSOONは、ウッドストックに感化されてイヴェント・コンサート「大霊感」を他所で企画。73年の第一回目にはマリリン・モンロー・ハズバンドを東京から招いている。

小宮　日野原さんが来られず、矢野さんと僕とSOONの有志で木という臨時編成で、ママ・キャスも歌っていたスタンダードの「Dream A Little Dream Of Me」（邦題：夢の小さな夢）なんかを演奏しました。会場は旧武山公園にある野外音楽堂。アップライト・ピアノを人力で運んで搬入したんですよ。

その後の人脈は、小宮・長門の弁によれば、ソウル（72年）ではおいしいえんど、ソウルー（72年）ではシュガー・ベイ[illegible]

矢野　結局、僕のアレンジで録り始めていたマリリン・モンロー・ハズバンドの音源を、日野原幼紀のソロ作『螺旋時間』（71年）としてそのまま録り直すことになるんだけど、小宮君にもギター弾いてもらったよね。

小宮　ですね。その頃には他にもコーラスや譜面管理などで矢野さんの仕事をいろいろアシストするようになっていました。あと洗足池の教室では、6度とか9度の音にすごくこだわるようになって、みんながメジャー・セヴンスで弾くところ、僕はシックスとかナインスの方へと誘われていくんですよ。

矢野　それはソウルの素であるペンタトニックのメロディーが使えるから。メジャー・セヴンスは洒落ていて涼し気だけど限られちゃう。シックスとかナインスはもともとジャズから来ているんだよね。そういう気づきや発見が小宮君の中であったってことだ。

矢野家も大沢の段階に入る最中、ディスクチャートが開店する72年秋を迎えている。

小宮　もともと別の場所にあったジャズ喫茶いーぐるの店主・後藤（雅洋）さんが、新たにロック喫茶を始めるにあたり旧知の日野原さんに相談したのが発端らしいです。それで日野原さんから僕に、君たちの仲間でやってくれないか、って話が来た。そのうち矢野さんにも声をかけて運営に入りました。

ロック喫茶に集った仲間たち

開店してほどなく矢野に連れられて大貫妙子が来店。フォーク・トリオ三輪車での不本意なデビューを回避しつつ、ソロとしてのデモ・テープ作りが始まる。

小宮　後藤さんにお願いして閉店後の店を借りたんです。11時半ぐらいからマイク、アンプと4チャンネルのテレコ2台をセットして。大貫さんと僕と長門、それに徳武（弘文）君を呼んで真夜中にやっていたんですよ。

矢野　テレコは日野原経由でTBSのやつと、洗足池にあったのを調達してね。2台を同期させてチャンネルを増やす。といってもスイッチを一緒に押す原始的なやり方だけど。

大貫妙子の紙ジャケット復刻盤『グレイ・スカイズ』（97年）に追加収録された〈午後の休息（DISKCHART DEMO）〉がその時の録音。ハウディ・ムーンの〈ウェイト・ウィズ・ハニー〉を先駆けて、近年の山家と大貫のコンセプトにも通じていくアコースティックの萌芽が瑞々しい。

小宮　そして山下（達郎）君が後から来るんですけど、まず驚かされたのは『ビルボード』

トップ40以下の曲も全部チェックしていたこと。FEN以外では絶対流れませんから。彼はそういうところで耳を鍛えて、良し悪しを聴き分けられるようになったんだと思います。それで当時の僕との共通項はフィラデルフィア・サウンドでしたが、そこも既にほとんど網羅していましたから。

矢野　そうか。僕と小宮君の出会いのところで言うと、感心したのは君が持ってきたラヴィン・スプーンフルの〈ディドリーム〉だよ。あれはだってジャズだろ、お龍ちゃんが演っていたような。そのクオリティだけはクラシックやっていたから判る。世界を動かすクオリティなのかどうか。とにかく、たった一曲の衝撃だけで人生が変わる、人間が変わる瞬間があるということだね。

ディスクチャートに集まるべくして集まった素敵な仲間たち。しかし小宮個人としては、ある時から複雑な思いを抱き始めることになったという。

小宮　意気投合してセッションに興じていたんですけど、ある時から山下君がそこにいたメンバーを集めてバンドを組もうとし出すんです。彼は本当に猪突猛進で、思い込んだらバーンと入ってきちゃっていくタイプだから、もう呆気にとられるしかなかった。正直、その強引さに振り回された印象が少なからずありますね。

矢野　そのあたり、僕はタッチしていなかったからよく知らないの。最初に放り込んでおきながら多忙を極めて後、フォローできなかったんだけど、ここでの音楽的リーダーは小宮君で信頼できる仲間が集まっていたと思っていたよ。まあ、中ではいろいろあったということか。

趣味嗜好を共有すれども、やはりそこはふぞろいの林檎たち。それぞれの表現衝動においては苛烈な衝突や辛辣な場面もあったと。思いのほか人間臭い群像劇が繰り広げられていたのかもしれない。

矢野　何か状況と状況を結びつけられたり、結果的に持って行かれちゃったりすることもあると思うけど、そこで陥りがちなのは初動での齟齬。外交や形式から入ると時としてそうなる。ニュートラルな音楽、身体から滲み出てきたものなら作為ではないからそれはない。逆にシチュエーションに結びつくかどうかはわからないけどね。小宮君のはずっとそういう音楽だからさ。僕はそれが大好きなんだよ。

矢野誠

〝山下達郎 Sings SUGAR BABEコンサート〟（94年）のパンフレットに掲載された山下×大貫インタヴューの中に、少し示唆的なコメントがある。

山下　（中略）あなたとぼくの音楽的な違いは、ぼくはスタイルとしてとらえるの、形式を優先させる。だけど、あなたはパッションとかさ、空気感のようなものでとらえるから随分変わってきたよね。

大貫　（中略）私から見るとスタイルを変えずに、よくもまあ、あれだけいろんな曲が出来るなと思って感心しちゃう。私はコロコロ変わるから。

これはあくまでも音楽家としてのあり方、ポリシーの表明であり、どちらがどうということではないのは予め（あらかじ）。

矢野　すごく対照的だよね、小宮君と山下君。だけど、最初に〝山下君がいい〟って僕に教

CamScannerでスキャン

えてくれたのも小宮君だから。それであの自主制作盤『ADD SOME MUSIC TO YOUR DAY』を聴かせてくれた。

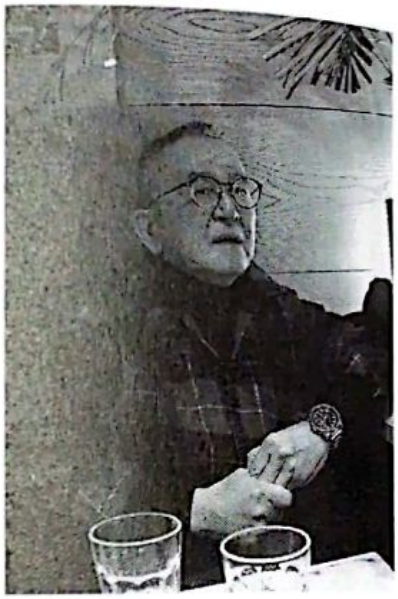
そして小宮とシュガー・ベイブの併走は、初期レパートリーの提供からしばらく続くことになる。

小宮　ター坊はわりとオリジナルのストックがあったけど、山下君はそれまで自作という概念があまりなかったみたいで。だからバンドが始まった当初は、曲数が足りなくて僕が書いた何曲かを演奏していました。

提供楽曲は〈それでいいさ〉〈港の灯〉〈想い〉。長門も作詞で絡んだ〈想い〉は、『SONGS』の30周年記念盤にライヴ音源が収録されている。そして73年8月23日、SOZ主催の〝大震災VOL4〟では彼らを長崎でアテンド。9月21日のはっぴいえんど解散記念コンサート〝CITY・Last Time Around〟では、大瀧詠一&ココナツ・バンクのセットで一緒にコーラス参加している。

シュガー・ベイブ
『SONGS 30th Anniversary Edition』
ナイアガラ（ソニー）SRCL5003
[2005]
30周年盤には小宮やすゆう作の「想い」のライヴを収録

福澤諸
「高度10000マイル／星のきざはし（スターダスト）」
ユピテルYS21［1976］（7″）


小宮やすゆう

12月17日のファースト・コンサート〝Hello! We Are Sugar Babe〟には、小宮やすゆう&レッド・アイ・エクスプレスで出演。バンド名をジョン・セバスチャンのファースト・ソロ『ジョン・B・セバスチャン』A面1曲目のタイトルから拝借して、オリジナルを8曲ほど演奏したという。

小宮　この時だけのバンドです。エディ藩とオリエント・エクスプレスからジョン山崎と秋山新之助に入ってもらいました。二人ともご機嫌なプレイヤーで、特にジョン山崎からは〝君の曲のコード進行がすごく好きだから参加するよ〟なんて嬉しい言葉をもらって。たぶん僕の曲はピアニストに喜ばれる進行なんだと思います。それも洗足池で仕込まれた矢野イズムの賜物ですね。

このライヴで初披露した〈星のきざはし（スターダスト）〉（作詞：小宮・長門・ジョー／作曲：小宮）は2年後、福澤諸のデビュー・シングル〈高度10000マイル〉（76年）のカップリングで取り上げられている。

小宮　この曲のデモを作っている時から凄く気に入ってくれたので歌ってもらいました。福澤君は何ていうかUFO関係の友達でもあって。彼は細野（晴臣）さんともそういうスピリチュアルな関係で繋がっていました。

矢野　僕がストリングス書いて、（矢野）顕子さんがピアノ弾いて、徳武君のラストショウが演奏して。雲の上のスイーツみたいにロマンチックだよね。

まさにディスクチャート／洗足池コネクションの結晶とも言える一曲である。（つづく）

CamScannerでスキャン

ジ・RCO・オール・スターズ ～ザ・ブルース・ブラザーズ(その5)

イラストレーション＝菅野カズシゲ

当初、劇場版『ザ・ブルース・ブラザーズ』の続編は、世界中で大ヒットを記録した第1作（80年）から間もなく製作されるはずだったが、82年のジョン・ベルーシの事故死によりあえなく実現不可能に。その後も彼の弟、ジム・ベルーシを起用して製作される計画があったが、ジムの直前の撤退によりこれもキャンセルされた。その間もザ・ブルース・ブラザーズ・バンドは活動を続け、精力的にヨーロッパや日本をツアーしていた。

ようやく98年、劇場版第2弾となる『ブルース・ブラザーズ2000』が完成、公開の運びとなる。前97年には、ダン・エイクロイド（以下、ダニー）が経営していたレストランで行なったブルース・ブラザーズ&フレンズ名義でのライヴ・アルバム『ライヴ・フロム・シカゴズ・ハウス・オブ・ブルース』をリリース。2017年には久々のスタジオ録音アルバム、スティーヴ・クロッパー、ルー・マリーニ&ジ・オリジナル・ブルース・ブラザーズ・バンド名義の『ザ・ラスト・シェイド・オブ・ブルー・ビフォア・ブラック』を発表した。

車破壊の1作目、音楽家が大挙した2作目

――映画『ザ・ブルース・ブラザーズ』第2弾の製作はどのようにして始まったのですか。

「ある時、ダニーがライヴ会場に現われて、映画の続きを作るって我々に言ったんだ。でも、撮影が始まったのはそれから8年経ってからだった。8年だぜ、8年。長いことかかって考えるんだなと思ったよ。それだけの時間があれば色々なことができるよな。実際の製作に費やした時間は1年もかからなかった

CamScannerでスキャン

リング、そう、1作目からは17年が経過していた。私は監督のジョン・ランディスのところに行って、髭が伸びて、ポニーテールにしてるんだけど、切ってこようかって尋ねたぐらいだ。「どうだっていいよ。前作から長い時間が経っているんだし、そんなことみんな分かるだろう」って言われたよ」

――出演者全員、ずいぶん変わっていたでしょう？

「その通りだ。ジョン・ベルーシに加えてキャブ・キャロウェイやジョン・キャンディも他界していたしね。

とにかくダニーはユニヴァーサル・ピクチャーズを説得して、30万ドルの予算を獲得してきた。ジョン・ランディスに「どうして撮影をすべて（補助金や税金の免除を受けやすい）カナダで行なわないのか」って尋ねたら、「ハリウッドで撮影することに決めて、30万ドルもらってきたんだから。これでいいんだよ」って言ってた。それがカナダとハリウッドとの違いだよ。オーケー、ノー・プロブレム。ここでやろう」って応じた。ダック（ドナルド・ダック・ダン）も私も2作目の方が好きだったな。1作目に比べると音楽が断然良かったからね」

――だけど商業的にはイマイチでしたね。

「当初、私たちはこういうスマッシュ・ヒットだと思ったんだ。私自身、プレミア公開にもたくさん出席した。まずはロサンゼルスに行って、それからニューヨーク、そしてカンヌ映画祭にも行った。どこへ行ってもスタンディング・オベーションだったんだ。普段ならバラバラと拍手があるくらいのところでも、観客みんなが立ち上がって、大喜びだった。

ダニーが言っていたのは、一般のファンはジョン・グッドマンがジョン・ベルーシの代役を演じるのを期待していて、もしそうしていれば、もっと結果は違うものになっていたんじゃないかっていうことだった。私もその意見には同感だった。ダニーがジョンに与えた役は“マイティ・マック”っていう新しいキャラクターで、ストリップ・バーのバーテンダーだった（※注1）。あいつもいいやつでね、時々一緒に出かけたものさ。（バーの）オーナー役は（ドラマーの）ウィリー・ホールだった。あいつ、2作目でいい役をもらったよな」

――第2作目ではより多くのミュージシャンが出演していました。

「第1作目ではハリウッドの歴史に残るくらい何台もの車をぶち壊したんで、第2作目では有名なエンジニアやミュージシャンをもって呼んでもらうっていうことにしたんだ。それが新旧映画の最大の違いだよ。前にも言ったが、ミュージシャンというのは音楽の演奏の仕方を習うのが仕事であって、演技を教わるっていうのは門外漢だからね。そうしなくてもいいように、というのを念頭に置いてダニーが台本を書いたんだ。我々、バンド・メンバーが少しくらい演技するのはまあいいとしても」

――フィナーレのジャム・セッションには大感激しました。

「ゲスト・アーティストたちは撮影前日になって現場に到着した。彼らには何も伝えられていなかったけど、ちゃんと理解できるようにボール紙に進行が記されていた。もちろんバンドには事前に通達されていたけどね。とにかくゲストは演奏する以外、何もしなくてもいいようになっていたんだ。だからあれは全部ライヴなんだよ。すごくいいシーンになったと思った」

――ダニーが自分でゲストに連絡を取ったのですか。

「それは知らない。ある日、全員が（スタジオに）やって来たって感じだった。クールだよな。ダニーは素晴らしいやつだ。何かやってほしいことがあれば彼のところに頼みに

CamScannerでスキャン

行くことだ。絶対に話を聞いてくれるからね。本当に気前のいいやつだし」

2作目を彩る多彩な出演者たち

――それぞれのアーティストについては何か思い出がありますか。

「エリカ・バドゥは最高だったな。映画全体の中で一番良かったのは彼女だよ。彼女にとってもいい転機になったと思う。彼女、今でもちゃんとキャリアを積んでいるじゃないか、エリック・クラプトンやスティーヴ・ウィンウッドらと同様にね。

それからあの撮影を介してやっとボー・ディドリーに会うことができたんだ。ジ・MGズの頃からずっと憧れていてね。彼はいつもと同様、あの大きな帽子をかぶっていた。彼とルー・ロウルズと私とで撮った写真にはサインを書いてもらって、今でもうちに飾ってあるよ」

――スクラップ置き場の作業員を演じたB・B・キングが大きな役どころでしたね。

「実際はもっと大きな役だったんだよ。だけどあの程度に収まってしまった。それからウィルスン・ピケットが〝どうしてエディ・フロイドが〈634-5789〉のヴォーカルをやるんだ。オレの持ち歌なのに〟って私のところへねじ込んできた。だって、エディがザ・ブルース・ブラザーズ・バンドのヴォーカルだったんだから（＊註2）。（ウィルスンには）〝ダニーがそうしてほしいからだよ。それでいいじゃないか〟って言ってやったよ（笑）」

――ポール・シェーファーが復帰していたのが印象に残っています。

「彼は第1作目に出演する予定だったけど、（ドラマーの）スティーヴ・ジョーダンと一緒に辞退したからね。映画に出演することで、〈サタデイ・ナイト・ライヴ〉のレギュラー・ポジションを失いたくなかったから」

――〝おかえりなさい〟って感じだったんですね。

「ハハハ（笑）。まあ、そういうことさ」

――もう一人の新しいヴォーカリスト、ジョー・モートンについては。

「あいつも何本か映画に出ているよな（＊註3）。いいシンガーだったよ。我々バンドもとても感銘を受けた。ジョーともう一人、誰だったか忘れたけど、一緒にジャム・セッションしたことがあったな」

――映画の第2弾を挟んで、ザ・ブルース・ブラザーズ・バンドとはアルバムを2枚制作していますね。それらについて教えてください。

「〈グリーン・オニオンズ〉が入っているライヴ・アルバム、『ライヴ・フロム・シカゴズ・ハウス・オブ・ブルース』だね。ダニーが参加して一緒に歌ったショウだ。あの中で気に入っているのはIRS（国税局）についての歌、〈オール・マイ・マネー・バック〉だ。あの歌には共感するところが多いんだ。君も知っている通り、アメリカじゃ空港に着いて荷物を運ぶためにカートを使おうと思ったら、金を払わなきゃいけないだろ。他の国ではどこだってタダなのに。アメリカって国はそうやって金を儲けるのさ」

――『ザ・ラスト・シェイド・オブ・ブルー・ビフォア・ブラック』の方は。

「あれは（サクソフォン・プレイヤーの）ルー・マリーニのアイディアだった。彼はニューヨークにスタジオを持っていてね。名前は忘れちゃったけど。そこで録音した。スタジオから2ブロックしか離れていないと

Blues Brothers & Friends
"Live From Chicago's House Of Blues"
House Of Blues 0099172WHE
[1997] (CD)
クロッパー氏、ドナルド・ダック・ダン、ルー・マリーニ、マット・マーフィー、アラン・ルービンなど腕利きのメンツが参加

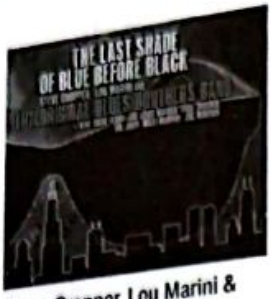
ころにホテルがあって、ホテルから出て10分ほど歩くとスタジオ入りできるようになっていた」

——新旧の映画の中で最も有名なセリフのひとつに〝我々は神の命を受けている〟というのがあります。つまり〝ブラック・ミュージックを世に広めるための任務を負っている〟ということですが、どのくらい成功したと思いますか。

「大成功だったと思う。ちゃんとやってのけたよ」

——第1作目の公開当時、僕は高校生でしたが、たくさん勉強させてもらいました。あの映画のサウンドトラックは自分の人生のサウンドトラックの一枚でもあります。僕だけでなく本当に多くの人々が今でもあの映画について話していますからね。

「グレイトな映画だった。ジョン・ベルーシのおかげだ。彼がいなければ、あそこまでにはなっていないよ。彼が今でも生きていてくれたらなと思うよ。イタリアでコンサートをやって会場から出てきた時、女の子がやってきて〝ベルーシがいないけど、彼は寝ているってことにしておきましょう〟って言われた。笑わせてもらったな」



Steve Cropper, Lou Marini & The Original Blues Brothers Band
"The Last Shade Of Blue Before Black"
Severn SEVERN CD0071 [2017] (CD)
ドクター・ジョンやエディ・フロイド、ジョー・モートンら豪華メンバーが参加したスタジオ録音作

——ダニー以外の映画の出演者とは今でも連絡をとりますか。

「いや、ダニーだけだな。ある時、彼から〝どうしているんだい〟って電話がかかってきた。〝暇なのか。じゃあ映画でも見に行こうぜ〟ってね(笑)。以前は第1作目で鷲の模型に色を塗るネオナチスの党員を演じていたコメディアン、ヘンリー・ギブスンとよく一緒に飲みに出かけたりしていたんだけどね」

——バンドのメンバーとはどうですか。最近、トロンボーンのトム・マローンとフェイスブック・フレンドになりました。

「トムとは今でも友だちだ。彼は自分のバンドを始めて、ダックと私に(ザ・ブルース・ブラザーズ・バンドは)抜けるって言ってきた。でも、いいやつだよ。私もしばらく前にバンドを辞めた。もう8年くらいになるかな。彼らは彼らでやっているみたいだ。フロリダであったチャリティー・ショウでは一緒に演奏したけどね。相変わらずスリリングなバンドだった。私自身のツアーも16年と17年にデイヴ・メイスンと一緒にやって以来ご無沙汰だな」

——ザ・ブルース・ブラザーズ・バンドみたいな大所帯だとアメリカをツアーするのが難しいといわれてましたね。

「そう。映画が大ヒットしていた頃はどこに行ってもソールド・アウトだったが、今では誰もブッキングしてくれなくなった。この国では流行っている時にはもてはやされるけど、そうじゃない時には冷たいものさ。人生はそういうものだよ(笑)」

(次号は先頃他界したザ・マーキーズの盟友、ドン・ニックスとの思い出を語っていただく予定です)

＊註1＝ジョン・グッドマン演じる〝マイティ・マック〟は、劇中でバンドの新ヴォーカリストに抜擢される役だった。

＊註2＝〈634-5789〉はスティーヴ氏とエディ・フロイドとの共作。

＊註3＝ジョー・モートンはラルフ・マッチオ主演、ライ・クーダーがサウンドトラックを担当した『クロスロード』(86年)や、『ターミネーター2』(91年)、『トリニティーズ・トライアンフ』(23年)などに出演している。

CamScannerでスキャン

リヴィング！フィル・マンザネラ

ロキシー・ミュージックのギタリスト、50年の冒険

第6回

野性復権

取材・文＝田山三樹　イラストレイション＝松本嵩春

〈ジェラス・ガイ〉はマンザネラのスタジオで録音されていたが、彼の留守中にもニール・ハバードのギターで続行され、戻ってきた彼は出来上がったトラックに後から自分のプレイを加える羽目になる。また〈アヴァロン〉のMVでは、フォーマル・スーツに身を包んだイケオジふうのレアなマンザネラが観られるが、彼ともうひとりの中核メンバーであるアンディ・マッケイは、ブライアン・フェリーが歌ったり美しいモデルの女性と寸劇を展開する城のような場所（高級ホテル？）のバンケット・ルームで演奏をする楽団員の一人のように見える。彼は自伝の中でこのことを「僕らの出番は、画面に登場する隼（ハヤブサ）より短いんだよ！」と憤っているのだが、ヴィデオで確認すると隼はトータルで20秒ほどの出演時間。15秒ほどのソロ・パートがあるマッケイに比べてもマンザネラの登場シーンはトータル12〜13秒といったところで、たしかに彼の言い分も理解できる。同曲でのヤニック・エティエンヌの突然の起用についても前回述べたとおりだ。

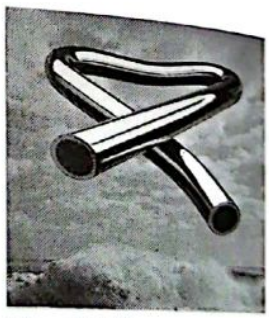
こんなことが徐々に積み重なっていった。それに加え、ディテイルにこだわる『アヴァロン』のレコーディングでマンザネラの心は、完成度の高い音楽を丹念に構築する楽しさと、われたセッション・ミュージシャンのような扱いをされていることに気づいたという。

放置できないジレンマを前に

たとえば、ジョン・レノンの追悼カヴァー

兆候はあった。ロキシー・ミュージックが『フレッシュ・アンド・ブラッド』『アヴァロン』を3人体制で制作していた80〜81年頃からである。フィル・マンザネラはときおり、バンドの創設メンバーである自分が雇

CamScannerでスキャン



Mike Oldfield
"Tubular Bells"
Virgin V2001 [1973] (LP)
この歴史的傑作を経て、オールドフィールドの音楽は完成度を増していくが、本作はラフな部分すら必然と思えるような勢いがある。この辺りも『プリミティヴ・ギターズ』に影響を与えたのではないか

それによって実現された、無垢な野性、を取り戻したいという気持ちとに引き裂かれていったようだ。

『アヴァロン』自体はアメリカン・サウンドとブリティッシュ風味が絶妙の匙加減で融合した典雅な細工品のような趣きがある傑作だ。ソフィスティケイトされたサウンド・プロダクションで、起用プレイヤーも音作りもアメリカンでありながらブリティッシュ・ロック独特の美学は失われていない。歌詞の内容も、ロキシーの『ストランデッド』あたりから顕著になった、フェリーの恋愛を通じたユートピア願望が力強く表現されている。それまでの作品では〝叶わぬ想い〟を語っていただけだったのが、ここにきてついに「これ以上のものはない」（〈モア・ザン・ディス〉）と言い切れる確信的な恋愛観にまで成熟したのだ。この点は、長年のファンとしては「ついにここの境地までたどり着いたか」とフェリーの世界観の成長ぶりに感嘆する。つまり『アヴァロン』は、ロキシーで追求してきたフェリーのテーマの最終完成形のようなアルバムと言えるだろう。

だが、マンザネラ自身はこのレコーディング中から徐々に、制作『フレッシュ…』から続く、資本細工的にひとつひとつの音を吟味して組み上げていく方法論自体にも食傷気味な自分を感じていた。最新の設備を持つスタジオで粋を凝らしたサウンドを突き詰めていくのはやりがいがある反面、バンド・サウンドの勢いに欠けるところがある。かつてのように、バンドが一体となって一気呵成に弾きまくることで出るグルーヴ感を懐かしんでいたのだ。つまり、マンザネラは当時のロキシーの路線に飽き足らなかったというより、そこで生まれる〝典雅〟と〝野性〟の二律背反からくるジレンマを放置できない自分を発見してしまったということだろう。スムーズすぎる今のロキシーの音楽に彼の破天荒なギター・プレイが存在する余地はなく、自身のワイルドな部分を別の形で表現せずにはいられない。その衝動を抑えられなかったのだと自伝やインタヴューで述べている。

そして思いついたのは「そうだ、マイク・オールドフィールドをやろう！」だったという。

マルチ・インストゥルメンタリストのオールドフィールドが、デビュー作『チュブラー・ベルズ』を、ほぼすべての楽器をひとりで演奏する多重録音スタイルで制作したことに倣い、マンザネラも同じように自分自身ですべてとりしきるアルバムを作ることにしたのだ。『アヴァロン』に取りかかっている中で、時間を捻出してもう1枚のアルバムを作るのは「めちゃめちゃ大変だった」そうだが、本人にはそこまでしても強行する理由があった。ロキシーが78年に再結集するまで、マンザネラはソロにせよ、801プロジェクトにせよ、常に自分が主体となって動かしていた。ロキシーはそうではない。その落差が精神に与える影響は、思ったより大きかったのである。だから、彼が余人が介入することのない世界を欲したのは、『アヴァロン』におけるコントロール権の喪失がもたらした反動という側面も強いのである。

そして作られたのが、オール・インストゥルメンタル曲による『プリミティヴ・ギターズ』という、彼にとって約4年ぶりのソロ・アルバムだった。

ロキシーという体制への音楽的反抗

『アヴァロン』と並行して作られた『プリ

CamScannerでスキャン

ミティヴ・ギターズ』は同作へのアンチテーゼとして、構想されたのだろうか。

「いま振り返って〝あの衝動はいったいどういうつもりだったんだろう?〟と考えてみると、ある部分では君の言う通りということになるね。単純な説明をするならば、『アヴァロン』で細部にこだわりながら少しずつ丹念に組み立てていくレコーディングをしていたから、それへの反動ということだ。それでこのアルバムでは僕自身の音楽創造の基本に立ち返って、〝プリミティヴ(素朴・野生的などの意)〟というタイトル通りに、原始的衝動に任せてフリーにアナーキーにガンガン弾きまくるというやり方をとったんだ。だからアンチというよりは、『アヴァロン』では出せない音楽的要素をここで思うさま発散して、自分の(音楽的アイデンティティの)バランスを取ったというのが正しいかな」

あえてこの時期にソロを作ることが、ある種の自己セラピーとして機能していたことが窺える話である。そして、この作品をじっくり聴いてみると、マンザネラの自然体の復活を強く感じる。そのやり方がまた、シンプル・イズ・ベストというか、自身の音楽ルーツを時系列に沿って再訪していくかのように、ラテン的雰囲気が色濃い〝Criollo〟から始まり、モダンなアレンジを施した南米軽音楽ふうの〝Caracas〟を経て、ザ・ヴェンチャーズを思わせる〝La Nueva Ola〟で徐々にロックンロール色を深めていく。それ以降の曲ではますます自由奔放に、フリー・インプロヴィゼーションやアンビエントなスタイルに加え、早すぎたトランス・テクノのような〝Big Dome〟、最初のソロ『ダイヤモンド・ヘッド』の時のような伸びやかなプレイでギターを弾きまくる〝Ritmo De Los Angeles〟など、創造性の引き出しをすべて披露したという趣がある。

そして、〝Impossible Guitar〟でのプレイは、特に気持ちよさそうである。隙間を埋め尽くすかのように弾き倒すロックンロール感満載の派手なフレーズ。特に終盤近くでの叩きつけるようなプレイからは〝こういうのがやりたかったんだ!〟という心からの叫びが聞こえてきそうだ。その意味で、この曲は欲求不満解消の意志がはっきりと表われた代表例と言える。なお、同曲はアヴァロン・ツアーでも演奏され、筆者の知る限りスタジオ版よりさらにハードに演奏されることが多かった。

ところで、各曲間には短い会話が収録されている。これはどういうものなのだろうか。

「会話の多くは、まだブライアン・イーノがロキシーにいて、意気込んで『フォー・ユア・プレジャー』を作っていた時のものだ。73年のロンドン、エア・スタジオのコントロール・ルームでの僕らメンバーの会話だよ」

ということで、これも懐古というよりは初心を思い出すための仕掛けだったようだ。

さて、こうしてみると、このアルバムは彼の音楽的アイデンティティ回復のための〝過去掘り〟作業と言えるのではないだろうか。

「うん。実にそう言えるね。僕の一種の音楽的自伝だ。作った一番の動機は、ともかくすべてを自分一人で好きなようにやりたいという切実な願望の実現なんだ」

好きなことを自由に、手っ取り早く実行。こういうシンプルで思い切ったやり方は、実は『フレッシュ…』のころに前例があった。それが、同アルバムからの3枚目のシングル曲〈セイム・オールド・シーン〉のB面曲〈ラヴァー〉(アルバム未収録)だ。リズム・マシン丸出しのサウンドに乗ってマンザネラの

Phil Manzanera
"Primitive Guitars"
Editions EG EGED14 [1982] (LP)
マンザネラ・ワールド全開のソロ作。ジョン・ウェットンが1曲参加している以外はワンマン体制で己の歴史をダイレクトに見せつけていく。この時点での彼の音楽の大棚ざらえ的作品だ

CamScannerでスキャン

ポップなリフが聞けるリリカルで愛すべき小品である。曲構成もアンサンブルもとてもシンプルながら、チキチキ・ポコポコと鳴るリズム・マシンや温かな音色のシンセと、間の多いリズムに乗るフェリーの抜け切ったヴォーカルが相まってとても楽しい出来だ。

「僕が自分のスタジオでノリ一発で作ったデモがあって、ちょうど〈セイム・オールド・シーン〉のB面曲が必要だったから、ブライアンがそれにメロをつけて完成させた。確かに楽しい曲で僕も大好きだよ」

この〝ノリ一発〟の勢いが喚起する音楽的エモーションこそ、彼が『アヴァロン』で見失ったと感じていたものだったのだろう。その音楽作りの素朴な楽しさをアルバム・レヴェルにまで拡大したのが『プリミティヴ・ギターズ』というわけである。

また、81年初めに彼は高橋幸宏のソロ作品『ニウロマンティック』にも3曲参加している。

Roxy Music
'The Same Old Scene / Lover'
EG/Polydor ROXY1 [1980] (7")
'Lover'はロキシーには珍しくアート・ロック的な雰囲気がない、ストレートなラヴ・ソング。曲調も歌詞も素朴な分、とても楽しく聴ける。ロキシーのシングルB面曲で歌詞がある曲は珍しい

なお、中でも〈カーテン〉で披露しているソロはケレン味のある音色で彼の引き出しのうちのフリーキーな側面が強調されたユニークな演奏だ。こうした課外活動的なゲスト参加も、『アヴァロン』制作のころ、ロキシー本隊では表現しきれない自分の音楽性を解放する場のひとつだったのではないか。マンザネラ自身によれば、「うーん、このときのレコーディングはいまはよく思い出せないな……。今度思い出したら話すよ」ということだったので、詳しく聞かせてもらう機会を楽しみに待ちたい。

『アヴァロン』とほぼ同時期に発表された『プリミティヴ・ギターズ』について、こうして当時の状況を探ってみると、それはロキシーという体制に対する音楽的反抗やリヴェンジを企図したものなのは間違いないようだ。

そして、マンザネラはふたつのアルバムがどのように評価されるかが気になっていた。するとツアー中のオーストラリアで手にした『ローリング・ストーン』誌のレヴューで、高名な音楽評論家のカート・ローダーが『アヴァロン』とともに『プリミティヴ…』に触れ、「『アヴァロン』でのギタリスト／フィル・マンザネラの扱いは低く、自分のパートをこなしているだけに聞こえるが、それはたぶん彼が、自分の最も大事なインスピレーションを『プリミティヴ・ギターズ』のために取っておいたからだろう」と評しているのを読み、〝サンキュー、カート！ ドンピシャだ〟と我が意を得たりの気分になったという。

高橋幸宏
『ニウロマンティック』
アルファ ALR28018 [1981] (LP)
サディスティック・ミカ・バンド以来の邂逅。マンザネラと共にアンディ・マッケイも参加。〈非・凡〉〈ドリップ・ドライ・アイズ〉などで独特のフレージングによる流麗なサックス・ソロを披露している

この2作を作り終え、吹っ切れた気分で82年夏から始まった『アヴァロン』ツアーに臨んでいたマンザネラだが、新たな葛藤も生まれた。それは「このままロキシーの一員としてやっていけるのだろうか」という疑問である。再結成して足かけ5年。野生味を抑えエレガントな方向に向かうバンドの方針に沿って活動してきたが、ソロを作ったことで目覚めたのだろう。もっと自分の音楽を追求せねばという気持ちが大きくなりつつあった。

そして、彼がそう考えたのは音楽上の理由だけではない。バンド全体を包む空気感に、なにか最初のロキシー解散（76年）直前と同じ匂いを嗅ぎとっていたのだ。（つづく）

紙ジャケ探険隊 真保安一郎の

初盤道

Sho ban do

イラストレイション=辻井タカヒロ

ロモはミックス違いといわれている。現時点でDiscogsにも“features some different mixes”と表記されている。“some”って何だよ〜、どの曲が違うんだよ〜、とブツブツいいながらも、まずは送り溝⑦をみてみる。AB面のマトはA-1/B-1なのだが、いずれもその後にDJ-RE-と続いている。うーむ。厄介なDJマトだけでなく、さらにマスターが変わったとおぼしきREも刻印されているじゃないか。ともかく聴いてみると、どうもミックス違いが確認できない。私の聴きが甘いのかもしれないが、一聴してそれとわかる、例えばビートルズ等で感じる音の違いがない。その代わりといってはなんだが、曲間の長さが変わっていて、たっぷり間をとっている。例えば第1弾シングルであるA③ ‘Just What I Needed’ が終わると、通常盤⑧ではすぐに次のA④が始まるのだが、この白プロモはけっこう間をあけている。ラジオ局用に頭出しがしやすくなっているのだ。これがDJ刻印の由来だとしたら何だかつまらない。B面では3曲目と4曲目をつなげずに分離させている。通常盤ではこの2曲はエフェクトを使ってクロス・フェイドしているから、この部分はミックス違いといえばミックス違いかもしれない（現在の配信版は分けて収録）。それに通常盤にあるプロデューサー、ロイ・トーマス・ベイカーのRTB印⑨もプロモ盤には刻まれていないのだ。なお、日本盤⑪の白見本盤⑫は通常盤と同じだった。

本作の白プロモは高いお金を払って買うほどの価値があるかは疑問だ。通常盤でもこの名作の独特のチュービーなサウンドと美的センス⑩を楽しむことができる。中でもB③ ‘Moving In Stereo’ は、映画『初体験リッジモント・ハイ』で、赤いビキニのフィービー・ケイツがプールから上がって来る、あのすこぶる印象的なシーン⑬に使われたため、今やネットでミーム化しているのだ（サントラには未収録）。男性ファンにとっては、この曲が入っているだけで永遠不滅の名盤。洋の東西を問わず、ホント男ってバカだよね。

⑩インナー・スリーヴにあしらわれた写真も面白い

⑪日本盤（ワーナー P10552 E）

⑫

⑬

⑫同白プロモ。通常の曲間で収録
⑬青春映画『初体験リッジモント・ハイ』の忘れられない名シーン。Blu-rayのパンフレットから

*レコード盤の内周＝レーベルの周りの無音部分に彫られている記号がマトリクス・ナンバーで、その末尾を本連載では“マト”と記します。例：ODE77017-P1＝この場合、末尾の<P1>の部分です

CamScannerでスキャン

The Cars
"The Cars"
カーズ
『錯乱のドライブ』
Elektra [US]
6E135[1978.6.6] (LP)

第95回
白プロモにご用心

米国盤の "White Label Promo"、いわゆる白プロモは初期盤として判別しやすく、音質的な優位も期待できるので大変人気がある。しかし実は注意が必要なのだ。当連載第2回ジョニ・ミッチェル『ブルー』でも扱ったが、通常盤の初盤の方がはるかに鮮やかな音を味わえる時がある。ラジオ向きに低域がカットされていたり、ローリング・ストーンズ『スティッキー・フィンガーズ』やレッド・ツェッペリン『Ⅲ』の白プロモのようにマトがかなり大きい盤があるのだ。この点は国内の見本盤も同じで、一概にプロモやサンプル盤がすなわち初盤とはならない。初盤道は厳しいのである。とりわけ米国白プロモのなかでも送り溝にDJ刻印があるものは要注意だ。これは長尺の曲に対してラジオで頭出しがしやすいように曲間でバンドを切っているもので、基本的な音質は変わらないはずなのだが、どうも気分的にスッキリしない。イエス『リレイヤー』のDJマトなど、実際に曲の途中で音がフェイド・アウトしてしまっている盤もあり、そうなると音楽自体が台無しだ。今回はそんなDJマト白プロモの中でも、人気の高いカーズのデビュー作をとりあげる。

連載第73回で記載したように本作とテレヴィジョン『アドヴェンチャー』は特別待遇で、78年発売ながら80年以降に登場するレッド・レーベルを先行して使っている。Warnerグループなので、工場は東部がSpecialty (SP) ①。西部は発売当初PRCのカリフォルニア第2工場であるPRC-W②⑤で、その後、79年にグループ系列のAllied (AR) 工場が稼働してからはAR③⑥に変わる。黒赤のエレクトラ・ドーン・レーベル④は、85年以降だ。カーズは日本以上にアメリカで人気があり、本作もデビュー作ながら『ビルボード』18位の大ヒットとなった。

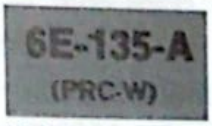
さて肝心の白プロモだが、SPとPRC-Wの両方のプレスに存在し、中でもSPのプ

①東部SP工場の白プロモ。ミックス違いといわれているが?

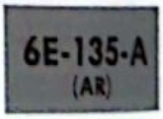
②西部は最初PRC-W工場でプレス

③西部は79年以降AR工場でプレス■

④85年以降は黒赤のドーン・レーベル



⑤②の工場表記部分



⑥③の工場表記部分

⑦①のマトはA-1-DJ-RE-SP。他にGeorge MarinoのSterling刻印も

⑧②のマトA-5-PRC-W-1。Sterling刻印もある

⑨②のB面にはロイ・トーマスベイカーのRTB刻印

*初盤道イヴェントのお知らせ:"祝!来日記念 イギー・ポップ&セックス・ピストルズ"が3月8日(土)15時から渋谷のdiskunion ROCK in TOKYO (03・3461・1809)で開催/参加無料

協力=想也氏■

CamScannerでスキャン

史実に対して忠実に、また、大胆に跳躍しながら進む ボブ・ディランを描いた劇映画『名もなき者』

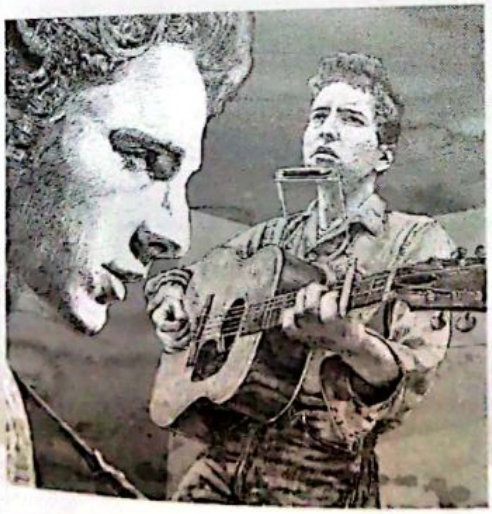
若き日のボブ・ディランを当代随一の若手俳優ティモシー・シャラメが演じる、しかもシャラメはエグゼクティヴ・プロデューサーとして私費を投じるほどの心酔ぶり、という話題の映画。原題“A Complete Unknown”は「ライク・ア・ローリング・ストーン」の一節。このチョイスは、ミネソタからニューヨークにやって来たディランの、まだ“誰にも知られていない存在だった”と、一躍フォーク界の寵児となって内面の孤独を抱えた“(本当の自分を)誰もわかっていない”を二重写しにした意味合いと読むべきだろう。65年までのディランに起きたことは、本誌の熱心な読者にはすでに了解済みかとも思う。物語は史実に対してある面では忠実に、ある面では大胆に跳躍しながら進む。シャラメのディランへの没入は相当で、歌いっぷりにも舌を巻く。エドワード・ノートン演じるピート・シーガーにもおそれ入った。アラン・ロマックスやボブ・ニューワース、アル・クーパーなどの描写には本当にこうだったかもと思わせる雰囲気があるし、ちょっとしか出てこないジョー・ボイド役やマリア・マルダー役にも丁寧にクレジットが振られていた。一方、エル・ファニングは実在の恋人スーズ・ロトロではなく、シルヴィアという映画オリジナルの役柄を演じる。映画の中での彼女の行動は、ファンにすれば評価が分かれる部分だろう。

だがこう考えることもできる。フォークの常識を変えた「風に吹かれて」「時代は変わる」から、やがて65年のニューポート・フォーク・フェスを台無しにした(とされる)エレクトリック・セットでのライヴへ。その流れはフォークやロック史を知る人には大事件だが、現代の感覚では「何で?」と感じる層もいるかもしれない。だったら、どれほど熱狂の群衆に囲まれてもひたすらひとりきりでいるディランを(SNS時代の観客が)自分の裡にも発見する。そこがこの映画の目指す場所かなと感じた。大きな名声だけでなく、身近な愛さえ拒否するディランを表わすために、シルヴィアという架空の恋人が必要だったのではないか。

松永良平

『名もなき者/A COMPLETE UNKNOWN』2月28日(金)からTOHOシネマズ日比谷ほか全国ロードショー 配給:ウォルト・ディズニー・ジャパン ©2025 Searchlight Pictures. All Rights Reserved.

INFO. STATION



イラストレイション=ジミー益子

Timothée Chalamet & Bob Dylan

CamScannerでスキャン

セックス・ピストルズ解散前の演奏を公式収録した『ライヴ・イン・ザ・USA 1978』

セックス・ピストルズが78年に行なった伝説的な米国ツアーから3公演を完全収録した公式ライヴ・アルバム『ライヴ・イン・ザ・USA 1978』の発売が決定した。このツアーは本来77年末開始の予定だったが、ビザの問題もあって12公演中5公演がキャンセルされ、実現したのは7公演だけ。それも南部や中西部の、バンドへの抵抗が激しい保守的な土地ばかりを巡ったのだ。物々しい警備の中で怒号が飛び交った初日1月5日のアトランタ、流血で名高い10日のダラス、そして"編された気分はどうだい?"とジョニー・ロットンによる有名な問いかけで幕を閉じた14日、サンフランシスコの3公演。いずれも公式では初リリースとなる。結局、このツアーで嫌気がさしたジョニーは五日後の記者会見で脱退、解散を表明することになった。

発売形態は、3種類のスペシャル仕様カラーLP、3枚組CDセットと配信だ。LPは輸入盤のみで、レッド・ヴィニールのアトランタ公演は2月28日、ホワイト・ヴィニールのダラス公演は3月28日、ブルー・ヴィニールのサンフランシスコ:ウィンターランド公演は4月25日に、それぞれ発売。日本盤3枚組CDも同じく4月25日発売で税込6600円。日本盤のみ英文ライナー翻訳/歌詞対訳つきのSHM-CD仕様となっている。

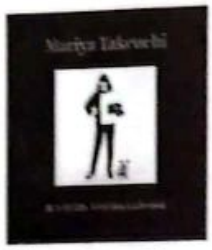
なお3月末にはSex Pistols featuring Frank Carterとして"PUNKSPRING 2025"への出演も決定している。真保安一郎

『ライヴ・イン・ザ・U.S.A. 1978』
ユニバーサル UICY80660~2 3SHM-CD ¥6000 4・25発売 歌詞つき 英文解説翻訳つき

竹内まりやのデビュー45周年を記念する RCA時代の初期作品をLPで収録したボックス

1978年11月25日のシングル「戻っておいで・私の時間/ジャスト・フレンド」とアルバム『BEGINNING』の発表以来、デビューから45年を経た竹内まりや。デビュー当初に所属していたRCA時代の名作アルバムが、アナログ盤6枚組の限定ボックス『Mariya Takeuchi RCA YEARS Vinyl Box Collection』として、3月19日にアリオラ(ソニー)から発売される。

ボックスに収録されるのは、1stアルバム『BEGINNING』、2ndアルバム『UNIVERSITY STREET』(79年)、3rdアルバム『LOVE SONGS』(80年)、4thアルバム『MISS M』(80年)、5thアルバム『portrait』(81年)で、まだ他の作曲家からの提供曲が多かった時代。竹内の瑞々しいヴォーカリストとしての魅力をたっぷりと味わえる5枚。さらに、当時のライヴ音源などを追加した『Mariya Takeuchi RCA YEARS Vinyl Box Collection Special Bonus Disc』を同梱。81年8月25日に中野サンプラザで行なわれた〈MARIYA POPPING TOUR〉、81年12月22日に厚生年金ホールで行なわれた〈SOLONG LIVE〉の2本のコンサートの模様に加え、「戻っておいで・私の時間」のオーケストラ版も収録される。2025年最新リマスター&カッティングで、ポスターやフォトカード、内袋を復刻封入。加えて先着特典としてポストカードがプレゼントされる(なくなり次第終了)。ガモウユウイチ



『Mariya Takeuchi RCA YEARS Vinyl Box Collection』
アリオラ(ソニー) BVJL110~5/6LP/¥18000/3・19発売/歌詞つき/解説つき

CamScannerでスキャン

英国最新情報　イエス『危機』スーパー・デラックス版

最高傑作の誉れ高きイエスの1972年作"Close To The Edge"（『危機』）のスーパー・デラックス・エディションが米ライノからリリースされる。ライノは13年に本作の拡張版を発売済みだが、今回は全曲が最新のリマスター／リミックスとなっており、5枚のCDにはアルバム本編の最新リマスター版に加え、スティーヴン・ウィルソンによるアルバムの最新リミックス版とインストゥルメンタル・ミックス、シングルや別テイク、ラフ・ミックス等による"レアリティーズ"、72年12月16日のロンドン、レインボウ・シアター公演が収められ、ブルーレイ・ディスクにはアルバム本編リミックスのドルビー・アトモス版と5・1ch、リミックス、オリジナルのハイレゾ版の4種の音声が収録される。さらに本作にはアナログLPも封入、様々なソースにより多角的にアルバムを楽しむことができる。海外では3月7日、国内ではワーナーから3月19日発売予定。

最近のデイヴィッド・ボウイ作品の50周年記念盤がアナログLPのみのリリースとなって久しく、彼の米国期を代表する74年作品"Young Americans"の50周年記念盤も通常のブラック・ヴィニールとピクチャー盤の2種が3月7日にパーロフォンから発売されるのみだが、この作品のセッションのリハーサル／アウトテイクを収めたテープが発見され話題になっている。発見者は22年に差押え物件の競売で入手した大量のテープの中から見つけたようで、それをソースにした本作のデラックス版の発売を期待したいところだ。

ジョー・ミークのマスター発掘プロジェクトの最新作"Too Far Out"はR&B～フリークビート期の作品集。レア曲、未発表音源を多数収めた待望のリリース（チェリー・レッド／2月21日発売）だ。（大伏裕）

米国最新情報　ロサンゼルス山火事の被害と救済

25年1月、ロサンゼルス周辺で発生した山火事は、本稿執筆時点ではいまだ消えず、数多くの家を焼き、被害はミュージシャンにも及んでいる。エンジニア／プロデューサーであるボブ・クリアマウンテンのLA西部のパシフィック・パリセイズにある自宅とホーム・スタジオ：Mix This!が焼失した。クリアマウンテンはまさか火事が自宅にまで及ぶとは思っていなかったが、あわてて家族とスタッフで3台の車に可能な限り録音機材などを積んで難を逃れた。グランド・ピアノと録音コンソールは持ち運びようがなかったが。

被害のニュースが相次ぐ中、被災者支援のためのチャリティ・コンサート FireAidが立ち上がり、1月30日にLA南西部のイングルウッドの2会場でコンサートが行なわれた模様だ。レッド・ホット・チリ・ペッパーズ、ジョニ・ミッチェル、ロッド・スチュワート、レディ・ガガなど錚々たるミュージシャンが参加。現地に行けない人たちのために、YouTube、Apple Music、Prime Videoなどで配信が行なわれ、全米70カ所のAVCシアターでも視聴された。

また、リンゴ・スターは1月14、15日、ジャック・ホワイト、シェリル・クロウ、エミルー・ハリス、ロドニー・クロウェルらをゲストに迎え、新作"Look Up"の曲、カントリーの名曲やカントリー・アレンジでビートルズの曲を歌うコンサート"Ringo Starr & Friends At The Ryman"を開催し、収益金を救済活動に寄付。CBSとパラマウントが放送・配信する予定だ。

他にもミュージシャンの動きは多く、イーグルスはFireAidを通じて、ビヨンセは自身の団体を通じて、いずれも250万ドル（約3億9千万円）を、メタリカは彼らの団体を通じて50万ドル（約7800万円）を寄付している。（中村彰男）

CamScannerでスキャン

『ヤング・ギター』編集長が語る数奇な出会いの数々

ロックの国のラッキーマン

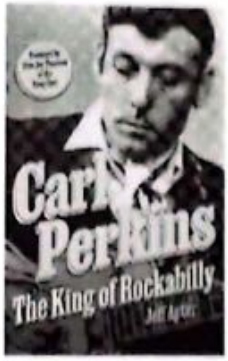
山本隆士著／シンコーミュージック／1818円

山本隆士は69年にシンコーミュージックで『ヤング・ギター』を創刊、98年まで編集長を務めた。本書は音楽を中心とした山本の半生を松永良平がインタヴューで構成したもの。

『ヤング・ギター』は長い歴史において大きくふたつの顔を持つ。フォーク・ミュージックがニューミュージックとして市民権を得た70年代初頭の邦楽のイメージと、80年代になってからのハード・ロック／ヘヴィ・メタルに舵を切った洋楽路線である。一見、広い振れ幅の中にあって、ミュージシャンとフランクに付きあってきた山本の人柄と、数奇な出会いの数々が明朗に語られていく。

42年生まれ、大学在学中の新興音楽出版社でのバイトをきっかけに、ジャズ雑誌『ダウンビート』、ビートルズ来日時の『ミュージック・ライフ』と渡り歩く。68年の研修旅行でサイケデリック文化の洗礼を受けてからは、米国でのコーディネイター的役割もつとめる。72年のはっぴいえんどの渡米旅行、のちにラスト・アルバム『HAPPY END』となるスタジオ録音にまつわるエピソードは白眉だ。長らく、職業作詞家としての松本隆のデビュー曲が、はっぴいえんどからはかなり距離を感じるチューリップ「夏色のおもいで」だったことがちょっとした謎だったのだが、その理由が仕掛け人によって明かされた。　安田謙一

最新情報もおりこみ時系列でその生涯と業績を再検証



Carl Perkins:
The King Of Rockabilly

Jeff Aprter著／Citadel Press［US］

"1にお金、2にショウ、3で準備万端、さあ野郎いこうぜ(Go Cat Go)!"。ご存知、不滅のロック古典「ブルー・スウェード・シューズ」を書き歌ったカール・パーキンス久々の、最新情報もおりこんだ包括的な評伝。

"ロカビリーの王様"という表題にふさわしいストレイ・キャッツのスリム・ジム・ファントムの長い序文から始まる全20章は、巻末に重要文献のビブリオも付し、構成もオーソドックスに時系列でパーキンスの生涯およびその業績を綿密に再検証。つまり、テネシーの片田舎で育ったひどく貧しい白人シェアクロッパー（小作人）の倅が、今やすっかり伝説と化しているサン・レコードで録音活動を開始。やがて、かのミリオン・ダラー・カルテットのひとりとして頭角を現わすも、その矢先、不運な交通事故によってスターダムへ乗り損ねる。しかし、やがてビートルズをはじめとする多くの後進の再評価によって、ついにはこの世界の殿堂入りなんて古くからのファンにはよく知られたサクセス・ストーリーというわけだ。で、この立身譚の物語から浮かびあがるのは、デビュー時で3人の子持ちの彼は当初から地道なロッカーであって、一貫してノーマルなキャラクターの苦労人だったということだろう。例えば1章を割き、人生で最も大切なのは家庭と家族だと断じているように。杉原志啓

CamScannerでスキャン

アナログな質感を重視し主観と客観を交えた論考

オールド・プロフェッサーのレアレコード世界 英国シャズ・ロック・ブルース→フュージョン、1966-71
村山裕三著／羅針舎／3800円

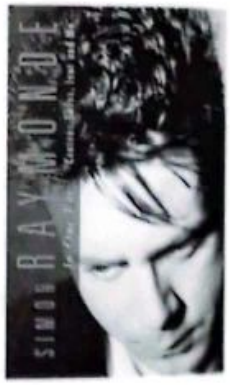
手に取った最初の印象は、JIS規格外の判型と、表4のイラストが一部顔を覗かせる窓を穿った"変型"ケース。一般流通書籍の外側に必ず記載されているバーコード付きのISBNがシールになっていて、わざわざ"剥がせます"と注記してあるところからも、アナログな質感を重視したこの本のこだわりが伝わってくる。

ページを開くと、66年から71年にかけて発表された英国のブルース・ロックやジャズ・ロックを中心とするLPの迫力あるカヴァー写真、そしてそれらの作品についての主観と客観を交えた論考が、これも美しいページ・レイアウトで掲載されている。

基になっているのは同内容のウェブサイトで、著者は実際に大学名誉教授の肩書を持つ経済学者。こういうと学者の余技のように思われるかもしれないが、大学在学中には"ロック研究会"に所属し、その後もこの本の副題に示されたような音楽を長年追いかけ続けてきたという。出自を物語るかのようにアカデミック論文の書式そのままな巻末の参考文献表も、ソースの確かさという点でこの本の特色となっている。異なる二つの分野が交差する領域を研究対象とする経済学者としての視点に影響を与えたのは、むしろ音楽の方だった、という意味の記述に触れて、逆に経済論文の方を読んでみたくなった。

松井巧

コクトー・ツインズのメンバーが自身の音楽制作を語る



In One Ear: Cocteau Twins, Ivor And Me
Simon Raymonde著／Nine Eight Books [UK]

著者は英国のアート系レーベルの雄＝4ADの看板バンドだったコクトー・ツインズに83年から加入。傑作『トレジャー』など中・後期のアルバムに参加した。その後は自身の音楽作りを続けながらインディーズ・レーベル＝ベラ・ユニオンを設立。フリート・フォクシーズやフレイミング・リップスなど個性派バンドの作品をリリースした。

自伝としてユニークなのは、早くも序章で自身が40歳くらいのときに脳腫瘍が原因で片耳の聴力を失ったことを告白していることで（本書のタイトルの由来である）、これが彼の人生を変え、レーベル経営に注力していく道筋を作ったようだ。また、ジャズ系の音楽家だった父親についても1章が割かれ、父譲りの素養が音楽作りや新人発掘に役立ったことも理解できた。

個人的に興味深かったのは、コクトー・ツインズが厳守していたという音楽づくりのポリシーである。それは"決してデモを作らない"、"テイクを重ねない"、"アルバム1枚分以上の曲は作らない"。デモがあればとっかかりができるしテイクを重ねれば完成度は上がる。曲を多めに作っておけば失敗時の保険になる。だが、こういう安全策を取らず1回の作業にすべてのエネルギーを込めることが、新鮮な緊張感と生々しいエナジーに満ちたコクトーの音楽を生んだことが実感できた。

田山三樹

CamScannerでスキャン

登場する9人の相違点が浮かび上がるインタヴュー集

STUDIO GREAT
日本のスタジオ・シーンを創造した凄腕ドラマーたち
村田誠二著／リットーミュージック／3000円

『リズム&ドラム・マガジン』誌に掲載されている日本のスタジオ・ドラマーに関するインタヴュー連載の、2020〜24年に取材したものから9人をピックアップし書籍化したもの（早くも続編に期待）。登場するのは田中清司、山木秀夫、島村英二、上原〝ユカリ〟裕、渡嘉敷祐一、江口信夫、小田原豊、河村〝カースケ〟智康、佐野康夫という、70〜90年代にレコーディング[illegible]。[illegible]は同誌の元副編集長で、村上〝ポンタ〟秀一の聞き書き本2冊、林立夫の自伝でその名を知るかたも多いだろう。

幼少期に音楽に興味を持つきっかけに始まり、ドラムを叩く／プロになる経緯から、本題であるセッション・ドラマーとしての活動、リズム・マシーンとの同期演奏普及時の試行錯誤、今後の展望などを訊く。そのアンケート取材に近い〝共通の型〟の設定が見事で、9人の相違点が浮かび上がってくる。

書籍化に際し各参加作品がスポティファイのプレイリストとして加筆されているのが現代的であるとともに、表紙カヴァー裏という、実に書籍的な場所に〈ドラマー誕生年一覧表〉がついている。内外の有名ドラマーとミュージシャンが年代順に記されており、とても参考になるので、表紙をみしてみるのをどうかお忘れなく。[illegible]

メジャー・デビューするまでの糞真面目で怒涛の日々

Hey! Two Punks
The Mods: The Early Days
博多疾風編
森山達也、北里晃一著／シンコーミュージック／2727円

サンハウス、ザ・ルースターズといったバンドと共に70年代後半から福岡で〝めんたいロック〟というムーヴメントを牽引し、現在も活躍しているTHE MODSの中心人物、森山達也と北里晃一が、メジャー・デビューするまでの怒涛の日々を思いつくままに綴ったエッセイ集だ。

森山自身が数あるロック本の中でバイブルに挙げる『ビートルズ派手にやれ！』（アラン・ウィリアムズ、ウィリアム・マーシャル著）の面白さや生々しさを再現すべく、無名時代の馬鹿話が惜しげもなく開陳される本書は〝バンドマンあるある青春グラフィティ〟といった趣を湛える。パンク・ロックに感染した北里がシド・ヴィシャスの着ていたライダース・ジャケットと同じものを手に入れようと質流れで買った皮ジャンが海軍の特攻服であったり、食紅で髪を染めたつもりがステージに立つと顔面が赤や黄色に染まっていたこと、ナツメグを山ほど飲んでトリップしようと試みるも、ただの胃もたれに終わるエピソードなど。本物に近づきたい一念からとった糞真面目な行動の数々がいちいち共感できて可笑しい。そして全編を覆う博多弁のグルーヴ。どんな苦境に陥っても「良かくさ！」の一言で乗り切る。これは全肯定的な人生の処方箋といえる書だ。森山の後輩でもある勝井フミヤのあとがきも秀逸。[illegible]

自身の音楽観が語られる全68本の記事をカラーで再録

インタビュー：坂本龍一

リットーミュージック／5400円

『キーボード・マガジン』と『サウンド&レコーディング・マガジン』は、これまで最も多く坂本龍一へのインタヴューを行なってきた雑誌だろう。その両誌に80年から2017年にかけて掲載された、全68本のインタヴュー記事を再録したのがこの本だ。A4版で400ページ弱というヴォリュームだが、坂本自身の音楽観について知ろうと思ったら、これほどよい資料はない。私も彼の発言を、ややうろ覚えのまま本誌で取り上げたことが幾度かあるが、今回それらが間違っていなかったことが確認できて、とてもありがたかった。一部を除いてカラー・ページというのも嬉しい。

どのページを読んでも面白いが、やはり最も興味深いのは、80年代前半、YMO時代のインタヴューだ。同時に掲載された細野晴臣や高橋幸宏の発言も再録されているが、テクノという手法を利用して日本の音楽業界を変えていこうと目論んでいるかのような細野とは対照的に、坂本には〝テクノ・ポップはテクニック至上主義を皮肉っている〟〝(打ち込みより)即興が大事〟など、醒めた発言が多い。けれどもそれらは、韜晦ではなく本音のようだ。しかも話が音楽以外へと逸脱することもほとんどない。終始にわたって坂本龍一という音楽家の生真面目さが見え隠れする、そんなインタヴュー集である。

立川芳雄

出逢いを通して自身の人生を炙り出すエッセイ集

また逢う日まで

JOJO広重著／TANG DENG／2500円

〝キング・オブ・ノイズ〟を標榜するバンド、非常階段のリーダーとして知られる、59年京都生まれの男性のエッセイ集。単行本やライナー等で発表した文章を含む400ページ弱である。

幼少期から現在までを綴るが、自伝とは一線を画す。すでに特化した本も出している非常階段を筆頭に、音楽家としての活動の記述が〝抜粋〟なのだ。多彩な〝事業〟の一部にも言及するが、すべてブライヴェイトな観点で綴っているのも特徴。本書の肝が〝出逢い〟だからである。

音楽や小説、映画などを含む出逢いを通して自身の人生を炙り出していく。やはり対面した人との関係にウェイトが置かれ、とりわけほろ苦く甘酸っぱい十代の〝プラトニックな女性遍歴〟にページを割いている。ブライヴェイトな話も多いが、バンド仲間や関西ローカルの話と同じく、身内ネタで終わらせない短編私小説風の書き方が見事。非常階段のメンバーでもある妻JUNKO、さらに森田童子と佐井好子への思いには、広重の潔癖な女性観がよく表われている。

易占いの道に行きついた流れもよくわかる。ソロのデビュー作『君が死ねって言えば死ぬから』(97年)以降、僕が広重に見る彼の諦観に身震いがする。簡潔な人生訓が連なる終盤は、易の店の卓越しに直接語り掛けられている調子で、口調は穏やかでも生々しく重い。

行川和彦

CamScannerでスキャン

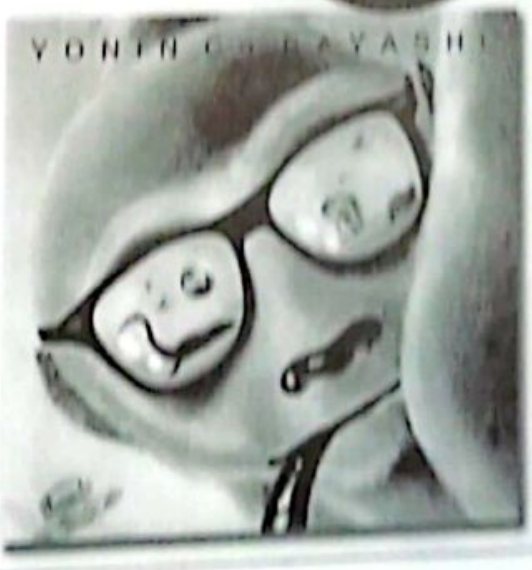
一髪千鈞／四人Co.ばやし

四人囃子が黙認のトリュビュートバンド「四人Co.ばやし」
初のオリジナル・アルバム「一髪千鈞」が遂に完成！
本家：森園勝敏氏（G）、岡井大二氏（Dr）参加！

・ディスクユニオン、Amazon、HMV、楽天、タワーレコードで発売中。
・ディスクユニオン新宿プログレッシブ館　販売週間ベスト1位を獲得（一髪千鈞CD-Rで検索
・ライブ等の活動情報→Facebook「酔森楽団・四人Co.ばやし」

初めてその名を聞いた時、てっきり「四人小林」と思い込み、
SHAMOTOもやウォーカー・ブラザーズ同様にメンバー全員が
小林性を名乗るグループと解釈していた。正しい名称は
「四人Coばやし」。そう、日本ロック史に燦然と輝く四人囃子の名を
二つに分けるという、実に怖れ知らずなネーミングのバンドだったのだ。
驚くものは真ん中の「Co.」。この意味は何か？
Company(仲間)？Cooperation(協力)？Community(共同体)？
Coordination(調整)？それとも、「一髪千鈞」の作曲に
参加の森園勝敏が参加しているようにCollaboration(共同作業)？
多様な解釈で申し訳ないが、何れの意味を当てはめても彼らと
四人囃子の関係性を暗示しているようで興味深い。そして、それは
四人Coばやしの音楽的本質をも示唆しているのではないだろうか？。

音楽評論家：中村俊夫



CamScannerでスキャン

Reissue Album Guide

・リイシュー・アルバム・ガイド・

国内盤 P.8-19　海外盤 P.20-29

国内外でリリースされた幅広いジャンルの旧音源コンピレーションや再発アルバム、映像作品をくわしく紹介。音楽そのものはもちろん、リマスターやパッケージの出来にまでこだわって、豊富な知識をもつ執筆陣が徹底チェックします

2月のリリース情報 P.2-7

ニュー・アルバム・ピックアップ P.30-33

レコード・メーカー各社の電話番号とウェブアドレス P.7

※掲載されている価格は特記されている場合を除き税抜き定価です

INDEX

A

AEROVONS, THE 8
ALPHATAURUS 31
AMEN CORNER 11
ARCHIE WHITEWATER 10

B

BADFINGER 20
BANKS, PETER 12
BLYTHE, ARTHUR 27
BROTHER TO BROTHER 13
BURNETTE, BILLY 22

C

CALE, JOHN 23
CAMEL 10
CANDOLI, CONTE (QUINTET) & ZOOT SIMS SEXTET 26
CATAPILLA 12
CORREA, DJALMA 29

D

DALE, JIMMY & THE FLATLANDERS 23
D'RIVERA, PAQUITO 14

G

GARFUNKEL & GARFUNKEL 30
GORDON, ROBERT 22
GROUNDHOGS 20
GURU GURU 12

H

HARRISON, GEORGE 21
HARRISON, DONALD featuring DR.JOHN 13

J

JAZZMEN, THE 26

L

LOBO, EDU 29
LOST WORLD BAND 31

M

MASTER'S APPRENTICES 9
MINGUS, CHARLES 14
MOLOCH 11
MOORE, ANTHONY 23

N

NASCIMENTO, FABIANO DO & SHIN SASAKUBO 31
NENA 24
NOBLE, KEITH 9

O

ODA 20

P

POISON IDEA 24

R

ROBBINS, MARTY 22
ROTA, NINO / CARMINE COPPOLA 28

S

SCAFFOLD, THE 11
SEXTETO TANGO 28
SOUL SEARCHERS 26
SPONTANEOUS COMBUSTION 12
ST. JOHN, BRIDGET 11
SUN RA 27

T

TOLLIVER, CHARLES (MUSIC INC) 27
TUBULAR WORLD 30
TURNER, TINA 25

W

WASHINGTON, DINAH 28

あ〜わ

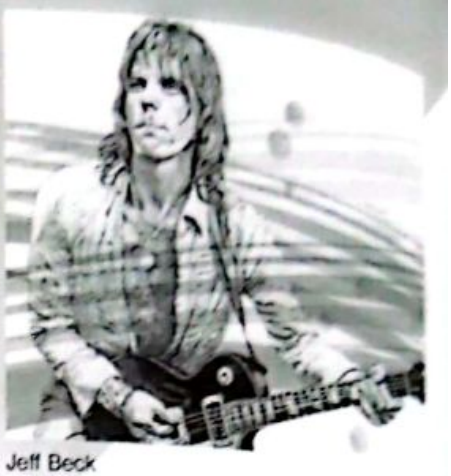
秋吉敏子／ルー・タバキン・ビッグ・バンド 15
ARCANA 33
岩崎宏美 19
上田正樹とサウス・トゥ・サウス 17
Ett・泊・ふちがみとふなと 33
岡田有希子 18
金丸正城 with Alto Talks 32
金延幸子 18
かまやつひろし&オレンジ 17
金属恵比須 33
クリエイション＋内田裕也&1815ロックン・ロール・バンド 17
コシミハル 16
サディスティック・ミカ・バンド 17
センチメンタル・シティ・ロマンス＋はちみつぱい 17
立花ハジメ 15
マレー飛鳥&北村聡 32
四人Co.ばやし 32

various artists (v.a.)

Deep Entries: Gay Electronic Excursions 1979-1985 24
The Albarika Story Volume 1 29

CamScannerでスキャン

New Release Information


Jeff Beck

・2月のリリース情報・

今月リリースされるリイシュー盤はこのコーナーで
まずチェック。紙ジャケット、生産限定盤などの
予定も可能な限りお伝えします

イラストレイション＝ジミー益子

ジェフ・ベック
『ザ・ベスト・オブ・ジェフ・ベック～エピック・イヤーズ 1971-2003』

スーパートランプ
『ライヴ・イン・パリ 1979』

キング・クリムゾン
『1995年10月1日（日）横浜・神奈川県民ホール』

ROCK & POP

ジェフ・ベック

『ザ・ベスト・オブ・ジェフ・ベック～エピック・イヤーズ 1971-2003』

▶2・5／ソニー／¥2500／2Blu-spec CD2

惜しくも23年1月に亡くなった孤高の天才ギタリストが、およそ40年間にわたって在籍したエピック・レコーズ時代のカタログから、ソロ名義のみならずジェフ・ベック・グループやベック・ボガート&アピスも含めた名曲・名演を網羅した、日本独自企画としては初となる集大成的なベスト・アルバム。もとは2010年に商品化が企画されたものの許諾が下りず頓挫。ようやく15年の年月を経て、遂に日本のみのリリースが実現した

スーパートランプ

『ライヴ・イン・パリ 1979』

▶2・28／ユニバーサル／¥4000／2SHM-CD

79年作『ブレックファスト・イン・アメリカ』が世界的なヒットとなっていたスーパートランプ、全盛期のパリ公演を収めたライヴ音源。ブルーレイ、DVDも同時発売

キング・クリムゾン

『1995年10月1日（日）横浜・神奈川県民ホール』
『1995年10月8日（日）名古屋・名古屋市民会館』
『1995年10月9日（月）大阪・フェスティバルホール』
『1995年10月12日（木）大宮・ソニックシティホール』
『1995年10月13日（金）仙台・仙台サンプラザホール』

▶1・29／DGMディストリビューション・ジャパン／各¥4000／2SHM-CD

95年のジャパン・ツアーを記録した〈日本公演補完シリーズ〉がSHM-CDで再発。今月号の記事で紹介している第1弾〈東京公演編〉に続いて、〈地方公演編〉5タイトルもリイシュー

アライヴ・ザ・ライヴ

ジェネシス『ライヴ・イン・サンフランシスコ1977』＊
キャメル『ライヴ・イン・サンフランシスコ1976』
ソフト・マシーン『ライヴ・イン・フランス1975』＊
ゴング『ライヴ・イン・ジャーマニー2009』＊
ナショナル・ヘルス・フィーチュアリング・ビル・ブルーフォード『ライヴ・イン・ロンドン1976』
ナショナル・ヘルス『ライヴ・イン・ト

CamScannerでスキャン

ント1979』＊
ブルーフォード『ライヴ・イン・コネチカット1979』
フォーカス『ライヴ・イン・ロンドン1972』
タンジェリン・ドリーム『ライヴ・イン・ベルリン1982』＊

▶2・7／IAC／各オープン・プライス／＊2CD

ラジオやテレビの放送用ライヴ音源をCD化する＜アライヴ・ザ・ライヴ＞シリーズの最新リリースは、プログレッシヴ・ロック系の9タイトル。輸入盤国内仕様

ブルー・マックス

『リミテッド・エディション』

▶1・22／Pヴァイン／¥2700／紙ジャケット

ブルー・マックスは、カナダの最東部ノヴァスコシア州でティーンエイジャー3人によって結成されたハード・ロック・トリオ。76年にレコーディングし、1000枚のみがプレスされたプロモーション盤がCDでリイシュー

60年代ポップ・ソングの舞台裏

『ナッシン・サクシーズ・ライク・サクセス:60年代ポップシーンの舞台裏で眠り続けたヒットの原石』

▶1・22／ディスクユニオン／¥2500

60年代のポップ職人ソングライターたちがアセテートにプレスしたデモ音源などを集めたコンピレーション。エリー・グリニッチ、ロン・ダンテといった有名どころから身元が謎の音源まで34曲が収録されている。輸入盤国内仕様

ピエール・ムーランズ・ゴング

『ブレイクスルー』
『セカンド・ウィンド』
『フル・サークル（ライヴ1988）』

▶1・25／マーキー／各¥3273／SHM-CD／紙ジャケット

ゴングからデイヴィッド・アレンが脱退した後、ジャズ・ロック／フュージョン路線へと舵を切ったピエール・ムーランズ・ゴングの86年作『ブレイクスルー』と88年作『セカンド・ウィンド』が再発。加えて、『セカンド・ウィンド』発表の年にドイツのブレーメン公演を収めたライヴ・アルバムもリイシュー。すべて25年の最新リマスター音源を採用。初回生産限定

ヴァシュティ・バニアン

『ジャスト・アナザー・ダイヤモンド・デイ』

▶1・25／マーキー／¥3273／SHM-CD／紙ジャケット

2000年代にカムバックする大きな要因ともなった、カムバック以前では唯一となる70年作が再登場。音は25年の最新リマスター音源を採用し、ボーナス・トラックを4曲収録。初回生産限定

ルネッサンス

『ライヴ・アット・カーネギー・ホール:イクスパンディド・3CD・エディション』

▶1・25／マーキー／¥5300／3CD

アニー・ハズラムの美声とバンド・サウンドを融合させた英国クラシカル・ロックを代表するバンド、ルネッサンス。アメリカでも成功を収めていた全盛期のただ中にオーケストラを迎えて録音したライヴ・アルバムに、当時は未収録だった「キエフ」を追加してリマスターを施し、さらに76年にBBC用に録音されたバンドのみによる演奏をボーナスCDとして追加した19年リリースの3枚組拡張版が再登場。輸入盤国内仕様

キース・エマーソン

『ヴァリエイションズ 20CD ボックス・セット』

▶1・25／マーキー／¥18000／20CD

キース・エマーソンの入手困難盤も含めたソロ作品のほぼすべてを収録し、さらに未発表音源も加えた20CDボックスが廉価盤となって再登場。輸入盤国内仕様

ジョージ・ハリスン

ジョージ・ハリスン＋エリック・クラプトン『クワイエット・アンド・ラウド、横浜

ジェネシス
『ライヴ・イン・サンフランシスコ1977』

ブルー・マックス
『リミテッド・エディション』

ピエール・ムーランズ・ゴング
『フル・サークル（ライヴ1988）』

ヴァシュティ・バニアン
『ジャスト・アナザー・ダイヤモンド・デイ』

ルネッサンス
『ライヴ・アット・カーネギー・ホール:イクスパンディド・3CD・エディション』

CamScannerでスキャン

ザ・プレジデント
『ファースト〜ホット・ブラッド・サマー』

ホルヘ・サンタナ
『イッツ・オール・アバウト・ラヴ』

サヴェージ・リザレクション
『サヴェージ・リザレクション』

ザ・ムーン
『ウィズアウト・アース』

クォーツ
『クォーツ・デビュー』

1991』
ジョージ・ハリスン+ラヴィ・シャンカール『トゥー・スピリット、シアトル '74』

▶2・19／ヴィヴィド／各¥3100／2CD

ライヴ音源を提供するヴィヴィドの<トレジャー・アーク>シリーズから、ジョージ・ハリスン関連の2タイトルが登場

ザ・プレジデント

『ファースト〜ホット・ブラッド・サマー』

▶2・26／ヴィヴィド／¥2700／紙ジャケット

オキー・ハイスデンスが元カヤックのビム・コープマンと組んだ、オランダのホール&オーツともいうべきAORユニットが83年にリリースしたファースト・アルバム。輸入盤国内仕様

ホルヘ・サンタナ

『イッツ・オール・アバウト・ラヴ』

▶2・26／ヴィヴィド／¥2700／紙ジャケット

プロデューサーにアラン・トゥーサンを迎え、ドゥービー・ブラザーズやスティーリー・ダンに通じるAORサウンドを展開した79年発表のセカンド。輸入盤国内仕様

サヴェージ・リザレクション

『サヴェージ・リザレクション』

▶2・26／ヴィヴィド／¥2700／紙ジャケット

サンフランシスコ、ベイ・エリアの5人組が68年にリリースした唯一のアルバム。ツイン・ファズ・ギターを看板に、初期ピンク・フロイドとジミ・ヘンドリクスを彷彿させるフリーキーなサウンドを聞かせる。輸入盤国内仕様

シャンゴ

『トランピン』

▶2・26／ヴィヴィド／¥2700／紙ジャケット

スティーヴ・バリがプロデュースを担当し、ストリングス・アレンジャーにバリと共にグラス・ルーツの一連のヒットを手がけたジミー・ハスケルを迎えた、70年リリースのセカンド・アルバムにして最終作。輸入盤国内仕様

ザ・ムーン

『ウィズアウト・アース』

▶2・26／ヴィヴィド／¥2700／紙ジャケット

ビーチ・ボーイズの初期メンバーであるギタリストのデイヴィッド・マークスとシンガーのマシュー・ムーアを中心に結成されたLAの4人組が68年に発表したファースト・アルバム。ビートルズ『マジカル・ミステリー・ツアー』を彷彿させるカラフルなアレンジは英国サイケ・ポップへのオマージュを感じさせる。輸入盤国内仕様

クォーツ

『クォーツ・デビュー』
『ライヴ・クォーツ』

▶2・26／ワサビ／各¥2600／紙ジャケット

ブラック・サバスのトニー・アイオミがプロデュースを手がけ、ニュー・ウェイヴ・オブ・ブリティッシュ・ヘヴィ・メタル・シーンに先駆けて77年に発表されたファースト・アルバム『クォーツ・デビュー』と、79年12月に地元バーミンガムで行なわれたコンサートの模様を収めた『ライヴ・クォーツ』がリイシュー。英国初盤LPを元にした紙ジャケ仕様で、各タイトルにボーナス・トラックを追加。音は25年の24ビット・リマスターを採用。初回生産限定

そのほかのリリース

ビリー・ジョエル『ビッグ・ショッツ - ライヴ・イン 大阪 1981』／オアシス『サム・マイト・セイ - ライヴ・イン 名古屋 1984』

▶2・19／ヴィヴィド／各¥3100／2CD

ティナ・メイソン『イズ・サムシング・ワンダフル!』

▶1・31／クリンク／¥1500／紙ジャケット

エイス・デイ（ウィズ・ロン・ダンテ）／トニー・ジョー・ホワイト『ブラック・アンド・ホワイト』／ナンシー・シナトラ『ナンシー』

▶1・31／クリンク／各¥1800／紙ジャケット／輸入盤国内仕様

CamScannerでスキャン

R&B/SOUL/BLUES

アール・フッカー

『ツー・バグズ・アンド・ア・ローチ』

▶2・9／ライス／¥3200／3CD

ブルース・ギタリスト、アール・フッカーの編集盤がリイシュー（オリジナルは69年発売）。50年代の初期音源と、60年代後半のセッション音源をまとめたもの。輸入盤国内仕様

ブラス・コンストラクション

『ザ・デフィニティヴ・コレクション：ドント・ストップ・キープ・オン』

▶2・5／ウルトラ・ヴァイヴ／¥6200／3CD

ブラス・コンストラクションのキャリアを概観するベスト盤が発売。バンド初期のヒット「ムーヴィン」ほか全43曲を収録する。輸入盤国内仕様

マキシン・ウェルドン

『ライト・オン』

▶2・28／ウルトラ・ヴァイヴ／¥1800

オクラホマ出身の女性シンガー、マキシン・ウェルドンによる71年作がリイシュー。ジョー・サンプル、ボール・ハンフリーなどがバックを務めた一枚。輸入盤国内仕様

ドティー・クラーク

『アイム・ロスト』

▶2・28／ウルトラ・ヴァイヴ／¥1800

レディ・ソウル・シンガー、ドティー・クラークが残した唯一作（64年発表）がリイシュー。名アレンジャー、ジョー・ケインが編曲を務めたジャズ・ソウル作品。輸入盤国内仕様

JAZZ

クリフォード・ジョーダン

『ライヴ・アット・エセルズ』

▶2・19／Pヴァイン／¥2600

サックス奏者、クリフォード・ジョーダンによる87年のライヴ録音がリイシュー。ボルティモアのジャズ・クラブで録音され、90年代にリリースされた作品を新仕様で再発

ザ・イレヴンス・ハウス・フィーチャリング・ラリー・コリエル

『レヴェル・ワン』

▶2・26／BSMF／¥2500

ラリー・コリエルが結成したザ・イレヴンス・ハウスのセカンド・アルバム『レヴェル・ワン』（75年）が再発。アルフォンス・ムゾーン、ジョン・リーらが参加したジャズ・ロック・アルバム。輸入盤国内仕様

アイリーン・クラール・ウィズ・ザ・ジュニア・マンス・トリオ

『ベター・ザン・エニシング』

▶2・28／ウルトラ・ヴァイヴ／¥1800

ジャズ・シンガー、アイリーン・クラールの63年作がリイシュー。ジュニア・マンス・トリオをバックにスタンダードを軽やかに歌う作品。輸入盤国内仕様

ロイ・エアーズ・ユビキティ

『ティアー・トゥ・ア・スマイル／ミスティック・ヴォヤージュ／エヴリバディ・ラヴズ・ザ・サンシャイン／ヴァイブレーション／ライフライン』

▶2・28／ウルトラ・ヴァイヴ／¥5700／3CD

ヴィヴラフォン奏者、ロイ・エアーズ率いるユビキティが70年代にリリースした5作品をまとめた3枚組CDが発売。「ランニング・アウェイ」の12インチ・ヴァージョンも追加収録

ドナルド・バード・アンド・ザ・ブラックバーズ

『ザ・ジャズ・ファンク・コレクション』

▶2・28／ウルトラ・ヴァイヴ／¥6000／3CD

ドナルド・バードのジャズ・ファンク期のキャリアを概観する音源集がリリース。73年の「ランサナズ・プリーステス」から始まり、「ブラック・バード」など有名曲を網羅する。レアなライヴ・トラックも収録。輸入盤国内仕様

アール・フッカー
『ツー・バグズ・アンド・ア・ローチ』

マキシン・ウェルドン
『ライト・オン』

ドティー・クラーク
『アイム・ロスト』

ザ・イレヴンス・ハウス・フィーチャリング・ラリー・コリエル
『レヴェル・ワン』

ドナルド・バード・アンド・ザ・ブラックバーズ
『ザ・ジャズ・ファンク・コレクション』

CamScannerでスキャン

ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン&パーティ
『チェイン・オブ・ライト』

『シルバー&ゴールド：ザ・サンショット・レコーディングス・コレクション 1969-1971』

フィッシュマンズ
『HISTORY Of Fishmans』

ボ・ガンボス
『SINGLE COLLECTION』

BARBEE BOYS
『3rd.BREAK』

富樫雅彦

『クロッシング・オービッツ』

▶2・5／三茶／¥2000

富樫雅彦のライヴ盤がリイシュー（オリジナルは2012年発売）。90年9月、佐藤允彦（p）、J・F・ジェニー・クラーク（b）と新宿ピットインで初共演した際の記録

WORLD MUSIC etc.

ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン&パーティ

『チェイン・オブ・ライト』

▶2・28／ウルトラ・ヴァイヴ／¥2800

ヌスラット・ファテ・アリ・ハーンの未発表音源がリリース。90年に録音され、リアル・ワールド・レコードの倉庫に眠っていたという音源を発掘。輸入盤国内仕様

サンショット・レコード

『シルバー&ゴールド：ザ・サンショット・レコーディングス・コレクション 1969-1971』

▶2・5／ウルトラ・ヴァイヴ／¥4000／2CD

ジョージ・フィリップス（フィル・プラット）が69年に設立したレゲエ・レーベル"サンショット・レコード"の初期音源集がリリース。ケン・ブース 'Artibella' など、レーベル初期の全楽曲を収録する。輸入盤国内仕様

ダブ・シンジケート

『アウト・ヒア・オン・ザ・ペリメーター（1989-1996）』

▶2・28／ビートインク／¥7300／5CD

エイドリアン・シャーウッドが結成したダブ・バンド、ダブ・シンジケートの80年代後半以降の作品をまとめたボックスがリリースされる。スタイル・スコットが主導権を握り、グループがライヴ・バンドとして台頭した時代の記録。初回生産限定。輸入盤国内仕様

日本のロック／[illegible]

フィッシュマンズ

『HISTORY Of Fishmans』

▶2・19／ユニバーサル／¥12000／[illegible] Blu-ray

フィッシュマンズ、87～05年の[illegible]るボックスが発売。[illegible]デビュー前の録音やラジオ出演時の[illegible]源、未発表ライヴ、デモ・テープなどを[illegible]めている

ボ・ガンボス

『SINGLE COLLECTION』

▶2・26／ソニー・ミュージックレーベルズ／¥2500／Blu-spec CD2

ボ・ガンボスのシングル集がリイシューされる（オリジナルは05年発売）。「時代を変える旅に出よう」（89年）ほか、全12曲を収録。阿部充泰による最新リマスタリングを施している

BARBEE BOYS

『3rd.BREAK』

▶2・26／ソニー・ミュージックレーベルズ／¥3200／Blu-spec CD2

バービーボーイズの3rdアルバム『3rd.BREAK』（86年）がリイシュー。代表曲「なんだったんだ？ 7DAYS」を収録し、ブレイクのきっかけとなった作品。2025年最新リマスタリング

岡田奈々

『青春のアルバム 復刻CDボックス』

▶2・5／ポニーキャニオン／¥27000／8UHQCD

女優・歌手、岡田奈々のレコード・デビュー50周年を記念したボックスが発売。キャニオン・レコード時代のアルバムを網羅するほか、シングル曲などをボーナス収録

谷村新司

『抱擁 - SATIN ROSE -』
『棘-とげ - MONDAY A.M.8:00』
『人間交差点 - ヒューマン・スクラン

CamScannerでスキャン

ブル・』
『伽羅（きゃら）』
『オールド・タイム』
『素描・Dessin・』
▶2・12／ポリスター／各¥2272／SHM-CD

23年に逝去した谷村新司の追悼として、そのソロ・アルバムをリイシュー。『抱擁・SATIN ROSE・』（84年）ほか、80年代に発表された6作品をリイシュー

デ・スーナーズ

『テレサ』

▶2・15／スカイステーション／¥2700／紙ジャケット

フィリピン出身の5人組ロック・バンド、デ・スーナーズの71年作がリイシュー。シカゴなど英米ロックのカヴァー全12曲を収録する

森サカエ&ブルー・コメッツ

『FOLK HITS!!』

▶2・15／スカイステーション／¥2700／紙ジャケット

森サカエ&ブルー・コメッツの66年作がリイシュー。ボブ・ディランのカヴァーなど全12曲を収録したフォーク・ロック作品

斉藤由貴

『age』
『MOON』
『LOVE』
『moi』

▶2・21／ポニーキャニオン／各¥2000／UHQCD

斉藤由貴のデビュー40周年を記念し、そのオリジナル・アルバムがリイシュー。『age』（89年）ほか、80年代後半以降の全4作品が再発される

デ・スーナーズ
『テレサ』

斉藤由貴
『age』

レコード・メーカー各社の電話番号とウェブアドレス

▶アオラ・コーポレーション 03・5336・6957 www.ahora-tyo.com ▶IAC 048・633・4090 interart.co.jp ▶インペリアルレコード www.imperialrecords.jp/intl（洋楽） www.teichiku.co.jp/imp（邦楽） ▶ヴィヴィド・サウンド・コーポレーション 03・3490・1070 www.vividsoud.co.jp ▶ウルトラ・ヴァイヴ 03・5485・2301 www.ultra-vybe.co.jp ▶エム・レコード 06・6608・3486 www.emrecords.net ▶キャプテン・トリップ 03・5355・5698 www.captaintrip.co.jp ▶キングレコード 03・3945・2131 www.kingrecords.co.jp ▶クリンク 049・289・3213 www.clinck.co.jp ▶サード・イアー・レコーディングス 03・5774・0364 www.third-ear.net ▶スカイステーション 03・6869・2537 ▶スペースシャワーネットワーク 03・5766・1321 music.spaceshower.net ▶ソニーミュージック 03・3515・5050 www.sonymusic.co.jp ▶ディスクユニオン 03・3511・9940 diskunion.net ▶テイチクエンタテインメント 03・5778・1711 www.teichiku.co.jp ▶東宝ミュージック 03・3201・2400 www.toho-m.co.jp ▶徳間ジャパンコミュニケーションズ www.tkma.co.jp/tjc ▶日本クラウン 03・6381・7730 www.crownrecord.co.jp ▶日本コロムビア 03・6895・9001 columbia.jp ▶ハウリング・ブル 03・5771・6966 www.howling-bull.co.jp ▶ハヤブサランディングス 03・5468・6495 www.hayabusa-landings.com ▶BSMFレコード 072・637・6718 www.bsmf.jp ▶ビートインク 03・5768・1277 www.beatink.com ▶Pヴァイン 03・5784・1250 p-vine.jp/ ▶ビクターエンターテインメント 0570・010・115 www.jvcmusic.co.jp ▶ビショップ 03・6796・3779 www.realarts.org ▶ビデオアーツ・ミュージック 03・6229・0751 www.videoartsmusic.com ▶ブリッジ 03・3710・8049 bridge-inc.net ▶ポニーキャニオン 03・5521・8000 www.ponycanyon.co.jp ▶ポリスター 03・6418・6011 www.polystar.co.jp ▶ボンバ・レコード 03・5484・0688 homepage2.nifty.com/BOMBA ▶マーキー・インコーポレイテッド 03・5414・5281 www.marquee.co.jp ▶マーキー～ベル・アンティーク 03・3954・4896 www.marquee.co.jp ▶ミューザック 03・5468・7065 www.muzak.co.jp ▶ミュージック・キャンプ 03・5301・3771 www.m-camp.net ▶メタカンパニー 03・5273・2821 www.metacompany.jp ▶ヤマハミュージックメディア 03・6894・0288 www.ymm.co.jp ▶ユニバーサルミュージック 03・4586・2300 www.universal-music.co.jp ▶ライス・レコード 048・814・0830（オフィス・サンビーニャ） www.sambinha.com ▶ワサビ・レコード 03・5938・5309 www.wasabirecords.com ▶ワーナーミュージック・ジャパン 03・6372・0999 wmg.jp

CamScannerでスキャン

THE AEROVONS ◆ ワールド・オブ・ユー：ザ・コンプリート・レコーディングス／エアロヴォンズ

Grapefruit / A TO Z(ディスクユニオン) ATOZ171 2CD ¥3500 11・27 解説＝黒田隆憲 輸入盤国内仕様

69年に英アビー・ロード・スタジオで録音され、パーロフォンからリリースが予定されていたものの、お蔵入りになっていたアルバム『レザレクション』が、03年に英RPMからリリースされたことで好事家たちの話題を呼んだジ・エアロヴォンズ。本盤は彼らの全スタジオ音源となる38曲をCD2枚組にまとめたもの。英チェリー・レッド傘下のグレープフルーツ盤に『ビートルズの遺伝子ディスク・ガイド』の監修者、黒田隆憲によるライナー・ノーツが付加されて、国内発売された。

セントルイスで育ったトム・ハートマンは12歳でビートルズの洗礼を受け、地元のバンドにギタリストとして参加。66年、14歳で学友たちとビートルズやザ・フーをカヴァーするロック・バンド、エアロヴォンズを結成する。67年にはオリジナル曲「ワールド・オブ・ユー」のデモ・テープを作成。それを聴いて触手を伸ばしたキャピトルに「ロンドンでビートルズと同じスタジオで録音したい」と返答すると、その願いが受け入れられる。数回の渡英の際に、ハートマンはポール・マッカートニーと言葉を交わし、ジョージ・ハリスンからアドヴァイスを受け、ビートルズの録音を見学するなど貴重な体験を果たす。EMIと正式に契約、69年、ノーマン・スミスをプロデューサーに迎えたシングル「ザ・トレイン」でデビュー。続いてアラン・パーソンズ、ジェフ・エメリックらも録音に関わった「ワールド・オブ・ユー」をリリースする。そして冒頭で触れた"幻"となるアルバムのレコーディングをアビー・ロードで行なう。

ディスク1の1曲目から12曲目はオリジナル・アルバムに収録が予定されていた曲。「ワールド・オブ・ユー」から、ポール・マッカートニー的センスのメロディが炸裂する。流麗でドラマティックなストリングスとリード・ギターとの交差、ステレオ・パンニングするドラム・フィルが緊張感を孕む。タイトル曲（となるはずだった）「レザレクション」のメロは「アクロス・ザ・ユニヴァース」に似ている。「セイ・ジョージア」は「オー・ダーリン」のパロディか。「ザ・チルドレン」の構成は「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」を強く意識している。…という風に、まず、バンドに含有されたビートルズ成分を抽出して楽しむのは当然のこと。そこは避けては通れない。が、繰り返し聴きこむうちに、憧れでは終わらない、表現の芯の強さも実感できた。ピアノで弾き語られる「ヒア」のメロディは特筆すべきものがある。12曲のほかに「ワールド・オブ・ユー」のデモや「ザ・トレイン」の（ノーマン・スミス編曲の）弦抜きヴァージョンなど8曲が付加されている。

ディスク2にはメンバー脱退などの理由で『レザレクション』発売中止となったあと、ハートマンが録音した「ストップド！」のデモ音源、マイク・ポストがプロデュースしたハードな「サンシャイン・ウーマン」、さらにアナザー・プラネット・ミュージックから21年に『ア・リトル・モア』と題されリリースされた8曲、加えて20年から24年にかけて録音された、未発表曲など18曲が収録されている。

「ナウ・アンド・ゼン」を"いい曲だなあ"と素直に味わえる人には強くお薦めします。 安田謙一

CamScannerでスキャン

KEITH NOBLE ◆ ミスター・コンプロマイズ／キース・ノーブル

Guerssen(ディスクユニオン) DUPG303／¥3000／11・27／解説＝藤原晋／輸入盤国内仕様

70年に自主盤制作を主とするロンドンのエデン・レーベルからひっそりとリリースされた本作は、シンガー・ソングライターのキース・ノーブル（2014年に70歳で逝去）が自身の音楽キャリアに決着をつけるべく完成させた唯一のソロ・アルバム。彼の名前込みで憶えている人は少ないと思うが、後にピンク・フロイドへと発展するR&Bバンドのシグマ・シックスに妹のシェイラとともに在籍していたのがこの人である。

フロイド・マニアなら当然チェックすべき音源ということになる。だが、実際に音を聴いたことがある人はそれほど多くないに違いない。オリジナル盤はプレス数がどれくらいだったか、どのような経路で人の手に渡ったかすら、今となっては確かめようがない。再発されるのは今回が初めて（日本盤はスペインのゲルセンを通じて復刻されたCDの輸入盤国内仕様）だ。

収録されているのは、彼が共作者として名前を連ねるチャド＆ジェレミーの64年のヒット・シングル「ア・サマー・ソング」に通じるところもあるソフトでポップなフォーク調の曲が中心。フロイドほどのスケール感や大胆さはないものの、エレクトリック・ヴァイオリンや管楽器、女性コーラス（シェイラが担当）を交えたアレンジと彼の繊細なヴォーカルとで紡がれたサウンドは聴き込むほどに味わいを増す類のものだ。そこはかとなく漂う陰影や幻想美、浮遊感、そしてそうした音作りに確固たる指針を与える内省的なテーマの数々には、深いところでフロイドとつながっていると思わせる部分もあり、そうした聴き方はもちろん面白い。だが、無理にそこと結びつけずとも、十分に聴き継がれるべきといえるだけの価値をもった再発盤である。　松井巧

MASTER'S APPRENTICES ◆ マスターズ・アプレンティス（チョイス・カット）／マスターズ・アプレンティス

Big Pink(ヴィヴィド) VSCD6229／紙ジャケット／¥2700／12・25／解説＝小西勝／輸入盤国内仕様

ヒプノシスが担当したアルバム・カヴァーにふさわしく、ユニークな〝ハード・ロック〟を展開するオーストラリアのバンドが71年に出したサード。イギリスでのデビュー作ゆえか英国盤は“Master's Apprentices”として発売されたが、67年のファーストの表題と酷似しているため、母国盤は“Choice Cuts”というタイトルだった。デジタル・リマスタリングされ、詳細な日本語ライナーの他に英文ライナーも封入だ。

ロンドンのアビー・ロード・スタジオで70年の9月からレコーディング。プロデューサーはシド・バレットやクォーターマスの70年のファーストを録ったジェフ・ジャラット。エンジニアはバッドフィンガーのセカンドを手掛けたジョン・カーランダーと、ピンク・フロイドやトゥモロウのファーストを録音したピーター・バウン。関係者の期待の高さがうかがえる。

2〜3分台の曲がほとんどのコンパクトな作りながら、1曲の中にたくさんの聴きどころを設けて飽きさせぬハイブリッドな作品だ。〝型にはまらないハード・ロック〟という言葉も陳腐になるほどヴァラエティに富むが、様々な要素をしっかり咀嚼しているから散漫に感じない。リリカルに始まったかと思えばラテン調に移り、加速するパートあり、コミカルなパートあり。ブルージーなギターやプログレのイメージを担うキーボードに加え、ブリティッシュ・ビートからの影響でベースとドラムの音も効いている。ヘヴィでも柔らかいサウンドで、ソフト・ロック風の曲からも天然のサイケデリック風味が匂い立ち、曲によって入るコンガやジューズ・ハープもいいアクセントだ。繊細なヴォーカルやメロウなコーラスもポイントで、おおらかな佇まいにほっこりする一枚。　行川和彦

CamScannerでスキャン

ARCHIE WHITEWATER ◆ アーチー・ホワイトウォーター

Big Pink（ヴィヴィド） VSCD6230／紙ジャケット／¥2700／12・25／解説＝小西勝／輸入盤国内仕様

60年代後半、ジャズやR&Bの影響下にあるホーン・セクションを擁したブラッド・スウェット＆ティアーズやシカゴを筆頭とするバンドがいくつか成果を残したが、この、まるで個人名のような名前を持つアーチー・ホワイトウォーターもそんなグループのひとつと言えるのかもしれない。

70年初頭にニューヨークで9人のミュージシャンによって結成され、チェス・レコードの傘下に置かれたカデット・コンセプト・レーベルから同年に発売されたデビュー盤にして唯一のアルバムが本作。リーダーのサックス奏者トラヴィス・ジェンキンスは39年生まれで、当時ジャズ畑では既に10年以上のキャリアがあり、満を持してのバンドであったろう。ヴォーカルやコンポーズも担当して気を吐いている。キーボードのボブ・バーコウィッツは最も多くソングライティングに関わっており、この二人がバンドの方向性を決定している中核と言えそうだ。

音楽性としては、基本的には歌ものがメインであるが、ホーンを効果的に配したジャズ・ファンク、ブルース、ソフト・ポップスといった様々なテイストの曲をクリエイトしており、サックスやエレピ、ヴィブラフォンが華麗に舞うインスト・パートにも充実感のあるニュー・ソウル風からハードでサイケデリックなブルース・ギターが鳴り響く曲まで非常に多彩。心地よくスウィングするいかにもニューヨークらしい都会的な音作りが彼らの身上であったのだろう。洗練としたソウル味が心地よい「ドント・ビー・ショート」など耳を捉える佳曲も少なくなく、たまたま世の中に伝わるタイミングを逃し、正当な評価を受け損なっていたのではないかと思えてならない。ポップスが多面的な表情を見せ始める70年代を予見させるような好盤だ。

青山陽一

CAMEL ◆ トーキョー・ドリーム〜80年1月27日、東京厚生年金会館に於ける実況録音盤〜／キャメル

ワサビ WSBBGX041／¥2800／12・18／歌詞／解説＝山田順一

アンドリュー・ラティマーの体調不良によりバンド・デビュー50周年を記念する日本公演が流れたキャメル。時期は違うが80年1月27日に東京厚生年金会館で行なわれたコンサートの模様を伝える本作の再発は、彼の復帰を待ち望むファンにとってのささやかな癒しとなるだろう。

このときのキャメルは、ギター／ヴォーカル／フルートにラティマー、ベースにコリン・バス、ドラムスにアンディ・ウォード、キーボードにヤン・シェルハースとキット・ワトキンスという、スタジオ作『アイ・キャン・シー・ユア・ハウス・フロム・ヒア（邦題：リモート・ロマンス）』を録音した際と同じラインナップとなっている。同作収録曲の割合が高いのはそのためだが、それ以外の「エコーズ」、メドレー形式にアレンジされた『スノー・グース』の曲などでも、このラインナップらしいモダンさとロマンティシズムにあふれたアンサンブルを聴かせているのが特徴だ。すべてのトラックが当時のFM東京（「ゴールデン・ライブ・ステージ」）でオンエアされたクリアな音源に基づいているのも、バンドの特徴を伝えるのに一役買っているといえるのかもしれない。

惜しむらくは、2019年に発売されたオリジナル輸入盤と同一である放送時の編集音源をほぼそのまま使用しているため（厳密にいえば、番組パーソナリティのMCはカット）、割愛されたトラックがずいぶんある（CDには13曲中6曲を収録）。招聘元のウドーが当時販売した＜ジャパン・ツアー '80＞パンフレットのミニチュア・レプリカが封入されているのは日本盤だけの仕様。30センチ×30センチの版型を12センチ×12センチに縮小しているので、細かい文字まで読むには虫眼鏡が必要だけれど。

松井巧

CamScannerでスキャン

MOLOCH ✦ モロク

Big Pink(ヴィヴィド) VSCD6233／紙ジャケット／¥2700／12・25／解説＝小西勝／輸入盤国内仕様

後にビッグ・スターやアレックス・チルトンのアルバムに参加するリー・ベイカー(g)在籍の、メンフィス出身のバンドが70年に出した唯一のアルバム。リマスタリングの音が使われ、長文日本語解説と簡潔な英文ライナー封入だ。デラニー&ボニーのファーストを手掛けたドン・ニックスがプロデュースし、ほとんどの曲を一人で書いている。ジェフ・ベック・グループもカヴァーした「Going Down」をはじめ、ハードなブルース・ロックの派生形で、オルガンも目立つ一方、ピアノ入りの曲はロックンロール色が強い。部分的にロバート・プラントを想起するヴォーカルも魅力的で、ロッカバラードも味わえる。 行川和彦

AMEN CORNER ✦ ラウンド・エーメン・コーナー／エーメン・コーナー

オールデイズ(クリンク) ODRIM1098／紙ジャケット／¥1800／11・29／解説＝立井公一郎／輸入盤国内仕様

今やエリック・クラプトンの片腕として有名になってしまったアンディ・フェアウェザー・ロウをフロントに擁し、いくつかのヒットを飛ばしたエーメン・コーナーの68年のデビュー作に8曲を加えた全21曲の拡大盤。ポップ・アイドル的側面もあったが、ブラック・ミュージックの熱っぽい解釈ぶりはスモール・フェイセズなどモッズの系譜に通ずる。アメリカン・ブリードでヒットした「ベンド・ミー、シェイプ・ミー」はこちらに軍配だろう。代表曲「ジン・ハウス」や「ハーフ・アズ・ナイス」も網羅するが、エルヴィス・プレスリーからソウル・サヴァイヴァーズまで硬軟入り乱れるカヴァーのチョイスもハイセンス。 青山陽一

THE SCAFFOLD ✦ サンキュー・ヴェリー・マッチ／スキャッフォルド

オールデイズ(クリンク) ODRIM1097／紙ジャケット／¥1800／11・29／解説＝八亀弘和／輸入盤国内仕様

ポール・マッカートニーの実弟、マイク・マグギアが音楽担当として関わっていたコメディ・グループ、スキャッフォルドは60年代後半からノヴェルティ色の強いレコードを制作していたが、67年のシングル「サンキュー・ヴェリー・マッチ」のヒットを受け、これを表題に当時のシングルや新録音など音楽面を簡潔にまとめて68年にリリースされた編集盤に三つのボーナス曲を追加。英国人の風俗やユーモアに通じていないと完全に理解するのは難しいかもしれないが、ある種のフォークっぽさや劇場っぽさ、ボンゾ・ドッグ・バンドやモンティ・パイソンらに連なっていく感触をひとつのとっかかりとして楽しみたい怪作だ。 青山陽一

BRIDGET ST. JOHN ✦ ソングス・フォー・ザ・ジェントル・マン／ブリジット・セント・ジョン

ベル・アンティーク(マーキー) BELLE244122／SHM-CD／紙ジャケット／¥3273／12・20／歌詞・訳詞／解説＝宮坂聖一

2004年に惜しくも亡くなった伝説のラジオDJジョン・ピールがその才能を高く評価し、彼が主宰したダンデライオン・レーベルからピール本人のプロデュースでアルバム・デビューしたブリジット・セント・ジョン。ダンデライオンからはアルバム3枚がリリースされたが、71年発表の本作はそのうちの2作目で、ピンク・フロイドとの仕事でも知られるロン・ギーシンがプロデュースを担当している。その効果は弦楽器や管楽器の導入に顕著に現われ、豊かな音色が彩を添えているが、それでも中心となっているのは巍然屹立とした彼女の歌とギターだ。ボーナスは、08年にエアー・メイルから国内再発されたCDと同じ4曲。 杉原徹彦

CamScannerでスキャン

CATAPILLA ◆ チェンジズ　キャタピラ

ベル・アンティーク(マーキー)　BELLE244124　SHM-CD　紙ジャケット　¥3500　12・20　解説＝宮坂聖一

69年に英フィリップス傘下に設立されたレーベル：ヴァーティゴの初期カタログには、個性的なアルバムが数多くある。72年に発表されたキャタピラの2作目である本作もそのひとつ。19年リマスター音源を使用したSHM-CDで再発されたもののアンコール・プレス盤で、一部が切り抜かれたオリジナルの変形ジャケが再現されている。全4曲の大作志向、サイケ・ロックやジャズ、ブルースなどがミックスされたダークでヘヴィなサウンド、その上でリードをとるサックス、アンナ・ミークの浮遊感のあるヴォーカルが醸しだす怪しげな雰囲気は、当時の英アンダーグラウンドを象徴する音としか形容のしようがないものだ。　松曳智仁

SPONTANEOUS COMBUSTION ◆ スポンティニュアス・コンバスション

Big Pink(ヴィヴィド)　VSCD6231　紙ジャケット　¥2700　12・25　解説＝小西勝　輸入盤国内仕様

当時、エマーソン・レイク＆パーマーのグレッグ・レイクがプロデュースしたUKロック・トリオの72年の初作。音はリマスタリングされ、二つ折り紙ジャケット仕様だ、メンバーの平均年齢が18歳ならではの怖いもの知らずのアルバムで、先の読めない6曲に翻弄される。サイケデリック感はピンク・フロイド、疾走感はディープ・パープル、ポップ感はビートルズ、ハード・ロックのリフはジミ・ヘンドリクス、コーラスはクイーン、歌ものパートは初期キング・クリムゾン、とでも言おうか。やんちゃな変態性はアメリカン・コミック風のアートワークにピッタリだ。英文ライナーと率直な日本語解説付きの39分強の6曲入り。行川和雄

PETER BANKS ◆ ツー・サイズ・オヴ・ピーター・バンクス　ピーター・バンクス

ベル・アンティーク(マーキー)　BELLE244123　SHM-CD　紙ジャケット　¥3273　12・20　解説＝宮坂聖一

イエスのオリジナル・メンバーで、最初のアルバム2枚でギターを弾いていたピーター・バンクスが、フラッシュ在籍時の72年に制作を始め、翌73年に発表した全編インストのファースト・ソロ・アルバム。半数以上の曲でギターで共演しているフォーカスのヤン・アッカーマンをはじめ、フィル・コリンズ、スティーヴ・ハケット、ジョン・ウェットンらプログレ系の豪華メンバーが参加している。バンクスはキーボードも弾くが、やはり聴きどころはアコースティック・エレクトリックともに華があるギターだ。後半では長尺のジャムを繰り広げており、アルバム・タイトルどおり彼の二つの面を打ち出した内容となっている。　杉原敬彦

GURU GURU ◆ カングルー　グル・グル

ベル・アンティーク(マーキー)　BELLE244125　SHM-CD　紙ジャケット　¥3273　12・20　解説＝大越よしはる

ジャーマン・プログレを代表するグル・グルの3作目（72年発表）が、24年最新リマスター音源を使用したSHM-CDで再発された。現在までグル・グルを牽引し続けるマニ・ノイマイヤーと、アクス・ゲンリッヒ、ウリ・トレプテという初期メンバーで録音された最後のアルバム。前2作にあったスペイシーなフリー・ジャズ、アヴァンギャルドな一面を残しながらより練りあげられたインスト・パートとコミカルな味わいの歌パートで構成された、10分超えの大作全4曲を収録。緩急のきいた展開など、よりしっかりとしたコンポーズの跡がうかがえる楽曲のなかで、前衛性とユーモアが軽やかに調和した初期の傑作だ。　松曳智仁

CamScannerでスキャン

BROTHER TO BROTHER ◆ イン・ザ・ボトル　ブラザー・トゥ・ブラザー

Big Pink(ヴィヴィド)　VSCD6232　紙ジャケット　¥2700　12・25　解説＝小西康　輸入盤国内仕様

70年代半ばを中心に、ニュージャージーのシルヴィア・ロビンソン配下で活動したファンク・バンド、ブラザー・トゥ・ブラザー。その74年、初アルバムがストレイト・リイシューされた。シルヴィアによる前年の名盤 "Pillow Talk" での演奏は彼らで、当時のリーダー格、マイケル・バートンは共同プロデュースを担い、初期ドラマーのヨギ・ホートンも参加していたが、本作のドラムは不詳のようだ。制作陣には同じくシルヴィア配下だったモーメンツのメンバーも名を連ねるが、全体にはバンドの個性が尊重され、アレンジャーのサミー・ロウと、アレンジ・曲提供と（クレジットにはないが）演奏参加のウッド・プラス＆スティール（以下、WBS）が助力、という印象。

同じ74年のギル・スコット・ヘロン 'The Bottle' を取りあげ、本家を上回るヒットとなった表題曲がまず出色。フルートも絡むこのカヴァーは、数年前のハーレム・リヴァー・トライヴを彷彿させもする。WBSの前身でもあるスカル・スナップス 'It's A New Day' の改題 'Hey, What's That You Say' は、若々しくも粘っこいアーシー・ファンク。一方、テンプテーションズ 'I Wish It Would Rain' は画期的なフォーク調カヴァーだ。オハイオ・プレイヤーズの最初期曲をファンキー疾走チューン化した 'Trespassing' では、キレのいいホーンズも効く。マイアミ風味のギターが印象的な 'A Love Of My Own' と、銀判な 'If He Can Do It (You Can Do It)' はWBS作（WBS自身の再演版は近年の発掘リイシューなどで聴くことができる）。一部の曲では70年前後のアイズレー・ブラザーズを想起させられたり、スライ・ストーンのダル唱法に通じるダミ声ヴォーカルも聴けたりと、様々に楽しめる作品。　出田圭

DONALD HARRISON featuring DR. JOHN ◆ インディアン・ブルース　ドナルド・ハリソン・フィーチャリング・ドクター・ジョン

Candid(BSMF)　BSMF 7738　¥2900　12・25　解説＝西村雅人　輸入盤国内仕様

アート・ブレイキーとジャズ・メッセンジャーズのサックス奏者として活躍し、また、コンゴ・スクエア・ネイション・アフロ・ニューオーリンズのビッグ・チーフ（トライブの代表）でもあったドナルド・ハリソン。その、92年のリーダー・アルバムが本作だ。彼のキャリアとしては、マルディグラ・インディアン（ニューオーリンズ在住のネイティヴ・アメリカンの扮装をしたアフロ・アメリカン）としての方が早く、幼い頃からセカンド・ライン文化に慣れ親しみ、その後、バークリー音楽院で学びジャズの道に進んでいった。

本アルバムではタイトルが指し示すように、そのマルディグラ・インディアンが重要なモチーフとなっている。マルサリス兄弟とも共演しているベーシストのフィル・ボウラー、ピアニストのサイラス・チェスナット、フレディ・ハバードのグループにいたドラムスのカール・アレンなどが参加している。最もこのアルバムを印象付けているのが、ドクター・ジョンの存在だ。あのダミ声、あの強靭なタッチのピアノで、ニューオーリンズ色を濃厚に打ち出している。

セカンド・ラインのリズムが豪快に鳴り響く 'Hu-Ta-Nay' 'Two-Way-Pock-ey-Way' などは、まさにマルディグラ・インディアンならではのサウンドだ。プロフェッサー・ロングヘアでもお馴染みの 'Big Chief' では、ドクター・ジョンの豪放なヴォーカルが大活躍。と思いきや、'Cherokee' ではストレイト・アヘッドなジャズ・アンサンブルを聴かせたり、両者が渾然となっているところが興味深い。このようなアルバムが、チャールズ・ミンガス、セシル・テイラー、ブッカー・リトルなどの名盤で知られるキャンディド・レコードから発売されていたことに驚きを感じる。　小川真一

CamScannerでスキャン

CHARLES MINGUS ◆ リインカネーションズ／チャールズ・ミンガス

Candid(BSMF) BSMF7737／¥2900／1・24／解説＝西村雅人／輸入盤国内仕様

キャンディドに残されたミンガスの発掘音源集だ。具体的には、60年の10月20日と11月11日に行なわれたセッションから、当時発売された3枚のアルバム(『ミンガス』『ミンガス・プレゼンツ・ミンガス』と、ジャズ・アーティスト・ギルド名義の『ニューポート・レベルズ』)のアウトテイク集であり、88年に発売された本作と同趣向の『リインカーネーション・オブ・ア・ラヴバード』、さらに23年発売の『インカーネーションズ』の続編と言える内容。24年4月のレコード・ストア・デイでアナログ発売されたもののCD化となる。

1曲めはミンガスの代表曲のひとつで、57年の『道化師』が初出となる 'Reincarnation Of A Lovebird'。オリジナルでの、冒頭からのタイトな演奏とチャーリー・バーカーへのオマージュというニュアンスはなくなり、静かに始まり、徐々にスピリチュアルな緊張感が高まる名演だ。いくつもヴァージョンが発表されているが、どれも表情が違う。2曲目はミンガスの盟友、ダニー・リッチモンドの独演となる完全なドラム・ソロ。ベースとドラムが一体となった状態をミンガス・サウンドにおけるリズムの完全体と考えるならば、逆説的にミンガスの実像が浮かび上がってくるはずだ。3曲目の 'Wrap Your Troubles In Dreams' は、『ニューポート・レベルズ』に収録されたものの別ヴァージョン。4曲目の 'Varsarlean' は西村雅人氏のライナーによると、61年に発表されたコンピ『ザ・ジャズ・ライフ』に収録されたものと同音源ではないかとのこと。最後の 'Body And Soul' も3曲目と同じく、『ニューポート・レベルズ』に収録されたものの別ヴァージョンだ。LPサイズの、全5曲で43分ほどの収録時間が心地いい。荒川典久

PAQUITO D'RIVERA ◆ フーズ・スモーキング?!／パキート・デリヴェラ

Candid(BSMF) BSMF7739／¥2900／12・25／解説＝西村雅人／輸入盤国内仕様

キューバ出身で、73年に結成されたアフロ・キューバン・ジャズのバンドであるイラケレで活動。アメリカに亡命して以降はディジー・ガレスピー・ビッグ・バンドへの参加、数々のクラシックの交響楽団との共演を経て、グラミー、ラテン・グラミー賞を十数回にわたって受賞してきたパキート・デリヴェラ。まさにラテン・ジャズの巨匠だ。

この『フーズ・スモーキング?!』は、89年に復活したキャンディド・レコードから、新録作品として92年にリリースされたものだ。ライナー・ノーツには当時のパキートの言葉が記されているが、"私は長年モンク、バード、ディジーの音楽を研究してきましたが、このタイプの音楽のフルレングス録音をしたいとずっと思っていました" と言うように、ここではキューバ音楽から離れて、ストレイトなハード・バップを演奏している。本作にテナー・サックスで参加しているジェイムズ・ムーディは、ディジー・ガレスピーらと共演してきたサックス奏者だ。そして、表題曲の 'Who's Smoking?!' では、念願のハード・バップを演奏できる喜びが滲みだすかのように、軽快にして酒脱、かつ自由闊達な演奏を展開していく。ジョン・コルトレーンの 'Giant Steps' では、パキートはクラリネットで細密かつしなやかなソロを聴かせる。セロニアス・モンクの 'I Mean You' では、小粋で艶やかなクラリネットを吹いてみせる。また 'Out Of Nowhere' で、ベースとのデュオで聴かせるクラリネットも繊細にして優美だ。アルバム全体を通してラテン・ジャズの要素はないが、アフロ・キューバン・ジャズの時代から秘めていたハード・バップ魂が炸裂し、それを謳歌するパキートの姿を楽しめるアルバムだ。 宗像明将

CamScannerでスキャン

秋吉敏子/ルー・タバキン・ビッグ・バンド ✦ 孤軍

RCA(ソニー) SIJP1124 / LP / ¥4000 / 12・25 / 解説＝岡崎正通ほか

1940年代から9ディケイドにわたって活動を続けるピアニスト、作・編曲家、バンドリーダーが秋吉敏子だ。"国際的に認められた日本人女性ジャズ音楽家"としては、上原ひろみや挟間美帆の大先輩にもあたる。

このたびLP復刻されたのは、彼女とテナー・サックス／フルート奏者のルー・タバキンが73年に米ロサンゼルスで結成したビッグ・バンドによる、74年録音のデビュー作。同楽団は82年にニューヨークへ拠点を移し、03年に活動を終了したが、30年におよぶ歴史の中で常に錚々たるメンバーを擁していた。このアルバムにも元デューク・エリントン楽団のブリット・ウッドマン(tb)、元カウント・ベイシー楽団のドン・レイダー(tp)、元バディ・リッチ楽団のボビー・シュー(tp、fh)、ウディ・ハーマン楽団とスタン・ケントン楽団の双方に在籍経験のあるビル・パーキンス(tb)など凄腕たちが揃う。アルト・サックスのゲイリー・フォスターやディック・スペンサーは、このオーケストラに所属することで日本での知名度を大いにあげたはずだ。

音響的に興味深いのは、能楽の要素も取り入れた「孤軍」(74年にフィリピン、ルバング島から帰還した元予備陸軍少尉、小野田寛郎に捧げられた)や、作家、スコット・エルスワースの語りが入る「メモリー」だろうが、今回聴き直して心ときめいたのはストレイトにスウィングし、ドライヴする楽曲の数々。「エレジー」出だしのピアノ・アドリブ、続いて炸裂する管楽器群に、はちきれんばかりの情熱を覚えるのは私だけではあるまい。熱のこもったアドリブ・ソロが連続した後、超絶的なアンサンブルで締めくくられる「ヘンペクト・オールド・マン」も、目の覚めるような仕上がりだ。　原田和典

立花ハジメ ✦ hajimeht

ALDELIGHT(ソニー・ミュージックレーベルズ) MHCL31037～8 / 2Blu-spec CD2 / ¥4000 / 1・15 / 歌詞 / 解説＝立花ハジメ、高木完
ALDELIGHT(ソニー・ミュージックレーベルズ) MHCL31034～5(初回生産限定盤) / 2Blu-spec CD2 / 紙ジャケット / ¥6000 / 1・15 / 歌詞 / 解説＝立花ハジメ、高木完

日本のテクノポップのパイオニア、プラスチックスのギタリストとしてキャリアをスタートした立花ハジメ。82年にソロ・デビューして以降の音源をレーベルを超えて集めた初のオールタイム・ベストが本作だ。高木完、小山田圭吾、立花の3人が選曲。CD2枚組全43曲というヴォリュームたっぷりの内容で、砂原良徳がマスタリングを手がけた。

立花はソロ活動をスタートするにあたり、ギターをサックスに持ち替えてサウンドはテクノから大きく変化。初期曲のサックスの音色には、ジェイムズ・チャンスをはじめジャズ／ファンクを取り入れたポストパンクの匂いが漂う。そこにミニマル・ミュージックなど現代音楽の要素を取りれたり、サンプリングを導入してエレクトロニックなサウンドに回帰したりと作品ごとにアプローチは変化するが、音楽を探求するというより、デザインするような姿勢は変わらない。"アルプス1号"をはじめ創作楽器を使用する実験的な面を持ちながらも曲に小難しさはなく、ポップな軽やかさを持っているのも一貫している。

80年代前半にラウンジ・ミュージック的な要素を導入。ライヴで突然「イパネマの娘」を弾き語りしたりと時代を先取る嗅覚の鋭さや発想の柔軟さに改めて驚かされる。また『BAMBI』(91年)の頃のサウンドの編集センスやダンス・ミュージックとしての完成度は、本作を共同プロデュースしたテイ・トウワに受け継がれていった。ボーナス・トラックとして小山田と高木による「MA TICARICA」のリミックスを収録。カテゴライズできないがゆえに音楽史から浮いてしまっている立花の音楽に二人がリスペクトを捧げているが、稀有な才能を再発見するきっかけとして最適なベストだ。　村尾泰郎

CamScannerでスキャン

コシミハル ◆ チュチュ
アルファ(ソニー・ミュージックレーベルズ) MHJL388 / LP / ¥4000 / 12・25 / 歌詞 / 解説＝コシミハル

コシミハル ◆ パラレリズム
アルファ(ソニー・ミュージックレーベルズ) MHJL389 / LP / ¥4000 / 12・25 / 歌詞 / 解説＝コシミハル

2021年のレコード・ストア・デイにあわせてアナログ再発されたコシミハルの2作品が、クリア・ヴァイナル仕様で再登場した。

音楽一家に生まれたコシミハルは、元来、クラシックやシャンソンに親しみ、子供の頃から作曲を行なう才人であった。だが、RCAからのデビューにあたっては、当時の音楽シーンの"主流"を占めていたニューミュージック～シティ・ポップ風のサウンド・プロダクションを軸にそのアーティスト活動をスタートさせた。同社では3枚のアルバムをリリースしており、それらも個人的には大変優れた内容だと思うが、独自の美意識を持った表現者、コシミハルならではの個性がみごと花開いているという意味では、やはりアルファ（¥EN）移籍後にリリースされた諸作こそが、現在に至るまでの活動の重要な発火点であると言えるだろう。

83年10月にリリースされた『チュチュ』は、彼女の通算4枚目となるアルバム。ライナー・ノーツに掲載されたインタヴューによると、彼女は本作制作の以前から、エンジニアの吉野金次と出会ったことをきっかけにリズム・マシンやシンセサイザー、ヴォコーダーなどの電子楽器を集め、デモ・テープの制作に没頭していたのだという。遠藤賢司のレコーディングに参加した際にそのデモ・テープを細野に渡し、細野が大いに気に入ったことで、¥ENからのリリースが決定した。細野のプロデュースによってそれまでのサウンド・イメージを一新し、テクノへと大幅に接近した内容となった同作は、YMOや細野のソロ作に通じる要素を感じさせつつも、ベルギーのテクノポップ・バンド、テレックスのカヴァーも収録。全編で彼女自身の個性であるヨーロッパ志向が溢れ出すという、稀有なバランス感をもった作品となった。岡野ハジメ、川島裕二、RAら新鋭アーティストの参加も、本作ならではのフレッシュさを演出する。なお、ジャケットはオリジナルとは異なっており、92年のCD再発盤のものを採用している。

続く『パラレリズム』は、84年9月に発表された5枚目のアルバム。前作のテクノポップ路線を引き継ぎつつも、"Miharuomi" のコラボレーション名義で細野がサウンド作りに深くコミットしたことも手伝ってか、よりいっそう作品としてのヴィジョンが研ぎ澄まされているのがわかる。前作ではわずかに残存していたニューミュージック的な要素が払拭され、清涼感と先鋭性が巧みに同居するオリジナルな内容となった。映像喚起力の高い歌詞・歌唱の魅力もいや増した印象だ。また、金子國義がアート・ディレクションを務めたジャケット・デザインも、統一的かつシュルレアリスティックなアルバムの世界観を見事に表わしている。

毎度定評のあるソニー発の再発アナログ盤だが、今回のクリア・ヴァイナル盤2作も、2021年ヴァージョンと同じく細野晴臣のプリ・マスタリング、小鐵徹のカッティングとなっており、音質面は万全だ。また、それぞれに封入されているライター／編集者の常田カオルによるコシミハル本人へのインタヴューも、コンパクトながら要点を押さえたもので、資料性が高い。

柴崎祐二

CamScannerでスキャン

センチメンタル・シティ・ロマンス+はちみつぱい ◆ 1974 One Step Festival
スーパーフジ(ディスクユニオン) FJSP520 / ¥2240 / 12・4 / 解説=中村俊夫

上田正樹とサウス・トゥ・サウス ◆ 1974 One Step Festival
スーパーフジ(ディスクユニオン) FJSP521 / ¥2240 / 12・4 / 解説=中村俊夫

かまやつひろし&オレンジ ◆ 1974 One Step Festival
スーパーフジ(ディスクユニオン) FJSP522 / ¥2240 / 12・4 / 解説=中村俊夫

サディスティック・ミカ・バンド ◆ 1974 One Step Festival
スーパーフジ(ディスクユニオン) FJSP523 / ¥2240 / 12・4 / 解説=杉本博士

クリエイション+内田裕也&1815ロックン・ロール・バンド ◆ 1974 One Step Festival
スーパーフジ(ディスクユニオン) FJSP524 / ¥2240 / 12・4 / 解説=金野篤

74年に開催された〝郡山ワンステップ・フェスティバル〟。このコンサートからアーティスト別にセレクトされたCDが一挙に再発された。8月8日の外道のステージの後を受け、シュガー・ベイブ（音源は残されていない）に続き舞台に上がったのは、センチメンタル・シティ・ロマンス。ソニーからレコード・デビューする1年前で、ファースト・アルバムに収録される楽曲を中心としたライヴだが、西海岸ロックを水彩画で表現したかのような淡くて繊細な味わいが格別。シュガー・ベイブがコーラス参加というのも、今となっては豪華な贈り物である。はちみつぱいはセンチに次いで出演。プログレッシヴな新曲「夕日のプレリュード」をはじめ、ぱいのアルバムから「月夜のドライブ」、76年リリースの鈴木慶一のソロ『火の玉ボーイ』に収められる「酔いどれダンス・ミュージック」や、初期ぱいの「煙草路地」、あがた森魚に提供した「大寒町」など、多彩な楽曲でショウマンシップの真髄をみせる。

上田正樹とサウス・トゥ・サウスは9日に登場。上田と有山淳司によるアンプラグド・ラグタイム・ブルースの第1部で客席を温めてから、サウス・トゥ・サウスを従えてホーンや石田長生(g)を迎えたファンキー大会へなだれ込む構成が見事。ウィルソン・ピケットやオーティス・レディング、サム・クックの名曲を完璧なR&Bマナーで、自身の持ち歌のごとくシャウトする上田の神がかったヴォーカルが凄い。〝サウスの後には出たくない〟と対バンすべてに言わしめたのも頷ける、ハイ・エナジーなテンションは日本ライヴ史上、一二を争う熱量だ。9日のトリを務めたかまやつひろし&オレンジは横内タケ(g)、山本達彦(kbd)、石井治郎(b)、浅野良治(ds)からなるオレンジと、ムッシュとのコラボ。スパイダース時代の「バン・バン・バン」、「どうにかなるさ」「のんびりいくさ」のソロ・ナンバー、リック・デリンジャーのカヴァーやオレンジのオリジナル曲などで構成されたライヴはラフで自由奔放な雰囲気に満ち、さながらロッド・スチュワートとフェイセズの関係性を彷彿させて貴重だ。

サディスティック・ミカ・バンドは、最終日10日のステージを収録。名盤『黒船』録音直後だが、特筆すべきは未発表曲の存在。「銀座カンカン娘」は、幻となった服部良一のカヴァー・アルバム『駅前旅館』に入るはずの曲で、同趣旨の雪村いずみ『スーパー・ジェネレイション』(74年)に先駆けたアイデアの片鱗が見える。「ロックンロールバンド」は小原礼による長尺ファンクで、後のバンブーやカミーノにつながるフュージョン志向が窺える。他の定番曲も、ライヴならではの大胆なアレンジが施され刺激的だ。クリエイションは5日のステージから。TVドラマ「大都会PARTⅡ」でも頻繁に流れた「ユー・ベター・ファインド・アウト」など、翌年発表される『クリエイション』の楽曲が中心で、竹田和夫のギターを軸に重厚なブルース・ロックが展開される。内田裕也&1815ロックンロール・バンドは10日の演奏を収録。クリエイションをバックにユーヤが十八番の「ジョニー・B・グッド」や「トゥッティ・フルッティ」を演る。そのスピードとリズム感に、改めて偉大なるロッカーだと実感する。

ヒロ宗和

金延幸子 ✦ 時にまかせて～金延幸子レア・トラックス +2

（ソニー・ミュージックレーベルズ）MHCL31033　Blu-Spec CD2／¥2545／12・25／歌詞／解説＝荒野政寿

ヴィム・ヴェンダース監督の映画『PERFECT DAYS』でファースト『み空』（72年）に収録された「青い魚」が使用されたことでも話題を呼んだ金延幸子。

彼女が『み空』に至るまでに所属したグループのライヴ音源や、シングル・ヴァージョンなどレア・トラックを集めたコンピレーション・アルバムが再発された。98年の東芝から、URCの権利移動に伴いエイベックス、ポニーキャニオンときて、今回のソニーで3度目の再発となる。これまでの14曲に加えて、CHELSEA名義の大滝詠一の編曲／はっぴいえんどの伴奏によるシングル「時にまかせて」と、そのB面曲「ほしのでんせつ」それぞれのアウトテイクがボーナス追加された、全16曲を収録。

西岡たかし、中川イサト、瀬尾一三、松田幸一らと組んだ秘密結社〇〇教団や、そこから西岡が脱退した〝愚〟、さらにソロとなってからの音源が混在しているが、金延の歌声は強い存在感を示している。ジョニ・ミッチェルの流麗な表現に通じるところも少なくないが、より深淵で孤独な世界を感じてしまう。ついアシッドという言葉に頼りたくなる。

ライヴでボサノヴァに編曲された愚の「あかりが消えたら」の演奏後、おちゆうじ（シューベルツ）のMC〝今のあれ、ロックとは言えないですよね〟に続いて8分を超える「ほしのでんせつ」を聴かせるところが白眉。アンサンブルの妙技はペンタングルを想起させる。

今回の再発では2曲のボーナス曲以外に、荒野政寿による詳細なライナーが付加されている。そこに引用された金延のインタヴューでは、シングルを手がけた大滝詠一に代わって、『み空』を細野晴臣がプロデュースするようになった流れが雄弁に語られている。　安田謙一

岡田有希子 ✦ ファースト コンサート「恋・はじめまして」

ポニーキャニオン　PCCA06361／2CD／¥3400／12・25／歌詞

岡田有希子のデビュー40周年リリース・プロジェクト関連作として、4種のコンサート音源を収めた通販限定の8枚組『GIFT / 1984-1986 Live Tour Box』。そこから84年9月24日、大阪厚生年金会館中ホールにおける〝ファースト コンサート「恋・はじめまして」〟の音源が一般発売された。初アルバム『シンデレラ』、彼女にいくつもの新人賞をもたらすことになるサード・シングル「・Dreaming Girl・恋、はじめまして」それぞれのリリースから19日後・3日後の記録で、PAミキサー卓からライン・アウト録音されたカセット・テープがソースだとか。ファンの声援はオフ気味とはいえ（現場では野太いコールが巻き起こっていたと思われるが）、品のよさと心根のやさしさを感じさせる歌唱は鮮明に捉えられている。伴奏を務める〝ファインメイツ〟は、数多くの歌手の関西公演に参加したジャズ系ビッグ・バンド〝居上博とファインメイツ〟のことだろうか。

この大阪公演のライヴ評を追うと〝前日から現地入りしてリハーサルした〟〝ぼぶっつけ本番だった〟と媒体によって正反対の記述に出くわすのだが、新人の清新さと、〝堂々たる〟と表現してもさほどたがわないであろう安定感を私は味わった。杏里や松任谷由実の楽曲カヴァー（オリジナル・アルバム未収録）も貴重。MCパートでは、コンサートに登場した巨大なぬいぐるみ犬〝ユッキー〟の話題や、彼女の描いたイラストを見てファンが曲名を当てるクイズも聞ける。

ドレスを着て、ワイヤード・マイクを使い、生バンドの伴奏で歌う昭和59年のソロ・アイドル（当時17歳と1か月）のワンマン・ホール公演をまるごと捉えたひとこま。その世界は、依然としてドリーミーで華やかなままだ。　原田和典

CamScannerでスキャン

岩崎宏美 ✦ WISH
ビクター VICL77063 UHQCD ¥2200 12・25 歌詞 解説＝金澤寿和
ビクター NJS812 LP ¥4000 3・26

岩崎宏美 ✦ 私・的・空・間
ビクター VICL77064 UHQCD ¥2200 12・25 歌詞 解説＝馬飼野元宏

岩崎宏美 ✦ わがまま
ビクター VICL77065 UHQCD ¥2200 12・25 歌詞 解説＝金澤寿和

岩崎宏美 ✦ Me too
ビクター VICL77066 UHQCD ¥2200 12・25 歌詞 解説＝馬飼野元宏
ビクター NJS813 LP ¥4000 3・26

ビクターが有するシティ・ポップ関連の名盤を復刻している〝フィーメル・シティポップ名作選〟に、岩崎宏美の80年代のアルバム4タイトルが新たにラインナップされた。従来同様に最新リマスタリング、タワーレコードでの生産限定盤。恒例のボーナス・トラック追加に丹念な解説、当時のライナーやシングル盤ジャケットの縮小版封入と手が込んでいる。

初のLA録音となった『WISH』は80年の作品で、全曲が筒美京平の作曲、作詞陣も橋本淳、なかにし礼、阿久悠、山川啓介と超豪華。作詞家デビューして間もなかった康珍化も参加している。筒美が岩崎に提供した曲といえば一連のディスコ歌謡が真っ先に思い浮かぶが、ここでは筒美が当時、興味を抱いていたとおぼしきカリフォルニア・サウンドが実践される。そのための海外録音だったのだろう。唯一、阿久が作詞している「処女航海」は、筒美が自身でアレンジも手がけており、外連味のないヴォーカルも相まって際立った一曲。ボーナス・トラックでは、林哲司のアレンジによるシングルB面曲「白夜」が最もシティ・ポップの色合いが濃い一曲であろう。

『私・的・空・間』は83年の作。筒美と岩崎が3年ぶりに組んだアルバムで、全10曲中7曲を筒美が作曲している。岩崎宏美の卓越した歌唱にいっそう磨きがかかったデビュー9年目。先行シングルとなった「素敵な気持ち」は、洗練の極みともいえるAOR歌謡の傑作であり、その次のシングルだった「真珠のピリオド」は、伊集加代子（現・伊集加代）のスキャットが印象的な哀愁路線のポップス。いずれも萩田光雄のエレガントなアレンジが秀逸である。ほかに「Morning Breeze」など、玉置浩二が3曲を提供。シティ・ポップの名盤と呼ばれるに相応しい内容となった。ボーナス・トラックには、「聖母たちのララバイ」に続いて「火曜サスペンス劇場」の主題歌となったシングル曲「家路」が収録されている。

86年作の『わがまま』は、全9曲中8曲を山川恵津子がアレンジ、うち6曲は作曲も共に手がけており、シティ・ポップのブームで最近とみに脚光を浴びている山川と岩崎の本格的なコラボレーションによるアルバムだ。ノスタルジックかつ洒脱なサウンドで世界中で話題になっているという人気チューン「カサノバL」もここに。ボーナス・トラックには、やはり山川の作曲によるシングル曲「好きにならずにいられない」も収められた。同曲のアレンジは「F・L・Y」が世界的人気を得ているスペクトラムの元メンバー、奥慶一によるものとトピックが満載だ。

最強のシティ・ポップ・アルバムと名高い『Me too』は88年に発表された作品。全10曲中、濱田金吾が6曲、和泉常寛が4曲の作曲を手がけている。アレンジは和泉自身が2曲、中村哲と戸塚修が4曲ずつ。全体的に抑えめの歌唱で、落ち着いた雰囲気が醸し出された大人のアルバムである。影森潤と上杉伸之助による詞も、リアルでドラマティックな恋愛が描かれて出色。「最初広いBEDに座った」「あなたのいらだちと私の理由」などのタイトルは、片岡義男の小説を彷彿させる。リゾート感に満ちたシティ・ポップとしての観点はもちろんのこと、ある意味では、昭和の最後にシンガー岩崎宏美が辿り着いたひとつの到達点と言えるかもしれない。 鈴木啓之

CamScannerでスキャン

GROUNDHOGS • Split

[UK] [REPRISE] LP

60年代初頭からジョン・リー・フッカーのバック・バンドとして活動し、解散を経て、68年にはギタリストのトニー・マクフィーを中心に再結成されたイギリスのブルース・バンド。長く活動を続けたが、23年のマクフィーの死去により、活動を終えている。そのイギリスでの人気の高さを反映するかのように、何度かアナログ盤でアルバムが再発されてきた。正統的ブリティッシュ・ブルースを聴かせる1～2作目も再発されたが、今回は3～4作目が再発売になった。

この4作目は、奇妙なジャケットが象徴するように、ブルースが基礎にありながら、完全にプログレッシヴな領域に踏み込んだ作品になっており、ファンを公言する若い世代のミュージシャンもいる。ギターとヴォーカルを担当するマクフィーを中心としたスリー・ピースのバンドの演奏は、生々しい音色で緊張感が漂う魅力あるもの。本作の前後数作が最も人気が高く、このレーベルからはデビュー作から72年の "Hogwash" までがアナログ再発されている。

白谷潔弘

ODA • Oda

Riding Easy [US] EZRDR166 / LP

黒地に赤い文字でOdaとだけ記されたぶっきらぼうなジャケットで登場したこのバンド。サンフランシスコを拠点に活動したランディとケヴィンの日系人のオダ兄弟によるバンドである。編成はギター2本の4人組。オダ兄弟は80年代にも同名のバンドを再編し、もう1枚アルバムを発表するが、これは70年代に発表した唯一のアルバム（73年作）。

アメリカには70年代になってもサイケを引きずったバンドが存在するが、本作ではハードなリフと鋭いギターを畳み掛ける完全なハード・ロックが完成している。また日系人に率いられてはいるが、フレーズや音階に日本を思わせる部分は皆無で、良質なアメリカン・ハード・ロックを聴かせる。オリジナル盤は全8曲が収録され、今回のアナログ再発も同様だが、配信では同時期の未発表曲が4曲公開されている。それらでも、アルバムと同様のハード・ロックとややソフトな曲調の楽曲やブルースに寄った曲などアルバム本編よりさらに幅広い作風の楽曲を聴くことができる。

白谷潔弘

BADFINGER • Head First

'87 [UK] VT35 / LP

本作はピート・ハム、トム・エヴァンス、マイク・ギビンズに元インディアン・サマーのボブ・ジャクソンが参加した4人で74年12月に録音されたものの未発表になっていた最終作。オリジナル・メンバー3人それぞれの曲だけでなく、ジャクソンも曲を提供、共作しており、それが見事にバンドの個性として成立している。当時の未発表の措置は、契約の問題からであり、曲のクオリティとは無関係であったことがわかる。

2000年には本作のラフ・ミックス版がデモ音源と併せてリリースされたことがあるが、今回はオリジナル・マルチトラックからのミックス、リマスターを本作の録音メンバーで唯一存命であるジャクソンと2015年からバッドフィンガーに参加しているアンディ・ニクソンが行なっており、これはオリジナル・メンバーとジャクソンの遺産管理団体が承認した最初の公式発売となる。2000年版と曲順が変えられているだけでなく、音質の向上は楽曲を際立たせ、アルバムを完成させているようだ。

白谷潔弘

CamScannerでスキャン

GEORGE HARRISON ♦ Living In The Material World (50th Anniversary)

BMG [EU] 3896890 2LP+2CD+Blu-ray+7inch

昨年末、ジョージ・ハリスン『リヴィング・イン・ザ・マテリアル・ワールド』の50周年盤が1年遅れで発売された。フォーマットは2CD＋2LP＋7inch single＋Blu-rayからなるスーパー・デラックス・エディションほか5種（LPには限定カラー盤も）。ディスク1はポール・ヒックスによる最新リミックスが施されたオリジナル・アルバム音源。ディスク2は別テイクをアルバム曲順に並べた未発表音源に、当時、シングルB面曲だった「ミス・オーデル」の最新リミックスを収録。リンゴ・スターへの提供曲「サンシャイン・ライフ・フォー・ミー」のジョージ歌唱版が追加収録されているものもある。スーパー・デラックスの7インチだけで聴ける「サンシャイン…」のインスト版もあるが、相当なマニア向けか。以下、主にディスク2以降の初出音源について言及したい。

ディスク2の1曲目からが未発表音源。'Give Me Love (Give Me Peace On Earth) [Take 18]' は、アコギ弾き語りによる演奏。スライド・ギターが入るべき場所の隙間が目立つ。スライドのメロディ込みで作曲設計されていることがよくわかるテイクだ。'Sue Me, Sue You Blues (Take 5)'。この段階ではライ・クーダーあたりがやりそうな真っ当なブルース・スタイルに留まっている。'The Light That Has Lighted The World (Take 13)' にはスライド・ギターが入ってないことで、ニッキー・ホプキンスのピアノの美しさが際立つ。アルバム中もっともメロディアスな 'Don't Let Me Wait Too Long (Take 49)' は、アコースティックな演奏でも最高にポップ。'Who Can See It (Take 93)' はストリングスをダビングする前のテイク。ヴォーカルも完成版と同じようだ。'Living In The Material World (Take 31)' はザキール・フセインのタブラが入る前のアレンジ。アルバム随一のスワンプ・ナンバー 'The Lord Loves The One (That Loves The Lord) (Take 3)' は、この初期テイクでは完成版より爽やかな印象で、まるでビートルズ時代の曲のようだ。'Be Here Now (Take 8)' はジョージお得意のインド風楽曲の部類だが、このテイクではその印象が希薄だ。ドローンを厚めに敷き、多重ヴォーカルをエコー処理することで宗教歌のような効果を出したのが完成版だろう。今回、最も驚いたのが 'Try Some Buy Some (Alternative Version)'。発表版と同じくロニー・スペクター版のオケを流用しているが、ここではストリングスを使わず、スライドでその効果を補っている。個人的にはビートルズ「ナウ・アンド・ゼン」のポール・マッカートニーのスライドに似た雰囲気を受け取り感激した。'The Day The World Gets 'Round (Take 22)' はこのテイクを採用すべきだったと思えるほど素晴らしい弾き語り。'That Is All' の完成版ではファルセットを多用していたが、このテイク24では地声の部分が多く、「サムシング」に似ていなくもないと感じた。隠れた名曲と言える。'Sunshine Life For Me (Sail Away Raymond)' のジョージの歌はリンゴのためのガイドなのかもしれない。ザ・バンドとジョージが共演する貴重な録音だ。どのテイクも作り込まれており、中にはアルバム版と甲乙つけ難いテイクもある。つくづく国内盤が出なかったことが残念だ。

本秀康

CamScannerでスキャン

MARTY ROBBINS ✦ More Gunfighter Ballads And Trail Songs

Wax Time [UK] WAX772366 LP

ロック時代の草創期、爽やかな「白いスポーツ・コート」(57年)などでポップとカントリーの橋渡し役を担った感のあるマーティ・ロビンス。しかしその名をうんと高めたのは、59年の全米No.1シングル「エル・パソ」だろう。すなわちこれが〝ガン・ファイター・バラード〟と称された一連のうたうカウボーイ・ソングの嚆矢だったというわけで。

本作は、59年のミリオン・セラー・アルバム『ガン・ファイター・バラーズ・アンド・トライアルズ・ソングス』へ〝モア〟を冠した61年発売の続編で、上記「エル・パソ」等、やはりコロンビアでの4曲のシングルをボーナス収録のアナログ復刻盤となる。「ライド・カウボーイ・ライド」や「ハンギング・ツリー」なんてタイトルの並ぶとおり、(ジャケットも含め)全編いかにも西部劇ふうの楽曲だらけ。曲調もまたオープニングの「サン・アンジェロ」における陽気なマリアッチ・スタイルのブラス・サウンドが示唆するごとく、まさしくカントリー&ウェスタンのヒット盤だろう。

杉原志啓

BILLY BURNETTE ✦ I Don't Say No

Iconclassic [US] ICON1608

ビートルズも最初期に楽曲をカヴァーした純ロカビリー・バンド、ジョニー・バーネット・トリオ。ビリー・バーネットはもちろんこのグループのリーダー、ドーシー・バーネットの倅で、後期のフリートウッド・マックの一員でもあった。

本盤はほぼ同時にリイシューとなった彼の従兄弟ロッキー・バーネット盤に続くビリー、80年唯一のヒット・アルバムだ(ちなみに、ロッキーのほうは父親ジョニーのごとくポップな作風なんだが、こちらはよりロック色が濃く、いわれているほどロカビリーの匂いは濃くない)。で、本作だが、やはり同年の唯一のヒット「ドント・セイ・ノー」をフィーチャーしたもので、ギタリストでもあるビリーのシャープでクリアなサウンドが印象的。また、なにほどか父親の世界をイメージさせるのは、〝キング〟エルヴィス・プレスリーのジャンプ・ナンバー「ワン・ナイト」を採りあげているあたりだろう。ただし、全編スマートで新しいドライヴ感ばっちりでも、いわゆる2世スターらしく心に刺さる泥臭さがチト。

杉原志啓

ROBERT GORDON ✦ Rockabilly Boogie (Expanded Edition)

Not Now [US] SVAC09950682

80年代のいわゆるネオ・ロカ・ブームといえば、大抵ストレイ・キャッツのブライアン・セッツァーが想起される。どっこいしかしで、もう一人、NYパンク・シーンから出現のロバート・ゴードンも忘れちゃいけない。

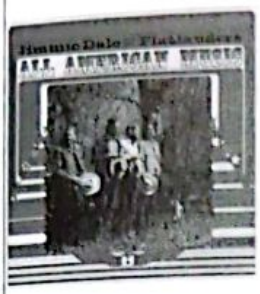
〝豪華拡張版〟と銘打つ本作は、彼の最高傑作といえるこのジャンルの名盤のひとつ。何より光るのは、バックだがけっして脇役なんかじゃないクリス・スペディングのオーセンティックなギター・ワークで、これが収録曲すべてで炸裂している。つまり、このジャンルのモダンな解釈を打ち出すゴードンのヴォーカルによりパワフルな現代性を付与しているところ。例えばジョニー・バーネット・トリオで有名なタイトル曲や、いかにものロッケンやスレイベルを配した〝キング〟エルヴィス・プレスリーの感傷的な季節もの「ブルー・クリスマス」のカヴァー・ナンバーなど超絶ものだ。4曲の追加テイクでのリンク・レイのギターも捨て難く、とにかくこんな大真面目なネオロカ盤も珍しい。

杉原志啓

CamScannerでスキャン

JIMMY DALE & THE FLATLANDERS ✦ All American Music

Sun / Omnivore [US] OVCD567／CD
Sun / Omnivore [US] OVLP567／2LP



テキサス・フォークのレジェンド三人衆、ジミー・デイル・ギルモア、ジョー・イリー、ブッチ・ハンコックそれぞれのファースト・ステップがこのフラットランダーズ。72年、カントリーのプロデューサー、シェルビー・シングルトンが制作、彼のレーベル、プランテーションでの録音だが、なぜか11曲入りの8トラック・カートリッジのみのリリース（73年）にとどまった。これに同セッションからの6曲を加え、80年にLP化したのが英チャーリー盤『ワン・ロード・モア』。日本を含め、世界中のルーツ派ファンに愛され、評価されたアルバムだ。

この再発は、さらに独ベア・ファミリーがオムニバス盤に収録していた「ダラス」の別テイクを加え、彼らの72年セッションをコンプリート化したもの。結局は全18トラックすべてが既出音源なのだが、フィドルやドブロ、ソー・ブレイド（ノコギリ）などが加わるピュアなアコースティック編成が生むテキサス・フォークの原点的マナーをもう一度…という筆者の〝推し〟アルバムです。　宇田和弘

JOHN CALE ✦ Paris 1919

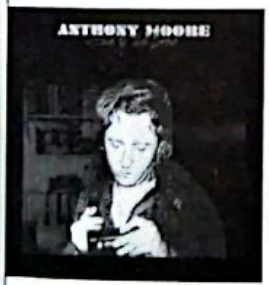
Domino [UK] REWIGCD139

ジョン・ケイルがリプリーズから発表した "The Academy In Peril"（72年）と "Paris 1919"（73年）が、本人の初公認盤として、リマスタリングされ再々発売された。"Paris 1919" は、06年に米ライノから再発の際は追加11曲入りだったが、今回はまったく違う6曲入りで、1曲は再録されたものだ。

本盤はクリス・トーマス制作だが、演奏にはリトル・フィートのロウエル・ジョージ、リッチー・ヘイワード、さらにビル・ペインとクルセダーズのウィルトン・フェルダーを起用。西海岸録音のせいか開放的な雰囲気で、曲もかなりポップなものが多い。'Child's Christmas In Wales' や 'Paris 1919' などでは、その歌声は何故かテリー・メルチャーを思わせる。ロウエルが激しく弾きまくった 'Macbeth' はまるでリトル・フィート。ケイルは当時、ジェニファー・ウォーンズをプロデュースしているが、南カリフォルニアを中心としたシンガー・ソングライターの全盛期に、彼なりの思い、個性を込めた作品集と言えるだろう。 中村彰秀

ANTHONY MOORE ✦ Home Of The Demo

Drag City [US] DC916／LP



スラップ・ハッピーのアンソニー・ムーアが、78～84年までに録音していた未発表音源集。中でも多くのロック・ファンの注目は、ピンク・フロイドの『鬱』（87年）に収録された「戦争の犬たち」「幻の翼」の原曲となる2曲（'One World' と 'Earthbound Misfit'）だろう。当時、デイヴィッド・ギルモアらは、ムーアの鋭く機知に富んだ詞に注目して3曲で彼の協力を得た。比べて聴くと興味深い。

ファンにとって嬉しいのは「ア・ディファレント・ライ」と「コラリー」のソロ版で、2曲は彼らの再結成作『サ・ヴァ』（98年）では3人で再録音される。そこでは地味目な展開の曲も、ソロ版では結構、開放的な感じでなかなか魅力的。そして、同様に気になるのが、アート・パンク色も濃い79年の傑作『フライング・ダズント・ヘルプ』に収録の名曲「ジュディ・ゲット・ダウン」と「ルシア」の荒々しい仕上りの別ヴァージョンだ。他にイアン・マッカロク参加(vo)の曲もあり、多彩な彼流のアヴァン・ポップが味わえる10曲だ。　石川真一

CamScannerでスキャン

NENA ✦ Nena (Remastered & Selected Works)

BMG [Germany] 964060052 2CD

一世を風靡したドイツのバンドによるファースト（83年）のCD2枚組再発盤。三つ折り紙ジャケットに封入された24ページのブックレットは表紙以外に写真はなく、ドイツ語のクレジットと歌詞で埋め尽くした点にも、媚びぬ意思を感じる。

ディスク1は、元ニナ・ハーゲン・バンドの二人がプロデュースしたアルバム本編。インターナショナル・ヴァージョンとは違い、邦題「ロックバルーンは99」のヒット・シングルをはじめ、本編はすべてアクの強い母国語で歌われている。ブロンディらのニュー・ウェイヴからの影響を感じるが、すっぴんの歌唱の女性ヴォーカルを筆頭に、いい意味で垢抜けてないところに打たれるのだ。必殺曲'99 Luftballons'のイメージにとどまらず、ラテン調あり、ダブ込みの曲あり、DAFみたいなビートの曲あり、AC/DCがヴァン・ヘイレンの「ジャンプ」を"先取り"したみたいな曲あり。10曲入りのディスク2には84年と85年のライヴを収め、デビュー・シングルのB面曲や英語の歌も楽しめる。

行川和彦

POISON IDEA ✦ We Must Burn

American Leather [US] AL0037 2CD

"キング・オブ・パンク"を標榜していた米国ポートランド拠点のバンドが、93年に出したフル・レングス5作目の新装リイシュー盤。23年のリマスタリング音源を使用し、手書き書体の歌詞など必要最小限の情報が印刷された6ページのインサート封入の二つ折りジャケット仕様だ。

ディスク1はアルバム本編。メンバー5人中4人が力士に匹敵するほどの巨漢だった頃で、音も重量級だが、まもなく活動停止したことがうなずける円熟味も帯びている。ミュージシャンシップに磨きをかけた深い"ハードコア・パンク・ロック"を聴かせ、ヤバい香りのブルージーなサウンドからは抒情性が滲む。ツイン・ギターの掛け合いも惜しみなく挿入するが、メタルというよりキャッチーなロックンロールが根っこだと再認識した。ディスク2には同時期のシングルや血湧き肉躍るライヴEP等で発表した11曲を収録。G.I.S.M.（本編の曲とは別の曲）、ディーヴォ、ワイパーズといった多彩なカヴァーからも唯一無二のセンスがうかがえる。

行川和彦

Deep Entries: Gay Electronic Excursions 1979-1985 ✦ v.a.

Dark Entries [US] DE320／LP

ニューヨークの初期ディスコ・シーンを起点にダンス・ミュージックの歴史を紐解くと、あらゆる場面でゲイ・ピープルのアイデンティティ、コミュニティ、そしてそこで共有される美意識の存在がその発展に多大な役割を担ってきたことがわかる。本作は、エイズ禍とそれに伴う偏見／バッシングによって、ゲイ・コミュニティ全体が苛烈な試練に晒されていた時期に制作されたエレクトロニック・ミュージックを集めた、実に画期的なコンピレーション・アルバムだ。

リリース元の"Dark Entries"は、これまでにもパトリック・コンウェイやシルヴェスター等の大物のアーカイヴ作品を送り出してきただけあって、今回の選曲もタイトル通り、より"ディープ"な世界に達している。ポストディスコとシンセ・ポップ、ハイ・エナジーの息吹が入り交じるサウンドは、ひんやりと硬質ながら自らのアイデンティを誇りをもって表明するように、清々しいまでに凛然としている。本作の収益は、サンフランシスコ・エイズ基金に寄付される由。

柴崎祐二

CamScannerでスキャン

TINA TURNER ✦ Tina Turns The Country On!
Parlophone / Warner [EU] 2173246747

TINA TURNER ✦ Acid Queen
Parlophone / Warner [EU] 2173246750

TINA TURNER ✦ Rough
Parlophone / Warner [EU] 2173246751

TINA TURNER ✦ Love Explosion
Parlophone / Warner [EU] 2173246752

2023年に他界したティナ・ターナーは、昨年がソロ・デビュー50周年だった。それにちなんで70年代に米英のユナイテッド・アーティスツから出されたソロ初期の4作がパーロフォン／ワーナーからリイシュー。うち3枚は久々のCD化で、紙ジャケ仕様のCDはインナー・スリーヴも再現され、ライナー・ノーツこそ付かないが上々の仕上がりとなっている。

最初の2枚はアイク＆ティナ時代末期に出したもの。初CD化となる74年作 "Tina Turns The Country On!" は表題通りカントリーに挑んだアルバムで、ナッシュヴィルのトム・タッカーがプロデュース。2曲を採り上げたボブ・ディラン、クリス・クリストファソン、ジェイムズ・テイラー、ドリー・パートン、リンダ・ロンシュタットなどで知られる曲をジェイムズ・バートン(g)らの演奏で歌うが、ソウルとロックの中間にいたティナとカントリーの相性は良く、ソウルフルな歌声が全編通して際立つ。最後はTV映画『ジェーン・ピットマン／ある黒人の生涯』で使われたゴスペル曲で締めくくる。

75年の "Acid Queen" は、ザ・フーのロック・オペラ『トミー』の映画版で演じた役にちなんだ作品。ザ・フーの表題曲に加えて、ローリング・ストーンズやレッド・ツェッペリンなどの曲を女性視点で歌い、"ロックンロールの女王" 然とした激唱をぶちかます。ストリングスを交えながらアシッドに迫るツェッペリンの 'Whole Lotta Love' が圧巻。演奏はエド・グリーン(ds)やレイ・パーカーJr.(g)らで、制作をデニー・ダイアンテとスペンサー・プロファーが手掛けるが、後半部では離婚直前の夫アイク・ターナーも加担。ふたりの険悪な仲とは裏腹な、アイク＆ティナ流のゴキゲンなロックン・ソウルも聴ける。

76年にアイクと決別し、78年に完全ソロとなって発表したのが "Rough" だ。初期ルーファスを手掛けたボブ・モナコの制作で、ルーファス時代のチャカ・カーンとダブる瞬間もあるが、激しさはチャカの上をいく。エルトン・ジョン、アラン・トゥーサン、ウィリー・ネルソン、ボブ・シーガー、さらにはウィリー・ディクソンやジョージ・ジャクソン作のナンバーも歌い、ロックにソウル、ファンク、ブルース、ディスコなどレパートリーは多岐にわたる。それらを快活に歌うティナは野性味に溢れ、元アイケッツのマクセイン・ルイスやヴェネッタ・フィールズらのバック・コーラスが主役を力強く後押しする。アイアート・モレイラがパーカッションで参加。

79年作 "Love Explosion" は本国未発売で、英欧などでリリース。ブレッカー・ブラザーズ参加のブラス・セクション以外はロンドンで録音され、今振り返ると "Private Dancer" (84年) への橋渡し的なアルバムだとも言える。欧州ディスコ界の名匠アレック・R・コスタンディノスが制作したディスコ・アプローチの作品で、冒頭から四つ打ちの流麗なダンス・ナンバーが飛び出す。派手なサウンドとティナのパワフルな声が張り合ってトゥー・マッチな瞬間もあるが、レオ・セイヤー 'Fool For Your Love' やオージェイズ 'Backstabbers' のカヴァーでは少し肩の力を抜いた声にソウル・フィーリングが滲む。パティ・ラベルやダスティ・スプリングフィールドで知られるポップなバラードも大味ながら快唱。　林剛

CamScannerでスキャン

SOUL SEARCHERS ◆ Salt Of The Earth

Funkclassic (US) FCDC1082

ソウル・サーチャーズと言えば、「バスティン・ルース」。そのリーダーのチャック・ブラウンはワシントンDCのゴーゴーの立役者として、一時は引っ張りだこだった。だが彼らはその前からレコードを出していて、74年のこれもその一枚。何回かリイシューされているが正直まともに聞くのは今回が初めて。リマスターで音がよくなっているという推薦文にほだされて買った。確かに「ブロウ・ユア・ホイッスル」「イフ・イット・エイント・ファンキー」といったなじみの曲はバンドの切れ味が抜群で、リーダーのチャック・ブラウンのどすの効いた声が聞ける。そういえば彼、日本に来ましたよね、なつかしい。

ところが今や主客は転倒し、「アシュレイズ・ローチクリップ」のようなインストが主役なのだという。確かにサンプリングに引っ張りだこなのはよくわかるよ。それらしきグルーヴ満載だし、かっこいいもんね。でもそろそろそうした聞き方も終わりなんじゃないかな。純粋に音と歌を楽しもう。 鈴木修

CONTE CANDOLI QUINTET & ZOOT SIMS SEXTET ◆ Los Angeles 1955 Live Sessions

Fresh Sound (Spain) FSRCD1156

これは、西海岸のジャズがまだ輝きを失っていなかった1955年にふたつのジャズ・クラブで行なわれたライヴ・セッションを収めたCD。コンテ・カンドリとズート・シムズはスタン・ケントン・バンドのメンバーとして53年に出会い、後にウディ・ハーマンやジェリー・マリガンのオーケストラで再び共にプレイすることになるが、ここでは両者がそれぞれリーダーとなっての演奏を楽しめる。

カンドリのほうは "Jazz City" でのパフォーマンスで、これが初登場。バップ・ナンバー5曲を取り上げたステージには嬉しいことにカール・パーキンス(p)が参加している。間を活かしたパーキンスの重厚なソロは鳥肌ものだ。ズートの8曲は、かつてジョー・メイニ(as)名義でPhilologyから出ていたが、今回はファースト・ジェネレイション・テープ（カセットだが）から起こされているのでPhilology盤より音が良い。こちらは全編で冴えわたるズートのテナーが圧巻で、ピアニストはデビュー間もないウォルター・ノリスだ。 大村幸則

THE JAZZMEN ◆ Nineteen Sixty-Six

今もなおデビュー時のフレッシュネスを保ち続けているジョー・マクフィーの初レコーディングが発掘された！ [illegible]のタイロン・クラブ率いる "The Jazzmen" というグループにマクフィーがトランペッターとして参加していた1966年の録音で、所在不明となっていたオリジナル・テープがついに発見されリリースされるに至ったのだ。

これまで知られていた彼の最も古いレコーディングはクリフォード・ソーントンの1967年録音 "Freedom And Unity" の一部だったが、これはそれよりも1年以上前の録音だ。意表をついて "Mint Julep" からスタート、グルーヴィなプレイで聴き手を驚かせた後、集団即興による "Killed In Vietnam" へと突入し、しばらくすると速いテンポの "Milestones" が現われるが、これもすぐにフリーな展開となり、マクフィーはもちろん、サックスのハリー・ホールとレジー・マーカスも、タイロン・クラブのがっちりしたバッキングを得て、素晴らしいプレイを繰り広げている。 大村幸則

CamScannerでスキャン

SUN RA ✦ Pink Elephants On Parade
Modern Harmonic [US] MH6304

何とこれは、サン・ラーのディズニー映画音楽集！ 1985年から90年までの間にアーケストラが様々な場所で披露したディズニー・ソングズを集めたアルバムで、『白雪姫』『ダンボ』『ピーター・パン』『メリー・ポピンズ』『南部の唄』といった映画からの曲が次々と現われる。もちろんバンドリーダーはすべての曲に"サン・ラーらしさ"を付け加えた編曲を施しているので、ひねりの効いたディズニー・ナンバーが次々と現れてワクワクさせられる。

『ダンボ』からのアルバム・タイトルをはじめ、多くの曲でバンド・メンバーたちやサン・ラー自身の、あるいはおなじみの「いつか王子様が」や『ピーター・パン』の「ネヴァー・ネヴァー・ランド」でフィーチャーされるジューン・タイソンのヴォーカルを楽しめるし、その合間に出てくるジョン・ギルモア(ts)やマーシャル・アレン(as)などのソロも快活そのもの。と、突然サン・ラーのぶっ飛んだソロが現われたりするのでゆめゆめ油断は禁物だが…。 大村幸則

CHARLES TOLLIVER MUSIC INC ✦ Live At The Captain's Cabin
Reel To Real [US] RTRLP014 2LP

米国ジャズ界のトランペッターの系譜を見れば明らかなように輝かしい音色を持つ者ほど短命である。例外はディジー・ガレスピーと未だ存命中の当作主役チャールズ・トリヴァー。彼がピアニストのスタンリー・カウエルと歩んだ道のりは今も史上に燦然と輝いている。即ちミュージック・インクという四重奏団、そしてストラタ・イーストというレーベル。70年代初頭に彼らの存在がなかったとしたらどれだけ寂しい歴史だったことか。

今回初登場の音源は73年3月のカナダでのライヴ。カウエル不参加のリズム・セクションはジョン・ヒックス(p)、クリント・ヒューストン(b)、クリフォード・バーバロ(ds)という布陣。実は皆、この後のレギュラー・メンバーで、その恐らく初顔合わせとしても貴重。曲は馴染みのものばかりの80分強。不朽の名作＝スラッグスでのライヴのタメが効いた世界とは感触は全く異なる。即ちブロウイング・セッションである。トリヴァーの余裕の表情たるや。リー・モーガン同様、今後も発掘音源は大歓迎だ。 松尾史朗

ARTHUR BLYTHE ✦ Live From Studio Rivbea Vol. 2: Arthur Blythe Quartet July 6, 1976
Non Business [EU] NBCD173

巨漢のアルト・サックス奏者アーサー・ブライス（1940-2017）が生前に遺したリーダー作はさほど多くない。79年に契約したCBSからは8枚のオリジナル作が出たが単独でCD化されたのは数えるほど。キャノンボール・アダレイ譲りの豊饒なトーンからもマイルス・デイヴィスとの共演が画されても不思議はなかったが実現しなかった。そりゃあケニー・ギャレットほど扱いやすくはないわな。

70年代NYロフト・シーンを代表するスタジオ・リヴビーの発掘音源第2弾はそんなブライスの76年録音。初リーダー作となったやはりライヴ盤の半年ほど前の記録である。チェロ、チューバ、ギターなどとのアンサンブルに心を砕いた後の姿に比せば実にシンプルな編成。マッコイ・タイナーのバンドにいたジュニ・ブース(b)、レギュラーのスティーヴ・リード(ds)にムハマド・アブドゥラー(per)を率い、長い無伴奏ソロを含め、素の姿が赤裸々になる。吹奏スタイルは既に完成され、いたずらに無機的にならず妖艶に得意曲が披露されている。 松尾史朗

CamScannerでスキャン

DINAH WASHINGTON ✦ Wake The Town & Tell The People!: Hits And Hot Shots 1957-1962

Jasmine [UK] JASMCD2819

ダイナ・ワシントンは、1944年にキーノート・レーベルに 'Evil Gal Blues' と 'Salty Papa Blues' を初録音。同レーベルは46年にマーキュリーに買収され、彼女はマーキュリーと契約、62年までに数多くの録音を残している。その中でチャート・インしたヒット・ナンバーも多い。本CDはマーキュリー時代後半のそうしたヒット・シングルからの録音を中心に、LPからの曲も交えて28曲を集めたもので、最後には62年、ルーレットでのヒット・アルバム "Drinking Again" のタイトル曲とシングル盤からの 'I Wouldn't Know' と 'It's Mean Old Man's World' の3曲が入っている。後にレコード化されたが、マーキュリーの未発表だった 'Mad About The Boy' と 'Bad Luck' が含まれているのも注目。前者は92年に英国でヒットしている。

R&B、ジャズ、ブルース、ポップスとジャンルの垣根を越えてルース・ブラウンからアレサ・フランクリンまで多くの後進に影響を与えた、ダイナ・ワシントンの歌の神髄を聴けるアルバムだ。 高田敦三

NINO ROTA / CARMINE COPPOLA ✦ The Godfather Part II: 50th Anniversary Remastered & Expanded Limited Edition

La-La Land [US] LLLCD1652 2CD

昨年末の1作目に続き、映画『ゴッドファーザー PART2』(74年) のサントラが公開50周年を記念しての拡張版2枚組として登場。前作同様、劇音楽スコアをニーノ・ロータが担当し、監督コッポラの実父カーマインが、オペラや葬送音楽、マーチなどの劇中現実音楽の監修と、全体の指揮にあたっている。

1作目の音楽が、ニューヨーク、シシリー、ネバダという地理的な変遷と深く関わっていたのと対照的に、この第2作では、旧作のテーマ群に加えて、新たに設定された「移民のテーマ」が、1920年代と50年代という、劇中で展開する二つの時間軸を見事な音楽的暗喩で繋いでみせており、その精緻な構成が、未使用分を含め全73分（うち半分以上が初音盤化）のロータ音楽の全貌から浮かび上がってくるところが最大の聴きどころ。

そのほかにも、サントラLP音源の新規リマスター収録、別テイクなどの追加曲、そして恐らくはロータ自身の手によるピアノ・デモ7分と、まさに充実した内容の全137分＝2CDだ。 上原昭一

SEXTETO TANGO ✦ Sexteto Tango Live At Teatro Colón, 1972

Lantower [Argentina] ／配信

イタリア移民の街ブエノスアイレスには、ミラノのスカラ座，パリのオペラ座と並び世界三大劇場のコローン劇場がある。オペラの殿堂ゆえにタンゴが演奏されることはなかった、1972年までは。

下層社会のサブカルだったタンゴがコローン劇場で初めて演奏されたのは8月19日。フロリンド・サッソーネ、アニーバル・トロイロ、オラシオ・サルガンらのオルケスタと、アストル・ピアソーラのコンフント9、そしてセステート・タンゴの6組が登場。これまで断片的な動画はあったが、2023年末のコンフント9とサルガン楽団に続き、24年夏にセステート・タンゴのライヴ録音が配信された。当時の記事を見るとオーディエンスの人気ナンバー1がセステート・タンゴ。まさに渇望していた音源だ。オスバルド・ブグリエーセ楽団の中核メンバーが68年に独立したコンボで、そのLPの2、4、5作目からピックアップされた全6曲23分は機急自在、メンバー間の呼吸がぴったり合った鋼の演奏だ。歓声も最高。文句なしの逸品である。 山本幸洋

CamScannerでスキャン

EDU LOBO ✦ Edu Canta Zumbi

Rocinante [Brazil] R3-042 LP

1965年にサンパウロで左翼演劇集団アレーナが上演したミュージカル「アレーナ、ズンビを語る」で音楽を担当したのがエドゥ・ロボだった。劇中歌を出演者が歌ったレコードは同年にRGEから劇と同タイトルで発売されている。本盤は、この劇中歌をエドゥ自身が歌った作品でタイトルも『エドゥ、ズンビを歌う』となっている。68年に終焉を迎えつつあったエレンコから発売された。これが世界初リイシュー。

劇は奴隷解放の闘士ズンビが率いたパウマーリス"共和国"による約100年続いた反乱を題材にした物語だが、曲目の中には、後にエリス・ヘジーナの歌唱で有名になった「ウッパ・ネギーニョ」、自身のソロ作でも再演された「エンボラーダ（カンサォン・ダ・ダヂーヴァ・ダ・ナトゥレーザ）」、自身やトッキーニョ、エリスも歌った「ザンビ」なども含まれている。アコースティック楽器の躍動感を活かした、ヴァイオリン奏者でもあるセーザル・ゲーハ・ペイシのアレンジが冴える。

駒形四郎

DJALMA CORREA ✦ Baiafro

Tres Selos [Brazil] TS059／LP

数々のMPB作品でのセッション活動にとどまらず、民俗音楽演奏からジャズまで、国やジャンルの境界を越え、ブラジルにおけるアフリカ由来の音楽探求と表現に生涯を捧げた打楽器奏者・作曲家ジャウマ・コヘア。出身はミナスジェライス州で、17歳でバイーア州に移り、連邦大学でハンス＝ヨアヒム・ケルロイターに師事して十二音技法や電子音楽を学ぶ傍ら（同校でヴァウテル・セメタッキとも交流している）、現地のアフロ・ブラジル社会に伝わる土着音楽の採取も精力的に行なった。1970年にアフロ・ブラジル音楽を演奏する自身のグループ、バイアフロを結成するが、これはやがて舞踊、演劇、視覚芸術をも融合したバイアフロ統合運動へと発展。生涯を通じてジャウマの表現活動の根幹となった。

そのコンセプトが表題となった本作は、インスト音楽を紹介する"MPBC"シリーズの一作としてフィリップスから78年に発表された作品。打楽器と弦楽器を軸に表現された、"バイアフロ"運動のマニフェストともいえる音楽。

駒形四郎

The Albarika Story Volume 1 ✦ v.a.

Acid Jazz [UK] AJXCD803／CD
Acid Jazz [UK] AJXCD803／2LP

ベニン独立後のポルトノーヴォでレコード店を経営していたセイドゥ・アディッサは、独立レーベルのアルバリカ・ストアを立ち上げ、60年代後半から80年代後半にかけてLP100枚以上とシングル約250枚をリリースした。これまでにアナログ・アフリカなどが復刻をしてきたが、今回登場した編集盤は、音楽ジャーナリストのフローラン・マッツォレーニと、ディープ・ハウスのレーベル、ニューフォニックを主宰するデイヴィッド・ヒルが選曲したもの。

収録されているのは、ベニンを代表するバンドのT・P・オルケストル・ポリ＝リトゥモをはじめ、ブラック・ドラゴン、レ・シンパティック、レ・ヴォルカン、アナスア＝ジャズ、オガッサほか七つのバンド。12曲中6曲がポリ＝リトゥモで、やはり演奏力は他のバンドを圧倒している。レパートリーはアフロ・ファンクが中心だが、アフロ・ラテンやブギーなディスコもあり。70年代らしいオルガン・サウンドやこの時代特有のエネルギーに富んだグルーヴが楽しめる。

荻原和也

CamScannerでスキャン

New Album Pickup

・ニュー・アルバム・ピックアップ・

ヴェテランの新作から注目の新人まで、
編集部が選んだおすすめの新録アルバムを紹介します

GARFUNKEL & GARFUNKEL ✦ Father And Son

BMG[US] 409996406906

今年84歳を迎えるアート・ガーファンクルと、35歳となる息子、アート・ガーファンクルJr.のデュエット盤。父、アートはリチャード・ペリー制作のスタンダード集 "Some Enchanted Evening" (07年) 以来のアルバム。ジュニアはドイツで活躍し、ソロ盤を2作発表している。

'Once In A While' 'You Belong To Me' などのスタンダード曲から、サイモン&ガーファンクル、ビートルズ、ドン・マクリーン、キャット・スティーヴンスらの名曲まで、華麗なオーケストラをバックに歌う二人。甘い歌声を披露する息子を温かく見守る父親という構図の世襲的作品かと思いきや、しだいに息子と競うかのように、往年の透明感はないがエンジェル・ヴォイスを本気で聴かせるアートのアーティスト魂に拍手だ。意外にも目立つのが、Ph.Dの 'I Won't Let You Down' とユーリズミックスの 'Here Comes The Rain Again' という80年代英国勢による2曲だ。ジャケット写真は "Fate For Breakfast" (79年) と同じキッチンではないか。

中村彰秀

TUBULAR WORLD ✦ ハージェスト・リッジ (50thアニヴァーサリー・エディション) ／チューブラー・ワールド

Tigermoth/マーキー(ベル・アンティーク) MAR244131／紙ジャケット／¥3200／12・20／解説＝宮坂聖一／輸入盤国内仕様

マジェンタなど複数のプロジェクトで活動するロブ・リード。英国プログレッシヴ／シンフォニック・ロックを代表するマルチ演奏家の彼が中心となったマイク・オールドフィールドの名盤再現シリーズ第2弾では "Tubular Bells By Tubular World" (20年) に続いて、74年のアルバム『ハージェスト・リッジ』に挑んでいる。オールドフィールド人脈のトム・ニューマン、レス・ペニング、ロビン・スミスも録音に参加している。

オリジナルの『ハージェスト・リッジ』は『チューブラー・ベルズ』の世界規模での商業的成功のあと、英国の田園風景を描いた叙情性に富むアルバム。そこで展開されるメロディをリードはファン・アートのようにとらえ、再構築している。本盤を聴いたあとでオールドフィールドを聴き直してみると、強烈に外連味、ずばりロックを感じたのが大きな発見だった。今回、「パート・ワン」をトム・ニューマンがリミックスしたヴァージョンも収録されているが、よりオリジナルに近い起伏が見てとれる。

安田謙一

CamScannerでスキャン

LOST WORLD BAND ◆ ザ・ドーン　ロスト・ワールド・バンド

Serum/マーキー(ヘル・アンティーク)　MAR2441328　紙ジャケット　¥3300　12・20　解説＝京盤聖一　輸入盤国内仕様

ロシア出身、NY在住のヴァイオリニストで、ギターやベースも操るマルチ奏者のアンディ・ディドレンコ。彼が率いるプログレ・バンドの最新作が発表された。フルート奏者のヴァシリ・ソロヴィヨフ、キーボード奏者のアレクサンダー・アキモフというオリジナル・メンバーの録音に、ゲストによる追加録音を加えている。楽曲は、すべて活動初期の96年に作曲したもの。当時は完成に至らなかった曲に新アレンジを施し、24年に再録音した。

叙情的な歌もの「ソー・クロース・トゥ・サンライト」、キャメル風メロディとエマーソン・レイク&パーマー風ピアノが光る「記憶の歯車」、プログレ・メタル風のテクニカルなギターが疾走する「金属性マルハナバチの飛行」、ヘヴィな音色のギターと変拍子が『太陽と戦慄』期のキング・クリムゾンを思わせる「翼竜プテロダクティル狩り」、ムーディー・ブルースを思わせるメランコリックな「夜明け」と、往年のプログレの醍醐味を満喫させる、彼らの才能が発揮された多彩な楽曲を収録している。　松澤将仁

ALPHATAURUS ◆ 2084:どこでもない所への旅路　アルファタウラス

AMS(ディスクユニオン)　DUPG301　¥3700　12・4　解説＝Masaki"Shimerson"Shimamura　輸入盤国内仕様

73年にイタリアのマグマ・レーベルから秀逸なアルバムでデビューを飾るも、2作目を発表する前に解散してしまったアルファタウラス。00年代に再編し、未完に終わった2作目の曲に新曲も加えた真の2作目"Attosecondo"を発表したあたりからその動向が再び注目されていた。本作は、彼らが12年ぶりに完成させた3枚目のスタジオ盤である。

23年11月にはオリジナル・ギタリストのグイド・ヴァッサーマンが亡くなった。ヴォーカルもオリジナルではない（オリジナル・ヴォーカルのミケーレ・バヴァロは24年に、ベースのアルフィンソ・オリヴァも22年に逝去）。ヘヴィな盛り上がりを特徴とする往年の個性が後退しているようにみえるのはそのせいかもしれないが、録音を開始したのは18年頃でヴァッサーマンのギターは部分的に聴くことができるし、そこを含めたエモーショナルなムードは繊細さと円熟味というかたちで、発展的な変化を感じさせるものだ。新加入メンバーもその方向性で的確な人材が選ばれているのだろう。　松井巧

FABIANO DO NASCIMENTO & SHIN SASAKUBO ◆ アルモニコス　ファビアーノ・ド・ナシメント&笹久保伸

リングス(ディスクユニオン)　RINC128　¥3000　12・11
リングス(ディスクユニオン)　RINR18　LP　¥4000　12・11

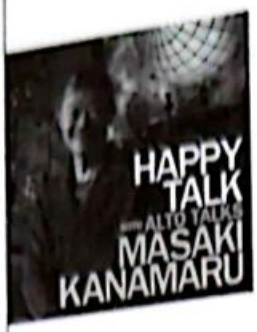
冒頭、印象的なハーモニクスの反復フレーズで幕を開けると、ギター同士が蔦のように絡み合い、時にエフェクトを交え、空間に揺蕩って響き合う。いくつもの情景を描きながら、ささやかな旅の終着地点で再びあのハーモニクスが変奏されて顔を出す――見事な構成が胸を打つ。

ブラジル出身、LAを拠点に活動するファビアーノ・ド・ナシメントと、南米、ペルーでの活動を原点に故郷、秩父に拠点を置く笹久保伸というバックグラウンドの異なる（同時に重なっても見える）二人のギタリストは、初共演ライヴから四日後にスタジオ入りし、この清澄な録音を吹き込んだ。ヴィラ＝ロボスやエグベルト・ジスモンチ楽曲のカヴァー、およびセルフカヴァー曲ではメロディの力強さが耳を惹く一方、その他の曲ではミニマリズムと非旋律的な即興性が特徴となる。だが、いずれもハーモニーの滲みと音響の揺らぎが聴き手を包み込む。奏者の卓越性に加え、録音場所の大磯SALOスタジオだからこそ生まれたサウンドでもあったことだろう。　細田成嗣

CamScannerでスキャン

金丸正城 with Alto Talks ✦ HAPPY TALK

ラッツパック RPCJ7010 ¥2545 12・11



いまや日本を代表する男性ジャズ・シンガー、金丸正城は歌手活動のほか、リサイタルの演出、レコード解説などの執筆活動、そして、日本ジャズヴォーカルインスティテュートの代表として後進の指導にもあたっている。本作は13年の「These Foolish Things」以来、約10年ぶりの新作。前作はストリング・カルテットでバラードを歌ったが、今回は、宮野裕司と菅野浩の2本のアルト・サックスによるAlto Talksとの共演で、ハッピーでスウィンギーな曲を中心に歌うものだ。

このピアノレスのグループの他メンバーは、関根彰良(g)、松島寛昭(b)、ジーン重村(ds)。メンバーを熟知したような小林洋のアレンジも素晴らしい。本人によるライナーで全15曲それぞれの内容を説明しているが、タイトルどおり、ハッピーな曲を選んだストーリーテラーの彼による爽やかな歌は、心を明るくしてくれる。2本のアルトがさりげなく歌を盛り立て、関根彰良のギターが見事なサポートを見せ、素晴らしい一体感がある。大変印象に残る作品だ。 高田敬三

マレー飛鳥&北村聡 ✦ サウンド・アンド・ブレス〜音と呼吸

アスカ ASKA05 ／¥3000 ／1・22

ワールドワイドに活躍するヴァイオリン奏者、マレー飛鳥と、映画やドラマの音楽も手がけるバンドネオン奏者、北村聡のデュオによるインストゥルメンタル・アルバム。9曲中4曲が、ディエゴ・スキッシ、ヘラルド・ディ・ヒウスト、中島ノブユキ、挟間美帆が提供した曲だ。フィリップ・グラスにも通じるミニマル・ミュージック風に幕を開ける「Recuerdos」、切なさと哀調を帯びた「The Interrupted Time」が出色だ。

だが、真に独創性を感じさせるのはふたりが書いた曲のほうである。北村の手による「Festivo」はタイトル通り、華やかな宴を祝うような色調が印象的。冒頭を飾る「One Evening」と掉尾に置かれた「Still」は、共にマレー飛鳥の作曲で、前者はその後の動的な展開を予感させ、後者は旅の終末を静かな余韻と共に彩っている。アストル・ピアソラがアメリカン・クラーヴェに残した傑作群も時折想起させる作品だが、歌心溢れるふたりの交歓は、そうした比較をはねのける強度を備えている印象だ。 土佐有明

四人Co.ばやし ✦ 一髪千鈞

ラバーソウル RSCD5012 ／¥3000 ／1・11 ／歌詞 ／解説＝中村俊夫

四人囃子のトリビュート・バンドである四人Co.ばやしのデビュー・アルバム。アルバム制作の話が持ち上がったのは2019年で、それから苦節5年の月日を費やしてついに完成へと至った。タイトルから分かるように、四人囃子、74年の名盤『一触即発』に影響された作品で、60、70年代のロック・バンドの芳香が随所に漂う。

オリジナル曲が並ぶなか、唯一のカヴァー「羊飼いの歌」は、四人囃子による幻の楽曲（原タイトルは「羊飼いの唄」）。ライヴで演奏されながらオリジナル・アルバムには未収録の曲で（『ゴールデン・ピクニックス Special Edition』などにデモが収録）、岡井大二(ds)と森園勝敏(g)がゲスト参加している。さらに、「一髪千鈞」にも森園が参加。このトラックには、森園監修の『ロックギターVol.1 教則レコード』に収録された「ガンジ」もフィーチャーされている。四人囃子へのリスペクトが感じられ、25年版『一触即発』ともいえそうなコンセプト・アルバムだ。 ガモウユウイチ

CamScannerでスキャン

金属恵比須 ✦ 邪神<ライヴ>覚醒

Ryouki-World RWKY0013 紙ジャケット ¥3000 12・11

2024年の金属恵比須を真空パックしたライヴ・アルバムだ。5人のメンバーのうちキーボードとベースの二人が去り、ベースに埜咲ロクロウが加入。2回行なったライヴではキーボードに、4月27日が那由他計画の塚田円、8月3日には烏頭の大和田千弘が客演した。1曲目の「罪つくりなひと」から9曲目の「邪神覚醒」までは4月と8月の音源がジグザクに並び、ピックアップすることでそれぞれのライヴを楽しむ聴き方もできる。

金属恵比須をずっと愛聴してきた塚田の音楽に後藤マスヒロと埜咲が加わった「覚醒のためのキーボード・ソロ」、大和田のピアノがバーカッシヴな「邪神覚醒」は、ここでしか聴けない貴重なもの。福益宏美は「イタコ」で絶叫し、高木大地のギターが炸裂する「彼岸過迄」「紅葉狩（第三部・第四部）」の後半は、怒涛のプログレッシヴ・メタルだ。2回のライヴで演奏された「邪神覚醒」「武田家滅亡」「イタコ」は、8月の音源を収録している。音質の良さをはじめ、制作陣の熱き思いも伝わってくる。 山岸伸一

ARCANA ✦ The Hanged Man/吊るされた男

アルカナ ARC002 ¥3000 12・18

一瞬、同名の越境型ユニットを思い出したが、それは30年前に結成されてもう存在しない歴史上のチーム。このARCANAは、それと何の関係もないと思われる日本人トリオだ。結成されたのは11年のこと。デビュー作発表は16年で、2作目となる本作は24年末にリリースされた。メンバーは、ケーナ＆サンポーニャ奏者の山下Topo洋平、ギタリストの鬼怒無月、ピアニストの上野山英里の3人。リーダーは山下らしく、南米フォルクローレ風のメロディアスな笛の響きが特長だ。

全10曲中5曲を鬼怒が、3曲を山下が、2曲を上野山が作曲していて、演奏は3人が絶妙にバランスをとる。全編、アコースティックに聞こえるが、要所要所でエレクトリック・ギターやシンセサイザーの音が脇を固めていて、かすかにマイク・オールドフィールドやロバート・リードの香りが漆むと感じるのは気のせいかもしれないが、当たらずとも遠からずでは。全体にすがすがしいサウンドの印象が強いなか、9分を超える「The Moon」の聴き応えに感銘を受けた。 坂本理

Ett・泊・ふちがみとふなと ✦ 大きな蔵、小さいうた

ぐらもくらぶ G50009 ¥3000 12・22

千葉県香取市にある大土蔵でのレコーディングは、これで5作目となる。明治期に醸造の蔵として建てられたこの場所に集まったのは、Ett、ふちがみとふなと、泊という個性に溢れた3組のデュオ・チーム。その彼らの歌と演奏を、戦前型のリボン・マイク1本で一発録音するという画期的な試みだ。

3組とも、ヴォーカルと楽器ひとつの最小限の構成のユニットだ。それが古い土蔵の中で、どのように鳴り響いていくか、とても楽しみであった。結果からいえば、声のぬくもりが驚異的に見事にでている。どの音像も丸みを帯びながら形を作っていく。これをモノラルな立体感と呼ぶのはおかしいだろうか。

それぞれのオリジナル曲に加え、「満洲里小唄」や「茶目子の一日」といった戦前の歌謡曲のカヴァーが収められているが、これらがシームレスに繋がっているのに驚かされた。きっとこの蔵の中には時空を超える装置が隠されているのだろう。またしても土蔵が素晴らしい奇跡を生み落としたのだ。 小川真一

CamScannerでスキャン